

5/16(94(N)

第45回

# 日米学生会議

THE 45TH JAPAN-AMERICA STUDENT CONFERENCE

## 日本側報告書



1993.7.26～8.23

Sharing Our Visions and Working for Harmony  
in the Global Community

地球共同体への展望と実践  
～私たちのめざす調和、そして共生～

## 編集者より

日米学生会議の活動内容を紹介する報告書は、戦前の一時期を除くと基本的に英語で発行されてきました。第25回会議(1973年)以降は、日本語での活動記録を残す動きが本格的に開始され、第30回会議(1978年)以降は、『報告書・エッセイ集』、第36回会議(1984年)以降は版型をB5にして『和文報告書』という名称で、活動の記録を発行してきました。前回の第44回会議(1992年)からは名称を『日本側報告書』と改め、従来100頁前後だった報告書が、準備活動の詳細な報告や参加者のエッセイをも含めた200頁以上の大部のものとなりました。「和文」から「日本側」へと名称を変更したのは、この報告書が日本側と米国側が共同作業で作成したものを日本語に移したのではないという事実と照らすと、「和文」という言い方が誤解を招きやすいためです。

今みなさんがお手にしている第45回日米学生会議の報告書は、このような流れを踏襲した上で、さらに表紙を従来のもとは一新し、内容および体裁をより充実する努力をへて完成しました。具体的には、準備活動、本会議、本会議後の活動、各種声明、エッセイ、参考資料の六部構成として、一昨年(1991年)の8月から本年(1992年)の4月の報告書作成に至るまでの会議の活動のすべてを網羅する方針を取りました。編集委員一同、誤字脱字のないように編集・校正に努めることはもちろん、同一事項に関してあえて複数の参加者の原稿を載せたり、一般参加者の方々の原稿を掲載するなどといったことにより、会議の多様性を浮き彫りにするような配慮も行いました。また、写真に関しても、会議中に撮影された数多の公式写真の中から厳選したものに加え、参加者個人が所蔵する写真からも数多く収録しています。今回完成した本報告書は、日米学生会議の報告書の決定版となりうると自負しています。

約1年半に渡る第45回日米学生会議の活動内容を、この1冊で覆い尽くせたかどうかはなほだ心許無い限りですが、ともかく本報告書を第45回会議を理解していただくのに最良の資料とするために、我々はできる最善の努力を尽くしました。もしもこの報告書をお読みになった方にとって、その読んだという経験が何等かの形で生かされることがほんの少しでもあったとしたら、それが報告書を作成した編集者一同にとっての望外の幸せですし、単なる参加者の思い出の集積以上の意味をこの報告書が持つことになるのだと思います。

パスカルは、「あまり早く読んでも、あまりゆっくりでも、何もわからない」という断片を『パンセ』の中に残しています。この報告書から何を読み取るか、何が読み取れるのかは、正直いつ私にもわかりません。もしも何等かのご感想やご意見をお持ちになった方がいらっしゃいましたら、どんな些細なことでも結構ですので、ぜひ事務局あてにお寄せください。今後の我々各自の、そして日米学生会議の活動の改善のために役立てさせていただきたいと思います。

第45回日米学生会議実行委員

日本側報告書編集委員会代表

芝崎 厚士



## 第45回日米学生会議日本側報告書によせて

1934年(昭和9年)、平和という言葉に若き情熱を感じた学生たちが、日米関係修復のために、青春の全てを傾けて日米学生会議を創始しました。相互理解を通じた平和の達成を信じ、両国学生は、信頼関係の醸成に向けて全身でぶつかって行きました。まさに開戦前夜のディスカッションを始めたことがきっかけです。しかし、戦争という荒波をとどめることは出来ませんでした。多くの命が失われ、多くの友が失われました。何故、理解し合えないのだろうか。悲しみと矛盾の中、寄せては返す波の如くかれらを勇気づけたのは、会議で得たかけがえのない数々の経験だったのです。

第45回日米学生会議は1993年7月26日より8月26日までの29日間、全米、全日本から選ばれた各々40名の両国学生が一同に会し武蔵野市成蹊大学、福岡県北九州市、福岡市、長崎県長崎市、兵庫県三田市、神戸市を主要開催地として行われました。総合テーマに“地球共同体への展望と実践—私たちのめざす調和、そして共生—Sharing Our Visions and Working for Harmony in the Global Community”を掲げました。日米両国学生による率直な意見の交換を通じて、相互理解の深化と知的精神的連帯感の促進をはかり、長期的展望にたつて両国の円満な関係をより発展させる。更には地球規模での人類の平和的共存と調和ある共生に寄与することを目的として開催されました。

一ヵ月に及ぶ共同生活の中、日米学生会議は我々の人生に一つの可能性を示してくれました。人間は必ず理解しあえる。国や民族や文化に囚われること無く、むしろそれを越えた所でただ一人の人間の視点から人を理解し、愛する事が出来る。日本と米国の希望と不安の錯綜する日々、必死で語り、懸命に考え、共に憂い、共に笑い、時には皆で泣いたものです。共に語ったあの一時、日本と米国を代表した学生一人一人は何のためらいも恐れもなく、互いに一人の人間として認め合い議論し、理解し、尊敬し、感謝する事が出来たのです。決して一人ではない人間の力を皆が感じ、心から信頼しあえたのです。この喜びは、回を重ねるたびに、今も絶えること無く参加者の胸に深く新たに刻み込まれていくのです。

正法眼蔵随聞記の中に面白い話があります。中国の海深くにそこを通るとどんな魚も龍になるという龍門と言うものがあるそうです。道元が世俗を離れ法門をくぐった人は皆僧になることを例えたものです。まさに、日米学生会議はGLOBAL COMMUNITYにおける龍門です。日米学生会議という共同体のなかで80人の仲間と語り、笑い、共に努力し続ける。すると“国際人?地球共同体の龍”となるのです。日米学生会議は一つのCHANCE・機会・DEVICE・装置なのだと言えるでしょう。

龍となった我々は多くの困難と障害の前に、決して諦めること無く不屈の精神を持ち、これからの時代に臨んでいきたいと思えます。人間の可能性、精神の可能性を信じ、いつの日か全ての人が人間らしい豊かな生活を送れることを切望します。両国学生の心の架け橋を礎とし、21世紀に向けて一人一人の真摯なる努力の下に友情を育み、我々の努力の積み重ねが、世界の平和と

人類の繁栄に寄与する事を希求し、此処に日米学生会議の更なる発展と精進を祈ります。

最後になりましたが、この会議の実現は信じられないほど深い誠意と類稀なる善意の賜物であることを申し上げます。多くの御指導や御賛助をいただいた賛助団体、後援団体各位、理事長板橋並治先生をはじめとする財団法人国際教育振興会の方々、特に会議に御同行頂いた水野詠子女史、JASCinc. 理事長ジャック・シュレンバーガー氏、同グレチェン・ホップス女史に、また会議開催に当たりご協力頂いた全ての皆様にこの場を御借りして心より厚く御礼申し上げます。

第45回日米学生会議実行委員会  
日本側実行委員長 平竹 雅人





## 米国側実行委員長のメッセージ

When I was in grade school living in Pusan, I had the honor of meeting the Honorable Dixie Walker who was then the United States Ambassador to Korea. Ambassador and Mrs. Walker's willingness to embrace people of different cultures made an impression on me and I admired their down-to-earth approach at international relations. I can still vividly recall Ambassador Walker asking guests from all different backgrounds to join hands and leading them in several renditions of Korean folk songs. By the end of the evening, everyone was laughing and having a great time.

In this way, I learned the value of "people to people" contact in promoting mutual understanding and appreciation of diversity. In fact, this incident had such an effect on me that my childhood dream was to some day become U. S. Ambassador to Japan!

Childhood aspirations aside, I believe the Japan-America Student Conference (JASC) provides such an opportunity for its participants. On JASC, each delegate serves as a "mini-ambassador" of his or her country, not just in the academic atmosphere of guest lectures or student presentations, but in real-life situations as well. "JASCers" not only room together with representatives from the opposite delegations, we exchange ideas over meals three times a day, and, in some cases, even share conversations while relaxing in a Japanese-style community bath.

A great deal can be gained through dealing with people on a daily-life basis. Not only does JASC provide an opportunity to gain insight into the culture and ways of thinking of members of the other delegation, it allows one to learn more about fellow citizens of different opinions and backgrounds as well as forces oneself to reflect on one's own ideas. For these reasons I strongly feel that the intensity of the one-month living experience is one of JASC's most unique and valuable assets.

Perhaps the most memorable experience of the 45th Conference for me was our visit Nagasaki. Having never visited the Peace Memorial in Hiroshima-city despite spending many summer vacations there and having lost a grandfather who experienced the devastation of the atomic bomb first hand a few weeks before the beginning of the Conference, I endured our early-morning bus ride into Nagasaki with mixed emotions. Once we reached the beautiful city, however, I was filled with a feeling of familiarity. Watching war films and speaking with the survivors of the atomic bomb were painful yet highly educational experiences. The War and Peace Forum proved especially meaningful in the city of Nagasaki.

The highlight of my trip to Nagasaki was our encounter with Mayor Motoshima. His determination to continue speaking his mind publicly about sensitive issues such as war

responsibility, despite having his life threatened and even being shot at by right wing radicals, was an inspiration to us all.

In closing, on behalf of the 45th delegation, I would like to express our deepest appreciation for all of the individuals, corporations, and organizations that help make the JASC dream a reality. Not only has JASC awarded us with leadership experience and personal growth, but everlasting friendships as well. These friendships are the bases for the multi-cultural understanding that will become essential as the world becomes smaller and more interdependent. As talk of a trade war and other political, economic, and social tension rises, people-to-people relationships fostered through experiences like JASC will become increasingly important. Thank you very much for your continued support.

Sincerely yours,

**Kathleen Coble**

**Chair, 45th American Executive Committee**

## 第45回日米学生会議 日本側報告書 目次

編集者より	芝崎 厚士	(1)
第45回日米学生会議日本側報告書によせて	平竹 雅人	(2)
米国側実行委員長のメッセージ	キャシー・コーブル	(4)
目次		(6)
第45回JASC代表諸君へ	板橋 並治	(10)
米国側主催者より	ジャック・シュレンバーガー	(13)
沿革	芝崎 厚士	(14)
実施要領		(15)
本会議日程		(16)
参加者名簿		(17)

### 第一部 準備活動

準備活動まとめ	芝崎 厚士	3
実行委員長	平竹 雅人	6
副実行委員長	西元 宏治	7
東京地区担当	割石 俊介	9
福岡地区担当	竹井 亮一	10
長崎地区担当	芝崎 厚士	11
関西地区担当	阿古 智子	12
財務	坂田亜也子	14
広報	芝崎 厚士	15
選考	寺澤 実紀	16
経理	高橋 香織	17
中国・四国における準備活動	松本 安代	18
全体合宿	西元 宏治	18
定例会		20
東京定例会	芝崎厚士／上原由美子／田中澄人	20
関西定例会	阿古智子／渡邊尚美	23
名古屋定例会	友末 優子	25
『犀の角』	芝崎厚士／上原由美子／貝原健太郎	25
6月セッション	割石俊介／渡邊尚美	28
フィールド・トリップ総括	高橋 香織	30
たんぼぼの家	村上 敦哉	30
UNHCR	米倉由美子	30
NHK	山田美那子	31
UNIFEM	上原由美子	32
山崎章朗氏	田中 沙羅	33



国際交流基金	西見さつき	34
国連大学	恒田 恵美	35
UNCRD/韓国学園	坂野 晴彦	36
山谷	細江 葉子	36
勉強会	芝崎 厚士	38
直前合宿	芝崎 厚士	40

## 第二部 本会議

### 1. ジョイント・オリエンテーション

総括	高橋 香織	45
ジョイント・オリエンテーション	貝原健太郎	46

### 2. 東京地区

総括	割石 俊介	47
開会式	日向 裕弥	48
外務省での講演会	貝原健太郎	49
総合テーマ討論会 総括	平竹 雅人	50
総合テーマ討論会 パート1	廣田 良平	50
戦争と平和フォーラム 総括	芝崎 厚士	51
戦争と平和フォーラム パート1	中村明日香/貝原健太郎	53
米国大使館員によるレセプション	高橋 香織	56
フリーデイ	日向裕弥/林 秀美	56
戦争と平和フォーラム パート2	田中 沙羅	58
新国際秩序シンポジウム 総括	西元 宏治	59
新国際秩序シンポジウム	中村明日香/吉田泰治	60
少数派問題フォーラム 総括	松本 安代	62
少数派問題フォーラム パート1	坂野 晴彦	63
環境フォーラム 総括	阿古 智子	64
環境フォーラム in 武蔵野	恒田 恵美	65
貿易シンポジウム 総括	坂田亜也子	66
貿易シンポジウム パート1	吉田泰治/中村明日香	67
武蔵野市レセプション	東 浩平	69

### 3. 福岡・長崎地区

総括	竹井 亮一	69
地球市民シンポジウム 総括	脇坂あゆみ	70
「地球市民シンポジウム」あとがき	竹井 亮一	71
北九州市レセプション	吉田 泰治	72
ホームステイ in 福岡	村上敦哉/後藤田鶴子/田中沙羅	73
環境フォーラム パート2	桜井 周/三宅浩史	75
リフレクション・ミーティング	貝原健太郎	76

少数派問題フォーラム パート2	鈴木 武志	77
長崎地区総括	芝崎 厚士	77
戦争と平和フォーラム パート3	貝原健太郎/後藤田鶴子/田中沙羅	79
実地研修 in 長崎	米倉由美子/田中沙羅	81
ジェンダー・ワークショップ 総括	寺澤 実紀	83
ジェンダー・ワークショップ	米倉由美子/西見さつき	84
フェリーの旅	岩田 康志	86

#### 4. 関西地区

総括	阿古 智子	87
ホームステイ in 関西	源真帆/友末優子/西見さつき/桜井周/後藤田鶴子	88
貿易シンポジウム パート2	吉田 泰治	91
ボランティア・フォーラム 総括	阿古 智子	92
ボランティア・フォーラム	村上 敦哉	95
一般参加者の皆様のご感想		96
少数派問題フォーラム パート3	林秀美/友末優子/鈴木武志/西元宏治	103
総合テーマ討論会 パート2	細江 葉子	106
新実行委員選出	西元 宏治	108
新実行委員ミーティング	田中 沙羅	109
フリーデイ	桜井 周/東 浩平	110
閉会式	米倉由美子	111
小西観光園	友末 優子	112

#### 5. 分科会報告

芸術と社会(The Arts and Society)	113
ビジネス(Business)	120
経済開発(Economic Development in the Pacific Region)	128
今日の教育(Education Today)	136
食糧問題(Food, our Lives, and the Global Community)	143
メディア(Media, Media, Media)	150
健康と社会(Mental and Physical Health in Society)	156
哲学と人生(Philosophies of Life and Human Issues)	165
新時代の法と政治(Politics and Law)	173
変貌する世界における科学技術の影響(Technology's Impact on a World of Change)	178

### 第三部 本会議後の活動

会議後の活動まとめ	芝崎 厚士	187
9月定例会	上原由美子	189
10月セッション	吉田 泰治	189
報告会	恒田 恵美	190
OB総会	源 真帆	191

## 第四部 各種声明

1. 第45回日米学生会議 共同声明	195
2. 戦争記念館・博物館に関する提言	203
3. 日米ユース・デklarレーション	204

## 第五部 エッセイ

エッセイ	209
鈴木 武志、三宅 浩史、脇坂 あゆみ、源 真帆、 泰松 昌樹、寺澤 実紀、西元 宏治、芝崎 厚士	

## 第六部 参考資料

宮沢首相からのメッセージ	229
クリントン大統領からのメッセージ	230
賛助団体一覧	231
第46回日米学生会議のお知らせ	235
編集後記	236



## 第45回JASCの代表諸君へ

板橋 並治

第45回日米学生会議の開会式に出席し、日本側主催団体である国際教育振興会(IEC)を代表し、又第1回会議の創立委員の一人として、代表諸君に直接話す機会を得たことは誠に大きな喜びであると云わねばならぬ。

私は1947年に復活された第8回会議以来、第43回会議に至るまで、毎回開会式に出席し、代表諸君に会議の起源と略史について話すことを使命としていたが、昨年ワシントンで開かれた第44回の開会式には、激しい腰痛に悩まされて出席できず、ビデオ・テープで代役を果たしてもらおうという誠に残念なことになってしまった。

幸い第45回会議は東京で開かれたので、未だに執拗に喰いついている腰痛に負けることなく開会式に出席できたことは、全く望外の喜びと云わねばならぬ。

JASCは、今から60年前の1933年の春、青山学院の中山公威君の提唱で、各大学のESS会員有志が集まり、国際問題について語り合ったことに端を発している。

1931年の日本の満州出兵以来、米国の対日感情が悪化しつつあったにも拘らず、政府はそれを緩和するために何ら有効な手を打っていないと、我々は感じていた。

そこで、我々は日米間の緊迫した空気を緩和するため「学生として何をなすべきか、何が出来るだろうか」と論議を続けた結果、「米国の大学生50名を招いて会議を開き、互いに率直な意見を交換することによって、相互理解と信頼を促進し、友好関係を確立すべきであ

る」と言う結論に達した。これは「世界の平和は太平洋の平和に、太平洋の平和は日米間の友好関係の確立にある」という考えに基づいている。

会議を実現するにはまず「50名の米国学生の滞在費を確保しなければならぬ」と考え、大企業の幹部の方々をお願いした。而し「それは素晴らしい計画だが……」と返事はいつも「だが」で終わってしまった。

「本当に素晴らしい計画と思うなら、なぜ援助してくれないのだろうか」といろいろ模索した結果「学生の方で、米国から50名の学生を招くなど到底不可能だ」と考えているらしいということが分かった。そこで我々は、学生の力を立証すべきであると考え、日米学生親善使節団を派遣することにした。

私を含め4名の学生が使節団員として横浜を出港したのは、1934年の春であった。埠頭では各大学のESS会員が盛大な見送りをしてくれ、我々使節団員は興奮してささかポーッとになっていたが、富士山が水平線に消えた頃には、興奮からさめて急に深刻になり、「若し50名連れて帰らなかったら、腹切りものだ」と言い合ったほどであった。

我々4名にとっては、全く初めての海外旅行であり、また米国内の情勢も殆ど分かっていなかったのが、我々の計画が実現できるかどうか、全く自信がなかったのである。

而し、最初に訪れたシアトルのワシントン大学で会議の計画を発表したところ、全く予想外の大きな反響があり、この調子なら50名

の代表の確保は可能であると云う自信を持つに至った。

そこで、中山委員長と遠藤委員が帰国し、自信をもって募金活動を再開することになり、田端委員と私が米国に残り、代表募集の活動を続けることになった。

田端君は太平洋岸の大学、私は中西部から大西洋岸の大学をそれぞれ20数校を訪れて代表募集の活動を続けたが、その結果二人あわせて総数99名の参加者(その内22名は大学教授及び夫人で、オブザーヴァーとして)を得て帰国した。

こうして、第1回会議は日米両国から約100名の参加者を得て、1934年の夏、青山学院大学で開かれ、大成功を収めることができた。

会議終了後、満州の実状を見てもらおうという目的で、米国からの参加者99名を関西から朝鮮を経て満州への研修旅行に伴った。この旅行の帰途、関釜連絡船上で米国代表が会合し、「会議を実現させた日本側学生の創意と、不屈の努力と好意に報いるため、第2回会議は米国で開こう」と、決議し、実行委員を選んで帰国した。

こうして第2回会議は翌年の夏、ポートランドのリード・カレッジで開かれ、日本から62名参加した。その後会議は日米両国で交互に開かれたが、1941年に米国で開かれることになっていた第8回会議は、日本側代表が渡米の査証を得ることができず、会議は止む無く中断されてしまった。

こうして戦時中、中断されていた会議は1947年に日本側の努力によって復活された。本来、偶数年の会議は米国側によって開かれることになっていたが、当時日本は米軍の占領下であり、米国の学生との連絡も、代表を招く方法もなかったため、駐日の米軍人や軍

属の中から大学生の資格ある人を選んで米側代表として会議を開いた。

このように本来の形式とちがう会議が1953年まで続けられたが、たまたま第14回会議に、戦後初めて米本土から参加したコーネル大学の学生が、戦前の会議の話をきいて、第15回会議は是非コーネル大学で開きたいという申し入れがあり、日本側代表は大変よろこんで賛成した。而し当時の日本の経済状態では、太平洋横断の航空運賃を負担できる学生が少なく、悩んでいた時、米軍当局から「軍用輸送機に15席だけ無料で提供する」と云う申し入れがあり、学生代表14名とOB1名が監督して第15回会議に参加すべく渡米した。

元来、会議には日米両国から50名ずつ参加することになっていたため、参加できなかった36名の学生は、「日米学生会議は第15回をもって発展的に解消し、それに代って第1回国際学生会議を開く」という決定をした。こうして日米学生会議は、再び中断されることになってしまった。

1963年に至り、戦前のOB有志が「1964年は日米学生会議の創立40周年に当るので、是非とも戦前の型で復活させるべきだ」と考え、活動を始めた。先ず学生の参加費をできるだけ軽くすべきであると考え、戦前のOBに経済的援助を要請した。第1回と2回の会議に参加したポートランドのルーディウィルヘルム君から「1週間の会議の費用を保障する」という嬉しい手紙をもらった。この手紙に励まされ、復活活動を続けることができたと言わざるを得ない。

日本側OBで、強い助けの手を差しのべてくれたのは、第6回と7回の会議に参加した宮沢喜一君(当時は経済企画庁長官、その後は首相)である。彼が外務省や文部省に連絡してく



れたお蔭で、文部省の援助を受けることが出来たのである。その上、日本側代表が日本を出る直前に彼らを首相官邸にまねいて激励してくれたことは未だに忘れられない。

こうして、第16回会議は1964年の夏、第2回会議の開催校として由緒あるリード・カレッジで開かれ、爾来会議は今日まで続いている。この2度目の復活がなかったら、日米学生会議は永遠に消滅してしまったにちがいないと考えると、この会議の復活に協力してくれたOB有志の方々に、どれほど感謝しても、充分とは言えないだろう。

今、この会議に参加している代表諸君にお

願いたいことが一つある。それは、この会議を契機として、「将来自分も太平洋の相互理解と友好の懸け橋となるべきである」という使命感を持って努力してもらいたいと言う願いである。

終りに、この会議の後援を続けて下さった JASC, Inc. IEC 賛助会、外務省、文部省、CIEE 及び日米文化センター、また、会議開催を全面的に御支援下さった武蔵野市及び成蹊大学、福岡県福岡市、北九州市及び長崎市、兵庫県神戸市及び三田市の皆さんに厚く御礼申し上げます。





## COMMENTS OF AN OBSERVER

In 30 days, I shed a pound of flesh and the treads on my walking shoes. I also, at times, shed 40 years or so as I mingled and meandered, toted and talked in a lively—let me say exuberant—group of 78 American and Japanese university students exploring plans and propositions keyed to the elusive theme of global harmony. By the end, I knew one certainty: there was to be no end, “Something,” in William Faulkner’s words about Japan, “supple, sturdy and enduring,” was in the process of being forged among these participants that would long outlast the final bus, train or flight connections. The JASC experience is a Conference, of course, a forum for exchanges of ideas, the baring of attitudes and mindsets, larded by the interventions of an earlier generation of experienced professionals. But what has also counted during this past month are the post-plenary, often late at night spinoffs, the smaller group encounters, where national origins and gender and other badges became blurred and new identities took hold as individuals, where the “us” and the “them” evolved more often towards the “we.” Amidst the bilingual clamor and chatter, I heard a noise of truth and sensibility emerging, much of it articulated in these pages. I commend them to you.

JACK H. SHELLENBERGER

President, JASC Inc.



## 日米学生会議の沿革

日米学生会議は、今から59年前の1934年(昭和9年)に、満州事変以降危殆に瀕しつつあった両国関係を憂慮した日本の学生有志により実現されました。彼等の情熱の根底にあったのは、米国の対日感情改善・日米相互の信頼関係回復が急務であるという当時の時代認識と、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その実現のために学生が一翼を担うべきである。」という、現在まで脈々と受け継がれている基本理念でした。準備活動は全国の大学の英語研究部、国際問題研究部から成る日本英語学生協会(国際学生協会の前身)の主催によって進められました。資金・運営等の面で幾多の困難に直面しながらも4名の学生使節団が米国に赴き、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国しました。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州(当時)への視察研修旅行も実施されました。

その趣旨に賛同し、日本側の創意と努力に啓発された米国側参加者の申し出により、翌年第2回会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催されました。その後、会議は1940年(昭和15年)の第7回会議まで毎年日米交互に続けられましたが、太平洋戦争の勃発により中断を余儀なくされました。

1947年(昭和22年)、在日米国人学生と日本人学生の参加という形式で復活した会議は、1953年(昭和28年)まで日本で開催されました。

翌1954年(昭和29年)、戦後初の米国開催となった第15回会議後、日米学生会議は国際学生会議との一本化をはかるために発展解消しました。

その後、過去の参加者の中で会議の再開を望む声が高まり、創設30周年にあたる1964年(昭和39年)、創始者の一人である板橋並治氏が理事長を務める財団法人国際教育振興会の全面的な支援のもと再び復活、米国で第16回会議が開催されました。1973年(昭和48年)の第25回会議以降、会議中の議論に統一性を持たせるために毎回総合テーマを設定、期間も約1ヵ月となり、現在の日米学生会議の基本形態が整備されました。

創設以来、会議の企画運営は日米両国の学生によって行われています。会議は創設時の理念を忠実に受け継ぎ、同時に時代の変化に対応した発展を遂げ、毎年日本と米国交互に開催されて本年に至っています。

'92年の第44回会議は、『地球共同体への一歩—今果たすべき私たちの役割』“Exploring Our Responsibilities to the Global Community”を総合テーマとし、ワシントンD. C.、ナッシュビル、コロラド・スプリングスの3か所で行われ、相互理解の促進はもとより、地球共同体形成へ向けた両国の新たな協力のあり方についても議論しました。また、会議の成果を広く社会へ発表するため、新たな試みとして「共同声明」を両国学生の共同作業で作成しました。

## 第45回日米学生会議実施要領

主 催 財団法人 国際教育振興会

後 援 外務省

文部省

国際教育交換協議会(CIEE)

日米文化センター

目 的 日米両国学生の率直な意見の交換を通じて、相互理解の深化と知的精神的連帯感の促進をはかり、長期的展望に立って両国の円満な関係をより発展させ、更には二国間の枠を越えた地球規模での人類の平和的共存と調和ある共生に寄与することを目的とする。

実施要領 第45回日米学生会議は1993年7月26日より8月23日までの29日間、東京、福岡、関西を開催地として行われる。前回の参加者の中から選出された実行委員が、日本側は財団法人国際教育振興会の協力を得て、米国側はJASC Inc.の協力を得て準備活動を行う。参加者は、共同生活の中で、安全保障・環境問題・民族問題をはじめとする様々な分野における意見交換の場を持ち、その結果を基に日米両国及び世界の将来について、社会に対して提言を行う。本会議では、主として英語を使用し、分科会、フォーラム、シンポジウム、ワークショップ、実地研修、ホームステイ、ボランティア活動等を実施する。

期 間 1993年7月26日より8月23日まで

参加人員 日本側：39名(実行委員10名を含む)

米国側：39名(実行委員9名を含む)

参加資格 日本側：会議中、大学院、大学学部、大学校、短期大学、高等専門学校(4、5年)及び専門学校に在籍する学生で、日本側実行委員会の定めた選考試験に合格した者。

米国側：米国側実行委員会の定めた者。

参加費 13万円



## 第45回日米学生会議 本会議全日程

- 7月26日(月) ジョイント・オリエンテーション(千葉県東金市)  
27日(火) ジョイント・オリエンテーション(千葉県東金市)  
28日(水) 東京へ移動/分科会(1)  
29日(木) 開会式/外務省講演/総合テーマ討論会(1)  
30日(金) 分科会(2)/戦争と平和フォーラム(1)/米国大使館レセプション  
31日(土) 分科会(3)(4)
- 8月1日(日) 自由行動日  
2日(月) 戦争と平和フォーラム(2)/新国際秩序シンポジウム  
3日(火) 分科会(5)/少数派問題フォーラム(1)  
4日(水) 東京リージョナル企画-環境フォーラム(1)  
5日(木) 貿易シンポジウム(1)/武蔵野市レセプション  
6日(金) 福岡へ移動  
7日(土) 分科会(6)/福岡リージョナル企画-地球市民シンポジウム/北九州市レセプション/ホームステイ  
8日(日) ホームステイ  
9日(月) 分科会(7)/環境フォーラム(2)/リフレクション・ミーティング  
10日(火) ジェンダー・ワークショップ  
11日(水) 長崎へ移動/戦争と平和フォーラム(3)/長崎市レセプション  
12日(木) 戦争と平和フォーラム(3)/自由行動/福岡へ移動  
13日(金) 少数派問題フォーラム(2)  
14日(土) 分科会(8)(9)/関西へ移動  
15日(日) 三田市・伊丹市・加古川市・姫路市のそれぞれに分かれ、パーティ/ホームステイ  
16日(月) ホームステイ/貿易シンポジウム(2)  
17日(火) 関西リージョナル企画-ボランティア・フォーラム  
18日(水) 少数派問題フォーラム(3)  
19日(木) 分科会(10)/総合テーマ討論会(2)/新実行委員会選挙  
20日(金) 新実行委員会ミーティング/自由行動日  
21日(土) 新実行委員会ミーティング/自由行動日  
22日(日) 閉会式  
23日(月) 解散

## 第45回日米学生会議参加者名簿（分科会別）

### <芸術と社会(The Arts and Society)>

* 芝崎 厚士	東京大学 (国際関係論)
田中 沙羅	慶應義塾大学 (人間科学)
東 浩平	筑波大学 (国際法)
日向 裕弥	国際基督教大学 (国際関係)
* Jeff Bennett	West Virginia University (International Studies/Economics)
Ananda Martin	Washington University (Cultural Anthropology/Japanese)
Shari Oshiro	Pamona College (Science, Technology and Society)
Kelley Segars	University of South Carolina (Anthropology/Japanese)

### <ビジネス(Business)>

岩田 康志	関西学院大学 (経済学)
上原由美子	明治学院大学 (国際経済)
山田美那子	立教大学 (国際比較法)
* 割石 俊介	早稲田大学 (政治学)
Don Gibbons	Harvard University (Biochemistry)
George Lekakis	State University New York (Accounting)
* Dana Reed	Howard University (International Business)
Sona Vaish	George Washington University (International Business)

### <経済開発(Economic Development: In the Asian-Pacific Region)>

貝原健太郎	東京大学 (法律)
西見さつき	慶應義塾大学 (法律)
* 平竹 雅人	成蹊大学 (経済学)
細江 葉子	東京大学 (国際関係論)
Christopher Guerriero	American University (International Relations/Economics)
Jessica Jensen	Amherst College (International Relations)
* Jin Gil Lee	Columbia University (International Political Economy)
Nathan Swanson	University of Iowa (Economics/Japanese/English Lit.)

### <今日の教育(Education Today)>

* 坂田亜也子	一橋大学 (法律)
田中 澄人	明治大学 (経済学)
源 真帆	聖心女子大学 (英文学)

吉田 泰治	早稲田大学 (国際商取引)
*Kathie Coble	University of Washington (Japan Regional Studies)
Adam Goff	University of Washington (Japan Studies)
Mandy Sanguinet	University of Missouri (Economics/East Asian Studies)
John Westgarth	Cornell University (MBA/East Asian Studies)

<食糧問題(Food, Our Lives, and the Global Community)>

*阿古 智子	大阪外国語大学 (中国語)
清水 直樹	東京大学 (農業工学)
林 秀美	関西大学 (法律)
三宅 浩史	東京大学 (経済学)
Jennifer Hu	M. I. T. (Economics)
Rick Ponzio	Columbia University (International Political Economy)
*Andrew Seaborg	University of Wisconsin (Int'l Relations/Sociology/Japanese)
Angie Yager	Denison University (East Asian Studies/Economics)

<メディア(Media, Media, Media)>

桜井 周	京都大学 (農業工学)
恒田 恵美	慶應義塾大学 (政治学)
*寺澤 実紀	北海道東海大学 (国際文化)
廣田 良平	東京大学 (経済学)
Andrea Bond	Columbia University (Political Science)
Andrew Conti	Wayne State University (English Literature/Business Admin.)
*Lisa Mizumoto	University of San Diego (Political Science/Japanese/Russian)
Roy Schmidt	University of Kansas (Advertising/Japanese)

<健康と社会—心と身体のパランス(Mental and Physical Health in Society)>

鈴木 武志	富山大学 (英語学)
*高橋 香織	東京外国語大学 (イタリア語)
中村明日香	慶應義塾大学 (国際政策)
村上 敦哉	大阪外国語大学 (英語)
Cecelia Blue	University of Illinois (Marketing/Economics)
Colleen Cebulla	Macalester College (Biology)
*Kenji Hall	Harvard University (East Asian Studies)
Greg Ruhnke	Stanford University (Medicine)



<哲学と人生(Philosophies of Life and Human Issues)>

後藤田鶴子	お茶の水女子大学 (英文学)
* 西元 宏治	早稲田大学 (国際法)
坂野 晴彦	名古屋大学 (医学)
渡邊 尚美	同志社大学 (英文学)
Blanche Fung	Harvard University (East Asian Studies)
* Mitzi Hnizdil	University of Florida (Public Relations/Japanese)
Taro Isshiki	Cornell University (Government)
Monte Scholz	University of Puget Sound (International Affairs/English Lit.)

<新時代の法と政治(Politics and Law)>

* 竹井 亮一	東京大学 (法律)
秦松 昌樹	慶應義塾大学 (法律)
米倉由美子	筑波大学 (国際法)
脇坂あゆみ	American University (International Relations)
* Todd House	Wake Forest University (History)
Bonnie Mioduchoski	University of Florida (Anthropology)
Kristina Skierka	University of Colorado (Political Science)
Mark Wenzel	University of Washington (Korean Studies)

<変貌する世界における科学技術の影響(Technology's Impact on a World of Change)>

尾崎 良太	福島県立医科大学 (医学)
友末 優子	名古屋大学 (応用科学)
* 松本 安代	徳島大学 (医学)
Mike Bayle	Stanford University (Computer Science/Japanese)
Sarah Kovner	Princeton University (East Asian Studies)
Mike Siegl	Stanford University (Economics/History)
* Walter Hutchinson	Columbia University (International Political Economy) (都合により参加できなかったが、会議開催のため一年間尽力してくれた)

\*は、コーディネーターを表す。

第 一 部  
準 備 活 動

第45回日米学生会議の準備活動は、2つの段階にわかれる。第一段階は、1992年8月から1993年4月までの時期であり、この間準備活動に携わっていたものは、主に10人の実行委員のみであった。第二段階は、1993年5月の全体合宿以降であり、新参加者30人を含む40人が、日本側の準備活動にあたった。

第一段階では、会議の理念や目的といった根本的な方向性に関する合意形成、具体的な企画の設定、選考・広報・財務・開催地との交渉といった実務的な部分の準備が進められた。実行委員は毎週土曜日にミーティングを行って各自の仕事の状況を確認し、また何度か合宿を行い、夜を徹して議論し合うことも少なくなかった。

企画・選考・運営をすべて学生が行うという日米学生会議の伝統にしたがって、各種企業・財団・マスコミ・地方自治体などとの交渉を進めていった。実行委員全員が、そのよ

うな経験の中で何度も壁にぶつかったが、そのたびにIECのスタッフや、過去の参加者のみなさんの暖かいご支援・ご忠告を受けて努力を続けることができた。

第二段階では、新参加者と共に、会議の具体的な内容に関する準備を中心に進めていった。新参加者は各自が所属する分科会のメンバーとして、またフォーラムやシンポジウムのタスク・フォースとして、精力的に準備活動に参加した。

この時期の準備活動の中心となったのは、週1回行われた定例会である。東京では日米会話学院において土曜の午後に行われた。名古屋、大阪でも同様に開催された。定例会では、毎回テーマを決めてプレゼンテーションやディスカッションが行われた。また、参加者間の通信として『犀の角』が発行され、多くの参加者が毎週力作を投稿し、本会議へ向けて各自の準備を進める役割を果たした。



(左より)

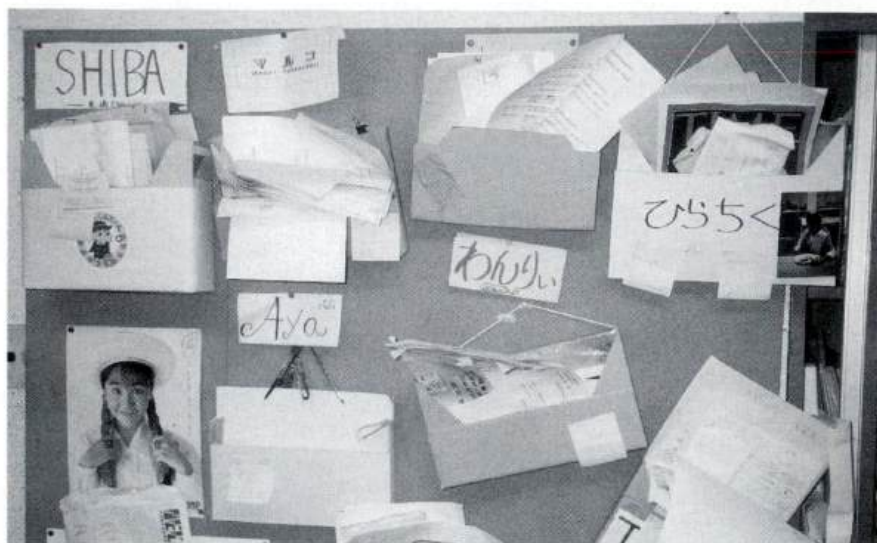
高橋 香織、松本 安代、阿古 智子、寺澤 実紀、坂田 亜也子、  
平竹 雅人、芝崎 厚士、竹井 亮一、割石 俊介、西元 宏治



定例会以外の活動として、国連大学、韓国学園、NHKなどを訪問して、そこで活動している方々と話し合うことを目的としたフィールド・トリップが行われた。また、6月12日には、ISA、日韓学生フォーラム、日仏青年会議のメンバー、さらに一般参加者を交えて6月セッションを開催し、本会議で話し合われる内容に関してディスカッションを行った。さらに、5月の後半からは、定例会とは別の自主勉強会が行われ、学術的な論文からインタビューや哲学的な作品に至るまで、様々な文献を読んで話し合いを行った。

本会議直前の時期は、全員目も回るほどの忙しさであった。私自身、夜半からワープロ

に向かっているうちに朝日が昇りはじめののに気付いたことが何回あっただろうか。また「何でこんなことまでやらなくてはならないのか」という問いを一度ならずも自分に発した経験をしたのも、私だけではないだろう。しかし、それでも何とかやり遂げることができたのは、ひとえに会議にたいする情熱があればこそである。そのような情熱を与えてくれた、1992年の第44回日米学生会議のみなさん、そして1993年の第45回日米学生会議のみなさんに、心から感謝したい。そして、来年度の第46回会議に参加する人が、同じような情熱を持って会議を作っていられることを願います。



## 第45回日米学生会議 準備活動全日程

- 1992年 8月19日 第45回日米学生会議実行委員選出  
 20～22日 新実行委員会ミーティング(日米)  
 開催期間・テーマ・参加人数・開催フォーラム等、第45回会議の枠組みを決定
- 9月12～13日 日本側実行委員会合宿(1)  
 10月10～11日 日本側実行委員会合宿(2)  
 11月2～3日 日本側実行委員会合宿(3)  
 12月～ 全国の大学にて説明会  
 19日 東京四谷の日米会話学院にて第一回講演会  
 講師：亀井俊介氏、西崎文子氏  
 26～27日 日本側実行委員会合宿(4)
- 1993年 2月18日 北海道にて講演会開催 講師：P・J・リネハン氏  
 20日 日米会話学院にて第二回講演会  
 講師：斎藤鎮男氏
- 3月2日～ 応募締切り・全国各地で選考試験実施  
 5～6日 日本側実行委員会合宿(5)  
 4月2～4日 日本側実行委員会合宿(6) 参加者の選出・所属分科会の決定  
 5月2～4日 全体合宿 参加者全員が初めて集合
- 8、15、22、29日 東京・名古屋・大阪で定例会実施  
 ディスカッション・本会議準備、連絡・『犀の角』発行  
 27日～ 東京で自主勉強会開始
- 6月～ 東京・名古屋・大阪でフィールド・トリップ実施  
 (NHK、キース・ヘリング展、UNCRD、たんぼぼの家など訪問)
- 5、19日 定例会  
 8、15、24日 勉強会  
 12日 6月セッション実施
- 7月1、8、15、22日 勉強会  
 3、10、17日 定例会  
 24～26日 直前合宿 最終確認など



第44回日米学生会議閉会式、日米双方の実行委員長、遠藤、ケ빈は感極まり肩を振るわせていた。皆、それぞれの思いのなかに80人の仲間を感じていた。僕は真一文字に口を結び必死で涙を堪えた。人間は理解し合える。国も民族も文化もなく、ただ一人の人間として人を理解し愛することが出来る。自らの手で。この思いをもういちど。感動の中そう胸に誓った。一年の道のりは本当に長く険しく、だからこそ優しさに溢れた時間であった。

実行委員長の仕事とは何なのだろう。僕の一つの結論は“熱意”と云う言葉に集約される。何時いかなるときもJASCに対するヴィジョンを持ちつづけた。怒りや戸惑い不安の前に笑顔で応えつづけた。決して諦めることはなかった。出来ない、不可能を捨てJASCが必要とする全てに挑戦した。多くの人に出会った。我々の理念を説き、御協力を願った。いま手元に残る約四百枚の名刺の束。有為な示唆を数多くいただき、多くの感動に触れる

ことが出来た。

もどかしさとの戦い。なぜ分かってくれないのだろうか。何故わからないのだろうか。他人との、そして自分との闘い毎日の毎日である。寂しさに苦しさに挫けそうになる。そんなときの何気ない一言、何気ない眼差しが、なんと僕を奮い立たせてくれたことだろう。相手への心からの尊敬と真剣な議論の中に人間の持つ無限の可能性さえ感じる事が出来たのである。

明日はもう少し話してみよう。彼は、彼女はこの問題をどう考えるんだろう。理解しようとする努力、頑張ろうとする努力、挑戦しようとする意志を持つ。80人の一人一人に目を向けつづけ、こんなJASCを創り上げる。静かなる熱意の前に、自ら実行し続ける事ひとりの人間として議論し、尊敬し、理解し、そして感謝する。これが僕にとってのCHAIRでありひとりのJASCerとしての意志の表明であった。

時として諦めうずくまり、また、意気揚々と立ち上がり、そして共に笑い、共に泣き、微笑んでくれたみんな、心から有難う。そう、こんな時を作り上げたJASCerへのちょっぴり気恥ずかしいような尊敬とみんなへのこの感謝の気持ちを心の奥でいつまでも燃やし続けること。これが僕の最後の仕事かもしれない。

第45回日米学生会議閉会式、大いなる感動の前に優しさに包まれながら僕は初めて止めない涙を流した。

ありがとう The 45th JASCer.



副実行委員長の仕事ほど報告しにくいものはほかにないと思う。9月の時点で他の担当者が過去の記録や書類を見ながら一年間の仕事の流れについての説明を前任者から受けている中、ほとんど何の書類も使わず(と言うより、始めから存在しない)、ゴミの捨て方や過去の活動に関する記録や資料の保管場所などについて断片的な引継ぎを行なっただけで動き始める。それも、そもそも副実行委員長には決まった仕事などないことを考えるならば、結果的には仕方のないことかもしれない。強いてその仕事を挙げるなら、実行委員長、選考、広報、経理、財務そしてリージョナル・コーディネイター以外の全ての仕事、それに加えて毎週のミーティングの下準備、講演会が近付けばビラ刷りを行なったりして広報の仕事を手伝い、選考が近付けば選考問題を作ったり選考担当者として相談して段取りを整え、約1ヵ月もの間毎日事務所に通いつめたことなどを挙げる事が出来る。実際の選考の際も、仙台・名古屋・大阪へと赴いて、選考・面接を行なった。新しい参加者が決まれば、全体合宿の準備をし、定例会が始まれば毎週土曜日までにスケジュールを作り、直前合宿の手配も行なった。その間、本会議が近づくにつれて、開催地との詰めが必要になると、リージョナル・コーディネイターと現地の下見や打ち合わせに赴いた。それ以外にも、日々の事務所の清掃や備品の買物やECミーティングの議題を調整した。

しかし、こんなことをいかに書き連ねたとしても到底、自分が副実行委員長として過ごした一年近くの日々を説明することは出来な



いように思う。それ以上に、何をしたのかよりも、何をそこから学び取ることが出来たかということの方が大事であるということを実感できた一年であったと思う。実際、第44回日米学生会議に参加してから第45回日米学生会議が終了するまでに自分が学んだことは言葉では尽くせないほど大きなものであったと思っている。

第44回の日米学生会議が終了したとき、自分は迷いながらも実行委員として日米学生会議に残ることを選んだ。確かに、日米学生会議という場をより多くの提供するためには、誰かが実行委員として残り、会議を作らなければならないという現実を始めから存在した。しかし、そうした現実に対する責任感以上に僕を実行委員にさせたのは、今までの自分に対する嫌悪感だったように思う。自分の生活のなかの何かを換えようと思っていた。そのために自分自身を試してみようと思っていた。もう一年間、日米学生会議という環境のなかで、自分の考えや行動を見詰め直してみたい

と思っていた。そのために実行委員になった。

実行委員になって以前と何より変わったことは、いつも現実との関わりの中で物事を考えなくてはならないということだった。非常に当たり前のことであつたけれども、それまでの僕にもっとも欠けていたことだつたように思う。頭のなかでは自由に物事を動かすことが出来る。そこでの基準は、常に自分自身であり、時間も空間も思考を遮ることはない。しかし、日米学生会議という会議を現実に取り上げてゆくためには、様々な問題を限られた時間と資源の中で処理してゆかなくてはならない。そして、自分の考えを発言し提案することは、それを現実化することを意図すると解され、常に「責任」が伴つた。ただ考えるだけでなく、行動が常に要求されるようになったわけである。

例えば、きつと例年問題になることなのであろうけれど、実行委員間における仕事の割り振りという問題がある。確かに、頭の中では、各人が積み木を積み上げるように、はっきりと自分の割り当てとされた仕事をこなし、それを持ち寄ることによって、会議は完成されてゆくことになると考えることが出来る。しかし、実際には各実行委員の仕事の間には、明確な区別は存在しないように思う。財務や経理はその仕事の性質上、他の仕事との間に比較的はっきりとした線引きが可能なように思われるが、それにしても10人という限られた人間が、限られた時間と資源の中で会議を実現させるという現実を考えた場合、やはり、各人が自分の領分にしか責任を感じない様では会議を実現するという責任を果したとは言えないと思う。こうしたことは、ただ仕事の割り振りだけにことが納まらない問題であるように思う。

現実がどうであろうと、尊重すべき原則が存在することは認めるが、常にそれは関係する現実全体の中で捉えるものであり、目の前に存在するものを無視して、原則論を振りかざすことは、問題解決に対する責任を放棄したことに他ならないように思う。そうした原則論をいくら繰り返しても、責任感から逃れることは出来るかも知れないが、現実は一向に変わらないのである。こんな今考えると当たり前のことに何度も頭を悩ましたりもした。

この点、副実行委員長という仕事は、早い段階に斯様な思考から脱することが出来る立場におかれていたように思う。なぜなら副実行委員長には、始めから割り当てられた仕事などというものは存在しないからである。固執する仕事も逃げ込める領分も始めからないことによって、より客観的な立場から、全体の準備活動を眺める機会が与えられていたように思う。

こうした前提に立って、副実行委員長に仕事を改めて定義するならば、各担当者間に生じる隙間を探ることだつたように思う。そういう意味では、副実行委員長というのは、トカゲのしっぽみたいなものかも知れない。しかし、この隙間が大きいのである。もっと言うと、実行委員の仕事は隙間だらけなのである。別にこのことは各担当者が自分の仕事をきちんとしていないということを直接には意味しない。ただ、日米学生会議そのものがそうした性質を持つものであるからにすぎない。善くも悪くも日米学生会議は未完成なのである。きつと学生会議に限らず、人間のやることはいつもその考えに比べて貧弱に見えるのかもしれない。その上各人が動くことによって仕事の内容も、他の担当者との関係も常に動いてゆくのである。どこまでやっても



これで十分ということは実際なかったように思う。しかし、だからこそ努力をする余地が残されていたように思われる。逆にこの隙間を積極的に評価すれば、この隙間をどう処理するかが、各回毎の会議の個性を作ることだったのではないかと考えている。どんなに些細なことであったとしても、それを誰かが行なわなかったとしたら、それは存在しないのである。物事を批判したり嘆いたりすることは、簡単である。しかし、そこからは何も生まれないのである。例えば、微力であり不完全であったとしても現実に働き掛けることなしには、何も変わらない。そんな当たり前の

ことに、何度も、何度も、何度も気付かされた一年だった。

副実行委員長としての活動を通して、学んだことや報告すべきと思うことを出来るかぎり書き連ねてきたけれども、どうも今一つうまくまとめ上げる術を僕はまだ持っていないようだ。きっと他にも言うべきことや伝えるべきことが沢山あるのだろうけれど、文章という体裁に直せるほど自分の中でも整理できていないように思う。使い古された言葉ではあるけれども、僕にとっても日米学生会議はまだ終わっていないのかもしれない。

## 東京地区担当

割石 俊介

第44回会議の最後の頃、New EC meetingに於いて、日本開催における開催地の1つに、東京が決定された。以来、東京地区担当の私としては一体東京のどこを拠点としたらよいのだろうか、ということに頭を悩ませることになった。

一口に東京といっても、それはとても広いエリアである。23区の内と外、南東京と北東京で違いはあり、一色ではない。

拠点の選定に当たり注意しなければならない要素は次のようなものであった。



- 1) 交通の便—東京=日本の首都という地の利を活かしたプログラムを進めるにあたり、できるだけ便利などころがよい。
- 2) 費用—JASCは金持ち団体ではない。できるだけ安い料金で済むところが多い。
- 3) 環境—治安・景観は良好か、近所にコンビニ、コインランドリーはあるか。
- 4) ファシリティの良さ—蒸し暑い日本の夏の開催である。ホテルには冷房・シャワーはついていなくてはならない。また、門限はない方が望ましい。

このようなトレード・オフの関係にある要素のバランスの中で決定しなければならなかった。

そして今一つ重要なことは拠点の地方自治体の協力を取りつけることができるかどうか



である。地域に密着したプログラムを開催するために、又、財政的な援助を得る為に、自治体の協力は欠かせないものであった。

結局、第45回の開催地としては武蔵野市が選ばれることとなった。東京23区の外、武蔵野の台地に位置する彼の地は、新宿・渋谷といった都心部にも行き易く、リサイクル運動への取り組みなど地域自治の動きも活発で、また、宿泊地として選んだ吉祥寺東急インには厚遇していただけることとなった。

武蔵野吉祥寺を拠点とすることでもう一つ大きなメリットとなったのは、同市内にある成蹊大学(学園)の協力を得られたことであった。会議開催中は大学では夏休みにあたるが、特別に、フォーラム・シンポジウムの為の大教室、分科会の為の小教室、食堂(食事)、購買部などの開放・提供をしていただけることとなった。また、開会式にあたっては学園史料館を使用させて頂いた。

東京地区担当としての仕事は会議開催までに主にこの2つの協力先—武蔵野市と成蹊大学—との協議、連絡、調整をすることだった。市・大学へ提出する予算書・計画書などの書類の作成、実際に当地へ出向いての説明、市と共催のイベント・環境フォーラムのプログラムを巡ってのミーティング、大学での会場

下見、開会式後の立食パーティーの為にケータリングサービス業者(第一ホテルにお願いした)を交えての史料館での打ち合わせ……準備期間はあっという間に過ぎていった。

私事ではあるが、春からは就職活動をしてきたこともあって、時にはかなりハードな準備活動であった。しかし、決して事務能力が人並以上に備わっている訳ではない私が、曲がりなりにも準備活動を乗り切ることができたのは他の実行委員全員の支えのおかげと、なによりも武蔵野市及び成蹊大学の(学生課を中心とした)方々のおかげだったと思う。書類の提出が遅れたり、計画に大きく変更があったり、無理なお願いをしたり……と、いろいろご迷惑をおかけしたが、その都度皆さんは本当に温かく、親切に、ご指導下さった。私が気付かないところまで事前に準備しておいて下さったりしてその配慮に心打たれることも度々あった。

こうして、準備活動は何とか進み、7/28からの東京地区プログラムを晴れて開催できることとなったのである。

最後に、この場をお借りして、武蔵野市、成蹊大学の方々、並びに東京地区準備をお手伝い下さった全ての方々に厚く感謝させていただきます。

## 福岡地区担当

竹井 亮一

92年10月の福岡地区訪問から候補地の選定を始め、11月には北九州・福岡・長崎の三市での実施を決定した。一方、当地に於ても他の二開催地と同様、公開プログラムが行われることとなって居り、北九州市の方々との話し合いの中で、地域や地方といったコミュニティー・レベルの生活単位の重要性を考える



シンポジウムを開きたい、ということで詰め  
の作業をすすめた。

今回の開催地の中で福岡・長崎は唯一コー  
ディネーターの生活地と全く別の場所であつ  
たため、数回に渡り出張を行い、それでも手  
の届かなかった多くについては、北九州市の

末松様、佐々木様の両氏に全面的にコーデ  
ィネートして頂いた。両氏の1年に渡る叱咤激  
励とご協力に心から感謝申し上げ、又、共に  
出張した平竹、西元、高橋にお礼を述べて報  
告とする。

## 長崎地区担当

芝崎 厚士

新実行委員ミーティングの時、私は初の沖  
縄開催を主張した。米国側にも賛同者がいた  
が、結局は容れられなかった。そう簡単では  
ないかもしれないが、次の日本開催では是非  
実現してほしいものだ。それはさておき、そ  
の次に私が固執したのが長崎訪問であった。  
その実現可能性は、準備活動が進行するにつ  
れて困難になっていったが、それは主に財政  
的な理由が原因であった。それでも私は頑と  
してその意義を他の実行委員に説き続けると  
同時に、長崎市の好意に一縷の望みを託し、  
援助を依頼したのだった。結局その時の覚書  
が、文化国際課の山下課長の鶴の一声によつ  
て受け入れられ、ようやく1月の終りに長崎  
さ行きが決定したのだった。

その後、広報活動を抱えつつ長崎のリー  
ジョンナル・コーディネーターとして準備を進め  
たが、常に市の方々のご厚意によって万事が  
順調に進んだ。それが最も明確に現れたのは、  
6月10日～12日に私とにしも(西元)が当地を  
訪れた際の市側の万全の対応であった。詳細  
は『犀の角』の“Royal Wedding Tour Pt.  
1&2”に詳しいが、第39回会議(1987年)の際の  
スタッフの方が多く残っており、その国際交  
流経験の豊富な腕利きの諸兄のご支援により、  
短期間で最大限の効果を上げて出張を終える  
ことができた。準備の最終段階では、主に電

話で確認を行ったが、その際の我々の要望に  
対する迅速な対応が有り難かった。コーデ  
ィネーターとしての負担が思ったよりも軽減さ  
れたので、私はその分他の重要な準備にも精  
力を傾けることができた。そのことによって、  
会議に対する貢献をより果たすことができた  
と思う。

ともかく、今回の長崎訪問に関しては、文  
化国際課の皆さんの手厚いサポートがその成  
功のほとんどをもたらして下さったといつて  
も過言ではない。まさに名伯楽といった風格  
の山下和俊課長、酸いも甘いも噛み分けた温  
和な仕事人の多以良光善係長、親身になって  
終始面倒を見てくださった山内素子女史、高  
橋秀子女史、そして博学の名通訳プライアン  
さんに厚く御礼を申し上げたい。本当にお世  
話になりました。

1995年に長崎は原爆投下五十周年を迎え、





様々な記念事業を行うという。現在の強力なスタッフが健在なことを考えあわせると、次の日本開催での開催地としては申し分ない条

件を揃えているように思われる。長崎での会議開催を責任を持って推薦する次第である。

## 関西地区担当

阿古 智子

9月初め、アメリカから帰国すると息をつく暇もなくリージョナル・コーディネーターとしての仕事が始まった。まず、来年の会議での宿泊場所を決める作業を始めたのだが、80人が1週間余り安く、そして快適に過ごせる場所を探すとなると大変な作業であった。コロラドスプリングスの実行委員会にて開催地を決定した際には、関西はその土地によって様々な特徴を持つところがおもしろいという意見が出、関西地区では自由活動日なども含めて何箇所かに回ろうという事となっていた。故に拠点を関西の何処にするかは決めておらず、宿泊地決定においては事実上コーディネーターに任されていた。大阪、奈良、京都、兵庫辺りで条件に見合った施設を探そうと、府庁、県庁、地域の観光局に出向いて相談したり、様々な施設から資料を取り寄せたりしたが、完璧に条件に合う施設はまずなかった。しかし、それぞれの長短を考えた上で三田市の関西学院大学セミナーハウスに決定し、ご好意によって安く使わせて戴けることになった。セミナーハウスがすばらしい施設を完備していたのに加えて、都市近郊にあるにもかかわらず多くの自然の残された三田市での開催に、実行委員はかなり乗り気であった。こうして宿泊地を決めたのは良かったがそれだけで三田市を拠点とし学生会議の企画を進めていくのにはかなりの無理があった。というのは、事前に三田市と交渉し、開催に際しての協力を全く取り付けておらず、日米学生会



議が地域に招致されたという形ではなかったからだ。自分達の条件にあった場所を選び、それに合わせてもらうなどと甘い考えをしていた事が、そもそもの失敗であった。学生会議開催には多額のお金がかかる。そうした会議開催の費用を集めるには、どうしても自治体を初めとする地域からの協力が必要であった。そして、地域からの協力を得るためには、私達が地域から求められた存在でなければならぬという事が準備活動をしながらにして分かってきた。宿泊地を決める前にいくつかの自治体と交渉し、お互いの事業目的に叶う所と協力関係を結ぶのが筋であったと思ったが、時すでに遅しであった。何しろすべてが始めての事である。大した経験もしたことはない学生が、社会で既に活躍されている方々相手に交渉していくのだ。初めから失敗の連続だった。しかし、何とか兵庫県三田市を拠点として会議を開催したいという私達の気持



ちを伝えていくことによって、地域の人々にも納得できないものだろうかと考え、三田市、その他開催に関わる自治体との交渉を開始したのだった。

関西での学生会議準備費、開催費用は出来るだけ関西で集めるということになっていたので、まずは財務活動としていくつかの団体に賛助のお願いをすることから仕事は始まった。日米学生会議の由来、歴史、45回の計画内容等について関係諸団体に説明して回った。なにしろ初めてのことで、最初はもじもじと慣れない説明の仕方であったが、そのうち空で云える様になる程にまでなった。訪問先では何処にいても答えは重いものばかりであった。折からの不況のせいもあっただろうが、日米学生会議は開催することによって何を達成出来るのか、はっきりとしたものがないというのがたいの方々の意見であった。ある時、大阪のある国際交流団体に賛助のお願いかたがた伺った時、そこの担当者に厳しい批判を受けたことがあった。その方は、私が学生会議について説明をしている間頷きもせずパラパラと事業報告書をめくり、暫し何やら考えておられたが、やがて報告書を机の上に置き、そして言われた。「何だこの企画書は。全く何を目的として企画されているのかわからない。それに、学生会議はいつもいつも相も変わらず同じ様な企画しかしていない。今の学生団体はパワーがないね。何かを自分たちで変えてやるというものが感じられない。昔、学生闘争があった頃は、若者はもっと意気盛んだった。変革を起こす率先者となろうとしていた。君達はこれだけの予算規模で事業を行なっているのにどうしてこんなものしか出来ないのか私には不思議だし、これではこれから支援してくれる団体もどんど

ん減っていくことだろう。途上国の支援活動をしているNGO等に支援したほうがどれだけためになることか。」このようなことを淡々と言われた後、「もう少し自分たちの活動についてよく考える様に。」と言って颯爽と仕事に戻っていかれた。私は、呆然としてしまった。今まで自信を持って描いていたものが音をたてて崩れていった。いや薄々感じていた事を鋭く指摘されてショックだったのかもしれない。日米学生会議は長い歴史をもち、多くの方々からの支援を受け、恵まれた環境で今まで開催に漕ぎ付けてきた。そうした支援に応えるものは、日米学生会議からは何もない。1ヵ月の間、様々な議論を通じて日米の関係改善、しいては世界の平和を目指していく等と言っても、議論によってどんな成果が生まれると言うのだろうか。見えないが故に、学生会議は日本とアメリカの学生80人の単なる交流会としか見られないかもしれない。いや、私達が為そうとしているのはそんなものじゃない。じゃあ一体私達は何をしたいが為にこんなに必死に動いているのだろうか。どうして学生会議を45回も続けてきたのだろうか。私は、此処にきてもう一度原点に戻らざるを得なくなった。

これからどうしたらいいのか。どんな気持ちで学生会議を企画していけばいいのか。一人てしばらく考えているうちに苦しくなってきた。自分では一生懸命やってきたつもりだったが、やっぱり考えが甘かったのだ。自己満足に過ぎなかったのだ。そうこうしている時にある実行委員から電話がかかってきて話をしてた時にその実行委員はこう言った。「俺達に出来ることをしていけばいいんじゃないの。」そう言われた瞬間に何だか急に楽になった。自分たちに出来ることを自分たちの

理想に従ってやっていけばいいんだ。それでも受け入れてもらえないのなら又その時にやり方を変えるしかない。とにかく前を向いて明るく進んでいこう。と考えることにした。それから、事ある度にやはり落ち込んだり、悩んだりしたが、電話や手紙での実行委員とのやり取りの中、解決することがほとんどだった。東京の本部から離れて仕事をしているとついつい何でも一人で悩みがちであったが、共に困難に立ち向かいながら頑張っている仲間がいるんだという事を感じて、又立ち直っていった。

難航していた財務活動は、様々な人に助けられて少しずつ話がまとまっていった。リージョナル・コーディネーターとしての仕事の他に、合間を縫って広報活動や、選考の準備をしていたが、そちらの方も関西にいるOB達に助けられてなんとか進行していった。ようやく会議の基盤は出来たのだが、今度は中のプログラムを具体的に埋めていかなければならない。今年は、地域での一般公開のプログラムも予定していたので講師との交渉等とても大変であった(公開プログラムについては報告書のボランティア・フォーラムの欄を参照)。地域の人々との交流会も途中でプログラムを変え、直前になってホームステイを取り

入れたので、リージョナルの仕事を手伝ってくれた実行委員やホームステイを急をお願いした三田市、伊丹市、加古川市、姫路市の担当の方には大変な迷惑をおかけした。だが、この地域との交流プログラムを企画していくうちに、様々な人との出会いがあり、人を通じてその土地がますます好きになっていった。こうした感動を他のJASCのメンバーも味わえたなら、JASC開催がどのような意味をもつか、その捉え方も変わってくるのではないかと、アメリカ側のメンバーも含めて日米学生会議をメンバー全員のものにしていくにはどうすればいいのか、その可能性を同じように悩む実行委員と考えたこともあった。

5月には新しい日本側のメンバーも決まっており、多くの仲間と共に仕事を進める楽しさが毎日の生活に加わった。6月、7月と月日は過ぎ、どんどん会議が近付き仕事に追われる日々が続いた。宿泊、交通、会議場などの手配を細かくチェックしスケジュール表作成、各イベントの地域の担当者との交渉など一つ片付くと又一つという感じで出てくる仕事を何とかこなしていった。こうして一応アメリカ側参加者を迎える準備がその体裁を整えたのだった。

## 財 務

坂田亜也子

財務の仕事は、JASCの運営にかかる費用を調達することである。JASCはその費用の一部を各方面からのご寄付に頼っている。主に、それをどうするかを考えるのだ。

JASCの場合、予算に見合った規模でやるという事はない。企画・活動先行形なのだ。不況のため、企画通りいくなか、経理と共に頭

を痛めた1年間だった。開催不可能となって私たちがOBから叱責される姿が、現実のものとならないよう願ったものである。手袋をしてさえ、手がかじかみペンの握れない冬の事務所であった。

JECとしては、JASCの内容そのものには直接関わりのない仕事にはじめは思えた。し



かし実際は、JASCの根本的な存在理由をいつも問い直し続ける仕事であった。JASCは、大変多くの方々のご厚意によって支えられているものだ。JASCは、自分たちは、こうしたご厚意に答えられるだけの事ができるのか。いや、しなければならないのだ。JASCにさせていただく投資は、有形無形のそれは、直接的にお返しできるような種類のものではない。こうした透明の債務の返済を、将来に亘ってできるだろうか。

こうした問いから、自然JASCとはどんなものであればいいのか、自分なりに答えを見つけようとするようになった。完全な答はまだ見付かるものではないけれど、「期待してるから、頑張ってる」とか「自分も学生時代にこんな事できたら」などと言っていた度いっそう深く考えさせられた。

私たちを支えて下さった皆様、本当にありがとうございます。財団・社団、企業の方々はいかに及ばず、OBの皆様にも大変お世話になった第45回だった。日本の、また海外のOBからの力強い励ましには本当に感激した。学生である私たちの言動は、皆様にはお見苦し

## 広 報

これまで、広報の対象は3つあるとされてきた。すなわち、会議を広く社会に知ってもらう一般向け広報。次に、参加資格を持つ層に会議を紹介し、一人でも多くの人に応募してもらうための学生向け広報。そして最後に、他の交流団体とのネットワーク形成とその円滑化を図るための「同業者」向けの広報。ところが実際には、第四の広報が存在する。すなわち、参加者各自が会議との、そして他の参加者との相互理解を深めるための広報である。

い点も時にはあったと思う。それでもいつでも、暖かく私たちの拙い説明を聞いて下さった。人間は一人では本当に何にもできないのだなあ、と自分の未熟さをひしひしと感じた1年であった。

しかし、みんなの力を合わせれば何か出来るということを見せてくれたJECのメンバーには本当にお礼を言いたい。資金調達が思うに任せないのに、企画ばかり進行していく不安から苛々する私を辛抱強く見守ってくれた。

最後になりましたが、財務、経理関係では大変お世話になったIECの西部さん、水野さん、そして深い理解をいつも示してくれた両親に、満腔の感謝を捧げます。



芝崎 厚士

この第四の広報は、従来は無意識の内に様々なレベルで行われていたが、今回はややそれを意識して行った。すなわち『犀の角』の発行である。実際のところ、日本側にとって、事前の準備段階における会議に対する意識の覚醒は、非常に重要なのである。詳しくは別稿に任せるが、『犀の角』が果たしたような役割をもつ活動は今後も継続されるべきであろう。

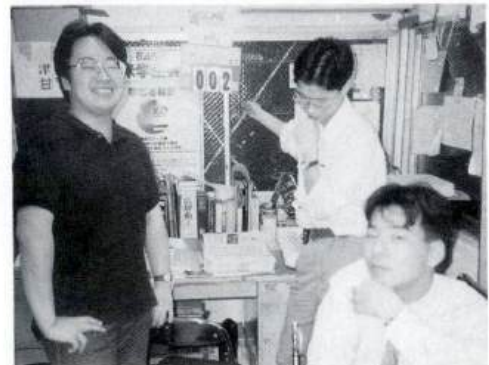
今年の広報活動に関して、簡潔にまとめよ



う。一般向け・学生向けの広報に関しては、従来どおりポスターの掲示、各大学での説明会、ビラの作成・配布、ダイレクトメール発送、マスコミへの呼びかけという古典的な方法を行った。ただし、今年は量的には従来以上の広報を行った。最終的な問い合わせ人数は前の日本開催の際の約2倍であった。他の主要な活動として、東京で2回、北海道で1回、講演会を行った。東京での第一回講演会(1992年12月19日)では、東京大学教授(当時)の亀井俊介氏、成蹊大学助教授の西崎文子氏を迎えた。第二回講演会は、大来佐武郎氏にお願いする予定であった。事前に内外政策研究会に氏を訪ね、お話を伺ったのは1月28日であった。2月9日の大来氏急逝の後、講演を快諾されたのは、元国連大使の齋藤鎮男氏であった(1993年2月20日)。いずれの講演会も、日米会話学院で行われ、盛況のうちに終了した。北海道の講演会は、1993年2月18日、かでの2・7にてアメリカンセンター館長(当時)のP・J・リネハン氏を講師にして行われた。「同業者」向けの広報としては、6月12日に行った6月セッションをおこなった。日米学生会議、日仏青年会議、日韓学生フォーラム、国際学生協会のメンバーとそれ以外の一般の学生を招いて、議論を行った。その続編は10月に開催された。

今後の広報の課題は、第一に事務作業の効率化と、第二にはOBを中心としたマスコミ広

報ルートの確立、第三にはゼミ・クラブ・サークル・生協などといった他の学生関連団体との協力による組織的な広報の確立があげられる。いずれも毎年悪戦苦闘しながら改善されない点ばかりなので、今後改革すべき課題として各回の実行委員は常にこれらの諸点に取り組みなくてはならないだろう。個人的には充実感を味わえた仕事であったが、だからといってそれが最大の成果を達成したとはとてもいうことができない。もっと効果を上げると同時に労力を下げることができるはずである。もちろんそれは努力を怠ってもよいと言う意味ではない。最後に、広報に関して一致団結して協力してくれた他の実行委員・参加者とOBのみなさん、そして印刷・コピー・講演会の準備その他でご迷惑をお掛けした国際教育振興会のスタッフのみなさん、そして講演を快諾してくださった亀井俊介氏、西崎文子氏、P・J・リネハン氏、齋藤鎮男氏のご厚意に深く感謝します。



## 選 考

寺澤 実紀

選考は大勢の応募者の中から新参加者を決定する、日米学生会議にとって重要なプロセスだ。当たり前なことながら、参加者の存在なくして会議が成立することはない。より多

くの人々にこの会議を経験してもらいたいと切望する一方、人数に制限があるため30名を選ぶ必要があり、ジレンマと背中合わせの中での活動であった。

毎年選考担当は東京在住者であったが、東京在住実行委員の人数不足に伴い、札幌在住の私が担当せざるを得なくなった。対外的責任の伴う選考だけに躊躇したが、自分を含む実行委員メンバーたちには、「私が担当する」以外の選択肢は残されていなかった。

10月上旬頃から選考担当として仕事を開始した。過去の資料等を参考にしつつ、選考の有無とその理由、対象、期日、会場、選考方法等、文字通り1から順に議論し、決定した。我々実行委員の最大限の誠意を示し、全ての受験者に公正な選考を行うためにも最も重要な手続であった。選考は実行委員全員で行うものであり、私1人が全ての責任を負うわけではないことに気付かされ、肩の荷が少し下りた。

毎月行われた合宿で選考に関して議論を重ねた。選考実施期間である3月が近づくとつ



れ、各種マニュアルや通知類の作成に追われた。2月も終わる頃上京し、「季節労働者」として直接的な選考運営に約1か月間従事した。全国7ヶ所で選考試験を行い、多くのOBやOGに協力して戴いた。4月の選考合宿において新参加者30名と彼らの所属分科会を決定し、新参加者の名簿が完成したところで、選考の全てが終了した。

## 経 理

経理は、当会議運営に伴う金銭の支出管理に関する仕事を行なう。準備活動開始直後の9月から6月の予算決定まで、各フォーラム・シンポジウム・リージョナル担当者及び財務担当者の協力を得ながら、数次にわたって予算書を作成した。また毎月の実行委員立て替え分支給の手続きや、会議中の支払いも担当した。今年は不況で賛助活動の達成見通しが明るくなく、いかに賛助金に見合った予算を立て、予算内で実行委員が計画したことを成し遂げるかのバランスに苦心した。収支決算の結果、赤字を出さずに会議を終了することが出来たのは誠に幸いであった。予算削減要求に応えようと最大限の努力をしてくれた実行委員全員に感謝します。立て替え分支給が

### 高橋 香織

遅延しがちであった点を、申し訳なく思っています。そして、会議が実現するのだろうかという金銭面での恐怖と一緒に耐えてくれた財務担当の坂田に、また末筆ながら予算書や調書の作り方を一から指導して下さった国際教育振興会の水野さんと西部さんに心からお礼を申し上げます。





松本 安代

日米学生会議参加者は例年過半数が東京周辺の関東の学生である。東京に事務所があり、活動の中心が東京である以上、当然の比率といえるかもしれない。広報活動も東京、そして過去の参加者がいる大阪、名古屋、札幌などの大都市を除くと手薄になりがちであることは否めない。第45回JASCの地方広報活動では選考試験会場予定地を中心により多くの人に日米学生会議の活動内容、存在意義を知ってもらうという方針をたてた。

中・四国の選考予定地は広島、高松、松江の3ヶ所であった為、まず香川県、島根県の国際交流協会にお願いし広報紙に載せて頂いた他、広島では中国新聞に紹介記事を書いて頂いた。大学説明会は12月下旬に香川大学、1月中旬に広島大学、2月上旬に島根大学、岡山大学で行った。

4ヶ所での大学説明会を通じて感じた事は「地方」学生のパワーだった。東京との絶対的な情報量の差、地理的不利などはあるものの、機会があれば自分も“何か”やりたい、機会を掴みたいという熱い思いを説明会時のフリートークで語ってくれた人も少なくなかった。実際に第45回JASCに参加することになった

中・四国の学生は残念ながらいなかったが、広島で、松江で…JASCのみならず、国際交流について、「地方」と「中央」との関わりについて等、様々な話が各地でできたことで今回の説明会は意義があったといえよう。

JASCのことをより広く知ってはもらいたいが、実際に本会議に参加できる人数は限られているというのが広報の抱える矛盾であろう。しかし、本会議前の準備活動として「地方」で説明会や講演会を行うことはこれからのJASCの1つの課題といえよう。

最後に中・四国における第45回JASC広報活動に関わって下さった方々に心からお礼を申し上げたい。



## 全体合宿

西元 宏治

出会いというものが人にとってどれほど大事なものであるかは、改めて言うまでもないが、出会いということだけに関していえば全体合宿ほど印象深い出会いの場というものも少ないのではないかと思う。

それは、全国各地から集まったお互いに見知らぬ者同志が集まり、これから本会議終了までの4ヵ月の間、共に会議を創るという不思議な偶然を自分にとって、そして、自分に出会う人にとってより豊かなものにするため



には自分自身が何を為すべきなのかということが、限られた時間の中で模索される場所であるからかもしれない。単純に過剰なまでに溢れてくるエネルギーに触れる最初の機会であるからかも知れない。

全体合宿は、参加者にとっては全くの新しい始まりであり、全国から30名の新しい参加者が初めて顔を合わせる場になる。一方、実行委員にとっては、初めて新しい参加者と一同に会する機会であると同時に、昨年初めてJASCに出会ってからちょうど一年が過ぎたことになり、この一年の自分を振り返る場にもなる。

今年も例年と同じく、ゴールデン・ウィーク中の5月2日、あの代々木のオリンピック・センターに全国から新しい参加者が集まった。集合時間が過ぎ、全員が顔をそろえると簡単に会議全体についての説明が行なわれた。その後、恒例の自己紹介が全員で輪を作って行なわれた。例年、この自己紹介は屋外で行なわれるのだが、あいにくの雨のため今年は屋内で行なわれた。一人ずつ、名前や学校などを述べるとこれからJASC内で呼び合うあだ名付けが行なわれた。このあだ名は、毎年、年齢や学校、専攻の違いを超えてJASCerとしての連帯感を共有する目的で行なわれるものであって、日本側だけでなくアメリカ側の参加者にも、本会議中のみならず白髪の生える頃になっても呼ばれる可能性を持つものである。実際、はじめは非常によそよそしく、ぎこちなかった自己紹介もこのあだ名付けが進むうちに、妙にJASC的な雰囲気(?)が漂うようになっていった。

自己紹介が済むと、休む間もなく会議の詳細に関する説明が行なわれた。本来ならば、自由に親睦を深める時間を取りたいところで

はあるが、この機会以外には本会議直前に行なわれる直前合宿まで、参加者全員が顔を合わせる機会がないため、各企画の説明や準備活動の進行状況、企画担当者の選任などが限られた時間の中で次々に行なわれていった。いきなり39名もの人間と知り合ったうえに、次々と浴びせるように企画の説明を受け、余りの情報の多さに参加者の中には戸惑いも多く見られたが、まだ見ぬ会議に対する期待の高まりが感じられ、わずかな自由時間であった夕食の際の会話でもそのことは十分に確かめることが出来た。結局、初日は食事の時間以外全てを費やして、夜10時に会議室の使用時間が尽きるまで、本会議、準備活動に関する説明などが行なわれた。

2日目は、前日に決めた係り分担などに基づき、各企画のこれからの方針や具体的な準備の段取りなどについて少人数に別れて話し合いが行なわれた。また、今後全体で顔を合わせることは本会議直前に行なわれる直前合宿までないため、今後の連絡方法の確認なども行なわれた。この日も、朝早くから午後一杯のスケジュールであったが、夜はOBの方々をお迎えして、ささやかながら懇親のためのパーティーを催した。当日いらしてくださったOBの中には、7年連続全体合宿にいらして下さっている方もおり、新参加者もOBの方々の体験談やJASCへの思いを伺い、まだ見ぬ本会議への思いを大いに膨らまし、代を越えたJASCerとしての連帯感を感じる事ができたようだった。この日は、2日にわたるハードスケジュールにもかかわらず、宿泊棟に帰ったあとも夜遅くまで(正確に言うと、朝早くまで)、話をする声絶えなかった。

翌朝は、簡単な確認事項だけで即解散となり、慌ただしかった2泊3日の合宿は終了し

た。皆、今後の準備活動と2ヵ月後の再会に  
思いを馳せながら、疲労し切った体を引きず

って全国に散っていった。



## 定例会

### 東京定例会

---

芝崎 厚士

5ページの表の通り、東京での定例会は、合計9回行われた。定例会は、日本側の準備活動の最も中心的な活動であり、それだけ楽しみも苦勞も多いものである。基本的な予定や時間配分などは、結局最後まで私が中心となり調整して決定する羽目になったのだが、例年同様時間切れになることが多く、事務局が閉まり、日米会話学院の教室から追いやられても、その建物の下で連絡や相談を行っていた。

定例会の内容自体は、本会議の企画に関する参加者の積極的なプレゼンテーションや討論によって、かなりの充実をみせたが、去年に比べると会議がどうあるべきか、といった点に関して踏み込んだ議論が生まれるまでに思ったより時間がかかったようが気がする。

それは新参加者のせいだけではないのだが。それでも、総合テーマに関する議論を中心にそのような話し合いが盛り上がってくるにつれて、漸くJASCらしい雰囲気が出てきたような気がする。日本開催ということもあり、準備活動の量が多かったのもっと自由に話し合える時間をもてるとよかった。また第44回会議の時のように講師を招いた討論なども取り入れるとより変化に富んだ定例会になっただろう。とはいえ、やはり必要とされる事務的な連絡の量は膨大で、その分話し合いの時間が削られることも多々あり、本来温めてきていたはずの定例会に関する創意工夫を思ったほどは実現できなかったのは申し訳ないことだった。

また、回を重ねるにしたがって参加人数が



減少し、開始時間が遅れるという悪弊も例年どおりみられたので、今後もよく注意してもらいたい。自省を兼ねていっておくと、今年の場合は『犀の角』の製本作業も遅刻スタートの元凶であった。各自忙しい中をぬって集まっているのだから、その貴重な時間を無駄にしないような内容を作るには、実行委員を中心とした参加者間の事前の連絡と準備を如何に効率的に行うかが鍵となる。また時間的制約を言い訳にして問題点を先送りすることを回避するには、参加者一人一人が会議に対する自分自身の考え方を妥協せずに主張し続けると同時に、会議に関する資料や情報を整理し、積極的に公開することによって、参加者間の会議に対する知識のギャップを最小限

に抑えることが必要だろう。そのような姿勢と用意が新参加者と実行委員の双方にあつてこそ初めて、参加主体と運営主体が同一であることによって全員に提供されているはずの日米学生会議という無限の可能性の荒野を開拓することができるのである。

もちろん、他の場所で思いをぶつけ合うのも大切だが、定例会の内容の充実あつてこそはじめてそのダベりも生きてこよう。今年の反省を生かして今後もよりよい定例会をめざしてほしい。なお、今年は東京以外の地域に住む参加者がよく足を延ばして参加してくれた。彼らの熱意溢れる貢献には特に感謝したい。



上原由美子

5月の初めての顔合わせだった全体合宿以後、毎週土曜日に行われた東京での定例会は45回会議に様々なものを与えてくれた。毎週特定テーマに基づいたプレゼンテーションやスモール・グループ・ディスカッション、ラップ・

アップ・ディスカッションは本会議のための良い練習となったと思う。しかし、何よりも我々の個々の精神的な部分の準備と参加者間の心のつながりをもたらしてくれたことが最大の収穫ではないだろうか。週一度、わずか4、



5時間ではあったが約2ヵ月半、時間を共有することができて良かった。時々、東京地区以外からはるばるJASCerがやって来て皆を驚かしたり、OB・OGの方にディスカッションに加わって頂き刺激を受けたりもした。又、この定例会を通して各々“自分の持つ分野”があることもわかった。だから毎回必ずといって良い程、1人のJASCerから新しいことを学んだ。JASCは実に多種多様な専門性、個性を持ち備えた人間の集団なのだ。あつという間に5時になってしまい大あわてで教室を出たものだ。その後は、よく日米会話学院の

斜め向かいにある『天狗』へ行って、物足りなさを補った。店員さんに「何名様ですか。」と尋ねられ、いつも「20人です。」とか途方もない人数を答え、さんざん迷惑な顔をされたことも良い思い出である。

東京地区以外のJASCersと定例会をもつことが出来ずに残念ではあったが、東京定例会が情報発信地となり本会議準備の重要な役割を果たしたことは確かだ。他の地域での定例会同様、会議作りの一環として不可欠なものだったと考えている。

#### 田中 澄人

ここで、私の個人的な東京における定例会の実情について感じたことのささやかな考察を述べたいと思います。多くのデリゲーツにとって非常に楽観的に、希望を満たすものとして本会議が位置付けられているようですが、厳しい目というものがなければ前には進まないでJASCのさらなる飛翔を期待して、苦々しく聞こえるかも知れませんが、あえて書かせて頂きます。

私感からすれば、定例会は多くのデリゲーツの期待を一身に背負って始まりました。しかし、日を追うにつれて個々のベクトルが必ずしも同じ方向に向いている訳ではないことが明らかになり、白熱した議論、討議を求めるよりも、平穏で寛大な精神による自粛と不問の規制が基調として存在しました。こうして、互いの共通する目的を見付けだし新たな実を育てるという作業は、少しずつ義務的で非生産的な情報と知識の公開の場となってしまいました。

また一部の人々にとって、話し合われる内容があまりにそれらの人達の日常考えるもの

とかけ離れていたために、殆ど全ての問題に対して意見の乖離と認識の相違が見受けられました。しかしながらこうした認識のズレは、最終的に「個人の多様性」という一種の隠れ蓑のなかに閉ざされて最後まで妥協として残りました。この事實は、学生の団体であり、自由意志による団結であることを考えた場合、避けえない問題点なのでしょうが？

学生という社会的に責任がないだとか、法的拘束力や契約してないからという理由の為に、より多くの実を結ぶであろう可能性が失われるのは、たいへん遺憾です。これは、多くの人たちに手作りのJASCを知ってもらうには適当かも知れませんが、先代方の持つ知恵や蓄積された有形無形の貴重な財産というものには、全くといって良い程目が向けられていませんでした。これは横への繋がりが、より強いという事実と共に、彷徨う小羊を思い出させます。

願わくば、個人的問題を乗り越えて、飛躍のための苦しみをもちとわなない強い意志が生まれ出ることを期待します。



週一回の定例会も関西では6人という人数の少なさ故、全員が集まれることは少なかった。しかし、今年は、日本開催で準備も多く、毎週土曜日以外にも、フォーラムの講演者に交渉にいくやら、広報活動にいくやらで都合のつく人同士協力し合って準備活動を進めていった。勉強会も、東京で行われていた程数多くは出来なかったが、皆自分の関心のある分野を選び、発表しそして議論を行なった。

関西地区担当の実行委員として定例会を率いてきた私にとって、今考えると様々な思い出が込み上げてくる。最初は、定例会を始める前に9ヵ月程も準備活動を行ない日米学生会議の在り方や企画進行の詳細について、日々考察を積み重ねてきた自分と、新しい参加者との隙間を埋めるのがとても大変であった。もちろん各参加者とも、それぞれ思い入れがあってこうして日米学生会議に応募された訳であり、そうした各自の目標や期待に添って準備を進めていけばいいと考えていた。しかし、特に日本開催の今年は各イベントの企画に際して、皆で歩調を合わせて準備を進めていく必要性があった。どうしてこうしたフォーラムを企画するのか、各イベントの企

画はどうするのか、社会へのアピールはどのように行なえばいいのか等、様々な事を議論し企画を作り上げていかねばならなかった。私達は、学生会議を実行委員が全てを企画し、実践の場を参加者に与えるというのではなく、参加者全員が各自のやってみたいことを企画出来る場と考えていた。今回は一般公開のフォーラムの準備等もあり、始まってみればある程度企画されたものに取りかかればならないという状況があり、新しく入ってきたメンバーと歩調を合わせるにはかなりの無理があったし、先ほどの各自の考えを取り入れ企画するという方針からすると矛盾している部分も多々あった。反省点も多く残るところだが、実行委員と参加者の立場の違いや、学生会議への考え方の違いなど、各自が思っていることを率直に言い合うことでお互いの溝を埋め、夏の会議を成功させることを目標に協力することが出来た。少人数ながら一つ一つ疑問点については議論を重ね、相互の理解も深まった様に思える。

関西では、今年6人のメンバーにて準備を進める機会が与えられたが、この先地方の参加者でも有意義に日米学生会議に参加していける様な対策をもっともって考え、学生会議の可能性にチャレンジしていくべきだと思っている。そして、方法はたくさんあると思うが、一番大切なのは、対話を大切にすることだと思う。住んでいる地域や環境が違うことにより生まれるギャップは、最初から無理に埋めることはない。ぶつかり合い、話し合うことで少しずつお互いの事を理解していくのだと思う。そしてそれが日米学生会議の核心



を支えていると私は信じている。

#### 関西定例会 日程表

5月9日 関西リージョナルイベント企画会議  
16日 勉強会(経済問題について)  
18日 大阪ボランティア協会公聴会  
27日 兵庫県庁、神戸市訪問  
29日 たんぼぼの家、リバティー大阪訪問

勉強会(マイノリティーの問題について)

6月4日 中田武仁氏訪問  
6日 関西学生連盟ミーティング参加  
13日 ボランティアフォーラムピラづくり完成  
14日 日米学生会議関西OB会  
26日 勉強会(従軍慰安婦について)  
7月3日 勉強会(環境問題について)  
11日 最終打ち合せ

渡邊 尚美

関西定例会を一言であらわすと「なごやか」になると思う。例えば、議論になり空気が煮詰まっても、常にそこはかたなく流れるなごやかなムードがあった。それには、様々な理由がある。第1に、人数。定例会は通常、七人で行われていた。少人数であったため、集中すべきときと脱線していいときのきりかえがスムーズにいき、緊張と緩和のめりはりのきいた時間をもてた。このように、過度の緊張と緩和を避けられたことも大きな原因であるが、第2番目には、メンバーの問題があげられる。七人全員が非常にほんわりとした性格であり、その上に、所謂「関西の人」であったため、終始笑いの絶えないなごやかさがあったのだ。第3に、場所の問題がある。今年、好運にも、落ちついて定例会をもてる環境にあった。松本宅・阿古宅等を提供して頂いたことで、非常にくつろぎ、静かな場所で、声を張り上げることなく話しあえた。大きな声を張り上げるとどうしても感情的になりが

ちなので、これは重要な点だ。数回、喫茶店や大学食堂で、ボヘミアン定例会を持たざるを得ないことがあったが、もし、毎回あのようなであったら決してなごやかな定例会にはなり得なかった。個人の家だったので、お茶も飲み放題であり、又、夕食を一緒にとりながら雑談をしたりと、休憩を上手に使えたことも大きかった。個人の家最大の利点は、時間が無制限であるということだ。各人納得のいくまで話しができる。準備活動や発表について、各々満足するまでとことん話しができたことは、関西定例会の誇りである。討論の充実感が、満足という名の「なごやか」を産み出していたことは間違いない。

仕事や情報が東京に集中する中、「東京にいれば……。」と思ったこともある。しかし、今は、関西の定例会に参加していたことをとても嬉しく、又、誇りに思う。来年、どのような定例会がもたれるかはわからないが、今年のようなよさを引き継いで、頑張ってもらいたい。



今年名古屋地区から参加者が二人いた。一人は坂野晴彦、もう一人は私だ。二人で定例会を開くなんて無理だから、月に一〜二回関西定例会に出席すればいいかな、と二人とも考えていた。しかし5月の全体合宿でECの人に二人で定例会を開いて欲しいと言われ不安でいっぱいだったが、とりあえず頑張ってみる事にした。毎週土曜日の午後に行う事にした。5月中はだいたい名古屋大学の図書館で行い、6、7月は鶴舞図書館で行った。関東定例会で話し合われているトピックを参照しながら毎週色々な話題をとりあげた。時間がたっぷりあったのでお互いの知識・体験をもとに深く話をする事が出来た様に思う。ただ二人とも理系だった為か貿易等のトピックになると何を話していいかわからなくなる事態もよく起こった。

後半は毎週東京から送られてくる『犀の角』をもとに、そこから興味あるトピックを選び二人でディスカッションを行った。

5月29日は関東フィールドトリップに二人で参加した。6月9日は名大祭の講演会をさきに行ったり、10日はフィールドトリップを企画し、午前中は国際連合地域開発センター、午後は韓国学園に行った。7月16、17日の関西定例会にも参加した。

東京や関西の定例会の内容に圧倒されながら、最初は何をやっているかわからなかった。しかし自分達なりに定例会をもち、話し合いをする事によって自分の意見が整理でき、JASCに望む事が出来た様に思う。これから後、地方参加者の方には、是非その地域での定例会をもつ事をおすすめする。

## 『犀の角』

『犀の角』は、第45回日米学生会議の日本側参加者向けの通信である。1993年5月22日より毎週1回発行され、会議中にも1回(8月5日)、会議終了後にも1回(9月25日)に発行された。合計して1993年11月までに12冊が発行された。今後は45thのOB誌として、年1〜2回の発行を予定している。

『犀の角』の前身は、1993年5月2日、8日、15日の計3回、同名のフォーラムのコーディネーターであった私が発行していた『戦争と平和』通信である。私が『戦争と平和』を発行するに至った動機は、国際交流の理念として、あるいは個人の信条としても頻繁に

取り沙汰される「平和」について、自由に意見を交換したいと思ったこと。そして、準備活動を行う際に不可欠な連絡事項を小冊子としてまとめておくことにより、連絡の不備を補うこと、などがあげられる。もともと意見交換のための小冊子の発行は、昨年の準備活動中にも行われていたので、アイディア自体は特に目新しいものではないが、今回は質的量的に準備活動全体を包含する総合的なものへと成長を遂げたのである。

何回か発行しているうちに、記載事項を『戦争と平和』ものに限らず、広く会議の全企画に求めると同時に、日本側参加者全員が共通

してシェアできる情報源としての役割も加味することになり、『戦争と平和』は、『犀の角』として再スタートした。

『犀の角』の語源は、ご存じの通り『ブツダのこぼ』の「犀の角のようにただ独り歩め」(岩波文庫版、十七頁)、という表現である。それは「求道者は、他の人々からの毀誉褒貶にわずらわされることなく、ただひとりでも、自分の確信にしたがって、暮らすようにせよ、の意」(同、二五三頁註)である。他の候補としては、「経綸問答」(中江兆民の『三酔人経綸問答』より)、エイレネ(ギリシャ語で「平和」)などがあげられたが、参加者の投票の結果、私がなかば冗談で口にした『犀の角』に決まった。

以上のようないきさつから、私が編集長となり、企画・編集・原稿の取り立てなどをほぼ独断と偏見に基づいて行った。最初は原稿の集まりが悪く、自分のタスク・フォースやテーブル・メンバーに半ば強制的に投稿をお

願っていたが、次第に投稿者も増え、頁数も増大した。

「『犀の角』は『しばの角』?」とある参加者が私にいったことがあるくらいに、私はこの編集作業に打ち込んだ。毎週水曜日や木曜日には決まって原稿の取り立ての電話をし、金曜日には夜が白々と明ける頃まで表紙作りや「編集者より」という巻頭言を書くためにワープロに向かっていった。ファックスを借りていたのが災いして、記事の着信音で朝目が覚めることもあった。土曜日の朝はマジックを手に電車で飛び乗り、周囲の目も構わずに集まった記事にページ数を書き込んだりした。他にも仕事は山のようにあったが、これほど自分が夢中になれた仕事はなかったかもしれない。定例会が始まる時、ようやく『犀の角』が出来上がってみんながそれを読み始める瞬間は、いつもほっとしたような嬉しいような気分になった。

日付	名 称	頁 数	投稿人数
5/2	『戦争と平和』 0号……………7 (別冊40頁)		1
8	『戦争と平和』 1号……………10		1
15	『戦争と平和』 2号……………17		7
22	『犀の角』 1号……………24		9
29	『犀の角』 2号……………37		16
6/5	『犀の角』 3号……………53		16
12	『犀の角』 4号……………40		14
19	『犀の角』 5号……………42		9
26	『犀の角』 6号……………49		14
7/3	『犀の角』 7号……………50		11
10	『犀の角』 8号……………65		16
17	『犀の角』 9号……………59		14
24	『犀の角』 10号……………89		16
8/5	『犀の角』 11号……………17		14
9/25	『犀の角』 12号……………78		11



投稿記事の中から、特に優れたものに対して、読者の投票部門と編集者の選出部門それぞれに「わがままパンダ大賞」ならびに「わがままパンダ賞」が贈られた。ちなみに「わがままパンダ」とは、編集長のニックネームである。受賞者は脇坂・吉田(以上大賞)、尾崎・田中(澄)・芝崎&西元であった。

多忙をきわめた準備活動の中で、参加者はそれぞれ力作を投稿し、会議前の意見交換の場として『犀の角』を活用した。また、東京以外の地域に住む参加者にとっては、東京の活動を知り、自分の活動を伝えるための有力な手段として役立つものと思われる。

少し残念な点として、意見交換の場、というよりは意見発表の場であって、建設的な討論がなされなかったことがあげられる。しかしそれも、『犀の角』という題名の持つ含意を

考えると、仕方のない気もする。この題名が自己現実的にその性格を規定したと言えよう。

「偉大なる自己満足」と揶揄されながらも、最後まで発行し続けることができたのは、好むと好まざるとにかかわらず原稿を書き、印刷・製本を手伝ってくれたすべての人々の協力の賜物である。感謝の言葉もないが、やはり「本当にご苦労さま。どうもありがとう」と述べておきたい。特に、「印刷部長」のダンサー(貝原)、「編集長付秘書見習い」のゆみ(上原)、お疲れさまでした。

会議後は、全員「犀の角」のように会議の思い出を抱きつつ、またバラバラになってそれぞれの道を歩いて行く。そんな現実を微かに見通すことのできるインプリケーションをもつ、不思議な『犀の角』は、次の発行日を静かに待っているのかもしれない。

#### 上原由美子

『犀の角』は、45thJASCersの意見箱の様な存在だった。とにかく何でも受け付けてくれた。JASCへの思いをぶつける人もいれば、日常生活をざっくばらんに皆に、披露する人もいた。連絡事項、自らのつぶやき、地方定例会からの便り……。今思えばこの『犀の角』は定例会だけではとても自分を表現しきることの出来ない部分を皆がぶつけ合っていた場ではないか、と思う。いつの間にか帰りの電車の中で『犀の角』を取り出して読みふけるのが習慣になっていることに気付いた。回数を重ねるごとに投稿する人が増え、それに伴いページ数も大幅に増加した。印刷には毎回、多くの人がかかわり一時から始まる定例会に間に合う様に製本に取り組んだ。途中、あまりの大量な紙を使うことから環境破壊の懸念も生じ製

版に何度も同じ紙を使用したり再生紙を使用したりもした。しかし、何といっても頭が下がるのは、編集長のShibaだ。「わがままパンダ」と名付けられながらも皆から原稿を集め、構成を考えて一度も休むことなく手作りの『犀の角』を発行してくれた。これはJASC前の皆の不安、期待に答え、遠く離れたJASCers同志の心を結びつける重要な役割を果たしてくれたことに疑いは無い。本当にご苦労様。

『犀の角』が、JASCersの大切な思い出の一つになっているが、これからも季刊誌として続く予定だ。皆、JASC後の思いをあ頃のようにまた『犀の角』で熱っぽく語ってはどうか。



## 貝原健太郎

言論の自由は我々民主主義国家に生きる人々にとって欠かせないものであります。権力から自由を勝ち取るために先人たちは時には暴力に訴えかけることもありましたが、その思想というものはロック、ルソー、マルクスといった著述家たちによってペンを通じて人々に伝えられ、そして今日まで影響を及ぼしてきました。しかしたとえ言論の自由が認められていたとしても、自分の考えを他の人々に伝える手段がなかったとしたら、いったいどうなるのでしょうか。そこにおいてもはや自由は名ばかりのものであるに過ぎなくなってしまいます。自由であるためには、その物質的基礎が不可欠なのです。

そしてここに私達が手に入れたもの、それが『犀の角』です。『戦争と平和』通信を前身としたこの週刊誌は、毎週土曜日の午前中に芝崎厚士を父長とする同志たちによって印刷、製本され、日米学生会議の参加者たちに配られ、彼らを大いに啓蒙しました。その作家陣は未来の大作家、脇坂あゆみを初めとする会議参加者だけでなく、会議OB、またISAの参加者にまで及び、その内容も戦争論、環境、ジェンダーといったお堅いエッセイから、去勢、ダンスといった柔らかいものまで手広く

カバーしていました。加えて、常に環境にも気を使い、紙は表紙だけを上質紙とし、中ページは再生紙を使用しました。またその紙節約の過程で2点の優れた芸術作品が生まれたことも忘れられません。

以上を読めば十分いかに優れた学術誌であったかはお分かりいただけたと思いますが、しかし欠点がなかったわけではありません。一つには紙上討論が成立しなかったことにあります。それぞれの作家は自分の思うことを自由に発表できたことはよかったです、それに対する反応にかけ、発表することによって作家自身が得られるものは少なかったように思います。もう少し議論が起こればよかったのですが。来年への課題としましょう。



## 6月セッション

6月12日、「6月セッション」が行われた。これは、日米学生会議の準備活動の一環として、二国間国際交流を行っている他の学生団体と一堂に会し、交流を持つことで相互に刺激し合い、学び合おうという趣旨の集いであった。

## 割石 俊介

日米学生会議実行委員会の呼び掛けに応えてくれたのは、国際学生協会(ISA)、日本・韓国学生フォーラム、日仏青年会議のメンバーであった。また、一般にも参加を募り、多数の学生が当日の会場となった東京・四谷の日米会話学院に集合した。

午前・午後にはわたるプログラムであったが、午前中はまず各団体から沿革・活動内容の紹介があった。発足の契機もその後の歩みもそれぞれに異なる四団体ではあるが、各々夏に控える会議本番への夢を熱く語り、その底流にある思いには通ずるものがあるようであった。

午後からは各分科会に分かれてのディスカッションを行った。主催者であったこともあってテーマ設定とグループ分けは基本的に日米学生会議が行い、日米学生会議参加者がデ

ィスカッションの司会を務めた。テーマは日米学生会議の本会議でとりあげることが予定されていた「戦争と平和」「新国際秩序」「貿易」「ジェンダー」「コミュニケーション」「環境」と多岐にわたり、活発な議論が交わされた。

セッションが終わったの感想としては、「他の学生交流団体の人達と話ができて刺激になった」「本会議での議論を進める上での参考になることが沢山あった」等々、開催の趣旨にかなったものが多く聞かれた。

---

### 渡邊 尚美

6月12日早朝、私は新幹線で東京へ向かった。6月セッションに参加するためだ。私にとっては5月の全体合宿以来、実に1ヵ月振りの上京であった。関西在住の筆者にとって6月セッションは二つの意味をもつ。「再会」と「討論」だ。時間的にも金銭的にも余裕がないため、よほどのことがない限り、東京へはいけない。その意味でも、この企画は、よいきっかけであった。

午前中、各団体の紹介が済むと、時計は既に12時を回っていた。我々はディスカッションのグループに分かれ、昼食をとりながら自己紹介をした。一通り話したところで部屋を移動し、討論が始まった。10人弱の人数やプレゼンテーションと討論という形式等、会期中の分科会とよく似ており、よい練習になった。が、しかし、発表者の意図とは関係なく、自己増殖的に主題が推移していく討論までが、本番同様であったとは、その時誰に想像し得たであろうか。具体例を挙げてみよう。例え

ば、私の参加していたグループは、服部君の事件を題材に、異文化間コミュニケーションについて話した。(話そうとしていた。)しかし、他の参加者より、「異文化間コミュニケーション」という問題の立て方自体を疑う発言がなされ、発表者が意図していた「それに伴う困難と克服法」については、あまり触れられずに終わった。それに対応して、潔く論点を切り捨て、議論の流れを遮らなかつた発表者は立派であった。討論とは生ものである。どうなるのかはふたを開けるまで分からない。非常に当たりまえのことだが、改めて、気付かされた。勉強になった。

又、各グループの題材が会議の企画と重なっており、このセッションをきっかけに、より興味をもって、準備ができた。5月の全体合宿から7月末の会議まで約二ヵ月半。丁度、中だるみの時期に、よい刺激が得られたと思う。



## フィールド・トリップ総括

高橋 香織

日米学生会議に参加出来る人数は、応募資格や規模・財政上の諸条件から限られてしまう。この限界を少しでも広げ、一般の方々にも当会議を経験する機会を提供しよう、という提案から、フィールド・トリップと称する一日実地研修を試みた。

5月初旬の全体合宿にて、今年の会議内容にふさわしいと思われる希望研修先を討議・選択し、新参加者を交えて交渉を行なった。

6月下旬の1週間にわたって参加者の多い出身地を中心に、東京8、名古屋2、関西1の計11回研修を行ない、多くの一般参加者を得て好評の内に活動を終えた。各実地研修の

責任者となった本年度会議新参加者にとっては、初めての対外交渉であり、会議参加にあたって学ぶ点が多かったことであろう。彼らによる活動報告は、以下の通りである。



## たんぼぼの家

村上 教哉

準備期間中の5月29日(土)の午前に、関西のメンバーを中心に9人で、障害者の自立を助ける施設である「奈良たんぼぼの家」を訪れた。

古都奈良にある「たんぼぼの家」は薬師寺・唐招提寺で有名な西の京のはずれにあり、環境は申し分なかった。

まず初めに所長の村上さんから、「たんぼぼの家」の活動報告から日本における福祉の現状に及ぶ幅広いお話を頂いたが、ただただ自分の福祉に関する認識不足を痛感するばかりであった。

りであった。

最後に、障害者の方々と実際に会う機会を頂いた。メンバーの者は皆、笑顔で障害者の人達に接していたが、多くの者が何かしらショックを受けているようであった。

この日の経験が、我々の福祉に対する問題意識を高め、今後、各自が実際に行動を起こすことにつながるであろうことは、帰り際にメンバーの1人が所長の村上さんに「たんぼぼの家」のスタッフになりたいという申し出をしていたことから、明らかであった。

## UNHCR (国連難民高等弁務事務所)

米倉由美子

国連難民高等弁務官事務所(以下、UNHCR)への実地研修は、7月2日、午後3

時から2時間の予定で、東京・青山のUNHCR駐日事務所で行われた。参加者は、JASC参加



者やその友人の計7人だった。

今回の実地研修の内容は、UNHCR駐日代表のギィ・プリム氏の講演及び質疑応答というものだった。

氏は、まず、難民の定義を説明された。それによると、「難民」には、「難民(refugees)」と「避難民(displaced people)」の二種類があり、前者は難民条約で定められた、迫害の恐れのため故国を離れた人々を指し、後者は内戦や戦争、飢饉、人権侵害などのため、住みなれた土地を追われながらも、自国内にとどまっている人々を指すということだった。難民の歴史については、プリム氏のお話のおかげで、私達は新たな認識を持つことができた。それは、難民の歴史は人類の歴史と同じであるということだ。古代メソポタミア文明の時代か

ら、宗教の違いのため迫害された人々が難民となった。17世紀のフランスの宗教戦争をきっかけとして、新教徒は国を出て(難民化)、アメリカを建国した。そして、20世紀に入り、「難民の大量移動」の時代となった。1917年のロシア革命、第二次大戦でのナチスの迫害によってヨーロッパに大量の難民が発生したのを契機に、1951年にUNHCRが発足し、次第にその活動領域を拡大したということだ。難民化の要因は主に二つあり、独裁国家や社会主義国家の人権侵害と、経済的貧困である。日本については、かつては移民を送り出していたと指摘した上で、プリム氏は日本にいる難民が物理的にも精神的にも多くの苦勞を強いられている状況を説明した後、日本はもっとopenになり、自分と異なる人とも考えをexchangeすべきだと主張された。

お話の後は、皆活発に質問をし、この問題への関心の高さが見えた。今回の実地研修は各参加者に自分なりの難民に対しての新たな認識を持たせてくれたという点で、大変有意義なものだったと思う。これを機会に、今後も、自分なりに難民について考えていきたいと思っている。

## NHK

1993年6月30日、梅雨の降り注ぐ中、NHK放送センターへのフィールドトリップが実施された。普段、何気なく接しているNHKの裏側を見ることで「公共放送NHK」の恩恵をいかに享受しているかを知る機会となった。

NHK(日本放送協会)は、我が国唯一の公共放送である。公共放送とはリンカーンの言葉をもじれば「国民の、国民による、国民のた

## 山田美那子

めの放送」と言える。放送法に基づき、「公平・中立」をモットーに活動している。

NHKの経営は、世界の公共放送で唯一、国民の自由な意志による受信料のみによって活動が支えられている。

日本の放送界においてパイオニア的存在であるNHKは、放送技術の向上や衛星放送の足場固めなどにおいて、民放を指導、先導し



ている。この点が、民放との並立、共存を可能とする鍵となっている。

NHKが民放と異なる点は、国民に必要、友好と思われる番組に関しては、視聴率に捉われずに放送する点である。誰も一度はお世話になった語学番組、教育番組等は1%にも満たない視聴率でも長年にわたって放送されている。

また、NHKは、報道機関として、ただ一つ災害対策基本法で「国民の生活や財産を災害から守るために国が指定した公共機関」である。それが人々にどれ程信頼を受けているか

は、事故や地震などの災害が起きたときに多くの人が、まずチャンネルをNHKに合わせるといふ事実からも想像ができる。

以上がNHKについて受けた説明の概要である。説明をして下さった国際局の正田様の「公共放送に携わる者として、放送技術の向上や充実を図ることは役目としては当然の事だが、技術屋としては何年もかけて研究した成果を民放に無料で提供するのには、ちょっと……」という言葉に、研究者としての本音が表われていたような気がした。

## UNIFEM(国連婦人開発基金)

上原由美子

6月30日(水)、日米会話学院地下1階にてUNIFEM(ユニフェム)国内委員会代表の中村道子さんに「開発と女性の問題」について、お話し頂きました。予定の6時を少し過ぎて始まりました。中村道子さんは、JASCのOGでいらっしゃるせいか、初めから和やかな雰囲気が進みました。参加者は、真帆、私の大学の友達の樋渡さん、Sue、よねちゃん、Tom、Dancer、竹ちゃんと44thのサリーと私でした。雨が降っていたこともあり、中村さんも含め10人という少人数でしたが、こじんまりと、アットホームな感じでした。

まずは私達にUNIFEMとはどんな物かというハッキリとしたイメージが余り無かったので「UNIFEMの概要」をお話し頂きました。第一に何故女性に焦点を当てるのか。ここでは、様々なデータを取り上げながら、絶対的に貧困状態にあるのは多くの女性と子供であり、また先進国の女性識字率が98%なのに対して途上国では2.1%であり加えてこの女性の識字率は伸びるどころか、減少しつづけ

ていることを示して頂きました。つまり、現在、主に途上国において女性が十分な教育を受ける機会を持つことができないために、彼女らの自立が妨げられる大きな要因となっているのです。

第二に、他の国連機関との関連ですがUNIFEMはUNDP(国連開発計画)のもとにあり、その他にUNHCRやUNICEFなども連帯し活動しているそうです。先述の通りUNIFEMは第三世界の女性自立をすすめるというものですからUNDPからその様な種類の仕事を委託されるのです。



第三に、実績と歴史ですが開発途上国において大変重要な生産労働の主な担い手であるにもかかわらず、社会で正当な評価が成されていないために、援助の資金や技術は女性になかなか届きませんでした。そこで「国連婦人年(1975年)」に続いて1976年には「国連婦人の10年基金」が設けられました。そして、1985年「国連婦人開発基金」と改称されました。(この間、様々な婦人会議がありました。)実績としては、インドにおける養蚕、タイの牧畜、フィリピンの養豚、パプアニューギニアなどの食料生産技術、その他、多くの国における女性のための識字教室など多くのプロジェクトを手掛けています。資金面でも年々拡大をはかり、より効果的な活動を目指しています。

第四に、現在行われているプロジェクトについて。これは、インドの養蚕についてのビデオ“Thread of Hope”というのを見ました。UNIFEMのプロジェクトは“コミュニティの自立”を重視しているということが感じられました。現金収入を得ることにより様々な面で生活レベルが向上したのです。そして何よりもその地域の女性の連帯と自立を促したのです。始めのほうではコスタリカとアメリカにおける女性の識字プログラムについてでした。実際私自身、自分の話す言葉を文字に表したり読んだりすることができないというのは想像し難かったのですがビデオを見て文盲であることがどんなに不都合であり、年を取れば取るほど、屈辱的なことと彼女たちが感じているかがわかりました。読み書きがで

きることは、Self-expressができることであり、自信を得ることにつながるとある女性が言っていました。途上国の女性にとっては、この様なプロジェクトは不可欠なものです。なぜなら、男性に優先的に教育の機会が与えられていて、女性は家庭を支えるために中途退学してしまうことに大変多いからです。しかし教育抜きでは、産児制限や乳幼児死亡率低下を成功させることは到底、不可能でしょう。UNIFEMでは、その対象地域にまず文字を普及させ、ある程度の識字率に達したら技術を教えるという効果的なステップを取っているそうです。

以上が、概要ですがまだまだ様々な運営上の課題が存在しているのも事実です。歴史が浅いせいか、余り知名度が高くないのでどうやって今後UNIFEMの名を広めて行くかということ、またどのように強力なネットワークを作ればよいか、スタッフや予算が少ないことはどうやって解消できるかなどです。更には、国連機構改革に伴うUNIFEMの新しい位置付けも問題です。

“10万人の女性を助けることは、40万人の子供を助けることになる”そうです。中村さんは世界に対する責任を感じ、会ったことのないものの痛みを知るには、想像力が必要で、そのために生きる範囲を広げることが重要だとおっしゃっていました。最後に、参加者からの質疑と応答があり活発な発言がありました。貴重なお話を身近なレベルで理解することができました。

山崎章朗氏

田中 沙羅

6月22日の午後6時半より、聖ヨハネ桜町病院にてJASCer 7名を含む全16名の学生が、

ホスピス病棟を受け持つ山崎章朗先生から話をうかがった。



ホスピスは一般病棟とは異なり、治癒を目的とするのではなく、患者の身体的痛みを和らげ、末期患者が余命を希望通りに生きられるよう最大限の援助をすることを目的とする。

桜町病院の場合、ホスピス病棟入院の基本条件は、(1)患者本人が(家族だけの意志ではダメ)ホスピス・ケアを望むこと。(2)末期ガンであること(治るガンであれば、一般病棟での治療を勧める)である。山崎先生はあくまでも「患者の意志を尊重する」ことを第一に考えるため、本人が知りたがる情報は全て提供するし、そうでなければあえて知ることを強制したりはしない。患者一人一人が死の直前まで少しでも充実した生を送れることを重要と考えるため、最新医療機器の力で命を一分一秒でも長らえさせることもしない。

医療者としては、ホスピスを望む人がいる以上、それを受け入れる受皿を備えるのが任



西崎 文子氏 (1992. 12. 19)



務であると感じている。しかしこれは必ずしも全ての人にホスピスが必要、という訳ではなく、生き方の一つの選択肢と捉えている。大切なことは自分の生を自分の意志で生きぬくことであり、最終的にいかなる生き方を選ぶかは個人の問題なのである。

山崎先生はこれまでに多くの患者の死をみとってきた。しかしつらい気持ちよりも、人生を肯定的に生きようとする患者と共にどれだけ生きられたか、その喜びの方が遥かに大きいと語っていた。医療機器ではなく、自分自身が自分自身の生を生きるためには、自分がどう生きたいのか、どのような最期を迎えたいのかが重要になってくるのである。

お忙しい中、私達学生のために時間を割いて頂いた山崎先生、直接連絡をとって頂いた長谷さん、そして参加してくれた学生の皆様、厚く感謝しております。

## 国際交流基金

### 西見さつき

7月6日、4人のJASCerは“文化交流面からの国際交流”について理解を深める目的で国際交流基金を訪問した。まず事業内容全般について20分程のビデオを見せて頂き、次に総務課の平野さんにご説明頂いた。

事業内容としては①人物交流②日本研究③海外文化・日本文化の紹介という三本柱から成り立っており、①については日本研究者や文化に関する専門家を日本に招いたりしている。②については日本語教師の派遣や海外で

の日本文化センターの活動などがある。③は英国で行われた“ジャパンフェスティバル”などが有名であるが、文化紹介の対象国は全世界、特にODA対象国に力を入れ、今後は日欧文化交流強化という方針のもとに旧ソ連や東欧にも交流を始めようとしている。アジアについては渋谷のアセアンセンター、米国は1990年に日米センターが設けられ、積極的に交流を促進しているとのことであった。

公共団体という性格上、商業ベースのものよりは、今まで知られていない国の文化紹介が中心である。利益目的でないために一般事業のように仕事が定型化されず、組織よりは個人の力量に頼る面も多く、マスコミへのアピールという面では今一步であったがこれか

## 国連大学

6月29日、青山にある国連大学へのフィールド・トリップを企画した。その内容について触れる前に、まず何故私が国連大学を知り興味を持ったのか述べたいと思う。

私が初めて国連大学の存在を知ったのは今年の春に開催された、国連婦人会のシンポジウムであった。そこにたまたま参加することができ国連大学内に入る機会があったからな



齊藤 鎮男氏 (1993. 2. 20)

らは変えていく方針だそうである。また、日本文化の紹介という面では、従来の伝統ものから現代のものにも挑戦し、現地の日本に対するステレオタイプを変えていきたい。逆に途上国に対してはまず日本語教育の普及から文化の紹介という段階があり、現地の日本語教師育成に力を注いでいるとのことであった。

私達の質問を交えてのディスカッションは“途上国で日本語教育を促進することで不法就労の促進につながるのでは？”等の鋭い質問もあり、予定の1時間をはるかに超えてしまった。個々の質問に大変丁寧にお答え下さった平野さんに感謝したい。また、日米学生会議を支援して下さっている日米文化センターも機会があれば訪ねてみたいと思う。

## 恒田 恵美

のだ。そして、その近代的な建物の実態とその活動について知りたくなり、今回のJASCのフィールド・トリップを機に詳細を調べたいと思ったのだ。

当日はあいにくの雨と参加者も少なかったので残念に思った。約一時間半の予定で大学側の担当者によるブリーフィングやコンピューター・グラフィクス映像の鑑賞、そして大学内の国際会場や図書館の案内を受けた。

ブリーフィングでは、国連大学の活動について述べてもらった。当大学では、環境や軍縮などの地球規模の課題への学術的なアプローチを研究している機関でもあり、また国連の「シンクタンク」として提携・協力関係にある団体との共同作業を行なっていることが分かった。具体的には、セミナーの開催や高等研究所での研究や国連の広報的役割として活動している。その他にも、学生が参加でき



る「グローバル・セミナー」が毎年開催され、国際問題について討議する企画もあるのだ。

以上のことより、国連大学は主に研究活動をしていることが分かったのだが、具体的な

活動については少し抽象的であったことと感ずる。私の印象としては、大学の建物は近代的で広く立派であったが、閑散としていて人の姿があまり見られなかった。

## UNCRD(国連地域開発センター) / 韓国学園

坂野 晴彦

日差しが強くなり夏を感じるようになってきた6月10日、名古屋ではUNCRD(国連地域開発センター)、名古屋韓国学校へのフィールドトリップを行った。東京でもやっているフィールドトリップとやらをひとつやってやろう。どうせやるなら、一般広報もしてとポスターなどで名大に呼びかけたものの、名古屋大学の大学祭休みを利用しての企画ということもあり、結局口コミの4人と43rd, 44th OBの松井(まっちょい)と名古屋の2人と計7人で行くこととなった。

午前中はUNDP(国連開発計画)の下部機関であるUNCRD(国連地域開発センター)へ。バングラデシュ、タイ、フィリピンなどの世界各地における地域開発をバックアップする機関で、社会開発、地域防災、環境管理などの7つのセクションに分かれており、主なセクションの代表の方にBriefingをして頂いた。当初1時間の予定が2時間半にもわたり、難しい話に疲れてしまった人もいたものの、国連の裏話や地域開発における苦労などたいへん興味深い話を聞くことができた。またBriefingの後には職員の方に昼食まで連れて

いってもらい、さらに色々な話が聞けた。

午後は名古屋韓国学校へ。朝鮮総連による朝鮮人学校は新聞などで馴染があると思うが、ここは韓国系である民間による日本に数少ない学校の1つである。韓国の言語、料理、文化を教えているのだが、今では在日韓国人よりも日本人の受講者の方が多くなったとのこと。とても好意的で、韓国の楽しい話を通じて韓国に親近感を抱くようになった。参加者の1人が、このフィールドトリップのアンケートで「こういう人達が日韓関係を支えているのだと実感した。」と書いていたのを見て同感せずにはいられなかった。



## 山 谷

細江 葉子

フィールドトリップ報告…山谷

参加者：13人(うちJASCer 8人)

内 容：まず山友会で、山谷の状態、成り立

ちなどを会長で医師の楢取さんにお話しいただいた。山友会の中を見せられていただき、山里相談室の中島さん

にバトンタッチして実際に山谷で働いている方々の活動の内容などのお話を聞いた後、質疑応答。そして2グループに別れて実際に山谷の中(町中)を見せていただいた。しかし時間的に余裕がなく、外も暗くなって来たため2つ目のグループは山谷についての報道を録画したビデオを見ただけだった。

#### 山谷について

##### <その成り立ち>

主に戦後の引揚者が郷里に帰るための電車を上野駅周辺で待つために一時的に生活するところとして政府が建てたテント、そしてそこに切り切らなかった人々のためにできてきた簡易宿泊所を中心としている。これらの簡易宿泊所は、高度経済成長期には日雇労働者の宿泊施設として残った。この頃から山谷は男の街、労働者の街といわれるようになり、荒れたところ、無法地帯というイメージで見られるようになった。また、このようにして、できた町ということで、普通の住宅街との境界線のようなものは全く無い。

##### <山谷の抱える問題>

- ・老齢化：年を取ったというだけでなく、長期にわたって体を酷使してきているため、身体的障害をもっている人が多い。
- ・将来に対する希望や目的、目標がない：多くの人は、一時的な出稼ぎである程度のお金がたまったら家に帰るつもりだったのに、寂しさを紛らわせるために始めたギャンブルやお酒で貯金ができず、帰ることもできなくなってしまった。そのために、家族のために働くという目

的も、家族の喜ぶ顔をみるという希望もなくなってしまい、自分は他人から必要とされている人間ではないと思うことによって生きる気力を失っていく。

- ・病 気：栄養状態、衛生環境が悪いうえに、現実から逃避するためなどにお酒を常に飲んでいるので、結核、アルコール依存症、肝機能障害、内臓疾患、高血圧、栄養失調、糖尿病などが多い。また症状が重く入院しても、病院の管理された生活に適應できなかったり、周囲の人に家族がお見舞いに来ているのを見ると堪えられなくなったりして逃げ出してしまうこともある。

##### <山谷でボランティアが行っていること>

- ・無料診療所：単に病気を治すだけでなく、相談に乗るなどして精神的な支えになり、そこに住む人達が、彼らのことを心から心配している人がいるということ、彼らは必要とされている人であるということに気づき、生きる目的をもつようになることを目標としている。
- ・「夜回り」：夜、おにぎりや毛布をリヤカーに乗せて山谷の中を回る。これは、野宿する人が一人ぼっちで病気に苦しんだり、亡くなったりすることがないようにという気持ちから行われている。
- ・宿泊援助：お年寄りや体の弱い人、健康状態が悪化している人は、仕事ができなためお金がなくて簡易宿泊所にも泊まれないので、そのため



の宿泊費を立て替える。

## 感想

わたしたちのすぐそばでこんな生活をしている人がいるのに、わざわざ気持ちをそっちの方に向けなければずーっと気が付くこともなく一生過ごしてしまうのだろう。世界の貧困問題や衛生問題にはこんなにみんなの注意が向いているのに、本当はこんなに身近なところに、とっても大きな問題があったなんて。'地球共同体'とか、'sharing our vision'ということ掲げて、山谷という、私達から見たら特別な環境に生活している人達のものの見方や考え方なんかも知ることができたら、

と思ってこのフィールドトリップを企画したわけだが、彼らからは直接的にも聞いていないのに、先進国の国内社会の矛盾そのものをドーンと突き付けられたような気がした。だからどうするという考えがある訳でもないけれど、とても大きなショックを受けた。まだ心の整理がきちんとできていない。でも、こんな機会じゃないときっと山谷なんて一生行くことはなかっただろうし、こんな経験をすることもなかったと思う。行ってよかった。今の気持ちがいつになったら整理できるかわからない。でもそれができるようになるまで忘れないで心にしまっておこうと思う。

## 勉強会

芝崎 厚士

第45回日米学生会議の自主的活動の一環として、毎週一回、火曜日または木曜日に勉強会が行われた。発案者は芝崎厚士と西元宏治である。その目的は、「戦争と平和」フォーラムと「新国際秩序」シンポジウムの準備として、参考になるような文献を読み、話し合うことにあった。そして、次のようなきまりを設けた。

「きまり 1 発表者は、しばと相談の上、最低でも発表の2週間前に文献を12部印刷して事務所のボックスに入れておくこと。ボックスは事務所の広報の棚にあります(『永遠平和……』、『三酔人……』は各自購入のこと)。2 参加希望者は、「配ってくれない」などといわずに、発表者に直接アクセスして、自助努力で文献を入手すること。3 発表者は、①その文章に書いてあること、②筆者の訴えたいこと、③それらにもとづいて自分で考え

たことを簡潔にレジюмеにまとめて、12部印刷して出席者に配る。4 発表の際には、できるだけ事実の羅列を避け、自分で発見した問題点を明確かつ簡潔に10～15分程度で発表する。5 勉強会の後、発表者には、しばから宿題が出される。いずれも簡単なものだが、必ず調べて提出すること。宿題は、最近刊の犀の角に随時掲載される。もちろん、各自が自主的に報告を行ってくれることが第一である。」

(『犀の角』 6/26号より)

以下に、勉強会の概要をあげておく。

### <勉強会の概要>

5/27(木)戦争と平和①

日本のジレンマ、アメリカー相対的に衰退しつつあるナンバー・ワンの問題、P・ケネディ『大国の興亡』下巻(草思社)  
担当：貝原(日本)、廣田(アメリカ)

## 6 / 8 (火) 新国際秩序①

日米同盟の成功—歴史と展望、松浦晃一郎  
『歴史としての日米関係 日米同盟の成功』  
(サイマル出版会)、太平洋と日米関係、渡辺  
昭夫『アジア・太平洋の国際関係と日本』(東  
京大学出版会)

担当：田中 [澄] (松浦)、清水 (渡辺)

## 15 (火) 戦争と平和②

日米安全保障体制と冷戦(原彬久)、日本国  
際政治学会編『国際政治100号 冷戦とその  
後』

担当：中村

## 24 (木) 新国際秩序②

グローバリゼーションとアジア・太平洋の  
ダイナミズム(矢野暢)、アジア・太平洋地域  
の相互秩序と東南アジア(山影進)、『事典アジ  
ア・太平洋』(中央経済社)

担当：上原(矢野)、宇多 [41回参加] (山影)

## 7 / 1 (木) 戦争と平和③

S・ターケル、『よい戦争』(品文社)、袖井  
林二郎、『拝啓 マッカーサー元帥様』(中央  
文庫)

担当：田中 [沙]・東(ターケル)、田中 [澄]  
(袖井)

## 6 (火) 新国際秩序③

国連の構造、S・D・ベイリー『国際連合』  
(国際書院)、国連事務総長—ふしぎな宰相、  
明石康『国際連合』(岩波新書)

担当：西元(ベイリー)、吉田(明石)

## 8 (木) 特別講義

Yoshinobu Yamamoto, JAPAN'S SECURITY POLICIES IN THE POST COLD WAR ERA, Paper prepared for the conference ENHANCING SECURITY IN SOUTHEAST ASIA (5-6 April, 1993)

※東京大学教授山本吉宣先生を迎えて討論

担当：寺田 [41、42回参加]

## 15 (木) 戦争と平和④

I・カント『永遠平和のために』(岩波文庫)

担当：日向

## 22 (木) まとめと展望

中江兆民『三酔人経綸問答』(岩波文庫)

担当：芝崎

全部で8回行い、毎回10人前後参加した。その成果は会議で見事に発揮された、と言いたいところであるが、すくなくとも会議に対する意気込みをぶつける場所として、そして問題意識の形成に役立ったことは間違いない。

場所は主に日米会話学院の教室を借りたが、教室が借りられない時は近くの喫茶店で人目を憚ることなく議論をたたかわせた。勉強会はゼミ形式で、芝崎が議長を務め、議事進行と宿題の出題を行った。

主催者の意図としては、あまりアカデミックな議論に走るつもりは(実力も)なかったので、書いてある内容を正確に把握し、それについて思ったことを自由に述べ合うことで、それぞれが自分なりの問題関心を育てられるような会になるよう、心掛けた。

今から考えると、準備活動の仕事が怒涛のように押し寄せて来る中で、よくこのような勉強会を計画し、実行したと我ながら思う。そして、この勉強会が無事に継続したのは、ひとえに発表を快く(半分は反語だが)引きうけてくれた参加者のみなさんのお陰である。

また、この勉強会には、45回の参加者に限らず、41、42回の寺田さん、41回の宇多君、44回の工藤君、さらにはISAの木原さんといったOB・有志も参加して、議論を盛んにして下さったことを特に記しておきたい。

ちなみに、この勉強会は、現在も会議の



OB・ISAのメンバーに限らず広く参加者を募って継続中である。94年3月までに、40人近い人々が参加し、毎週木曜日に日米会話学院で議論を行っている。

最期に、お忙しい中日米会話学院にお越しになり、我々の相手をして下さった山本吉宣先生に、参加者一同より心からお礼を申し上げます。



## 直前合宿

芝崎 厚士

直前合宿は7月24～26日の間、全体合宿と同様に東京代々木のオリンピック・センター(通称オリセン)で行われた。その内容は各企画の最終的な打ち合わせが中心だったが、1日目は総合テーマの扱い方に関する議論を時間を延長して行った。わたしとしも(西元)は、残った仕事を処理するために事務所に残っていたので、その議論に参加せず、話し合いが一段落ついた夜9時前によく到着した。その後いつものように寝室で話し残した議論を続行した。進行役として奮戦していたみき(寺澤)とわんりー(割石)をねぎらった後で、主にRyô(廣田)とダンサー(貝原)からその日の議論について話を聞いた。その模様は偶然8ミリに残されているので、今でも見ることができが、定例会以来、「総合テーマ」

といえば誰もが彼を連想するほど、常に疑問を投げ掛け続けてきたRyôの熱意は十分理解することができた。彼は来年の実行委員長になったが、第46回会議でも同様な役割を果たすことだろう。その後で、翌日予定しているミニ・ライブ用に持ってきたギターをつまびきながらみんなと雑談をしてその日を終えた。ダンサーもギターを弾くことをわたしははじめて知った。

2日目は、打ち合わせの続きやジョイント・オリエンテーションのダンスの練習などを行った。いよいよ米国側を迎える態勢が整いつつあったが、どうやらそれでも仕事が終わらず、1～2人の実行委員を東京に残す必要があることが明確になってきた。ともかくその日の予定は何とか終えて、パーティーの時間になった。他のみんなが楽しんでいる間、私はRyôと部屋に戻ってリハーサルをしていた。

ポップ・ディランで行こうと最初から決めていたので、本番でやった3曲以外に<I Want You>、<Hard Rain's A-Gonna Fall>、<The Times, They Are A-Changin'>などを試してみた。ただ話すだけでなく、一緒に何かをやることで、お互いに他のやり方では得



られない共感をもてたと思う。二人とも人前で演奏した経験はほとんど無かったので、どうなるか不安だった。パーティーが佳境に入った8時半ごろに、みんなのいる会場へ向かった。わたしがカポタストを忘れて取りに戻った後、我々は恐る恐る演奏を開始した。みんな疲れていたためでもあると思うが、本会議を目前に控え、異常にテンションが高くなっていることが一見してありありと伺えた。

<Mr. Tambourine Man>では、すっかり上がってしまっとうまく声が出なかったが、1971年のBangladesh Concert風の明るく威勢のいい<Blowin' In The Wind>で態勢を立て直した。ラストの<Knocking On Heaven's Door>ではブリッジをみんなが一緒に歌ってくれた(ただし、Guns and Rosesのバージョンで)。調子の悪かったハーモニカ

も、何とか最後までもってくれた。緊張しっぱなしの舞台を終えた後、わたしは夢中でビールを何杯も飲み干した。Ganちゃん(岩田)がキャンプ仕込みのギターを披露したりして、パーティーはその後も楽しく続いた。写真はいずれもそのときのものだ。

その夜(正確にいうと翌日の未明)、実行委員ミーティングが開かれ、わたしにしもは東京に残ることになった。ジョイント・オリエンテーションに行けなかったことは残念だったが、その間処理した仕事の重要性と量を考えると、残る以外の選択肢はありえなかったことは確かで、その判断は正しかった。翌朝、わたしはにしもとみきと共に四ツ谷の事務所に引き返し、残りの参加者は午後、東金へと向かった。





第 二 部  
本 会 議

## 1. ジョイント・オリエンテーション

総括

高橋 香織

7月26日千葉県東金市の県立東金青年の家に、日本側参加者が代々木オリンピック・センターから、米国側が成田からそれぞれ合流し、2泊3日の合同合宿を行なった。宿舎は、緑に囲まれた東金市を見下ろす小高い丘の上に建っており、美しい自然の中で、米国側参加者は長旅の疲れを癒すことが出来た。3日間の様々な企画を通じて、今後一ヵ月間生活を共にする仲間を知り、会議に必要な信頼関係を醸成しよう、という当初の目的は十分に達成されたと思う。宿舎に同時期に滞在した小学生と一緒に行った早朝ラジオ体操は、米国側参加者に少なからぬカルチャーショックを与えたようであったが、すぐに小学生と友達になり、冗談を言って人気者になるアメリカ人のコミュニケーション能力にはこちらが驚かされた。時差の為か、朝の5時からグラウンドで野球を楽しむ米国側参加者もあり、それに付き合う日本側参加者のエネルギーにこれまた感嘆した。2日目午前中は、真夏の太陽が照りつける下で、宿舎周辺に設けられたコースを1時間程歩くウォークラリーである。「一等から三等まで賞品が出ます」との声に、駆け足で帰ってきたチーム、2時間経っても帰らないチーム等様々であったが、全員が汗だくになって疲れ果て、「企画者は誰だ」と怒ったとか怒らないとか。ちなみに一等の賞品は、宿舎が寄付してくれた西瓜であった。午後の日米双方による文化紹介は、去年に比べて非常によく準備された水準の高いもので

あったと言えるだろう。特に米国側は、50年代から現代に至る迄の社会現象を歌と踊りと寸劇で表現し、日本側から盛大な喝采を浴びた。Gregのエルヴィス・プレスリーやJessica、Don、Rickの親子劇は、全参加者の記憶に焼き付いたことだろう。また、日本側による少林寺拳法・生け花・着付け・書道・漢字講義、1対1での日本語講座も大変好評であった。夜のキャンプ・ファイアーでは、即興でGregが「火の神」に変身して着火するなど、早くも強烈な個性を覗かせ始めた。早々にキャンプ・ファイアーを切り上げて、講堂でカラオケ大会を始めたみんなの姿を見て、一体この先どうなるのかと、実行委員が一抔の不安を感じたことを付け加えておこう。3日目は、第一回テーマディスカッションの後、片貝海岸へ移動し、房総の海辺のすがすがしい風と、海の家での天婦羅を堪能した。今年の会議は、冷夏で晴れた日が数える程しかなかったが、ジョイント・オリエンテーションでの3日間は天気恵まれ、全ての企画を遂行することが出来た点は正に幸運であった。実行委員にとっては、いよいよ会議が始まったという興奮と、80人を移動させることの難しさと、東京から開催される本会議の準備に対する不安とで複雑な思いの3日間ではあったが、急速に打ち解けていく参加者達を見て、このメンバーなら大丈夫、と安心を覚えたのも事実である。会議は英語で行なわれる為、自分を十分に表現し切れないフラストレーション



ョンを感じる日本側参加者もいる。本会議での議論に突入する前に、ウォークラリーやスポーツなど、言葉の障壁が低く、かつ共同作業を通じて連帯感を味わえる機会を提供したい、というのが企画者の希望であった。会議終了後、参加者の一人が「会議では色々なことをしたけれど、ジョイント・オリエンテーションの楽しさが一番印象に残っている」と言ったのを耳にして、当企画の目的は果たされたと感じた。



## ジョイント・オリエンテーション

貝原健太郎

あるものは、夕闇の中、野球をしていた。あるものは、遠い道程を、ビールを求めて歩いた。あるものは、ピアノを弾いて待った。93年は冷夏の年であったが、その夕は気持ちよく暑かった。千葉県東金に、40人の若者たち、アメリカ側参加者の到来を待つ。

「早く来ないかなあー」

ほとんど暗くなってしまったころ、30分遅れて、アメリカ側参加者を乗せたバスは到着した。

必死で英語であいさつを済ませ、名前を覚えようと努力しつつも、最初の晩はアメリカ側が疲れていたため、案外あっけなく過ぎていった。



ジョイント・オリエンテーション全日程中(と、言ってもたった3日だけどね)最も盛り上がったのは、Cultural Presentationの時間であった。先ずはアメリカ側から。彼らは僅か二時間という練習時間にもかかわらず、1940年代から10年ずつ各時代の大衆文化を、彼らなりに脚色して、寸劇風に発表した。今でも忘れられないのが、子供役をしたJeffの姿である。無邪気に飛び回る姿が印象的であった。Monteの歌声にも驚かされた。1980年代のNew Kidsの真似も見ていておもしろかった(この辺からは日本人が見てもおもしろさが分かった)。そういえばヒッピー役のMarkも妙な雰囲気醸し出して忘れてられない。それにしてもアメリカ人のエンターティナーとしての能力には本当に感心したり、また少しうらやましくもあった。これでは、日本の映画界は絶対勝てない、と思った。

日本側は、お約束どおり、着物の気付け(Deeお疲れさま)、空手(Higashiかっこよかったぞ)、折り紙、お花、などなどをアメリカ人と一緒にした。着物を着たJessicaがすごくきれいだっただけは印象的だった。

何はともあれ、とりあえず楽しくジョイント・オリエンテーションは終わった。そして

私たちは次なる目的地、東京へ出発したのであった。

## 2. 東京地区

### 東京地区総括

割石 俊介



第45回日米学生会議の第一開催地は東京地区で、中でも武蔵野市を中心とした。アメリカ側学生団来日直後の千葉におけるジョイント・オリエンテーションを終え、7月27日の午後に80人の参加者全員が武蔵野市に移動した。

7月29日、第45回日米学生会議の開会式が成蹊学園史料館にておこなわれ、日米双方の実行委員長により正式に会議の開会が宣言された。その後のプログラムは、同7月29日の外務省における講演会、7月30日の戦争と平和フォーラム、7月31日の分科会、8月1日の休み、8月2日の戦争と平和フォーラムⅡと新国際秩序シンポジウム、8月3日の分科会5と少数派問題パートⅠ、8月4日の環

境フォーラムIN武蔵野、8月5日、貿易シンポジウムと武蔵野市によるレセプションといった多岐にわたるものであった。

宿泊地を吉祥寺東急イン、フォーラム・シンポジウム・分科会の会場を成蹊大学、という具合に武蔵野市を拠点としながら、フィールドトリップや講演会などで度々都心部にも足を運び、東京という都市の多様な側面をうまく利用した型のプログラムになったように思われる。また、フリーデイには鎌倉まで足を伸ばしたメンバーも大勢おり、正規のプログラム以外の時間にも精力的に東京を楽しんでいたようであった。

このように、プログラムも盛り沢山、移動の機会も頻繁、と決して楽ではない東京地区





この9泊10日であったが、大きな問題もなく、順調に予定を通り、日程をこなすことができ

## 開会式

武蔵野市での第一日目。初めてフォーマルに身をつつみ、成蹊大学の資料館にむかった。この日になると、気のあう友達がアメリカ側参加者にもでき、これからの1か月に胸をふくらませながら、東京の見どころや、お互いの住んでいるところの話をしたり、一緒に「第45回日米学生会議」の横断幕の下で写真を撮ったりして開会式が始まるのを待った。

第45回日米学生会の使節団が、公式の場に出るのは、この開会式がはじめてである。当会議開催のためにご賛助いただいている各界の方々のご臨席のもと、第45回日米学生会議の開会式挙。日米双方の実行委員長のスピー



た。これはメンバー全員が、東京地区担当実行委員である私とKenji Hallに非常に協力的であったこともあるが、それ以上に学生課を中心とする成蹊大学の方々、武蔵野市の方々、その他多くの方々の多大なるご協力に負うところが大きい。特に私は準備活動に長きにわたり携わってきたものとして、感謝の気持ちで一杯である。

そして8月6日。東京で学んだ成果、思い出を胸に、我々は次なる開催地である福岡へ向かった。

## 日向 裕弥

一チでは、両国学生の心の架け橋を礎とし地球共同体形成へ向けて真摯なる努力を続けていくという決意が述べられた。特にアメリカ側実行委員長のスピーチで語られた、日本に向かう飛行機のなかで遭遇した日本人とアメリカ人の子供のエピソードは、日米間の相互理解を通じた平和の達成の可能性、ひいては日米学生会議の可能性を示したものであった。続いて、クリントン大統領と、宮沢首相からのメッセージも届き、開会式に花を添えた。

アメリカ側の日米学生会議の支持母体であるJASC, Inc. のSchellenberger代表の手短なスピーチのあと、財団法人国際教育振興会理事長で日米学生会議の創始者の一人でもある板橋並治氏の英語によるスピーチが行われた。ユーモアを織り混ぜながら、日米学生会議創始の経緯と、その後の沿革が語られた。いままで、日米学生会議の実施要領を読んだり、実行委員の話を書くなどして、日米学生会議の歴史を何となくは知っていたが、板橋氏のユーモアを交えたスピーチを聞くと、日米学生会議の歴史の重みが感じられた。また、

今回私達が行なうことができた第45回日米学生会議があるのも、第1回の日米学生会議があり、創設時の理念を忠実に受け継いだその後約60年の日米学生会議の歴史があるからだと思うと、日米学生会議の創始者のひとりである板橋氏及びOB・OGの方々に対して感謝

の気持ちを覚えた。

開会式終了後、成蹊大学の中庭で集合写真を撮影。外は、やっと夏らしくなり、少し蒸し暑かったが、第45回日米学生会議の幕開けにふさわしい梅雨明けのすがすがしい青空だった。

## 外務省での講演会

貝原健太郎

外務省のご厚意により、日米学生会議のメンバーは、外務省に招かれ、文化交流部長の木村崇之氏から貴重なお話を伺うことができた。以下、そこで語られた内容を要約したい。尚、テーマは“Change of Circumstances between U. S. and Japan”。

先ず最初に、木村氏は日米両国の間の相互理解を難しくしている要因について語られた。1つ目には両国間の文化の違いを指摘された。お互いの間に存在する偏見、ステレオタイプ、歪められた情報伝達などが誤解を生じさせていると言われた。また第2点として、両国が世界において占める地位に変化が生じつつあることを挙げられた。冷戦の終焉、自民党一党支配からの脱却、クリントン大統領の登場などが、両国間の関係を、そして世界に占める地位を変えている。また冷戦終焉故に経済大国日本にアメリカの関心が余計に向けられるようになった、と言われた。

続いて、日米関係の歴史的变化について軽く触れられた。そこで特に強調されたことは、やはり日本の地位の向上ということであった。すなわち、1950年代には日本のGNPの世界に占める割合は1%にも満たなかったのに対し、アメリカは57%を占めていた。ところが、現在では日本の占めるそれが15%であるのに対し、アメリカは26%となっている。日本の相

対的地位が上がれば風当たりが強くなるのも当然ということであろうか。

さて、その次に、日本がなかなか国際政治の舞台に参加し得ない事情について語られた。1点目に、日本の政治決定の遅さを挙げられた。それは湾岸戦争中にも世界から非難されたことであった。2つ目に、第三世界への柔軟な姿勢を強調された。つまりODAで彼らを支配することはできないとされた。3つ目に、現実として国際社会が日本なして政治決定をする習慣を身につけてしまっていることを述べられた。それゆえ、日本の貢献がどんなに実質的なものであっても、なかなか日本の意思が世界に反映され得ないとされた。

最後に、今後の国際社会を担う若者たちへのメッセージとして、次の3点を心に留めるよう言われた。1. 偏見をもたないこと 2. 紛争の存在を直視すること 3. 相手の立場





を考えること、である。日本の外交政策を担う方から、このような貴重なお話を聞かせて戴き、本当に有意義な時間を過ごすことがで

きた。

(誰だ、俺が寝ている写真撮った奴!?)

## 総合テーマ討論会 総括

---

平竹 雅人

総合テーマとは日米学生会議の登龍門であると言えます。このテーマのもとに80人の両国代表が集まり、日本、米国をはじめとし世界の抱える問題を認識し、考え、議論することを通じて、現在のそして未来に向かってあるべき我々の姿を模索する。同時にそのプロセスの実体化、具現化を求めつづけます。余りの壮大なテーマに時として諦めを感じ立ち止まります。しかし、何故戦うのだろうか。なぜ殺し合うのだろうか、何故理解し合えないのだろうか。素朴な疑問が議論の炎を少しづつだが着実に燃やしながら、我々の議論を静かに深めていきます。

民族問題、新国際秩序、戦争と平和、環境問題、貿易の問題に始まり、異文化コミュニケーション、男女の性差によって生じる問題、各国に見る男女関係のあり方等、幾日も費やし夜を徹して議論する話題や何気ない、非常に幅の広い、それでいて時として驚き、感動し、琴線に触れる会話が本会議の一カ月間交錯するのです。何時もより高密度な時の流れの中で、我々の形作った空間は地球社会における個人のあり方であったように思います。相互の異文化を背景に一人の人間として相手

に係わっていく。相手の個性、意見を尊重しながら自らを表現する。時として正面からぶつかり合う、だが決して諦めること無く問題を共に発見し、分析し、解決しようとし続ける。我々の共同生活、共時的経験の積み重ねが生み出す空間の特殊性はまさに地球共同体の展望と実践が並列的に、しかも現実に展開するところにあると言えるでしょう。

会議のあらゆる活動は、常にテーマとの関連性を想起しつつ行われます。各プログラムにおいて日常性から地球共同体への展望を対象化し、更に毎日の会議での生活の中に還流するという過程を繰り返すのです。

総合テーマ討論会とは、この実践過程への導入部であり疑問、議論の起爆剤としての役割を負っています。日米学生会議という地球共同体への転移装置なのです。

“地球共同体への展望と実践—私たちのめざす調和、そして共生—Sharing Our Visions and Working for Harmony in the Global Community”これが第45回日米学生会議の総合テーマです。このキーワードを胸に本会議を理解し、追体験していただければ幸いです。

## 総合テーマ討論会 パート1

---

廣田 良平

第45回会議の私たちのテーマは、“Sharing Our Visions and Working for the Harmony in the Global Community：地球共同体への

展望と実践—私たちのめざす調和、そして共生—”でした。総合テーマは会議を形成する中心理念であり、各プログラムは参加者が総

合テーマを理解しようとする際、様々な視点を提供しています。総合テーマ討論会は参加者一人一人が各自のテーマに対する考えを出し合い、差異を認識しつつもより普遍的な理解を80人で模索することを目標としています。

その手掛かりとして、第一回の討論会では地球共同体において私たちの調和と共生を妨げているものがあるとすればそれは一体何であろうかということをし合いました。

まず、真っ先に挙げられたのが文化や言葉を含めた個人の背景の違いでしたが、やはりそれらを前提としてうえで話し合ったほうが生産的なので他の要因を考えました。

背景の違いそのものに対して関心を持っている方がいいが、時代の要請から、もっと言えば経済的要請から否応なしに地球上の人々が身近に引き寄せられてしまっている状態は、時として望まざる人との相互依存関係と共生を私たちに押し付けてしまいます。

メディアはある問題の根源を国民性などに

還元することによって極度に単純化しようとするため、偏見を生んでしまいますし、私たちのほうもある国家の行動がその国の人々の意思を反映していると捉えがちであることも否めません。教育にも偏見の伝授という面を多分に持っているのではないのでしょうか。

また人間は基本的には自己中心的な生き物であり、自分から遠ざかるに従ってある対象への関心も薄れかつそれを理解しようという意志も薄れてしまうといった私たちに共通に見られる人間の性質も指摘されました。このことに端を発して、地球規模の問題よりも、ECのような地域的な問題、さらにはそれよりも一国内の問題の方が優先されてしまうため地球規模の協力関係は構築するのが困難なのではないかと考えました。

上記のような状況を克服するには私たちは何をすべきかは第二回の討論会で話し合いました。

## 戦争と平和フォーラム 総括

芝崎 厚士

わたしの知る限りでは、『戦争と平和』という名を冠する単行本は、L・トルストイ(1869年)、H・ヘッセ(1946年)、末川博ほか編(岩波書店、1957年)、I・E・アイベスフェルト(1978年)、猪口邦子(東大出版会、1989年。奇しくも猪口先生はJASCのOGである。改訂版はいつ出るのか?)、S・ボク(法大出版会、1990年)、大高安二郎(集英社、1992年)、前田哲男(ほるぷ出版、1992年)、A&H・トフラー(扶桑社、1993年)、古川純・山内敏夫(岩波書店、1993年)と、計10冊ある(1993年12月現在)。末川ほか編とアイベスフェルトのものは未読だが、前者は学校の図書室で、後者は会議中に

吉祥寺の古本屋で見たことがある。ヘッセのものは見たことがないし、また翻訳がないらしいので残念ながら読めないかもしれない。勉強不足のためにこれ以上は知らないが、当然この他にも存在するに違いない。ご存じの方はぜひご教示を願いたい。

ボク(わたしのことではない)の本の原題は“A Strategy for Peace—Human Values and the Threat of War”で、他の本もなんらかの副題を伴う場合が多い。それに、題名に「戦争と平和」という表現を使用した本なら、H・グロティウス『戦争と平和の法』(1625年)を皮切りに、C・オズグッド『戦争と平和の心



理学』(岩波書店、1968年)、A・ラパポート『現代の戦争と平和の理論』(岩波新書、1970年)といったところが代表的な例だろう。日本語では、『平和と戦争』とする例は語感が悪いせいかまず見られない(日本国際政治学会編『平和と戦争の研究』1957年、続編1969年が数少ない例外か)が、英語では“Peace and War: armed conflicts and international order”(Ed. by K. J. Holsti, 1991)とする本もある。その他雑誌なども含め「戦争と平和」という言葉を題に掲げた文献は「罪と罰」に引けを取らないくらい数多く存在する。また、P・ピカソが1952年に同名の絵を残している(「戦争」と「平和」という作品を別々に描き、それを併せて南仏の礼拝堂に一つの壁画とした。前記の大高氏の本より)。どうも「戦争と平和」をキーワードに採集範囲を広げると収まりがつかないようだ。一つの研究としておもしろいかもしれない。しかし、同様な問題に取り組もうとする異名の著作が無数に存在することを考えると、名前にこだわることにそれほど意味があるとは思えないこともまた確かである。

ともかく、この何年かで『戦争と平和』と称する本の数が急に増えているようである。上記以外でも田中勇『戦争と平和の政治学』(芦書房、1984年)、入江昭『二十世紀の戦争と平和』(東大出版会、1986年)、芝田進午『戦争と平和の理論』(勁草書房、1992年)、石村修ほか編『いま戦争と平和を考える』(国際書院、1993年)、小室直樹・色摩力夫『国民のための戦争と平和の法』(総合法令、1993年)などがある。このような傾向が顕著となってきたのは、昨年の報告書でもふれたように、人々の間で、冷戦思考下の純情な平和追求や硬直的な脅威論から脱却した「戦争と平和」論への模索が漸く開始されたためだと考えられる。



その模索は世界レベルでも、地域レベルでも、国民国家レベルでも、また自治体レベル、個人レベルでも同時発生的に起こっている。そしてその際には、より哲学的・根源的な「平和」観・「戦争」観の再検討が必要となつてこよう。

以上のような状況を考えると、日米学生会議において同種の問題を扱ってきた企画の名称が、1992年の第44回会議で初めて「戦争と平和」となったことに、偶然以上の意味を見出すことができそうである。

わたし(ボクのことではない)とジン・ギル・リーという、実行委員の中で当該分野に関して最も造詣の深い二人は、まるで当然のように、前回の会議を受けて戦争と平和フォーラムの担当になった。我々は第一に主権国家間の安全保障問題、第二に哲学的・思想的なレベルでの考察、第三に個人レベルでの戦争体験といった問題群の設定を試みたが、実際には第一の問題は東京での講演、第三の問題は東京での映画「八月の狂詩曲」(黒澤明監督作品、1991年)鑑賞、長崎での講演と実地研修、プレゼンテーションで扱われた。第二の問題が顧みられなかったのかというと必ずしもそうではなく、合計3回行われたフォーラムの中で、各自そのような考察を深めていたようである。本当は別に時間を設けて思想的

なレベルの議論が持てるとなおよかったのではないだろうか。

詳細は以下に任せるとして、全体的な概観を述べておこう。パート1では専門度の高さがやや障害となったものの、特に初の試みであったラップ・アップ・ディスカッションでは議論が盛り上がった。またパート2の映画鑑賞では、特に米国側は大きな感銘をうけたようである。パート3では、天候にも恵まれて、長崎の持つ意義を十二分に理解することができた。実際に彼の地を訪れることが参加者に与える効果は、想像以上に大きかった。わたしとジンは、お互いが知悉する分野に議論を偏向させないように注意したが、それでもそのような面があったかもしれない。しかしフォーラムの内容は、我々が主に守備範囲とする第一の問題よりも、むしろ第二第三の問題を考える上で効果的なものが多かったのだ、その心配が杞憂であったことを祈りたい。

他の例に漏れず、当フォーラムは数多くの人々の協力によって成り立っている。まず東京地区担当のあすか(中村)とダンサー(貝原)、長崎地区担当のすみと(田中 [澄])とさら(田

中 [沙])、プレゼンテーションのひがし(東)、ひろみ(日向)、ゆみ(上原)、あゆ(脇坂)、以上8人の日本側タスク・フォースに感謝したい。『犀の角』用の原稿執筆、定例会・勉強会での発表などを通して自発的(かつ強制的?)に形成されたその団結力は、他企画のタスク・フォースを大きく上回るものであった、と感じるのは彼らも同じであろうし、晶貝目の判断を割り引いてもそう思うのは決して誤りではない。

米国側では、映画上映の際に多大な貢献をしてくれたたろう(一色)、プレゼンテーションを行ったジェシカ、ドン、ペイルに特に感謝している。彼らと共にフォーラムを楽しく作ることができて、とても光栄に思っている。そしてジンは、今回の経験を通して一生の友となることができた。彼との出会いにも感謝したい。

最後に、戦争と平和フォーラムで講演を行ってくださった、山本吉宣先生、M・フィッツパトリック氏、本島等長崎市長、長崎平和推進協会のみなさん、長崎原爆病院のみなさんに最大の感謝を捧げたい。

## 戦争と平和フォーラム パート1

中村明日香

日米学生会議において、戦争と平和の問題を取り上げることは、設立当初の目的を鑑みれば、至極当然のことにように思われる。ポスト冷戦時代と言われる今、我々の目指すグローバル・コミュニティでの真の平和を構築する為に、現在において他に、積極的且つ実行可能な方策を議論しあう時は無いであろう。東京地区では、国際関係の中での世界的、地域的そして、国民国家レベルでの安全保障問題に焦点をあて、「戦争と平和フォーラム」

を開催した。

フォーラムは会議開催直後でありながら、日本の国際貢献、集団安全保障での役割などの話題性に加え、日米安保等の従来からのバイラテラルな両国関係の将来などについても、当該国の学生会議ということでも熱心に質問をする姿が見られた。当日は、東京大学教授の山本吉宣先生と駐日アメリカ大使館一等書記官、安全保障課課長のマーク・T・フィッツパトリック氏を迎えてのレクチャーと質疑応答、



デリゲート同士のスモール・グループ・ディスカッションが行われた。レクチャーでは、まず山本先生により、冷戦後の安全保障の特徴として、国家同士の対外的な武力紛争ではなく、内戦や地域紛争などの局地戦に国際紛争というものの舞台が移ってきており、もはや国家間のバランスオブパワーが、作用しなくなってきたという説明があった。また、安全保障の一環としてPKOなどトランスナショナルな活動への要請が高まっている現状、武力による紛争解決でなく、予防的外交政策による解決が現在のトレンドとして揚げられるということであった。結論としては、相互依存関係のより一層の緊密化と早期警告体制の実現が不可欠になってきているという認識を持つに至った。フィッツパトリック氏は、現職の駐日アメリカ大使館一等書記官ということで、実際のアメリカの対日及び安全保障における外交についてが、中心的な内容であった。フィッツパトリック氏は、高校時代にロータリー交換留学生として、来日以来、大学時代にも同志社大学に留学なさるなど知日家で、そのあたりにクリントン政権の対日政策の方向性をも窺い知ることが出来るような気がするが、氏は、「あくまでも個人的見解ではありますが、」という慎重な前置きを置いた上で、質疑にも答えて下さった。レクチャーとしては、重要な3つのアジェンダとして、1)IAEAなどを中心とした非核化の促進、2)化学及び生物兵器の国際的な制限組織の設立、3)アセアンやAPECなど多国間の政治というフィールドを含む多面的対応を促進させることがグローバル・コミュニティーに向けて必要であるとされた。また日米間の関係については、ポスト冷戦期に於いて、日米安全

保障条約が(貿易摩擦などの相反する主張の対立ではなく)両国間の共通のゴールとしての価値を明確にする役割を担っているということであった。氏の一贯した主張の中には、アメリカ軍のプレゼンスがアジア安全保障に依然として欠くべからざる存在であるという考えがあったようだ。アジア諸国の対GNP比の軍事費増加の中で、削減傾向にある在外アメリカ軍がどのような対応を行うか今後の行方が注目されるところである。このことに関連して、日本の自衛隊により戦略的なビジョンを持つこと、対北朝鮮という観点から、日本に於ける米軍の駐留に触れ、駐留費用の一層の負担を期待しているということであった。

小グループに分かれてのディスカッションでは、憲法9条の存在が日本の国際協力に与える影響、あるいは国際協力的手段について、湾岸戦争を例にとって話し合ったり、日本の戦後補償問題など、日本人デリゲートにとって議論がし尽くされていない問題が取り上げられる場合が多かった。このディスカッションでの経験を生かし、今後自分達りの具体的な意見を持ち、その上で国際社会に受け入れられ得る実行可能な将来に向けたビジョンを持つことが、課題となるであろう。



戦争と平和フォーラムは、全会議日程中3回行われたが、その一回目は成蹊大学にて行われた。テーマは、国際関係における平和の在り方、個別적으로는日本とアメリカの安全保障の在り方についてであった。恐らく中村明日香がアメリカ大使館のフィッツパトリック氏のレクチャーの要約をしていると思うので、私は東京大学国際関係論の山本吉宣教授のレクチャーを要約したい。テーマは、日本の基本的安全保障政策であった。

冷戦構造の崩壊により日本の安全保障政策は見直しが迫られている。特徴として、1つにはユートピアニズムが急激に身を潜め、リアリスティックな思考が優勢であること、またそれゆえ、2点目として、誰のための何のための安全保障なのかをはっきりさせなくてはいけないことにある。

さて世界の安全保障に目を向けると、これまでのリアリズムに基づいた安全保障政策が今日では十分には、又は全く、働き得なくなっていることが分かる。最初にバランス・オブ・パワーの概念である。冷戦時代までの武力紛争は基本的には国家間のものであり、外在的であった。そこにおいては、国家間のバランス・オブ・パワーが成立すれば、紛争を防ぐことができる程度は可能であった。ところが、冷戦時代には隠されていた民族対立が雨後の筍の如く沸き上がる今日、紛争は内在化・地域化した。そこにおいては従来のリアリズムの手法を当てはめることができず、先進国は手をこまねいている。

また集団安全保障という概念も、現在の民族紛争には適用できないものである。なぜな

らこれも国家間の紛争を前提としているからである。また、地域紛争にも世界各国の利害が深く根を下ろしているケースもあり、国家間の協力を困難にすることがある。

3点目に、予防外交が挙げられる。これは高い相互依存性を必要とし、また早期警告のシステムも確立していないと実現は難しい。しかし、それでも、上記の二つよりは、今後の世界に応用できる可能性は高い。例えば旧ユーゴのなかでも、マケドニア共和国に適用されるべきものである。またASEANも、予防外交の枠組み作りに取り組み始めている。

21世紀に向けての安全保障の利害についても挙げられる。一つには、上記の、地域紛争である。二点目として、現在の主権国家体制をいかに維持することができるか、ということである。というのも、歴史上、いかなる国家も一定の領域支配を確立したままでいられることはなかったからである。

また、21世紀には、新しい平和への脅威が登場するであろう。環境問題、AIDS、麻薬、経済摩擦などである。

最後に日米安全保障条約について。冷戦の文脈においては重要であったこの条約も、今後、貿易不均衡を理由として日本に負担をあまりに多く強いるようになれば、条約自体を維持することすら難しくなるかもしれない。そこで今後は、二国間・アジア地域の紛争処理手段としてだけでなく、世界の安全保障のために、PKFを出动させるための機関として用いるようにしたらどうであろうか。

山本教授は非常に分かりやすく、なかなか知的好奇心をくすぐられました。冷戦崩壊後



の新秩序を模索する今日、平和を確立するために国家は、そして我々は何をすべきなのか、

ということを考えさせられました。

## 米国大使館員によるレセプション

7月30日夜、赤坂の米国大使館官舎敷地内において、当会議代表団を歓迎するプールサイド・バーベキュー・パーティーが催された。途中、運転手が道を間違えたことから細い路地で大型バス2台が立往生し、交通渋滞を引き起こすという冷汗の出る一幕もあったが、少々遅れただけで無事現地に到着することが出来た。一步敷地内に入ると、赤坂の喧騒とはうって変わった雰囲気、広い敷地や英語表示されたひよろ長いアパート群、雨に煙るプールサイドの灯りが、あたかも我々がアメリカの住宅街にいるかのような錯覚を与えた。プールはこの夜、私達の為に時間を延長して開放されていたのだが、生憎小雨の降る寒い夜であり、活用し切れなかったのが少々残念であった。大使館文化事業部の方々が自ら肉を焼いたハンバーガーや、ビール、チップス等を供してくれたパーティーは、とても家庭

高橋 香織

的で心暖まる一時であったと言えよう。肩肘をはらないもてなしを受け、ブラックバーン公使、ウォルシュ等書記官、文化事業部松元女史らとリラックスした雰囲気、交流を結べたことは、参加者全員のよい思い出となったと思う。その夜は自由解散となり、参加者はそれぞれグループを作って六本木の街に消えていった。



## フリーデー



8月1日(日)。今日は、free day。かねて

日向 裕弥

から、予定していたように、行きたい人を募り、鎌倉へ。9:30に東急イン出発。JRで新宿に出て、小田急線で藤沢へ。江ノ電にゆられながら、一行14名は、長谷寺に。非常に恵まれた晴天。蒸し暑くはあったものときおり風が吹く夏らしい一日に鎌倉散策。風流だなあ。ほかの観光客と話をしたり、土産物屋をぶらぶらしていたら、時はすでに1時半をまわっていた。Lisaのたつての願いをかなえるべく、流し素麺を食べることができると

ころを探す。アメリカのテレビで、流し素麺が紹介されたのを見て以来、ぜひとも一度流し素麺を食べたいと思っていたという。日本で、二十年ちかく育ちながら、一度も流し素麺を食べたことがないので、流し素麺をやっている店が見つかるのかと思っていたが、観光案内センターの案内で、鎌倉駅から歩くこと20分、坂道を登り下りしながら流し素麺を食べることができる店にたどりつく。自分がテレビや写真でみて想像していた場所より、狭く竹筒も短いと思いながらも、はじめて流し素麺を食べる体験ができたことに満足。Lisaも、とても喜んでいて。鎌倉駅に戻りがてら、鶴ヶ岡八幡宮に立ち寄る。日も傾き始め、ときおり涼しい風が感じられる境内で、各自が引いたおみくじを説明しながら、笑ったり、考えたり。

疲れていた人は、鎌倉駅から東急インに戻り、残りの9名は、花火を観に横浜のみなとみらい21地区へ。国際会議場や半円形のホテルなど斬新なビルが立ち並び、まだ日の明るいうちから楽しめる景観だ。前日の隅田川の花火大会のように、前進するだけで疲れるほど会場は混んでいないし、天気も良く、花火を観るには最高の環境である。世界一大きな観覧車もあり、観覧車にのった数名はちょうど観覧車の最高地点で花火を観ることができたという。

一日かけて、鎌倉では長谷寺と鶴ヶ岡八幡宮にしか行かないぜいたくな観光で、なおかつ流し素麺を食べるという風情ある優雅なfree day。鎌倉・横浜を案内したお礼にと、Gretchen、Dana、Colleen、Lisaが横浜の花火会場でビールをごちそうしてくれた。暑い一日で、歩き疲れていたのに、ひときわおいしく感じられた。ビールがおいしい一日だった。

日米学生会議中は、いろいろ新しい体験をした。日本で育ち、生活している私が、アメリカ側の参加者に聞かれても説明できなかった日本のことを、会議中のfree dayやfree timeに、自らアメリカンデリゲーツと一緒に経験し、知ったことがたくさんあった。経験の共有(Sharing Our Experiences)は、アメリカのことだけでなく、日本の文化のこと、自分のことなどを新たに知る機会であった。



#### 林 秀美

東京フリーデイ。午前中から鎌倉ツアーへ行く人もいれば、それぞれの家へ洗濯又は休養をしに帰った人もいる。私は鎌倉めぐりに参加し、おのぼりさん気分で大仏と写真を撮る。ツアーには日米合わせて約15人が参加。

東急インから電車で揺られて1時間半程度だ。空は怖いくらいに晴れ、鬼のように汗をかきながら大仏のもとにたどり着く。帰りしなに中華街(横浜)へ行こうと計画はたてたが、私とよねの2人は知らぬ間に皆と離れてしまい、



その後のみなの行動は私は知らない。

東京はエキサイティングな街だと誰もが口を揃えて言う。私も同感だ。東京では絶対にジュリアナへ行こうと数人が言っていた。ディスクなどという、いわゆるやかましい場所は私の好みではなかったが、冒険も人生には大切なわけやね、と考え直した末、ジュリアナ行きを決定する。日米合わせて10人くらいだったと思う。それぞれが、“踊りにいくぞ系”の服装でジュリアナの最寄の駅へ到着。駅周辺ではナンパ車が待ち構え、道行くねえちゃんもかなり怪しい。テレビのまんまの姿だ。入口の出迎え黒服系はかなりレベルは高く、客の中には力士も見える。小さな姉ちゃんを右肩に乗せて踊っている。お立ち台は思った

より小さく、ポンテージの姉ちゃん達が誇らしげに踊っている。ちなみにジュリアナ扇子は千五百円である。バックには常にジュリアナミュージックが流れて、今にも耳がおかしくなりそうである。そんな状況だったが、私も踊り、みんなもそれぞれ風の踊りを楽しむ。特に、マーク・アナンダ・セシリアの踊りはとってもグー(ケンジ系)で、周囲の人々はみな圧倒されている。サラとヨッキーは圧倒されすぎた模様で、物陰でひっそりと見学系だ。11時半頃名残惜しみながらジュリアナを去った私達だが、もっともって踊りたかったというのは誰もが思うことだろう。チャンスがあったら行ってみてくれ給え。おわり。

## 戦争と平和フォーラム パート2

田中 沙羅

戦争と平和フォーラム第2回目は東京の成蹊大学にて「八月の狂詩曲」上映会という形で行われた。英語版が見つからなかったため、日本語で上映されたが、太郎が要所要所で訳してくれたので、言語面での支障はたいしてなかったと思う。

論理的に構成された文章を読むのとは違い、映画から感じとったものはさまざまであろうし、また一つの画面の解釈にしても、どこまで深く読みとるか、その深さの程度においてまたどこに着眼点を置くか、においてもかなり個人個人で違ったものになったようだ。

ただ、コーディネーターの意図としては、決して原爆を落とされた日本に対する同情をそそることではなく、過去にあった事実を目を向け、そこから出発する糸口を見つけることにあったと思う。国と国の対立は、必ずしも個人と個人の対立を意味することではない。わかり合うのに必ずしも言語によるものばかりではない。

吟味する余地のある画面が多く、スモール・グループ・ディスカッションの時間がなかったため、それほど皆の考えをシェアできたかは疑問だが、企画としては良かったと思う。



まず、初めに新国際秩序シンポジウムの総括を書くにあたって、本企画の担当者として、本企画が設立された経緯及び会議までに行なった準備活動までについて詳しく述べ、本会議における具体的な講演内容については、重複を避けるために他の報告者に任せたいと思う。

前回、第44回日米学生会議最終期に開かれた日米両国の実行委員による新実行委員ミーティングにおいて、第45回日米学生会議で開催する企画について話し合いがもたれた際に、従来の安全保障の側面から国際関係を考えるフォーラムだけではなく、経済・国際協力・人権等といった側面からも国際関係を捉えるフォーラムを設置するべきではないかという意見が出された。その提案自体は、大方の合意を得、新たなシンポジウムを設置することが決められた。しかし、個別のテーマとして、様々な問題が提示されたが、結局一つの

ものに絞られることなく、「新国際秩序」という比較的抽象的なテーマに収斂されることになった。つまり、玉虫色の解決が図られたわけである。担当者としては、以上の経緯を踏まえ、既に設置されている企画との重複を避けるものであれば、基本的に自由に選択することを許されたという前提の元に準備を進めることとした。準備の初期段階として、本来の専攻とは全く異なる分野の企画を引き受けたため、まず、図書館等で国際問題に関する文献を概観することから始めた。それと平行する形で、日米学生会議の持つ様々な専攻の学生が集まるという事情を考慮し、テーマを一つに絞り込むことは避け3～4のテーマを設定し、各テーマに関して別個の講師に講演をお願いし、講演の後に参加者を交えてのパネル・ディスカッションを行なうなどの企画の外枠を構成した。また、この外枠にあわせる形で、テーマの設定も日本開催であるこ



とを鑑み、日米の位置するアジア・太平洋地域が抱えている問題を中心に構成することとした。

こうして4月までにそれまでの自分の考えをまとめる意味で企画書も完成させていたが、参加者の希望も取り入れたいと思っていたので、実際に依頼する講師や演題についてはリストを作成するに止め、講演依頼は行なわないうでいた。参加者に初めて企画書を元に自分の考えを説明したのは5月の全体合宿であり、その後何回かタスク・フォースを中心に会合を持ったため、具体的な内容についての決定が行なわれたのは、5月末になってからだった。結論として、経済発展・日米関係を中心とした国際関係・人権問題からアジア・太平洋地域の国際関係についての講演を依頼することに決定し、講師の選定・依頼を行うことになった。このように、講師の方に講演の依頼を開始出来る体制が整ったのは、6月の始めに入ってからだった。更に、講演内容をあらかじめ絞っていたため講演を依頼できる方が限られていたこと、他の本会議との準備と平行して講師の方との交渉を行なわなければ

ならなかったこと、交渉を開始した時期が遅かったために依頼した方のスケジュールが既に決まってしまうことなどの理由から、交渉は中々はかどらず、最後の講師の方が決定したのは直前合宿前日のことだった。この間に、講演を依頼した方の人数は優に10名を越え、その中には海外に滞在中にも拘らず、電話・FAX等で突然、講演を依頼した場合もあった。その方々に対しては、この場を借りて失礼なお願いをしたことをお詫びしたいと思う。また、他の準備活動を抱えていたため、交渉開始後にもかかわらず、二度ほど福岡・長崎・関西の開催予定地に出張したため交渉が中断してしまい、関係者に心配を掛けたことも申し訳なく思っている。

また、本会議の直前まで交渉を手伝ってくれた吉田泰治君とISAの木原玲子さんには特にお礼を言いたいと思う。

そして、何よりも多忙な中、講演を快くお引き受け下さった渡辺昭夫教授、広野良吉教授、松井やより女史に心から感謝したいと思う。

## 新国際秩序シンポジウム

中村明日香

米ソ両超大国の二極化状態の変容によって、ポスト冷戦時代の国際社会における日米関係も変化が迫られているといえよう。中でも特筆すべきは、今後のアジア太平洋地域の新国際秩序形成に向けて、日米両国がその政治的経済的發展に対して大きな役割を担っているということである。しかしながら、依然としてこの地域は国際秩序形成に対して、不安材料といえるべき要素も内包していることは確かであろう。このような事を踏まえて、今回

東京地区では8月2日に、新国際秩序シンポジウムが開催された。

シンポジウムは、共通テーマとして「アジア太平洋地域の新秩序」を掲げ、三人のスピーカーの方々のうち、青山学院大学渡辺昭夫教授には主に地域内協力体制、広野良吉氏には経済發展、松井やより氏には人権という面からそれぞれお話頂いた。渡辺氏によれば、当該地域において最も必要とされているのは市場を共通項とした開かれた地域主義と考えら

れ得るものであり、東南アジア諸国連合やアジア太平洋経済関係閣僚会議に代表されるものである。ここでのポイントは、新資本主義とも新重商主義(ロバート・ギルピンによる)と言われるアジアの政府主導型の経済発展が、依然として国家主導の自己完結型であり、政治的統合をも目指すヨーロッパ共同体レベルとは統合の度合いに格差があることを教示しているのである。氏が地域協力体制への障害として掲げているように、中印間の紛争、南北朝鮮、日本とロシアとの北方領土問題など、冷戦期の遺産といえるものや尖閣諸島や南シナ海の比較的小規模な領土問題、北朝鮮の核やアジア地域における武器保有の対GNP比増加、ティムール、ミャンマー、チベットなどの人権問題など将来に向けて解決すべき問題が山積している。しかし、渡辺教授の見解によれば、このような障害が存在するにも関わらず、安全保障という側面が地域間協力に新たな共通項をもたらしており、事実、経済を中心とした協力体制の中でも、アジア安全保障のレジームを確立しようという動きが見られるのである。そして、そこにはやはり、アメリカによる集団安全保障の枠組みが重要となっているということであった。

成蹊大学の広野教授は、先進国の成長率がおおよそ3%程度のところ、アジア太平洋地域は5%(中国の場合は7%)であり、将来的にも少なくとも東アジア諸国は順調に成長を続けるであろうという予測を述べられた。地域の急成長の原因として、1)就学率の高い労働力、2)高い貯蓄率、3)勤勉さ、4)政権の比較的安定性という4つがあげられるということであった。このような状況に対する日本の役割としては、経済援助を増やし、アジアのマーケットとして市場開放を促進すること、

また技術援助や海外直接投資を通じた資本投資をより活発にするなどが当てはまるということであった。そして、既存のアジアにおける国際レジームがカバーする範囲を拡大し、秩序づくりに寄与することも重要な役割を述べられた。アジア太平洋地域はヨーロッパ共同体とは違い、成長しているとはいえ、依然各国間の経済格差も大きく、人種や文化的背景も大いに異なっている。しかし、それ故に経済というファクターが、新国際秩序づくりにおいて欠くべからざる存在であるといえるであろう。

急激な経済成長のもとに、その功罪として、人権問題が顕在化してくることが往々にして起こり得る。松井やより氏は、女性の人権擁護活動に長年従事しておられた経験から、フェミニストとして、またジャーナリストとして発言下さった。主に、アジア地域における売春行為に対する実態を我々に示された。松井氏は、日本で初めて「売春」ではなく、「買春」という言葉を定着させた方でもある。経済成長によって日本企業の海外進出は激増したが、それに伴って、進出先での買春の需要も増加させることになった。何も日本からの進出企業の社員だけではなく、買春ツアーさえもパック旅行にまぎれ存在してくるようになった。松井氏によれば、日本企業はこれ





まで男性優位、男性志向型社会であったため、このような人権を蹂躪するような行為を許してきたということであった。日本の企業社会も女性の進出で、徐々に変化が見られることとは思うが、今後アジア太平洋地域内の一層の協力体制を構築するためには、男性優位に基づいた女性への性的奴隷観を捨て、

互いの国と国とが尊重しあうことが重要な要素の一つであると考えられる。そうすれば、日本政府がエイズ感染防止を訴えるために制作した、「いってらっしゃい。でも気をつけて」などという(パスポートで顔を隠した男性の)ポスターなど、生まれることはないであろう。

#### 吉田 泰治

このシンポジウムの開催の趣旨として、「アジア太平洋地域における新秩序」というテーマの下に、視点を「アジア、太平洋」に据え、冷戦後の新しい国際秩序を巡る状況を認識しつつ、具体的な「新秩序」を模索し、さらには、その実現のための具体的な行動、日米双方の役割、について考えることとしました。様々な問題を、さまざまな角度から取り上げ議論し、各参加者の問題意識を深めて頂くことをねらいとしました。

シンポジウム当日は、広野良吉先生(成蹊大学教授)、松井やより先生(朝日新聞編集委員)、渡辺昭夫先生(青山学院大学教授)にご講演を頂き、広野先生には「アジア太平洋地域の経済発展」、松井先生には「アジア太平洋地域の人権問題」、渡辺先生には「アジア太平洋地域の国際関係」、の各テーマでご講演頂きました。このテーマ設定は、経済、人権、政治、の各問題についてシンポジウム参加者一人一人の視点で考えることを可能にしたと思いま

す。その証拠の休憩時間には各先生を交えた議論が活発に交わされていたようです。

ご講演の中で、最も印象的だったことは、松井先生の人権問題、特にアジア地域における「売春」に関する問題は大変私の興味を引きました。このテーマ設定でよく話し合われる、政治、経済とは別の角度からの提言でしたので、他の参加者も興味を引かれたらしく、その証拠に、質疑応答では、松井先生への質問が殺到してしまいました。

この類いのテーマ設定をした際に陥りやすい、政治、経済に片寄った議論ではなく、その問題意識を人権にまで広げた点が、多少議論内容の奥深さを欠く結果となったものの、大変斬新であったのではないかと思います。

最後になりましたが、このシンポジウムのコーディネートを行い、また大変すばらしいシンポジウムを準備してくれた西元宏治君に心より感謝したいと思います。

#### 少数派問題フォーラム 総括

#### 松本 安代

「人種のるつぼ」と評されるアメリカに対し、日本はしばしば「単一」民族国家といわれる。日本における少数派問題は「単一」と誤った見

方をされるような同質社会である分、顕在化しにくく、根底にある差別意識は深いのではないだろうか。

今回、日本開催の会議において日本の少数派差別問題に焦点を当てることによって日本における現状を認識し、「Sharing Our Visions」を行い、「調和」と「共生」を考えることを目的とした。

フォーラムは東京、福岡、大阪の3セッション行われ、東京では講演とグループ別討議、福岡では学生による発表とビデオの後グループ別討議、そして大阪ではグループ別実地研修の形をとった。プログラムは以下の通りである。

<東京セッション>

・基調講演

「日本における少数派差別」今野敏彦氏  
(四国学院大学教授)

「先住民族問題を考える：ロシアの先住民族」  
岡田一男氏

(東京シネマ新社プロデューサー)

「在日韓国・朝鮮人問題」金宣吉氏  
(青丘社主事)

<福岡セッション>

・発表内容

日本における外国人労働者問題

大学における少数派問題

日米の少数派問題に対する意識の違い

アフリカ系アメリカ人に対する差別

在日韓国・朝鮮人差別

沖縄の歴史と現状

アフターマティブ・アクションについて  
・ビデオ

“Struggle and Success of African American in Japan”

コーディネーター：ステファニー、ウェストン氏

(福岡大学講師)

<大阪セッション>

・実地研修他

リバティおおさか(大阪人権歴史資料館)

在日韓国基督教会館

部落解放同盟大阪府連合会浅香支部

部落解放同盟大阪府連合会中城支部

アジアハウス

RINK(Rights of Immigrants Network in Kansai)

めぐみ保育園

多数派と少数派の存在する社会において、「少数派問題」は常に存在し、私たち自身が加害者にも被害者にもなりうる。私たちが自分以外の存在と向き合う時、固定観念や偏見によって歪んだ関係を持つことが「差別」の始まりであろう。真の自分と真の他者とを見るとところに相互理解、「調和と共生」の道があるといえよう。

最後にこのフォーラムのために協力して下さった方々に心からの感謝を示したい。

## 少数派問題フォーラム パート1

坂野 晴彦

第1回目のマイノリティーフォーラムは8月3日の午後、成蹊大学で行われた。東京での当フォーラムは、講師を呼びやすいという地の利を生かし、専門家による講演と講師を囲んでのスモールグループディスカッション

を行った。はじめに四国学院大学教授の今野敏彦氏により、「日本におけるマイノリティーの理解のために」と題して、マイノリティーのとらえ方、日本のマイノリティーについての話があった。2万人もいるとされるジャピノ





(日本人とフィリピン人との間に生まれた子)の問題などは目新しく感じた。Q&Aでは同和問題について質問がなされ、その問題の深刻さを再確認することとなった。

次に東京シネマ社の岡田一男氏によりサハリン北部に住むニブフ民族についてのビデオを觀賞することとなった。ニブフ民族の素朴な暮らしが、「おとさんの心遣い」という名でソ連邦・近代文明によりはぎとられてゆく。移住させられ、酒にひたり、自殺するその様は、強く脳裏に焼き付けられた。最後に「1999年にはニブフ言語を記憶する人はいなくなる」というテロップが流れた時、アイヌ、イヌイッ

## 環境フォーラム 総括

環境フォーラムは、東京都武蔵野市と北九州市の2箇所で行なわれた。武蔵野市では一般公開のイベントとして市民の方々も参加され、学生会議のメンバーも意見交換を新鮮さを味わいつつ活発に行なうことが出来た。環境問題の解決は、近年地球レベルの問題として急務となっているが、私達一人一人が出来ることは、私達自身の生活を見直していくことである。武蔵野市や市民グループの様々な取り組みをクリーンセンター見学や、再生紙の製作等、実際に体を使って体験的に環境問題を考えたことは、アメリカの学生にとっても、日本の学生にとっても意味深いものとな

った問題を切実に身近なものとして感じる事ができた。

最後に「在日韓国・朝鮮人の人権状況」と題して在日三世の金宣吉氏から話があった。歴史的、統計的な在日韓国・朝鮮人に対する処遇についての話で、制度的な不利益が今も存在していることを、そして、帰化では解決できない問題であるということを実感した。また、在日の人々はもとより、サハリンにおきざりにされた韓国・朝鮮人や在韓被爆者に対する戦後補償についても触れられ、気付かない部分に存在する問題を認識することとなった。

三者の講演を終え、マイノリティー問題解決への道を考える上で、教育の重要性を強く感じた。最後のスモールグループディスカッションの場での「身近に差別問題がでてきた時、初めて自分の中に差別が生ずる」という言葉が忘れられない。

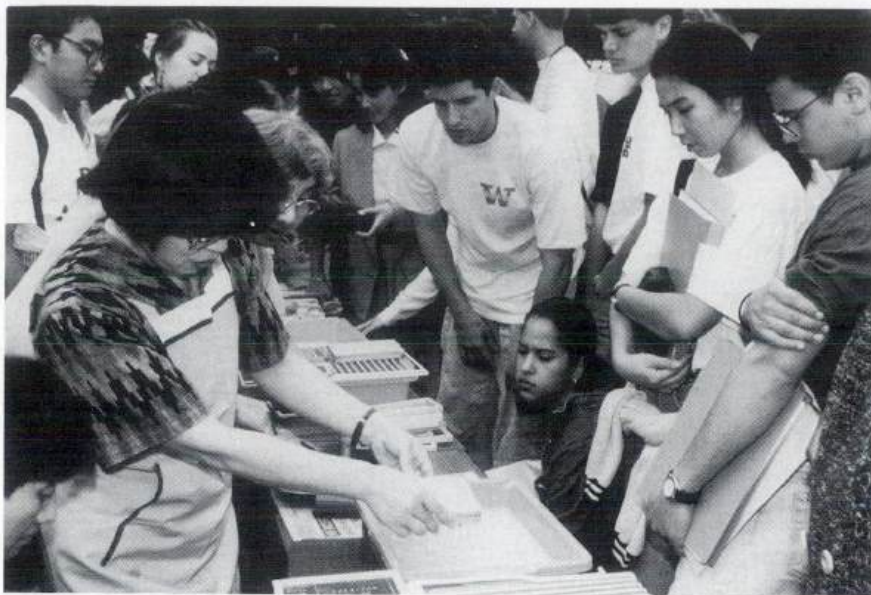
## 阿古 智子

った様だ。北九州では、自治体レベルでの環境問題への取り組み方について議論しようということで、何人かの自治体関係者、活動家の方をお呼びして講演していただいた。その後、スモールグループで議論を行ない、これからの自治体レベルでの環境問題への取り組み方について話し合った。

2箇所でのフォーラムを通じて、環境問題の解決方法を身近なレベルから、そして自治体、国、そして世界レベルから議論していこうと試みた訳であるが、分野によって専門的な事が議論にのぼり、知識の差によって議論が進みにくかったことや、いまひとつ議論の

焦点がばらつきがちで、具体的な提言を出していくところまでいかなかったこと等まだまだ改善すべき点は多く残されたが、これから

の学生会議での課題として、そして各個人の環境問題への取り組みを通じての課題として活発な議論が続けられていこう。



## 環境フォーラム in 武蔵野

恒田 恵美

8月4日、環境フォーラムの一環として武蔵野市役所クリーンセンターを訪れた。午前・午後の二部構成で一日「環境」がテーマのリージョナル・デーであった。ここで、なぜ環境フォーラムが武蔵野市で開催されたのか述べると、この武蔵野市というのは東京のなかでも積極的に環境問題に対して取り組んでいるからなのである。そこで、この日一日の活動内容について振り返りたいと思う。

午前の部では、クリーン・センターでビデオ鑑賞やセンター内を見学したのだ。朝から晴天が続いており、外で一般参加者達も交えて、牛乳パックからの紙すき体験を行なうことができた。

午後の部は、成蹊大学へ戻り、4名の講師

を招いて講義をして頂いた。その後、JASCer 4名によるプレゼンテーションが行なわれた。講義内容を簡潔にまとめると、講師の方々は行政からの立場で環境に対する我々市民の行動のとり方の指導について述べた。他方、JASCerからのプレゼンテーション





ではアメリカの環境問題の現状の指摘と比較、また、私達学生レベルでいかなる行動をとり得るかなどについて、個々の体験から学べた気がする。

今回のこの「環境フォーラム」全体を通して、環境活動が地域社会において日常的どう行われているのかを体験することができ、また、

私達個人が、日々の行為をどう心掛けてゆけば良いのか知ることができたと思う。この日は「環境フォーラム」でもあり、また、「リージョナル・デー」の第一日目でもあった。武蔵野市市民の参加者たちも交えて、ディスカッションでは個人の体験に基づいた意見が多くあげられたように感じた。

## 貿易シンポジウム 総括

坂田亜也子

貿易シンポジウムは、三部形式で開催された。第一部実地研修、第二部講演会、第三部学生による発表である。一部、二部は8月4日、第三部は8月16日に行われた。

実地研修は、日米間の様々な具体的問題に目を向けることができるよう、3グループに分かれ行った。訪問させていただき、また社内の方のお話をうかがうことができたのは、日本鋼管株式会社、株式会社伊勢丹、本田技研工業株式会社の三社である。ダンピング問題に沸く鉄鋼業界、参加者の関心の高かった流通問題および企業の海外戦略について、また貿易摩擦問題の代表品目ともいえる自動車問題に、触れる事ができた。いずれにおいても興味深いお話や見学に加え、社内の方々との大変活発な質疑応答が交わされた。参加者にも非常に好評であり、時間がもっと欲しかったという声が多く聞かれた。

第二部講演会は、ニューヨーク大学経済経営研究所所長の佐藤隆三先生を講師に迎え成蹊大学の構内で行われた。新時代における日米の役割をテーマに、両国の事情に精通していらっしゃる先生のエネルギッシュなお話は、我々学生を引き込み、活発な反応を呼んだといえる。

学生による発表は、地球共同体へ至る一つ的手段としての自由貿易と進む地域ブロック化はそれにどのような影響を与えるか、という流れで行われた。自由貿易とはという大きなものから始まり、NAFTA、APECの今後の展開などについて6人の日米の学生が発表を行った。その後3、4人ずつの小グループに分かれ、関心・知識に沿って幅広く深い議論が行われた。

お話いただいた佐藤先生、フィールドトリップでお世話になったNKKの宇佐美氏、伊勢丹のチャウ氏、ホンダの田中氏には、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



吉田 泰治

このシンポジウムは8月5日午後2時より、成蹊大学の101教室にて開催されました。講師には、ニューヨーク大学、日本経営経済センター所長、佐藤隆三先生をお迎えし、「日米経済摩擦と協調」という演題で御講演を頂きました。講演、質疑応答やスモールグループディスカッションなどすべて英語を使用する予定としていましたので、一般参加の方に来て頂けるか心配でしたが、期待以上の参加者がありました。

当初は、「貿易」という問題設定上、例年それを研究対象としている学生には大変興味を喚起するものになっていましたが、やはり、時として、議論や講演の中ですら大変高度な専門知識を必要とすることもあるため、第45回の当会議においては、それを専門としない学生からの不満の声が上がっていました。その問題を避けるための工夫が、準備段階から、話し合われてきました。そのお陰か、佐藤先生の御講演は、そのことを考慮されていたようで、どの学生にも興味を引くものになったのではないかと思います。例えば、ある時は

数式を使った高度な日本の対米貿易黒字に関する問題を議論されたり、日本の輸出自主規制に関して、非常に斬新な視点を、大変わかりやすく、日本語と英語両方で解説されながらの議論もありました。個人的感想は、問題の設定が大変広範囲に渡ったため致し方ないのかもしれませんが、先生はたくさんの問題を提起され、議論されましたので、どうしても、議論が拡散してしまった感があったと思います。但、やはりこれも、いろいろな分野を専門とする学生に対する講演でしたので致し方ないのかもしれませんが。



中村明日香

日米両国のバイラテラルな関係は、21世紀へ世界を牽引する大きな役割を担っているといえよう。両国の緊密さ故に問題となっている一つの側面として、貿易問題が揚げられよう。そこで、東京開催時において、ニューヨーク大学教授の佐藤隆三先生をお招きし、「我々はグローバル・コミュニティーのために何をすべきか。～新しい時代の日米貿易～」と

銘打ったレクチャーをしていただいた。

レクチャーでは、クリントン政権の特徴などを説明頂いた後に、日本の対米貿易において現行の輸出自主規制と最近議論的となっている輸入拡大に伴う輸入枠が実質的にはアメリカの意図する方向には機能しないという御指摘があり、先生の新たな案の提示があった。これは、明らかにガット違反と考えられ



るスーパー301条などによって制裁されるよりも、日本からの輸出に関税をかけ、この税分を輸入補助金として利用しようというものである。輸出補助金確保のためには、輸入を制限しようという動きはもはや意味をなさなくなるからである。

ここでの問題は、現在のクリントン政権は、レーガンとブッシュ時代からの双子の赤字削減を行なっている最中であり、日本がその上に重要な役割を担っていると考えていることである。増税と歳出減によって赤字の削減を財政面からは行なっているが、その財政再建におけるデフレ効果を緩和するためには輸出の拡大が不可欠だからである。クリントノミクスの下では、自由主義の原則を保持しながらも慎重な行動主義をとることが新たな政策姿勢であるという。国際経済研究所のバークステン=ノランドは、もはや対日強行派か穏健派、自由貿易論者が管理貿易論者かといった二分法を越えて、日本の黒字削減よりも市場開放と内需拡大によるアメリカ企業の日本進出と輸入拡大を促進する事が最重要課題であるとしている。つまり、当面はアメリカ国内の赤字削減促進によって(先に述べたデフレ相殺のために)「大きな政府」であるクリントン政権は日本に内需拡大を迫ってくるであろう。佐藤教授の案が、内需拡大に有効に機能するとすれば、日米間のスタートダッシュもある程度成功したといえるであろう。しかし、輸出関税化という処置が輸出自主規制よりも効果的に輸出量の削減に寄与し、輸入補助金の確保が危ぶまれる可能性も不定できない。つまり、輸出関税化とは別個に市場を開放し、内需を生み出すことが重要であろう。例えば米問題にしても、先生の考えでは、市場を開放しても関税することで、国内産の米に価格

競争力をつけることが出来るということであった。膨大な経常収支の黒字を削減することは、世界経済における日本の役割であろう。

#### 貿易(プレゼンテーション)

アジア太平洋地域の経済発展とともに、各国間の相互依存関係も深まり、地域的統合の機運が高まってきた。これはヨーロッパ共同体などにも一般的に言われていることであるが、地域内の自由貿易の確立が基本的に目指されている。事実、1991年3月の会合でも地域内の関税、非関税障壁を小さくするよう提案がなされている。アジア太平洋経済協力関係閣僚会議(APEC)は、設立当初15カ国で構成され、定期的な会合を持ってきた。会合ではワーキンググループに分かれ、個別の問題について話し合い、提案を行ってきた。近年アメリカ合衆国が、アジアの台頭に懸念を抱き始め、(敢えて言えばアメリカ抜き)のブロック化について度々強靱な反応をしてきた。アジアに現存するAPEC以外の地域的統合、例えばEAECなどに対する態度がそれである。アジアのリーダーとしての可能性を持つ日本は、アジア地域の統合を積極的に推進しようというよりも、ヨーロッパ共同体やNAFTAとの関係に、より目が向いていると認識している学者もいる。「雁行型発展」の先頭にたつ日本はアジアの地域的統合の利点を域外へも納得させるような役割を担わなければならないであろう。APECに於ける最大の懸念事項の一つは、アメリカやドイツといった強力な経済の推進を行うリーダーシップが不在であるということである。また、アジアの諸国には地域統合内のアメリカの経済的プレゼンスを好まない国も存在する。しかしながら、アジア経済は、アジアという市場以上にアメリカ

力を始めとする世界市場に大きく依存しており、アジアという限定された地域だけでは自立することは不可能である。勿論、グローバル化と地域統合は必ずしも相反することではない。そのような視点にたてば、地域的統合同士を結び付ける役割こそが、重要になってくるであろう。アジア地域が欧米とは違う、いわゆる「強い政府」の統制下で、急

激に発展してきた経緯を見れば、そのような共通項を持つ国々が互いに集まり協力しあえば、障害が取り除かれる確率が大きくなる。もしアジアで自由貿易圏が実現すれば、アメリカを含んだAPECが、他の地域との連携をクリエイトすることを要求されることは想像に難くないであろう。

## 武蔵野市レセプション

東 浩平

8月5日木曜日、貿易シンポジウムのフィールドトリップと講演の日程を終え、午後5時半にホテルプレステージに向かって成蹊大学を出る。30分近く歩くと三鷹駅近くのホテル・プレステージに到着した。

パーティー会場はホテルの一室の大広間で所狭しと様々な料理が並べられ、ラーメン、すし、やき鳥等の小さな出店まで出ている。乾杯をして会食が進むと、日米両チェアアの挨拶に続き武蔵野市長のスピーチがあり、アメリカ人学生にははっぴが、日本側にはペンセットが贈られた。また少ししてアメリカ側参加者の1人マーク・ウェンゼルさんより流暢な日本語による市の協力に対する感謝の意

を含めたスピーチがあった。レセプションの最後に行われた、武蔵野に伝わる民謡と踊りの披露はダイナミックで、あきさせることなく、レセプションの素晴らしいしめくくりとなった。



## 3. 福岡・長崎地区

### 九州総括

竹井 亮一

第2開催地である福岡・長崎では、地域の特性を活かしたプログラムを目指したことは言うまでもないが、日程的には80人になってから2週間という、参加者の心理的体力的や

マ場を迎える時期で在ったため、宿泊施設等一定の快適さを維持するように心掛けた。

日程全体の流れは各報告に譲るが、もう少しフィールドワークを増やすべきだったとい



う声も聞かれたように、訪問先との接触をはかりながら、各企画を進めることがもう少しできれば良かったと思う。ただ、会議参加者内でじっくりと話し込むことは、時間を十分にとって行いたいものであり、兼ね合いの難しい所であった。

九州に関しては、コーディネーターの住居とは至極離れて居たため、北九州市役所をはじめ、北九州市・福岡市・長崎市の各位にがっちり支えて頂いた上でようやく実現したものであったことを心より感謝したい。



## 地球市民シンポジウム 総括

脇坂あゆみ

地球市民シンポジウムは、「グローバル時代を先駆ける地方からの国際化」をテーマとして、八月七日、北九州国際会議場で開催された。この企画は、国家単位の交流に重点がおかれている現状の中で、個人が地球市民としてどのように個人の意思を国際的に反映していくかを新たな視点でとらえなおそうとしたものだ。

国際化の中の個人のあり方、社会の開発について、まず上智大学名誉教授の鶴見和子先生が、地域の重要性を「内発的発展論」に基づいて主張された。内発的発展とは、いわゆる発展途上国における急速な工業化、つまり外発的発展に対する人間の暮らしの発展だが、これは個人の開放をめざす。他国を手本にはしつつも、自社会の文化に基づき、自社会の自然環境を保護する発展論だ。開発は発想的、実践的、政策立案的でなければならないが、その過程では異質なものがぶつかりあい創造がなされねばならない、苦しみの共有によって連帯がもたれなければならないという議論は、多様性をいかに発展につなげるかを考え

る有効な指針となると思われた。

つづいて、地球市民としてグローバル化に対応する交流の具体的な実践について、ジャーナリスト四方洋氏をコーディネーターとし、駒井洋筑波大学教授、福岡アメリカ合衆国領事館ドナルド・ヤマモト総領事、北九州から末吉興一市長をむかえたパネルディスカッションがおこなわれた。人権意識の育成が地球人への第一歩であり、現存する外国人労働者問題などを自身の問題ととらえ、自ら変革の核となること<sup>が</sup>、真の国際化の一部であるということが討論された。

なお、このシンポジウムの大きな意義は、



北九州及び青年会議所との協力により企画が行なわれ、地元小倉高校生徒もふくみ、幅広い一般参加が実現したことであった。学生会

議からは東浩平が、発展途上国における経済開発と環境及び人権保護の価値観の対立などについて述べ、今後の課題も提示した。

## 「地球市民シンポジウム」あとがき

竹井 亮一

これは、去る8月7日北九州市で開催された地球市民シンポジウムの、1つのエピローグである。

先日、いつものように夜遅く郵便箱の扉を開けると、一通の大きな封筒が在った。北九州青年会議所、地球市民スクールの報告書だった。この集まりは、40名程度の様々な層の市民が、半年間計6回のスクーリングを通じ、“地球市民”にアプローチをかけてゆこうとするもので、内容は講師によるレクチャーに止まらず、1泊2日のネイチャーゲーム、アフリカへの救援物資の倉庫整理作業など、8月7日のシンポジウム参加も含め多岐にわたっており、参加者にとっての充実度は相当なものようであった。「ここまでやれると、いろいろと地球市民や地球共同体について、JASCとは別の意味で深く取り組めたらうな」と思い、秘かに、今度は是非別の形の地球市民シンポジウムでもできればな、と策を練り始めている。

僕は個人的に、地球市民というものを考えるにあたり、2つの姿勢を持つべきだと意識してきた。それについてここで若干検討してみよう。まず、1つめは、地球共同体という発想を追究して、その中での地球市民という存在がいかに重要かを考える姿勢であり、いわばまず大を見て小に至るといった視点の移し方をするものである。今回のシンポジウムは、理論や講師の方々豊かな経験・知識をもとにして、この考察を行う場であったといえよ

う。

さて、地球市民を考えるにあたり持つべき姿勢の2つめは、今度は各人の立場から地球共同体の考えにまで発想を押し広げてゆく姿勢である。ここでは、先程とは逆に自分達の在り方を追究してゆく延長線上に地球共同体を見出そうとする、いわば小を見て大に至る発想である。

前者の“大から小”の発想を展開するには理論や思想をもとに議論してゆくやり方が優れていると言えよう。これは地球共同体というとても大きな存在から発想を展開してゆくからである。一方後者の、“小から大”の方は、理論的な面と同様に知覚し体験する中で理解が必要となる。いや少なくともその方が実のある理解がしやすいと言えるのである。

8月7日のシンポジウムでは、大から小、小から大の2面的な理解を主に理論の上から行った。従って最後の、小から大の発想を体感・知覚するという作業は、プログラム上では行われていないこととなる。先程の地球市民スクールは、この点も、いやむしろこの点に重点を置いてプログラムが組んであったようだ。JASC本会議中は、大阪での民族問題フォーラムや、各分科会のフィールドトリップが、このような行動的・体験的な内容をカバーしていたことになる。

そこで、のこりは、まさに参加者一人一人の生活態度や行動力に委ねられていることになる。本来ならば地球市民シンポジウムを1



泊2日程度で行い、そういった内容を加味することもありえたが、日程上できなかった。シンポジウム参加者の更なる地球市民像の各自による追究を願って止まない。様々な形での、様々な体験をへて、より重層的・多元的な理解が少しでも参加者の内で拡がって行ってほしい。

最初にエピローグだと言ったのは、実は嘘である。あのシンポジウムも、そしてこの日米学生会議も、それに関わった人々にとって1つのプロローグであってほしいという、ちよっとぜいたくな思いが僕の中にある……。

この場を借りて、あのシンポジウムを共に産み育てて下さった、末松様、佐々木様を始めとする北九州市国際部の皆様、お忙しい中私共のシンポジウムへの深い理解とともにご講説頂いた鶴見先生、四方先生、駒井先生、ヤマモト領事、末吉北九州市長の各位、そしてシンポジウム実行委員の、東、村上、脇坂、泰松のみんな、その他挙げることのできな



鶴見 和子先生

い御賛同、御協力頂いた全ての方々本当に心から御礼申し上げます。皆様の御理解がひとつの方向へ向かい、地球市民シンポジウムという場をもたらして下さったことをぼくは生涯忘れないでしよう。ありがとうございました。

1つのプロローグ。

## 北九州市レセプション

吉田 泰治

このレセプションは、地球市民フォーラムの時間延長によって、当初の予定の2時間からおよそ1時間程度に短縮されてしまいました。地球市民フォーラムでの議論が活発であったことを考慮すれば致し方ないとも思えます。それに加え、我々学生が、レセプション後の予定に関わる荷物移動のため、開会に間に合わず、北九州市長をはじめとする方々のごあいさつを聞くことができなかったことも不運でした。このように、時間的な問題から、私個人的にはかなり慌ただしくこのレセプションでの前半が過ぎていったように思われます。

そんな中、北九州市の方々我々のために準備して下さったこのレセプションは大変暖かいものでした。特に、このレセプションの席上では、我々を一晩受け入れて下さったホストファミリーの皆さんと初めて対面することになりました。今回の会議期間中、2度ホストファミリーと過ごすという機会に恵まれましたが、北九州市でのそれは、アメリカの学生にとっても、日本の学生にとっても初めてのことであり、皆、一様に緊張の面持ちであったようです。私個人的には、私と一緒に滞在したアメリカの学生が日本語を全くといっていいほど喋れなかったため、このホ

ストファミリーと彼との間に入って意思疎通の手助けをするという役が待っていましたので、とても緊張したものとなりました。辺りを見回しても、アメリカの学生が、家族に向かってお辞儀をして日本語で挨拶していたり、日本の学生が、アメリカの学生のいったことを通訳できず四苦八苦している様子がかうかが

えました。

先に述べたように、レセプションの前半は大変慌ただしくもありましたが、後半、ホストファミリーとの交歓が進むにつれて、何らや大変和んだ雰囲気となり、「地球市民との交流」がようやく行われたような気がしました。

## ホームステイ in 福岡

村上 敦哉

東京での1週間の会議を終えた後、私達は飛行機で北九州に向かった。東京での滞在地であった吉祥寺の喧噪な雰囲気とは打って変わり、私達が宿泊したリーガ・ロイヤルホテルのあるJR小倉駅周辺は見事に整備されていた。

到着した翌日の午後、北九州国際会議場で地球市民シンポジウムが開かれ、そのすぐ後のレセプションにはホストファミリーが迎えに来るようになっていた。日本人とアメリカ人がペアを組み、40組のペアが各々違う家庭にお世話になることになっていた。レセプションでは、各々のペアが自分達のホストファミリーを見つけると、簡単に食事を済ませ、各々の家庭へと足早に散っていった。

40の家庭で各々のペアが経験したことは様々であると思うが、ここでは私の体験を報告したいと思う。

私たちのホームステイ先の家族は3人家族で、家は農家であった。両親と長男という家族構成で、3人とも非常に心暖かい人達であった。夜には、5人で、北九州地区の農家が抱える様々な問題や、あるいは、プロ野球の観客の応援の仕方の日米比較など、実に様々な事について興味深い話し合いをすることができた。特に興味深かったのは、日本の農家

が抱える最大の問題である後継者問題に関する話であった。その対策として地方自治体や農協が実施しているプログラムをいくつか教えてもらったが、特に農協などは自らの存続をかけて涙ぐましい努力をしているようであった。

2日目には、晴れ上がった夏空の下、長男の人と共に3人で周辺の田畑を見て回った。田畑で作業をしていた幾人かの人達とも話しをしたが、その時、ふと思い出したことがあった。それは、2日前の中間反省会で議論されたホームステイの意義であった。中には、日米学生会議にホームステイを入れるのは妥当でないと考える人達もいた。しかし、アメリカ人の大学生と日本の農家の人々が、何のわだかまりもなく楽しげに言葉を交わす光景を目の当たりにした私には、とてもそうは思えなかった。

今から振り返ってみても、あの2日間のホームステイが、1ヵ月に及ぶ会議の中で占めた役割は非常に大きかったと思う。なぜなら、第45回日米学生会議を通して、私達80人が探し求め続けた“グローバル・ハーモニー”も、草の根レベルでの人々の相互理解と信頼が欠けていては、絶対に実現し得ないのだから。



我々を含む数組は、農家でのホームステイだった。私たち二人(後藤、Fung)は、ブロッコリー、ミニトマトなどを栽培する専業農家にお世話になった。祖父母、父母、子供三人の計七人が住む、最近少なくなった、三世同居の家庭である。

この家庭で外国人を招くのは初めてだということ、我々を迎えに来てくれたご主人と、高校生の娘さんは、最初、心配そうな様子だった。これは、初めて日本の家庭を訪れる米国人学生にとっても同じことである。彼女と、英語の分からないホストファミリーとの間に、私もまた不安になった。どうすれば、お互い言葉の溝を乗り越えて、自然に会話ができるようになるだろうか。

家に着くと、ご主人の両親、妻、高校二年生の息子さんが迎えてくれた。後で、部活動の練習から帰ってきた中学生の娘さんが加わり、普段ならば食事の時間はさぞ賑やかであろうことが想像できるのに、この日は、皆、なんとなくこちなく、静かだった。

夕食が終わる頃、農業の話などをしていうちに、皆やっと打ち解けた。夜は衛星放送の字幕映画をみた。これは結構よい時間だったと思う。言葉を交わす面倒もなく、同

じ感情を分け合うことができたからだ。

次の日、子供たちと近所を散歩したりして遊んだあと、祖父母を除く皆で、近くの公園に遊びにいった。この頃には、子供たちの表情も和らぎ、親しげになっていた。実は、この日、農作業を手伝わせてもらいたかったのだが、ちょうど収穫物もなく、ホストファミリーの方も今日は休みたいということだった。結局、お互いにとって楽しい休日だった。

別れ際の家族の寂しそうな様子が印象的だ。初めて外国人に接した日本の家族と、初めて日本の家庭に滞在したアメリカ人。双方が、言葉・文化の違いにかかわらず、結局同じ人間であることをしみじみと認識した二日間であったと思う。外国人と比較的接し慣れた都会の家庭とは一味違うホームステイであった。



## 田中 沙羅

ホームステイ、それもファームステイ。私にとっては全く初めての経験であった。「農家」ときいただけで、「別世界」を予想していた私であったが、その予想は見事にはずれた。

ホストの杉原さんは、農業研修のため海外経験のある、気さくな人であった。おまけに

8歳、6歳、4歳の3人姉妹がおり、非常に賑やかな家庭であった。初め少々緊張していた私も、心のこもった歓待とあどけない子供達を前に、緊張はとけていった。

2日目。午前中はすいか畑に行き、すいかをトラックに積み手伝いをした。とはいえそ

の合い間に子供達とじゃれ合ったり、写真をとったりしていたので、手伝っていたというより子供の相手をしていたといった方が正確だろう。前日の雨も上がり、青空の見える暑い日差しを浴び、すいか畑を背に、すっかり私は子供達の「お姉ちゃん」になっていた。

午後。すいか出荷の手伝いをした。手伝いとはいえ単に「わかまつすいか」のシールを貼るという非常に単純なものであったが。この頃には子供達はさらに私にまといつくようになっていた。共に食べ、遊び、仕事をするうちに形成された何かを私は感じていた。

## 環境フォーラム パート 2

北九州市は30年前ごろは、公害がひどく煙の街として悪名をとどろかせていたが、その後、市をあげて積極的に公害問題にとりくみ、今ではすっかり健康的な街となった。行政、地元企業、市民の努力の過程に学び、また、北九州市は発展途上国の自治体へ公害克服のための技術等のノウハウを提供するなどしてアジア諸国へ貢献をしています。それらのことをきくために、北九州市の公害対策の人を講師としてまねき、また小グループ・ディスカッションにも加わっていただき、コメントし



杉原さんは最後に私達を車で海の一望できる灯台に連れていってくれた。子供達と共にとった写真と、おみやげに頂いた博多人形は一生の思い出になるに違いない。

人間にとって、自分の存在が確かなものとして感じられた時程嬉しいことはない。杉原一家の親切なもてなし、とりわけ子供達が純粋に私を慕ってくれたことは、私に生のエネルギーを与えてくれた。暑い夏の一時、子供達と共に汗を流し、トラックの荷台で風に吹かれながら疲れを癒した思い出は、一生消えることはないだろう。

### 桜井 周

ていただきました。一人目の方には、北九州市に流れるむらさき川に鮎をもどすプロジェクトを行ったときの話をさせていただき、もう一人方には洞海湾の水の浄化にとりくんでこられた経験を語っていただきました。公害からいかに脱却していくかという問題について、現実的な位相で考えることができました。

また、九州で環境問題とくれば、水俣病にふれない訳にはいかない。アメリカ側参加者に水俣病について知ってもらうために、水俣病の運動にかかわってきた牧師さんにきていただいた。水俣病の歴史と症状について説明してもらい、あとで写真も見せていただいた。水俣病については、地球市民シンポジウム、リパティ大阪でもふれていたもので、それらと関連づけて学習できてよかったと思う。

最後に、東京大学の中西教授にきていただいてお話をうかがう予定であったが、都合により御参加頂けなかったのは残念だった。



8月9日、環境のタスクフォースでは、『環境保護と国際貢献』というテーマで北九州の国際会議場でフォーラムを開催した。北九州市は、かつてのひどい公害問題を主体性をもって自ら克服し、現在そのノウハウを地球環境保護の観点から、今日都市公害に悩まされる発展途上国への移転に努めている。その北九州市の歴史と現況について市の職員とアドバイザーの方に講義を願った。以前の「公害王国日本」の抱えた象徴的な公害問題として、また九州地域で開催されるということもあって、水俣病問題にもふれた。ここでは、この問題について被害者の立場から積極的に携わって

おられる方に講義を願った。

当日は、各講師の方々もスライド等を使ってかなり専門的な事項まで分かりやすく説明しておられた。しかし、内容が少々難しすぎ、グループディスカッションの時間を設けた二も関わらず、レクチャーが一方通行になったきらいがあったのは、反省すべき点であった。

最後に、都市工学の観点から広く公害問題、特に住民と水との関わりについて研究をなさっている中西教授にも講義をお願いしていたが、当日、身体の都合上、お越しいただくことができなかったのは大変残念だった。

## リフレクション・ミーティング

貝原健太郎

反省会。会議が始まって2週間を過ぎたころ、若く血気盛んな参加者の中に会議に対する不平不満の声が聞かれるようになりました。ある者は総合テーマの扱いの不当さに苛立ち、ある者は巨大になり過ぎた会議の在り方に疑問を抱き、ある者は豪華絢爛なレセプションに憤り、またある者は言葉の壁に突き当たり挫折感を味わっていました。彼らはホテルの一室に集まり、互いの意見を戦わせ、会議への恋慕の念を確認し、「今からでも遅くない、会議を変えなくてはいけない」と考え、立ち上がりました。そしてその手始めとして、パンフレットを印刷し人々に配布しました。その結果自分たち以外にも会議に対して何らかの疑問を抱いている人達がいることを知り、そしてとうとうコミュニケーション・ワークショップの時間を割いて反省会を開くことになりました。北九州国際会議場の一室に80人が

一同に会し、それぞれの熱い思いを語り合いました。「つまらないレクチャー主体の会議は時間の無駄だ」「総合テーマを通して会議に一貫性を持たせなくてはいけない」といった現在進行している問題から、「会議の規模が大きすぎるのでは」「会議の目的とはなにか」といったより根本的な問題に至るまで多くの点が指摘されました。またそれに対して賛成、反対さまざまな意見が出されました。それぞれの参加者がそれぞれ会議に対する熱い思いを語り、中には感極まって涙を流すものすらいました。

結局その場で何らかの答えが出ることはありませんでしたし、参加者もそうするつもりではありませんでした。しかしその討論を通じて会議への思い入れを参加者が強め、また会議をより良いものにしようという考えが浸透したように思いました。また彼らの間に一

種の連帯感が生まれました。予定外の企画でしたが成功であったといえましょう。

反省だけなら猿でもできますが。

## 少数派問題フォーラム パート2

鈴木 武志

### 「マス・メディアの中のマイノリティー」

台風の進路を窺いながらの日程で、嵐の後の静けさを皆心待ちにしていた。一室に閉じ籠もる窮屈感とは裏腹に、ビデオの内容に新鮮さを覚えたのは私だけだったのだろうか。

外国人労働者を題材とする著書なり、報道特番などは、枚挙にいと間がない程語られているが、ともすると陳腐な大義名分としか聞こえないこともままあるものだ。

そんな中で、私が新鮮なイメージを感じたのには、後になって頭を整理してみると、やはりそれなりの理由があった。第一に、番組作成に当たっての取材者側の視点の違いが、第二に、被取材者の対象を多様化していたという二点が挙げられる。

先ず同じ外国人労働者問題を扱う時でも、日米間では取材内容に大きな倫理感の相違があった。具体的には、番組作成段階で作成者側の主要意図が、どこに置かれているかということである。私が見聞きした限りでは、概して外国人労働者と言え、潜在的マイナスイメージをラベリングされて報道されることが多い。一方、今回の番組では、米国側の作成ということもあってか、集団としてのマイナス面を強調するのではなく、労働力を有す



る個人としてとらえているように思われた。

次に被取材者側の多様性についてだが、実に様々な職種、年齢、男女別による紹介がされていた。多様な視点を設けることより、ケースの特殊化、異例化を避け、普遍的な情報によって視聴者に解答を委ねる報道姿勢には、評価すべきものがあった。

以上の二点を踏まえ、次のような結論に至った。日本人だけに限ったことではないが、人は内なる諸問題を抱えている時、無意識のうちに苦悩から免れるべく、仮想敵対者を作り出し、問題をすり替えている。そして、そのすり替えを助長するものが、時として偏狭な倫理感を含んだ情報なのだ。今後ますます情報は増大するばかりだが、インテリジェントな情報受容を心掛けなければならない。

## 長崎地区総括

芝崎 厚士

長崎訪問は8月11～12日の間に行われた。11日午前5時にバスでリーガロイヤルホテル小倉を出発し、9時から12時までが長崎国際

文化会館での開会式を兼ねた映画「原爆の長崎」鑑賞と本島市長の講演、昼食後は被爆者講話組と原爆病院組の二手に分かれて実地研修



を行った。夕刻宿舎のながさき式見ハイツ到着後は長崎市によるレセプションとパーティーがあり、会議が中盤に入りやや疲れていた上の強行軍だったのでいい息抜きができたと思う(かわいい仔猫がいたのを覚えている人もいるだろう)。翌日の午前中には、前日行う予定であった参加者のプレゼンテーションとディスカッションを行った。午後は市内の実地研修。国際文化都市長崎の素晴らしさを満喫した後で、再びバスに乗り込んでリーガへ戻った。

わたしはジンと共に長崎のコーディネーターとして、戦々競々たる思いでこの2日間を過ごした。特に初日の頃は疲れが極限に達していて、また同時に個人的に悩んでいたこともあり、そのせいか前日のタスク・フォースとのミーティングを手配りがやや不十分なところを残したまま終えてしまい、かなり不安だった。往路の道中で、グレッグやみき(寺澤)とふざけたりしているうちに、少しは疲れも心の霧も晴れるような気がしたのも束の間、いざ長崎に着いてみると自分の気分が構ってはいられなかった。レセプションを終えたあたりで疲れはとれたが、心の中のわだかまりはどうしても消えなかった。

いろいろ失敗もあったが、全般的にいて無事に終了した(多少、無事でなかった人もいたようだが)ので一安心だった。わたしの不手際でご迷惑をおかけした人にはこの場を借りて心から陳謝したい。

それぞれの内容は各稿を御覧いただきたいが、参加者が受けた印象の強さ、そして討論と研修のバランスなどを考え合わせると、総じて長崎訪問は所期の見通し以上の成果を達成したようだ。報道関係者の取材に対応していたためでもあるが、わたし自身、原爆病院

の病室にどうしても入ることができなかった一人である。被爆者講話組の方も、撮影された8ミリビデオをあとで見たかぎりでは貴重な経験となったようである。

「一番印象に残っている」と言ってくれる人も何人かいて、コーディネーター冥利に尽きるが、実際のところ参加者にそう思わせただけは長崎の持つ魅力と文化国際課のスタッフの皆さんの活躍に代表される長崎市の方々の完璧な受け入れ態勢の存在であり、それはコーディネーターの無為を弥縫して余りあるものだった。また、会議期間中ほとんど曇り空が多かった中で、長崎での2日間は嘘のように気持ちよい台風一過の日本晴れが続いたことも幸運だった。

二日目の8月12日は自分の23回目の誕生日でもあり、ずいぶんリラックスして過ごすことができた。午後は一人長崎を散策し、チャンポンを食べながら絵はがきを書く。会議が始まってからまもなく、なぜかわたしの「娘」となったさら(田中[沙])とひろみ(日向)へのお土産にチャイナ帽を買って、6時の集合場所に3時ごろから一人で座って長崎港の景色をずっと見ていた。長崎は6月の出張の時から初めてで、このときが2度目だったが、その居心地の良さ、人の暖かさにはますます魅せられるばかりであった。「将来一度は住んでみ



たいなあ」などと勝手なことを考えているうちにみんなが三三五五戻ってきた。娘たちも帰ってきたので帽子をあげて一緒に撮ったのが前頁の写真。帰りのバスの中でみんなが一言ずつ書いた色紙を渡してくれて、さらに「ハッピー・バースデー」の合唱。会議中に誕生日がある人にとってはたまらない瞬間で、なんともいえずうれしかった。今でも部屋に飾ってあるその時の色紙の中で印象に残っているのは、盟友ジンの“THIS DAY PROVES THAT YOU ARE NOT MEDIOCRE”と、色紙の裏ににしもが書いた「今更、何も言うことはなし!」。特ににしもの言葉を目にしたときには肩の荷がふっと軽くなった気がした。充実感が心の中をさっと駆け抜けていき、気

分が爽やかになった。

ホテルに帰ると、娘たちがわたしの部屋にやってきて、バースデー・プレゼントとしてパンダのペット(他にもくれた人がいる)と、「事務所で使って」といってかわいい猫のスリッパをくれた。その後でいろいろな話をしたが、まさか二人とも来年の実行委員になるとは思いもよらなかった。本当に幸せな一日だった。さて、彼女たちにお返しをしなくてはならないが、次女にはディズニー・ランドで買ったミッキー・マウスの手袋をあげた。長女にはまだ誕生日がこないけれど、何をあげようか今から楽しみにしながら考えている(もちろん、このときはまだ養女ではなかった三女にもね)。

### 戦争と平和フォーラム パート3

貝原健太郎

8月11日は、真夏の太陽が真上から照りつける暑い日だった。まるで私たちが、長崎に来るのを、そう、あの長崎に来るのを待ち構えていたかのように。あの日も、これくらい暑い日だったのだろうか。

本島等市長のお話を聞いた。市長は高ぶることなく淡々と私たちに語られた。逆にその口調が私にはこたえた。

「20世紀とは何だったのだろうか。①市民をも巻き込んだ2つの総力戦、②冷戦構造、③難民、飢餓、環境、南北問題、テロ、などの諸問題の累積。この三つが20世紀の象徴である。そしてその中でも最も愚かだった行いは、ナチのユダヤ人虐殺と、そして、原爆投下であった。それを踏まえて今、日本人がなすべきことは何か、それは、過去の日本の侵略の事実を追求すること、また世界中に対し親しみの持てる人間になること、の二つである。

さて、現在の政府の政策に問題がある。第一に、長崎にきた難民(ポルトビープル)を冷遇すること、第二に公的権力から外国人を排除することである。国際化とは一体のどのようなものと考えているのだろうか。

戦争は人間から理性を失わせる。人間は戦争を正当化する。」

特に、最後の言葉はこころに訴えるものが



本島 等長崎市長



あった。原爆フィルムを見たあとだっただけに。

とにかく、暑い日だった。あの瞬間は、こんな比べにならないくらい暑かったのだろ

う。いや、熱い、か。気が滅入った。人間の残酷さを感じた。戦争は要らない。原爆も要らない。

### 後藤田鶴子

8月9日、その日が原爆記念日だったのを思い出したのは、夕方、夕刊を見たときだった。

小学生の頃に原爆の写真、絵画展を見に行き、また修学旅行で長崎を訪れて衝撃を受けて以来、8月6日の広島、9日の長崎の原爆記念日には朝からテレビを点け、投下自国のアナウンスとともに、黙禱することになっていた。だが、日常の忙しさに、黙禱の時間をつい逃してしまうようになってしたのは、高校生の頃からだろうか。

2日後の11日、我々は長崎を訪れ、本島等市長・被爆者の話を伺った。「ここを訪れ、話を聞くと、皆さん、戦争や核兵器の恐ろしさをひしひしと感じていくのですが、そのうち日々の忙しさの中に、このとき感じたことを忘れていく人が多いですね。そこが、実際に体験した人と、体験していない人との違いでしょうか。」被爆者の一人がおっしゃった。

私もまた、原爆の惨めさを感じた衝撃を、日々の生活の中に、だんだん薄れさせていた一人だった。体験者と比べて、自分たちの認識の甘さを感じざるを得ない。

平和を享受する日本にいて、概念的に、戦争はいけないと言っても、説得力を欠く。同じに、家族や友人を失い、後遺症が原因で差別を受けてきた体験者の話を聞くと、手段の

効率性だけで、戦争への参加を容易に正当化することへの疑問を感じる。一個人・一家族の幸せもまた、達成すべき平和なのだ。

市長を含め、長崎の人々の平和への切実な希求は、我々の心を打った。次の日の会議参加者によるプレゼンテーションは熱が込もった。夜は遅くまで、日・米・アジア関係の問題について話し合われた。

戦争のない地球は、我々が最終的に求めるものだ。二国間関係の危機が感じられれば、それを無くし、戦争を予防する努力をすることだ。それぞれの国に属する者が、互いを理解し、認め合い、常に友好関係をつくっておくことの大切さを感じた一日でもあった。この日以後、日米の学生がより話し合いの場を持ち、互いの問題に関心を持つようになったことを感じた。



前日の夜に計画されていた戦争と平和フォーラムパート3は翌日12日の午前中へと延期された。今回の計画はstudent presentationとそれに対するQ&Aという形式がとられた。

東丸は兵士の心理について言及した。兵隊訓練は人間を戦闘兵器に仕立て、命令に従順な人間を育てるものであるから、そこで訓練された兵士に責任はない、との主張であった。育てる側の責任も勿論否めないが、右も左もわからない幼い児童とは違い、ある程度成熟した人間が対象である以上、責任ゼロと言い切ってしまう点には疑問を感じた。

ひろみは、いかにして地球共同体を形成するかとの視点から、キース・ヘリング展で感じたことを発表した。Ignorance=fear, Silence=death この言葉は非常に強いインパクトを私達に与えた。自分達に何ができるか、という点が特に強調されていた。

あゆは自分自身の経験を語りつつ、そこか

らくる自分の拠って立つstanceを明示した。まず第一に、歴史に対する認識と相互理解が日米間で浅いことが問題であり、日本は原爆に、アメリカは真珠湾攻撃の回顧に重点が置かれすぎていると指摘した。また、日米双方の考え方をふまえ、過去から学び、戦争を憎む日本国憲法を精神を保ちつつ、平和には不断の努力が必要であるという自覚をもち、経済、文化摩擦にとりくんでいく姿勢をもちたい、と主張した。彼女のpresentationからは真摯な態度がひしひしと伝わってくるものであっただけに、聴く者の胸をうった。

この他、Mike S.、Mike B、Don、ゆみ、Jessicaがpresentationを行った。皆「戦争と平和」という大きなテーマを前に、それぞれの立場から自分の問題として考えていこうとする姿勢が印象的であった。Q&A timeも時間を大幅に延長して活発な意見交換が行われた。

## 実地研修 in 長崎

### 米倉由美子

今から48年前の1945年8月9日に、長崎に原子爆弾が投下され、多くの人の尊い生命が失われた。

この長崎での実地研修で被爆者の方のお話を聞く前まで、私が知っている長崎の原爆についての知識は、ただそれだけの、単なる事実でしかなかった。しかし、被爆者の方のお話を直接うかがって、その事実が人間に及ぼす計り知れないダメージを知った。それは、他の日本側参加者も米国側参加者も同じだったのではないかと思う。

会場では、二人の被爆者の方と通訳の人と

一緒に、参加者は椅子を円形に並べて座った。最初、現在61歳の男性が、次に58歳の女性が、それぞれ自分の被爆体験を語って下さった。そのひとことひとことが、生々しく被爆の様子を伝え、私達の心に響いた。友達との下校途中に被爆し、あまりの爆風でスルメのように体が丸くなって飛ばされたこと。ものすごいやけどのために皮膚が全部溶けてしまい、皮膚がなくなってしまったこと。水を飲みたくてたまらなかったけれど、学校の先生の「けがした時は水を飲むな」という注意を思い出して我慢したこと。目の前で、我慢しきれず



水を飲んだ友達が次々と死んでいったこと。助かったと思っても、自分の親は死んでしまい、その死体を自分で焼かなければならなかった辛さ。被爆後遺症に苦しむ余り、多くの人が自殺したこと。

このような多くの事実が心に残っているが、特に鮮明に覚えている言葉は、「被爆して助かっても、こんなに苦しむのなら、あの時お母さんと一緒に死んでおけばよかったねというも妹と言っていました。」というものだ。

現実起きたことの重み、そしてその事実が人間一人一人に及ぼした、想像を絶するほどの苦しみを、参加者はひしひしと感じた。自分達の目の前にいる被爆者の方が48年前に

受けた苦しみを思うと、言葉を失い、ただ涙を流すしかなかった。

ある米国側参加者は、被爆者の方に、そんなに残酷なことをした私達の国を許してくれと言った。それに対し、被爆者の方は私達が憎むのは戦争そのものであって、人を憎んではいけないから、アメリカ人を憎んではいけないとおっしゃった。そして、これから二度と戦争を起こしてはいけないと強く主張された。

この日のことを、私達は決して忘れないだろう。戦争が、そして原子爆弾という破壊兵器が、一人の人間に与える苦しみとその重さの意味について、私達は改めて考えていかねばならないと思う。

田中 沙羅

8月11日午後は原爆病院訪問組と被災者講和組に分かれて実地研修を行った。私達病院組はボランティアの方に道案内をして頂き、日本赤十字社長崎原爆病院を訪れた。小グループに分かれて病室に入り、原爆症に苦しむ患者さんから直接話をうかがった。彼は原爆投下後消防士として長崎の地に入り被爆したとのことであった。原爆症の症状はすぐに表れた訳ではなく、何十年も経過した後のことだったらしい。学生側の質問に、時にはたろうの通訳も交えながら静かに考えながらうつつむきがちに語る姿を前に、私は自分達のやっていることにとまどいを感じた。勝手に、どやどやと病室におしかけてきて、いきなり思い出したくもないかもしれないつらい過去の経験を語ってくれと強要する…。しばらくしてお孫さんらしい子供が御見舞に来たのを機に、申し訳なさを内に感じつつ、私達は病室を後にした。

その後会議室にて院長の方から病院の沿革について話をうかがい、その後学生との質疑応答の時間をとって頂いた。最も興味深かったのはマークの質問。在日中国人、韓国人は原爆症の認定を受けられるのか、また入院できるのか、というものであった。この点についてはかなりsensitiveな要素を含むだけあって、明確な解答は得られなかった。



真夏を思わせる暑い日ざしの中、病院を後にした私達は平和公園に向かった。平和の泉、平和祈念像、各国から寄贈された像……夏休みということもあり、周囲には子供達のはしゃぐ声がきこえ、しきりにシャッターを押す若者達の姿も見られた。48年前にこの地が焼け野原であったなんて、とうてい信じ難いこ

とであった。

私にとって原爆投下地を訪れたのは生まれて初めてのことであった。海と山が一望でき、それほど観光化されることもなく、小じんまりとした穏やかな町、そんな印象を受けた。平和な世の中に生きているという事実を再認識した一日であった。

## ジェンダー・ワークショップ 総括

『13日の金曜日』に行われるはずだったジェンダー・ワークショップであったが、8月10日に日程を繰り上げて開催された。北九州市滞り開始直後、九州地方を襲った大型台風が原因で交通機関が麻痺し、10日に予定されていた福岡市訪問を中止したため、スケジュール調整の必要性が生じたのである。日程を急遽9日、つまり前日の夜変更し、コーディネーターのMitzi Carlin(当時Hnizdil)と私は承諾をしたものの、プレゼンター(発表者)やスキット出演の有志と共に大いに焦ったのは言うまでもない。天候と男女問題は、『女心と秋の空』に象徴されるように、大いに関係があったのかもしれない。

焦りと多少の不安のなかで当日の午前中、Mitziと私は配布物を作成し、スキット出演者たちは熱心に最終練習を行っていた。激しい雨の中、午後1時にビデオ『Dear Lisa』の上映から、ワークショップを開始した。アメリカにおいて少女が大人になる際に直面するであろう問題を扱っており、15分間に編集された映像だった。次に、雅子さん及び皇室に関するプレゼンテーション(発表)が行われ、『結婚の儀』を特集したビデオ番組の一部が見せられた。

休憩の後、アメリカ側から6名、日本側か

## 寺澤 実紀

ら5名が、それぞれの国において世論を喚起しているジェンダー問題について、プレゼンテーションした。アメリカ側は妊娠中絶、同性愛、性差別等、日本側は従軍慰安婦、家庭における性役割等を取り上げ、問題を相互に再認識し、理解を深めた。引き続き、プレゼンテーションの内容に関する質疑応答が行われたが、質問はアメリカ社会における同性愛から、『かわいい』という日本語の背後に潜む日本社会の性規範にまでも及び、ジェンダー問題への関心の高さが窺われた。大いに盛り上がったところで、日米の男女4名で構成される小グループに分かれ、夕食をとりながら白熱した議論をそれぞれ継続した。

夕食から戻ると、既に会場は日本側有志によるスキットの準備が完了しており、最近の男女関係に見られる複雑な図式が熱演された。アメリカ側有志も、家庭での性役割、若者の男女関係、人種差別を反映した結婚、そして同性愛者とその家族を熱演した。

より活発にジェンダー問題について話し合い、また日米それぞれの参加者の相互理解を深めるために、1対1のディスカッションが同性間、そして異性間の2種類の組み合わせにより、2回行われた。様々な事柄がパーソナル・ベースで語り合われたのは、言うまで



もないであろう。

最後に男女の理想の共存形態について、6名の参加者がプレゼンテーションを行い、物議を醸した。約8時間に及ぶワークショップであったが、多くの参加者が語り尽くせない思いを胸に秘めつつ、終了時間を迎えたと確信している。

ジェンダー・ワークショップは、前回の第44回会議で好評を博したジェンダー・ナイトの時間枠を拡大し、参加者間のより密度の高い交流を主旨として、今回の会議においても立案された企画であった。運営側としては、一応目標を達成し、成功裡に終わられたと考えているが、参加者1人1人がどのように捉えていたかは、今となっては把握の仕様がな

い。コーディネーターであるMitziとは準備活動に充てられた1年間、コンピューター通信の一種であるbitnetを利用し、共に企画を練り、アメリカ側、日本側それぞれの実行委員会における決定事項を連絡し合い、時にプラ

イベントをも語り合った。会議終了後9月に結婚し、別姓夫婦増加の波に逆行している彼女だが、一緒に仕事ができ楽しかったと同時に、感謝している。ありがとう、そして結婚おめでとう。

全体合宿以後、一緒に働いてくれたタスク・フォースにも感謝している。特にみな(山田美那子)には連絡係としてサポートして戴き、感謝の言葉もない。プレゼンテーター達やスキット出演者、そして開催地であった福岡地区担当のたけちゃん(竹井亮一)、本当にありがとう、そしてお疲れ様でした。



## ジェンダー・ワークショップ

米倉由美子

ジェンダー・ワークショップは、8月10日、リラックスした雰囲気の中で行われた。

まず、日本側と米国側それぞれが準備したビデオを見た。前者は「結婚の儀」の紹介、後者はアメリカの10代の平均的な少女の物語という内容だった。

次に、参加者によるプレゼンテーション。これは、担当者が事前に自分の興味のあるテーマについて準備して発表を行うというものだが、日本側と米国側で、テーマが対照的だったのは興味深い。日本側は、家事をしない日本の男性、なぜ理系は女子が少ないか、教

育現場におけるジェンダー、女性は社会で無理をしているのではないかと、従軍慰安婦問題といったテーマだったのに対し、米国側は、ゲイ・レズビアン問題、中絶問題、ヒラリー・クリントンのイメージ、政治におけるジェンダー問題、メディアにおけるセクシズム、デート・レイプ問題といったものだった。

続いて、全員でのディスカッションが行われたが、活発な意見交換がなされ、盛り上がった。特に、米国側の女性参加者からの、日本ではなぜ女性は結婚や出産の後、仕事を続けるのが難しいのかという質問に対して、日

本側は女性、男性ともに様々な意見が出され、そこから、日本の社会は、女性はかわいく振舞うように強いるのではないかという問題に発展し、激しくも楽しい議論となった。

夕食の時もグループに分かれてディスカッションは続き、その後は、日本側と米国側のスキット。日本側は最近の男女の恋愛スタイル、米国側はそれに加えてゲイ問題という二つのテーマで、それぞれ熱のこもった演技を披露し、拍手喝采を浴びた。その後、日本側



と米国側一対一のディスカッションで同性、異性とそれぞれ話をし、考え方の相違や類似に驚いたり納得したりと興味深かった。

最後の、総合テーマとの関連のプレゼンテーションでは、各発表者が独自の視点からのユニークな意見を述べたが、共通していたのは、男女という性別の違いにこだわらず、考えをshareして共生していこうという点だったように思う。それは、ジェンダー・ワークショップが終わった時に、参加者全員が思ったのではないだろうか。私自身、米国のジェンダーに対する問題の急速性や深刻さを知り、驚いたけれど、個人的に米国側参加者と話をしたことによって、同じように考えているんだなという発見が何回もあった。ジェンダーの問題は、普遍的であると同時に個人的な問題であるという認識を、改めて教えてくれたワークショップであった。

## 西見さつき

数多くあるJASCイベントの中でもジェンダー・ワークショップは誰もが楽しみにしていたイベントの一つであろう。台風接近の為、急拠日程が繰り上げになり、プレゼンのある者は前日徹夜状態。でも何とか準備を終えてミツィーの元気一杯の司会のもと始まった。ビデオを交えて、日本の皇太子妃と女性の役割について、ファースト・レディとしてのヒラリー・クリントン、雇用機会均等法、従軍慰安婦問題、教師としての女性、女性の政治進出、女性側から見たジェンダーが多かったが、自らもバイセクシュアルと称するアメリカ人男子学生の米国社会のゲイに対する差別についてのプレゼンがアメリカ社会の意外な保守

性と日米のゲイに対する認識の違いを感じさせ印象深かった。続いてのQ&Aでは主に日本側に職場での女性差別をどう思うか、日本男性は女性に家庭に入ってほしいと思っているのか、等の質問が集中した。最後にデート・レイプについて議論が白熱したところで、グループディスカッションへと移った。

夜からのスキットは、日米が、デートについて、続いて米側が、“米家庭におけるバイセクシュアルの受け入れられ方”について、笑いあり、涙ありの大熱演。アメリカ人学生もここで“アッシー、メッシー、キープ君”という新しい単語を覚え、日本側の学生として私は、オープンなアメリカ社会でもやはり理



想とされる女性像は日本と変わらないとしみじみと感じたのであった。

続いての1対1のディスカッションでは“子供を産んでも働き続けるか？”“家事の分担は？”“理想の夫は？”等に話が弾み、“まるで見合のようだ”と二人で大爆笑。また、

## フェリーの旅

8月14日。その日我々は、リーガロイヤルホテルを後にして関西へと向かうことになっていた。誰もがリーガロイヤルホテルのすばらしさに心を奪われており、そこを離れたくないという気持ちと、まだ見ぬ新天地・関西へのあこがれの中で複雑な思いにひたっているようだった。次の宿泊地である三田の関西学院セミナーハウスを知っている私にとって、その思いは特に強かったのではないだろうか。

九州でホームステイをした時のホストファミリーも何人か見送りに来てくれており、彼らや仲良くなった(迷惑をかけた?)ホテルのベルボーイの人々に別れを告げて我々はバスに乗り込み、新門司港へと向かった。そして20分後に見えてきたのはなんと中国であった。そう、目の前に見えてきたのは中国風の少々趣味の悪い船乗り場であった。しかも、階段、エスカレーターは狭く、多くの者がその不便さを痛感したことだろう。

あいにくの雨で海が荒れることを心配したが、少し寒かったことを除けば、フェリーの旅は特に変わったこともなかった。それぞれがホテルにいた時と同じようにグループを作って、さまざまなことについて話はずませていた。ギターを手に甲板で歌う者、JASCについて語り合う者、自分の恋話に花を咲かせ

一般的に、米社会でゲイであることをオープンにして生きていくことの困難さについて説明してもらった。ジェンダーという女性問題だけを考えてしまいがちであるが、男女ステレオタイプやゲイに対する差別等、様々な面を学んだ一日だった。

岩田 康志

る者、2人で消える者、寝てしまう者と色々であった。そして、夜が更けてくると1人1人と寝始める者が増え、私もいつのまにか意識がなくなっていた。

翌日人々の声で目を覚ますと、あと15分で六甲に着くという時であった。洗面所のあわただしさの中には、疲れというより関西に来たという興奮がにじみ出ているようであった。外に出てみると、ポートアイランド、六甲アイランドの姿を見ることができ、帰ってきたんだなという安心感が広がった。

船から降りて、三田・伊丹・姫路・加古川とそれぞれのホームステイに散っていったが、バスの中で吉田が一言言った。

「やっぱりバスガイドのお姉さんも関西弁話しているな。」



## 4. 関西地区

総括

阿古 智子

フェリーにて神戸の港に着くと、80人がホームステイのグループ別に行動する。きっと混乱するだろうが、心して統率しなければならぬ。交流会はどのように進んでいくのだろうか。ホームステイを引き受けてくださった方々に迷惑をかけはしないだろうか。九州での日程を終えて、関西に向かう途中、これまで事前に準備してきた中で知り合った人々とお会いでき、一緒に企画を進めていくことに対する期待と、それ以上の不安が心の中を占めていた。しかし、船からおりると出迎えの人たちの笑顔を見て、そんな不安は消え去ってしまった。心配していたグループ分けも、難なく終わり、各グループは伊丹市、三田市、加古川市、姫路市の各ホームステイ家庭との交流会に出発していった。

そして私は、三田市にある野外活動センターで三田市と伊丹市のホームステイ受け入れ先の家庭との交流会に参加した。この日はあいにくの雨だったし、交流会の企画、進行をほとんど地域の方にお任せしていたのでとても心配だった。しかしここでもそうした心配は吹き飛んだ。センターに着くと、ボランティアで主婦や学生、国際交流団体の方々が忙しげに食事の用意を山小屋の中にして下さっていた。ホームステイの受け入れ家庭も集合し、手伝って下さっていた。その後のプログラムもとどこおりになく地域のボランティアの方によって進行していただいた。こんな風に着いてすぐ交流会、ホームステイと慌ただ

しいスタートを切った関西での日米学生会議は、多くの方に助けられ、幕を開けることが出来た。

私達は最後の一週間を関西で過ごした訳だが、その中で一般公開のボランティアフォーラム、フィールドトリップを取り入れたマイノリティーフォーラム等大きなイベントがあった。到着時の交流会、ホームステイも含めてこうしたイベントは全て地域の人々との交わりを通じて行なうことが出来た。私達が沢山の山の人にお世話になり、交流を通して多くのことを学ぶことが出来たのはもちろんだが、もうひとつの収穫はイベントに参加していただいたり、イベントを手伝っていただいた人々からとても楽しかった、意味深いものだった、などの感想を聞いたことだ。一つの行事を通じて出会いがあり、学びがあり、新しい世界が広がっていくことは大変素晴らしいことであるし、これからもより地域の人々との相互関係を築きつつ、日米学生会議を開催していくことは大変有意義であると思う。私





はこの関西での全日程を通して、ボランティアの方々の多大なる力に本当に驚かされ、そしてそうした方々への感謝の気持ちを抑えることが出来なかった。そして今回の地域の人々との交流が日米学生会議の新たな可能性を秘めていると実感した。

宿舎は交通の便が悪く、娯楽が少ないとの不満も少し聞いたが、最後の一週間を三田の自然の中で健全に過ごし、多くの仲間たちと

じっくり話し合う時間をもてたことは大変有意義であったと思う。関西学院セミナーハウスではおいしい食事とすばらしい施設を存分に使わせていただいて、最後の貴重な時間を演出していただいた。無事関西で1ヵ月の会議を終わらせることが出来たことをお世話になった人全てに感謝したい。そして再び本当に実のある一週間であったと振り返って感じている。

## ホームステイ in 関西

### 三田市

8月14日の夜、1週間の北九州滞在を終え門司港をフェリーで出発した私達は、8月15日の朝神戸の六甲アイランドに到着した。昨晩から降り続いた雨が少し残っており、あいにくの天候ではあったが、皆船旅の疲れも見せず、いよいよ最終開催地へ入ったという喜びと悲しみの入り混じった複雑な気持ちを秘めて、それぞれのホームステイ先へ散っていった。

伊丹市に滞在する10組20名と三田市に滞在する10組20名は、共にバスで三田市にある伊丹市の野外活動センターへと向かった。あいにくの雨で屋外でのBBQパーティーはできなかったが、三田市内のITCの委員長を務めておられる上田正子様や曾山綾子様を中心に、今回ホストファミリーを申し出て下さったITCメンバーのお母様方が各々手料理を持ちよって下さったり、三田市にある泰川女子短期大学のインターアクトクラブの学生さん達とカレーを作って下さったり、朝早くからすっかり準備を終えて私達を迎えて下さり、山小屋でホストファミリーの紹介を兼ねなが

### 源 真帆

ら昼食会が行なわれた。食後は体育館に移って、全員で歌を歌ったり、ゲームをして楽しんだ。初めは緊張していらしたホストファミリーの皆様や私達も、ゲームが盛り上がるにつれてその緊張がほぐれ、特に子供達は言葉の壁を越えて初対面の私達と積極的にコミュニケーションを図ろうとして、体育館には皆の歌声や笑い声が響きわたっていた。そして皆がすっかり打ち溶けた頃、交流会はお開きとなり、私達は日米各1名ずつ組になってそれぞれの滞在先へと向かった。

翌日は幸いお天気もよく、ホストファミリーと共に三田市のお寺やダムを訪れたり、



神戸や大阪を案内して頂いたりとても楽しい1日を過ごし、夕方セミナーハウスへ戻った時も、名残り惜しい気持ちで一杯だった。

末筆ながら、このように地域の方々と交流

を深める機会を与えて下さった、伊丹市国際課の荒西完治様やITCの上田正子様、曾山綾子様を始め、ホストファミリーの皆様にご心から感謝いたします。ありがとうございました。

## 加古川市

友末 優子

十五日の朝、フェリーで神戸に着いた。眠い目をこすりながら、重たいスーツケースをかかえて船を降りると、ホストファミリーの方々がたくさん出迎えに来て下さっていた。コリーンと私がお世話になる西垣内さんご夫妻もいらっしゃった。そっくりの顔をしたお子さんを二人連れていた。車で移動し、加古川の協力でパーティーがあり、皆で食事をとった。その後、各家族にわかれた。

私たちは西垣内さんに連れられて、姫路城へ向かった。あいにくの雨模様であったが、芝生の緑が光って美しかった。コリーンは日本の城を見るのは初めてということで、いろいろ興味深そうに見てまわっていた。姫路城では他のホストの方々にもお会いした。

近くの喫茶店で休んでから車で四～三十分程の西垣内邸に行った。子供達は小二と幼稚園の年長だったが、二人とも三歳の時からピアノ、そして公文、英会話を習っているという。いまどきの子供は英会話まで習うのか、

と驚嘆すると同時に時代の流れを感じてしまった。

夕食にはベジタリアンのコリーンの為に手巻きずしが出た。子供達もこの頃には私達に大分慣れてきて、口をきくようになった。

翌日は神戸市立のフルーツ・フラワーパークという出来たばかりの大きな公園に行った。

かなり山の中にあり、途中の田園風景と特徴のある屋根をもつ家が印象に残った。パークではパンやチーズの作り方や温室等を見学した。子供達は園内のスタンプ押しに夢中になって走り回っていた。名前の通り、果物とお花でいっぱい、巨大で人工的なパークだった。

その後三田市で昼食をとり、セミナーハウスまで車で送り届けていただいた。これがきっかけになって子供達がいよいよ習っている英会話を少しでも好きになってくれたら、と思った。

## 加古川市

西見さつき

約半日のフェリーの旅を終え、ややくたびれた格好のサラと私は朝10時に神戸六甲アイランドに到着した。迎えにきて下さっていたホストファミリーの方の車で加古川市のパーティーへ。加古川市の方の暖かい歓迎のお言葉とアメリカ側の学生の挨拶に続いて、ホス

トファミリーの方々やアットホームな雰囲気でご自己紹介。私達のファミリーは2歳と5歳の女の子がいる若い御夫婦で、ホストマザーは、何と来年から約一年間、小学校で日本文化を教える為に子供連れて渡米するという。

午後からは、姫路城や日本庭園を見学。サ



ラだけでなく東京出身の私にとっても初めて見る物ばかりで、あいにくの雨にもかかわらず大満足。ちなみにサラは初めて食べた宇治金時にいたく感激、しっかり漢字を覚えていた。夜からは、ホストファーザーも加わって手巻きずし大会。アメリカの大学生活や、日米の文化の違い、日本の政治についてなど話はつきなかつた。“派閥”とか“連立政権”といったレベルの日本語を操るサラに一同感心しつつ当然のように会話は日本語で進行し、本来なら通訳の役割の私も完全に一ゲストと化して楽しんでいた。

このホームステイを通して学んだことが三つある。一つは、幼児期の語学習得能力の素

晴らしさ。サラの英語を意味がわからずながらまねてみる5歳の愛抄ちゃんの発音は完璧であった。やはり語学は勉強するものではないかもしれない。また、一生懸命、子供達に英語を教えたり、遊んだりしていたサラから、自分達でできる何かを通して単にゲストとしてではなく家族の一員となろうという姿勢。そして最後に、ボランティアしようと思っけていても、きっかけや方法がわからないことが多い日本の社会の中で、加古川市のようにサインアップするだけで、ホストファミリーの方が自分の都合に合わせて、お互いに楽しみ、学ぶことのできる地域型国際交流の形はこれからも広まっていったほしいものである。

## 伊丹市

六甲アイランドにフェリーが着いたあと、伊丹、三田組はバスに乗って三田市内にある伊丹市立野外活動センターに行き、ホストファミリーがすでに用意しておいて下さった昼食をかこんで交流会をはじめた。まず、ホストファミリーと日米学生会議の参加者と自己紹介と顔あわせをおこないながら食事をとった。当初、外で自然の中でおこなう予定であったが、雨が降っていたので山小屋の中でおこなうことにした。

食後、体育館に集まってゲームや歌をうたったりして親交を深めたあと、各家庭にわかれてもてなしをうけた。私の行った家庭では、ホストファミリーの大学生が誕生日で、私達の歓迎とあわせてお祝いをした。翌朝、大阪市内に出て、大阪城や難波の繁華街を見てまわり、大阪という地域をビビッドに感じる事ができた。セミナーハウスに4時までにもど

## 桜井 周

らないといけなないので、あまりゆっくりできなかったことが残念だった。セミナーハウスでの集合時間にまにあうように3時に伊丹市役所に集まり、バスでおくっていただいた。



我々姫路ホームステイ組のバスは、北九州からのフェリーが着いた神戸から最も長い1時間半かけて、姫路商工会議所に向かった。そこで昼食のレセプションを受け、各ホストファミリーの代表者二人ずつと引き合わせてもらった。

姫路でホームステイの世話をして下さった渡辺さんは、自らの家に、常に誰か留学生を住まわしているような人だ。渡辺さんの幹事による昼食での団らんは、楽しく、スムーズに行われた。

その後、各ファミリーとそこに滞在する日米学生二人ずつの組に分かれ、それぞれ、姫路城などの市内観光に行った。結局、姫路城には、ほとんどの組が来ており、ほぼ団体旅行の形で、ボランティアの方の英語の説明を聞きながら回った。

姫路城・好古園などを観光した後、それぞれ各家に向かった。私たちのホストファミリ

ーであるご夫婦の家には、横浜に住む娘さんが、小学校二年生と三年生の子供さんたちを連れて帰省しているところで、ちょうど賑やかなお盆を過ごされている時だった。

夜、何組かは渡辺さんの家に集まり、ホームステイ先の家庭の若者の交えて、歓談したり、トランプ・ゲームをしたりして楽しんだ。

姫路でのホームステイ先の家庭は、比較的今日の日本に増えつつある形のものが多かった。私が北九州で滞在した農家とは対照的である。私の姫路での滞在先は、初老のご夫婦二人住まいで、娘さん達は、外で核家庭を築いている。他の家庭では、たとえば子供は下宿先で仕送りをもらいながら大学に通っていたりする。

ホームステイは、アメリカ人学生にだけでなく、日本人学生にも、現代日本の家庭のあり方について考える場を与えてくれたように感じる。

## 貿易シンポジウム パート2

8月5日の佐藤隆三先生の御講演を受けて、貿易の問題をもう少し我々日米学生会議参加者に引き付けることを狙いとし、貿易シンポジウム第2部が8月16日の午後7時から関西学院大学千刈セミナーハウスにおいて行われた。今回は、日米学生会議参加者のみでの開催とした。日本側、アメリカ側から各3人のプレゼンターがあらかじめ選出され、「自由貿易について」というコンセプトの下に、それぞれのプレゼンターが、一貫した流れの中ではあるが、独自のテーマでプレゼンテーションを行った。

まずは、三宅浩史による「自由貿易とは」に始まり、A. Yagerによる「貿易障害」、さらに、このテーマを扱う上で不可欠のGATTについて、R. Ponsioからそれぞれ簡単にプレゼンテーションをしてもらった。ここまでは、いわゆる理論的な話となり、少しでも「自由貿易」の外観にふれようとした。この後、具体的な現在の国際経済の世界における特徴の1つである、地域経済統合を紹介してもらった。まず、岩田康志に、「経済統合」の一般論について、それに引き続き、中村明日香からAPEC(アジア太平洋経済協力関係会議)につ



いて、C. GuerrieroからNAFTA(北米自由貿易協定)の、現在進行中の2つの大きな経済統合について簡単に紹介してもらった。

参加者によるプレゼンテーションであったため、それぞれ議論の深淺があったと思う。しかし、そこにはそれぞれ各人の難しい抽象的な議論をやさしく参加者全員に説明しようとするあとがうかがわれたと思う。特に、使用言語が英語ということもあって日本側にプレゼンターは、国際経済独特の専門用語に悪戦苦闘していたようである。このプレゼンテーションの後、小グループに分かれて議論を

行った。



## ボランティア・フォーラム

### 総 括

今年は、初めての試みとして各地区でのリージョナル企画がプログラムの中に取り入れられたが、これは私達が一ヶ月の間滞在する地域で一般の人々と共に社会で問題になっていることを取り上げ、議論し、考えていこうというものであった。関西ではボランティア・フォーラムが企画されたが、開催には紆余曲折の道程があった。

まず企画の大枠を決定し、そして企画書を作成し、講演をお願いするためいくつかの団体や関係者と交渉し、と少しずつフォーラム企画担当者達が精一杯協力し合い頑張った。だが忘れてはならないのはその他たくさんの方々が無熟な私達に対して助言して下さり、企画を推進する上で大きな力となって下さったことだ。企画についての様々な助言、資料の提供や広報の協力などにおいて、兵庫県ボランティア協会、神戸市社会福祉協議会、大

阿古 智子

阪ボランティア協会、大阪市社会福祉協議会には多大な支援をいただいた。又、議論の材料となる様に事前に実施したアンケート調査では、兵庫県、神戸市の教育委員会をはじめ、県、市下のいくつかの小・中学校・高等学校にご協力いただいた。神戸国際交流協会には実施においてネックとなっていた資金面での相談に親身になってのっていただいた。そして何よりも企画全般について兵庫県、神戸市にはただならぬお力添えをいただいた。又、フォーラムに出ていただいた講演者や諸団体の方々には、本当に心からの感謝を述べたいと思う。

企画の推進の中で最も大変だったのは、広報の作業であった。なるべく数多くの人に日米学生会議の活動を知ってもらいたい、この一般公開イベントに参加してもらいたい。又、「ボランティア」というあまり関わったことの

## 21世紀のコミュニティにおける ボランティアの役割を考える

主催 第45回日米学生会議 後援 兵庫県・神戸市



ない人にとっては取っ付きにくいものに、興味をもってもらうにはどうすればいいのか。フォーラムの担当者達と何度となく話し合いを重ね、他にもたくさんの方からアドバイスをいただきながら進めていった。そうしているうちに、少しずつ参加申し込みの葉書が寄せられ、本番には学生会議のメンバー80人を除き約150人ほどの一般参加者が集まった。

本番は、素人ばかりの運営で、時間配分がうまくいかなかったり、ディスカッションのグループ分けの際混乱状態をつくってしまったりいろいろと迷惑をお掛けしたが、日米学生会議のアメリカ側メンバー、日本側メンバー共にペアーを組んで懸命に役割分担をこなしていき、なんとか無事終えることが出来た。参加者から「学生の一生懸命な姿に感動した」という声も聞かれてとてもうれしい思いがした。

だが、私がフォーラム後に一番感じたのは何とも言えない無力感であった。一体何を目的にこのフォーラムを企画したのか…結局は当初目指していたものを果たしたとは到底考えられないものであったと思った。この思い

は、全体の企画を担当していた私の勝手な感想にすぎないが、これから日米学生会議の一般公開のイベントをもし企画することがあるのなら、今回の反省点を次の企画者にどうしても伝えていかなければならないと思った。日米学生会議が一般公開の企画を設けたことは大変有意義なことであったと思う。それは自治体、企業、財団等社会から多くの援助を受けているのだから、社会の人々にも参加してもらえる企画を設け、尚且つそうした企画により、社会を少しでも変えていく何らかの力にならなければならないと考えているからである。とはいえやり方が問題である。それは、日米学生会議という団体の性格を考えたときにより一層問題となる。まず日米学生会議は一年ごとにメンバーが入れ替わり、実行委員でさえも前年からの担当に過ぎないので、事務的な面でのノウハウの伝承はあっても、会議のコンセプトやコンセプトをもとに編み出していく様々な企画は、継続性をもちにくい。よって今までの繰り返しの企画が設定されやすい。これは何も一般公開の企画にのみ当てはまるのではなく、全体の企画に対し



とも言えることで、今まで作り上げてきた伝統を守っていく反面、一から時代性やその回の求めているものは何か考えて作り上げるという創造性に欠ける側面もあると思う。次に、アメリカ側40人日本側40人の計80人が日米学生会議に参加する訳だが(年によって異なるが)企画に際してはこのメンバー全員で取り組むことは出来ない。そしてどうしても会議開催国側でほとんどを進めてしまわざるを得ない状況になり、今回のような一般公開の企画の準備はとても大変な作業となる。又、準備作業をした者と、していない者とは、一つ一つの企画に対する思い入れも異なり、参加に対する認識もかなり変わってくる。こういった一般公開の企画は大変ではあるが、その分たくさんの人に会って、いろんな話を聞いて社会勉強する機会にとっても恵まれる。そうした積み重ねが人によって異なってくるのも日本側とアメリカ側で仕事が分断されてしまう故であろう。自分が企画を担当していたせいか、かなり厳しい目でみている部分もあるが、戦前から45回も続け、数多くの方々から資金的にも、その他の面においても協力していただいていた日米学生会議をこれからも続けていくには、その在り方を今一度きちんと問い直していくべきだと真に考える。

最後に再来年の日本開催において一般公開の企画を設けるかは分からないが、私の反省もこめて次の担当者に少々アドバイスをしたいと思う。

1. 出来るだけメンバー全員で等しく取り組める企画にすること。

(全員が同じ認識をもって協力体制を築くと混乱も少なくなるし有意義である。)

2. 無理して大規模なものを企画しないこと。

(先にも書いた様に、学生会議の組織は一年ごとに入れ替わるので、大規模な企画は進めにくい。学生が手作りで出来る範囲のものが望ましいと思う。)

3. フォーラム形式のものを行なうなら使用する言語に気をつけること。

(英語を使用するなら対象を絞った方がよい。同時通訳を使う余裕が金銭的にないのなら日本語でのフォーラムは難しい。アメリカ側の様子を見て、一般参加者をどういった対象に絞るかも考慮した上でコミュニケーションの手段を考える。)

4. 社会に訴えるものを企画すること。

(私達が現代の様々な問題を解決すべく若い力を発揮させるのだ!という意気込みをもって社会にアピールする企画を生み出していくこと。)

これらは、次回、今回と同じような形式のフォーラムを企画すると想定してのアドバイスだが、創造性を巧みに利用してどんどん新しいものを自ら企画して行って欲しいと心から願っている。そして日米学生会議に参加することの意味を、経験を通して掴み取って欲しい。私が学生会議を土台にし成長させてもらった様に。

追記：フォーラム後、参加者の方々から寄稿をいただいた。それぞれの方が、フォーラムに参加した感想や、参加後の活動について、又現代の社会状況について等思うところを書いて下さった。フォーラムを通して、参加下さった方が様々なことを考え、又行動していかれたことをとてもうれしく思っている。こうした出会いのネットワークが広がる様な企画はこれからもどんどんなされるべきだと思う。いただいた寄稿はこの報告書に収めさせ

ていただいている。寄稿くださった方、どう

も本当に有難うございました。

## ボランティア・フォーラム

村上 敦哉

8月17日、第45回日米学生会議では最後の公開プログラムにあたるボランティア・フォーラムが、兵庫県中央労働センター大ホールで行われた。間もなく到来する21世紀のコミュニティーの中で、ボランティア活動がどのような役割を果たし得るのか、というテーマの下、上記の三部構成でフォーラムは進行した。

第一部では、まず、金子教授が自らの経験談を交えながら、「ボランティアのあり方とその楽しさ」について話された。教授が最も強調されたことは、「ボランティアとは自ら選んでやっていくことであり、決して強制ではない」ということではなかったかと思う。また、「関心をもって自分から動いてみると、新しい価値や世界が見えてくる」ということも指摘された。

次に、ジョセフ氏がNGOのあり方とその果たすべき役割について語って下さった。いきなり冒頭で、「私はボランティアという言葉が嫌いです。」と言われたのにはハッとさせられた。その理由として、「日本には、ボランティアに取り組もうとすると、ダサイとからかわれる対象になってしまうという嫌な風潮がある」と言って氏は嘆かれたが、それらの言葉の裏には、欧米に比べると、ボランティア精神が依然として根づいていない日本社会に対する氏の憤りが感じられた。NGO、つまり我々日米学生会議も含む非政府・非営利団体に対しては、「政府や企業の下で影を潜めるのではなく、それらに積極的に働きかけていくことが大切」だと氏は強調された。その結果、「各セクターが相互にチェックし合って、

バランスのとれた社会が形成されていく」のだと氏は言われたが、まさにそれが現代社会、特に日本社会に求められていることだと思った。

続いて、中田氏が日本人のボランティア意識について、欧米の場合との比較を交ぜながら話された。中田氏によれば「日本では一般的に、ボランティアをする人はうさんくさい人だと軽視されがちだが、欧米では、逆に、高い使命感と知識をもった人だと評価される」という。これはやや極端化した対照だと思われるが、自分の周囲の人々の姿勢を振り返ってみると、実に当たっていることが多い。どこからそのような差が生じてくるのだろうか。それに関して中田氏は、「日本人は経済活動を通して獲得した損か得かという尺度から、日常生活の中で逃れることができず、すべてのことを経済的尺度ではかるようになってしまっている。それで、ボランティア精神を育むことができないのです」と指摘された。我が身を振り返ってみると、思い当たる節がたくさんあり、良心の呵責に会ったのは私だけであろうか。

基調講演の最後として、「奈良たんぼぼの家」で障害者の自立をサポートしておられる村上氏が、その活動報告をして下さった。その中で特に私の気を引いたことは、障害者の自立に関する問題であった。自立とは「自分の自己実現を図るために、自分の生き方を、自分で決定すること」だと村上氏は定義されていた。その自己実現の過程で生じる様々な困難を、障害者が乗り越えていくのを手助けす



るのが村上氏らスタッフの役割だという。その自己実現を見事に達成された上埜英世さんが、第二部で童話の語りをされたが、本当に励まされる思いがした。

第二部では、前述の諸団体による活動報告がなされたが、どの演説者も熱意と迫力にあふれていて、彼らの情熱の深さがひしひしと伝わってきた。その中でも特に、A SEED JAPANの代表である羽仁氏の「我々はボランティア団体ではなく、自らの社会を変えることを目的とした団体です」という言葉が非常に印象的であった。

第三部では、担当者が予め用意しておいたいくつかのトピックに従ってグループ別討論がなされた。私のグループでは、何故、日本に比べると欧米ではボランティア意識が発達しているのかということについて討論がなされた。欧米でボランティアが比較的发達している原因については、ジン・ギル・リーが指摘した「キリスト教の影響」ということで皆大体一致していた。

このフォーラムを通して思ったこと、感じたこと、発見したことは人によって違うであ

ろう。しかし、中田氏が強調して言われた「人の痛みを自分の痛みとすること」という言葉には、誰もが特に注意を払ったのではなからうか。非常に興味深いことに、北九州で行われた地球市民シンポジウムの基調講演の中で、鶴見教授はこれと全く同じこと、つまり、「苦しみの共有」という言葉を繰り返し強調されていた。

様々な問題が累積されていくことが予想される21世紀のコミュニティーにおいて、この「苦しみの共有」という言葉は、それらに対処していく際のキーワードとなることであろう。いや、そうなるに違いない。



## 一般参加者の皆様のご感想

(順不同・敬称略)

### 「共に生きる」ということ

大坪 徹

「日米学生会議・公開フォーラム(神戸)」に参加させていただき多くの感銘を受けたが、特に、中田武仁氏が言われた「人の命の尊さを否定する人はいない。しかし、自分の命だけ尊いという思いになっていないか」という指摘を忘れることは出来ない。

今、わが国では、冷夏による凶作で「コメの輸入」が問題になっており、新聞紙上では、「コメの緊急輸入問題とコメの輸入自由化とは別の次元の問題である」と言う政府の論調のみが論じられている。しかし、私たち日本人が飽食によってコメを無駄に棄てていることへの視点が欠けているのではなからうか。犬養道子氏が、著作「人間の大地」で、「一時間に、千五百人のわりで、五歳以下の子供が餓死しつつある」<sup>1)</sup>、そして、「七十億ドル。何の数字

か。日本とアメリカを大筆頭とする、世界全人口の二十パーセントにも満たぬ「富む国々」の消費至上人間が、特に中産階級の女性が、一年間に棄て去る、まだ十分に食べられるのみか大方は手つかずの食べものを、1980年度のレートで金に換算したときの値である。もしもいま、七十億ドル分がむざむざと棄てられず、生かされるとしたら、少なくとも全アフリカの飢餓の問題は片づくだけでなく、こんご飢餓難民を出さずにすむ立派な食計画プログラムをつくることさえ出来る<sup>2)</sup>と日本人のグローバルな視点・ライフスタイルの転換を訴えられて久しい。コメの輸出国であるタイでは、わが国のコメの緊急輸入を反映して、既に輸出価格がこの二週間で二十パーセントも急騰したと報じられている<sup>3)</sup>。コメの輸入国にはフィリピンもあり、コメ価格の高騰は、これら途上国への影響のみならず、コメ輸出国であるタイでも、都市部の貧困層や農村の畑作地域の住民は困るであろうことが指摘されている<sup>4)</sup>。私たち、戦後の食糧難の中で生きた時代の者には、コメの凶作に対して、現代の飽食をそのままにして、「金」によって解決しようとする体制に疑問を投げかけざるを得ない。

「21世紀のコミュニティ」のあるべき姿、それは、「共に生きる」ことへの視点であり、一人一人が、「地球時代のライフスタイルへの哲学」を構築することで成し得ると考える。私は、今、与えられている職務、それは、若い女子学生たちに、このことを伝えると共に、私自身が自分の出来る身近な所、日々の生活の中で「共に生きる」ことへの実践であると思う。今回、「日米学生会議公開フォーラム」に参加させて頂いたことを契機に、勇気づけられ、より積極的になったことを感謝したい。一例

では、先日、朝の散歩中に方向感覚を失われ、道に迷って居られた目の不自由なご老人を見かけ、ご自宅までお送りしたが、本当にすがすがしい朝となった。

- 1) 犬養道子：「人間の大地」、P.18 中央公論社(1983)
- 2) 前書、P.21
- 3) 日本経済新聞：1992-10-9
- 4) 同新聞：1992-10-6

---

#### 松本由美子

過日のボランティアフォーラムに参加(というよりは、ただ聴衆のひとりで)でき、30年前の学生時代、大学のESSを通じてあらゆる会合にできるだけ顔を出した頃を思い出しながら、意義深い時をすごせました。

特に中田氏のお話は、同じ年齢の息子を持つ親として、じかに氏の人柄にふれられて、ボランティアの意義は何かを改めて考えさせられました。私個人として、ボランティアというカタカナがもうひとつはっきりと把握できませんが、聞くところによると、ラテン語に源をもつ、「自由意志」という意味であるらしいので、私も自由な意志で(誰に影響を受けたというのではなく)志願して、自分自身以外の子供の教育費の一部を援助できたらと、上の子が大学に入った時に、ある外国の子供のスポンサーになりました。でもそれだけではお金を出すだけの足短おばさんにすぎません。何か物足りないのです。勤労を供なわないからか、それとも、ただたんに、お金ですませることに抵抗があるからか、とにかくこれでもいいのか考えていましたら、この活動グループが日本と外国の子供の間の手紙交換に(スポンサー)英語力を持つ人を必要としているのを知り、応募し、現在、月に1～2度翻訳



のお手伝いをしています。「今自分に出来ることは何か」ということで、自分なりのボランティアにしています。他人がしているからではなく、自分が何をしたいか…これは生き方そのものです。

---

#### 梶井 明

フォーラムに出席して、ボランティアの定義(意義)の多様さを確認する事ができましたが、私にとって「ボランティアとは、自分の『いきがい』を求め、行動すること」であるような気がしています。

すべての人々が安心してボランティアできる社会になってほしいものです。

そのためにも、まず、政治をボランティアする人々によって、日本の将来から考えられ、政策決定されることを望みます。

---

#### 安達 長子

私は突然フォーラムに参加させて頂きました一主婦です。世界的に問題になっています、エイズの運動に末端ですが、微力ながら参加させて頂いております。あれがボランティアだったのかなあー、と思える程のことしか今の私には出来ませんが、フォーラムに参加して、何年か後には今よりもう少し多くのボランティアが出来ればと熱く感じました。若い力の皆様どうかがんばって下さいませ。

---

#### 千阪 実木

特にこれといった事がないので感想を直接書かせていただきます。

今回のボランティアフォーラムでは「ボランティア」自体への学生(参加している)の関心、考え、勉強していること or きたこと(ボランティアについて)というのは表だって感

じとすることは私自身でできなかった。しかし、日本人とアメリカ人が同じ学生という立場で団体を構成し、役割りを決め、どうしたら上手くゆくか考え実行していったというところに大きな意味があったのではないか。実際参加している学生たちは、この間とても生き生きして見ていて羨ましく思った。私も是非Englishを何とかして、参加したいと思った。

---

#### 高木 聡子

運営の方、ご苦労様です。私は国際的なボランティアに何か携われればと思いつつ、実際何も行動できない状態でしたから、良い機会となりました。様々な年代の方が各々思いを込めて活動していることがわかり、私も私なりにできることを少しずつしていこうと考えようになりました。ボランティア団体にとっつきにくい印象があるのですが、(以前、在日韓国人との交流会ですでに団体内の友人関係が固まっていたりした経験で。)今度またチャレンジしていこうと思います。

日米学生会議がこれからもますます発展していくことをお祈りいたします。

---

#### 山本 幸子

はじめて今年参加させていただきました。私の勤務先の生徒は筋ジストロフィーという難病ですが、日頃入院しながら学校に通っています。おそらく高等部卒業後も継続入院になると思います。

その子供たちにも、私は人にお世話になるだけではなくて、たとえ寝た切りになっても人のお役に立てることを考える人間になってほしいと常々思っています。うちの生徒は、口と目は最後まで残るのですから。

それが、私たちの進路指導かも知れません。そういう意味で、講師のおはなし、学生さんの真剣なすがたにうたれました。

---

### 岡 信雄

ボランティアフォーラム報告書作成の通知が届き、日米学生会議のことを思い出しました。ニュースにしておきながらその媒体を当事者に送付することを忘れており、基本的なミスでまことに申し訳無く思います。同封したのは9月7日発売のアルバイト情報誌「J-ONE」の“キャンパスニュース”というわたしたち関西学生報道連盟がつくっているページの切り抜きです。記事にもミスがあり不行き届きを反省するばかりです。ダンプの記事と同じページに乗せるのも硬軟が極端すぎて、やや「間が悪い」体裁になっていますね。

さてフォーラムのことなのですが、個人的にボランティアに興味があり参加しました。4月8日にカンボジアPKOで国連ボランティアの中田厚仁さんが凶弾に倒れ、そのニュースの一報が編集室にいた我々にはいつかきたときの驚きが、“ボランティア”を私に印象づけるきっかけとなりました。阪大OBということで、阪大のメンバーが速報を作成するために中田さんに関する情報を収集することに躍起になっていた光景が思い出されます。その後、父親である武仁氏が“息子の遺志”を継ぎ国連ボランティア名誉大使になりました。武仁氏がたまたま私の大学(大阪市大)のOBということもあって、インタビューに訪ねたこともありました。そうして印象づいたボランティアとは一体どんなものかと思い、大阪ボランティア協会主催の“サマーボランティア”に参加したのが直接のボランティアとの出会いだったのです。

実際ボランティアに参加して思ったのは、金子郁容氏のいわれた「不思議な関係、意外な展開」に尽きることです。肢体不自由児と出会い、彼らと話し、笑い、そして彼らが懸命に歩こうとする姿を見るにつけ、わたしの心が痛んだのは事実です。しかし、おおげさではなく、そこから私の「人が生きることを考える行為」が深くなったのもまた事実です。私のなかにこれまでになかった愛情のようなものが忽然と生まれたようでした。これからもボランティアに“ボランティア”として関わっていくのか、また実際の制度を考える方向からボランティアに関わるのかはわからないけれど、何らかの形でボランティアをみつめたい、いまはそんな思いです。

報道に携わり、さまざまな出来事に接触する機会がおおく、ともすれば「関わった人」さえも忘れがちになるようです。今回の記事が何らかのお役に立てばと思います。

---

### 松波めぐみ

フォーラムの時、夢中でとったメモを読み返すと、今でも新鮮な感動に包まれる。この時出会った幾つかの言葉は、しっかりと自分の中に居座って、ずっと前から居たかのような顔をしている。

何故感動したか。それは「ボランティアをしている」とは思わずに、ボランティアに関わって来た自分の歩みを見直すことができたから。「ああ、そういうことだったのか」と、眼からウロコが落ちると同時に、新しい可能性が自分の中に見出すことができた気がしたから。

アムネスティ・インターナショナルという、人権擁護の国際的なボランティア団体に出会って2年になる。知られていない世界中の苛酷な人権侵害の被害者の為に働くアムネスティ



イを知って、そんな運動が「ある」こと自体に感動した。とりあえず会員になったが、「ボランティアを始めた」という意識は皆無だった。むしろ勉強になりそう、世界中のネットワークから情報が得られる、少しは英語にも親しめるかもしれない——といった動機だったと思う。人知れずいつでも参加出来て、負担にならないのが魅力だった。

しかし。次第にもう少し活発にやりたくなくなって、地域のグループに顔を出したり、講演会等に出かけたりしているうちに、思わぬ収穫があった。日本の社会や身近な地域のことに関心が向いたこともその一つ。自分の育ってきた過程を違う角度から見たり、本当に自分のやりたいことは何なのかを考えるようになった。様々な背景を持った多様な人々との出会いが、少しずつ自分を変え、潤して行ったような気がする。

金子郁容氏はボランティアの楽しさとして「不思議な関係と意外な展開」を挙げた。本当にその通りだったと思う。人との出会いは意外性に満ちている。まず知識を得ようと思っていたが、随分柔らかくなったと思う。又「自分から」これをやろうと決めて動けるようになった。そんな自分に充足感がある。人のため(自己犠牲)といった考え方は嫌いだ。自分がやりたいことを自分のためにやっている、と言ってしまえば、ボランティアであってもなくても同じみたいだが、違いはこの充足感だと思う。視野が広がるにつれて、逆に「アムネスティ以外のこのNGO、このボランティアの方が、もっとやりがいがあるのでは？」と考えたり、自分の中の矛盾を感じることも正直言って、ある。無力感やジレンマもつきまとう。けれど、自分で引き受けたことだから(そう思えるから)不思議と元気になれるのだ。

いろいろな可能性を視野に入れながら、「やはり自分はこれ」と選んでいる。これが精神的な自由というものではないだろうか？自分の心の声に耳を傾け、自分に素直に生きていると実感できることは「幸せ」だと思う。ボランティアは出会いの宝庫であり、自己実現の為の学校のような所だ。一人で生きているのではない、と実感させてくれる学校。

百人百色のボランティア観や活動スタイルがあると思う。まだ「これ」というものに出会っていない人も、まずボランティアの世界に一步踏み出してみるといいと思う。ゆっくりと自分さがしをして、出来れば長く続けて行ける活動に出会えたらいいね。たくさんの人が、一つしかない自分の人生を選びとって行ってほしいと思う。

(追記：「人生」とか「幸せ」なんて言葉は、以前は照れくさくて頭の中でも使えなかった。自分でも不思議な気がする。ちょうど、ボランティアに関わる前は、「やりがいはあるだろうが、そんなことをしていると人に知られたら照れくさい、気恥ずかしい」と思っていたことと似ているようだ。ケン・ジョセフさんが「真剣にやって下さい。交流ごっこはやめて下さい。必死になって下さい」とおっしゃっていたことを思い出す。人が真剣に生きている姿を、やゆしないこと。認めあう感性を大事にしたいと思う。——すみません、まとまらなくて)追記その2：今、私は学生ではありません。書く資格があったのでしょうか？(西洋史専攻、卒業後コンピュータソフトの会社に勤務中)

アムネスティ・インターナショナル西宮グループ運営担当をしています。このフォーラムには、PHD協会に勤める友人から聞いて有休をとった上で参加しました。アムネスティは

常時会員大募集中です。さしつかえなければ載せて下さい。連絡先は松波(0727-92-6134)まで。

---

### 中村 美子

私が、国宝姫路城において外国人に、英語で城内を案内するボランティアガイドになってから10年になります。子育ての終わった後に何をすべきかを、色々考えておりました。ちょうどそのとき姫路城で英語のボランティアガイド募集という記事を見付け、これこそ私のやりたい仕事だと思いました。英語の能力は問われませんでしたので、希望者は誰でもなれました。英語は私の最も得意な教科だったので、何のためらいもなく応募しました。(今思えば、大胆なことをしたものだと思います)それ以来10年、暑い日も寒い日も、風の日も雨の日も、週一回は必ず城にでかけて、活動をしています。最近では依頼も多く、週2、3回はでかけることもあります。

姫路城の案内は日本人の感覚では、まず外から優雅な城を眺め、「これが姫路城か、きれいだね。立派だね。」、そして天守閣にのぼって、そこから景色を眺め、「素晴らしいね。」で終わり、1時間もあればじゅうぶんだと思う人がほとんどです。しかし外国からのお客様はそれぞれ違った文化伝統をもった国から来られていますので、瓦の模様のこと、屋根のしゃち瓦のこと、また日本人の気にとめないことにまで疑問を持たれます。歴史的背景と併せて説明すると納得されます。それには最低2時間必要なのです。「素晴らしい仕事をされていますね。」とよく言われますが、実際歩きながら、限られた時間に出来るだけ多くの説明をするとてもハードな仕事なのです。

外国の方は“ボランティア”をよく理解さ

れていますので、案内が終わると、自分のために時間をさいて案内してくれたことをとても喜んで感謝の気持ちを表して下さいます。外国のお客様を伴って城へ来られる日本人の中には「たかがボランティアだ。たいした案内は出来ないだろう」と最初から無礼な態度をされることがあります。同じ日本人として悲しく思います。勿論外国語で案内するのですから表現のまずいところもあるかも知れませんが、いつも最善を尽くしているのです。日本のことでどんな質問をされても答えられるようなガイドになろうと勉強に励んでいるのです。

私はカトリックの学校で8年間過ごし、何の抵抗もなしにボランティアという言葉を受け入れていました。私の知り合いが「ボランティアはお金があって、暇のある人が出来るのよ。」と言うのを聞いてからボランティアについての定義、外国でのボランティア状況や実際にされている方のことを知りたいと思っていました。その時新聞で日米学生会議主催のボランティアフォーラムの記事をみつけ、早速申し込み、参加することが出来ました。

4人のパネリストのお話しはとても有意義なものでした。特にケン・ジョセフ氏の日本人のボランティア活動に対する厳しいご意見はもっともだとおもいました。それはまさしく私の思っていたことだったので。

また中田武仁氏はカンボジアで息子さんを亡くされたにもかかわらず、これから日本人がボランティアとしてもっと活動出来るような下地をつくろうと努力されているのにも感動しました。各ボランティア団体の活動発表会で若い方々が一生懸命活動されているのをうれしく思いました。このフォーラムに参加して私が今まで考えていたボランティアに対



する考え方が間違っていなかったことを確認出来ました。

私のしている城でのボランティアはフォーラムに出席された方々とは比べものにならないほど小さなことですが、あくまで自発的に、自分の能力にあった範囲でずっと続けていきたいと思います。

---

### 山田 通代

報告が遅くなって申しわけありません。

もう8月に公開フォーラムに行かせていただいて3ヵ月になるんですね。早いものです。あの頃私は丁度、7月に静岡で行われた'国際青年の村'93に参加してまもない頃で、テーマが環境('What can we do for our environment'~from ego to eco~)であったこともあり、3R(Reuse, Reduce, Recycle)の実現etcに、身近な(例えば大学、町レベルで)ところからとり組もうと、何かとにかく探しているところでした。それまでボランティアや市民活動をhypocrisy的に考えていた私にとって、それはとても大きな変化でした。'やってみよう、やらなくちゃ!'と思い始めたのです。

ゲストスピーカーの方々(日米フォーラムの)のお話もとても興味があり、ここで何かよいグループに出会えたら、“一人じゃしんどいなあ…”とっていた地域レベルの活動もやれるようになるだろうと、期待に耳をそばだてて1つ1つの話をききました。

そこで私の興味に限りなく近かったのは、A SEED JAPANの活動でした。キャンパス・エコロジー(大学の環境調査、改善活動)などはまさに私の求めているものでした。

そしてスピーカーの羽仁カンタさんの紹介をうけて今、私はA SEED KANSAIのスタ

ッフに入れていただき、多国籍企業調査、学習etcにとりくんでいます。究極的に今ある日本の富や、私達健康な人間の与えられている状況を考えると、いつも“物事の不条理”と、たまたまこういった恵まれた環境にいることを、すごくとてつもなく偶然なことなんだと感じ、幸せであると同時に、この幸せのうらにある見えない、わからない、けれど確実にある犠牲に、どうしてよいのかわからなくなることがしばしばあります。

'Act locally'は日本でもかなり浸透しつつありますが、'Think globally'を真剣にやりだすと、私達は袋小路に入ってしまうがちです。今、それを強く感じます。

'Act locally'は、やる気がすこしあればできることなんです。'Think…'の方はそうはいかないな、というのが実感です。そうしてフラストレーションたまる位なら、毎日の自分の楽しみや目標だけを追っている方が、どれだけ楽なことか知れないからです。

しかし特に私は経済を専攻しているので、発展と南北問題や、富のあり方について、ボランティア活動を通じて、これからも自分なりに考えていきたいと思います。考えることから逃げることは、先進国の人間の、そして健康な人間のエゴであると思います。

いろいろなボランティアがあります。そこで体験し、考えることはそれぞれ違いがあるでしょうが、私は、ボランティア活動とは、ともすれば、おごり高ぶり、自分のみの幸せを求めて満足しがちな私達1人1人に他の何かをおしえてくれる、貴重な、そしておもしろい活動だと思います。

皆さん、とにかく頑張りましょう!!

林 秀美

外国人労働者問題

8月18日にマイノリティー3があり、在日韓国・朝鮮人問題や部落問題、外国人労働者問題や沖縄問題と4つのグループに分かれて行動した。私は外国人労働者問題で、まず最初にリパティ大阪へ行き、歴史やリパティ大阪の説明を聞いた。我々のメインはその後のアジアハウスという所と、リンクという所でそれらの場所は、アジアからの留学生や移民してきた人々の権利を擁護することを目的としたものである。アジアハウスは4年前の秋に全国の人々へ呼びかけてカンパをしてもらうことによって実際に約100名の人々の手によって建設された。4階建ての造りで、2～4階までがアジアからの就学生が住居としている。韓国やタイからの人々が多いらしい。最近は人数が多くて4畳半や6畳の部屋を2～3人でシェアすることもあるらしい。中国から来たある就学生の話の例では、日本へ来て日本語学校へいく場合、学費は年間約70万で、これは中国では約2000万の値うちがある

そうだ。つまり、よっぽど裕福でないと自費では来れない。その結果学費を稼ぐのにこちらでバイトをするが1日4時間しかバイトはしてはいけないのでかなり苦しいらしい。職種はウェイター・ウェイトレスが殆どだ。また、日本語学校の中でも、労働させたり、学校の寮としてマンションの1室に7、8人もつめこまれるケースもあるとか。彼らの苦勞は私の想像をはるかにこえていた。

リンクは、弁護士のボランティアで運営しており、外国人救済の為の団体だ。近年日系人や中近東、アジアからの出稼ぎ労働者は多い。現在ではリンクの様な団体は増えたが、裏を返せば、それほど問題が多く生じていることを意味する。日本はどちらかというとき特殊技能を持つ人々しか受け入れなかったが、最近はそのとは限らない。教育問題、居住地、保険、意思伝達がスムーズにいかない時のための通訳の人の少なさ。問題は多くなるばかりだと感じた。

友末 優子

在日韓国・朝鮮人問題

マイノリティーの大阪のフィールドトリップはJASCの中でも特に印象に残るものとなった。私自身がタスクフォースなので今回まわるトリップ先はすべて下見してあり、はりきって出掛けた。

私は在日韓国・朝鮮のグループだった。まずバスでセミナーハウスからKCC(韓国キリスト教教会)に三十分遅れで到着した。そこで

金さんから韓国の歴史を話していただき、次に韓国系アメリカ人の大学生の女性の方で日本に滞在中の方から話をうかがった。彼女の英語は目がまわる程速く、理解するのに苦勞した。その後のQ&Aの時間ではアメリカ側に韓国系の人が出たこともあって、なかなか白熱したものとなった。

その後KCCから徒歩十分程の焼肉屋「まっちゃん」で韓国料理を頂き、四人一グループの



小グループに分かれて、鶴橋駅まで在日韓国人居住地区を通りながら散策した。この猪野地区というのは在日の人の多い大阪でもとび抜けて在日の人がかたまって住んでいる地域である。この辺を歩き、在日の家内工業の実態、表札に記されている日本名と本名、朝鮮人学校の設備等を見て、何か感じてもらえたら、と思った。私のグループには韓国系アメリカ人のジンがいたので歩いている最中も議論が盛り上がった。

韓国食品のマーケットを抜け、鶴橋駅から

芦原橋駅にある「リバティ大阪」という人権博物館に行った。この芦原橋駅付近はいわゆる同和地区で、あちこちに同和問題に関する看板が立っていて、なんとなく重苦しい雰囲気だった。リバティ大阪ではマルチスライドを見たり、館内見学(水俣病の展示が行われていた)をしたりして、今日一日をふり返った。

フィールドトリップ後、沖縄料理を「おもろ」という店に食べに行き、美味しいお料理で満腹になり、マイノリティーのフィールドトリップは無事終了した。

鈴木 武志

#### 部落問題「同和という不和」



交通渋滞に巻き込まれ、リバティ大阪には一時間遅れの到着となった。以前から、頭に浮かんで消え、ずっと胸につかえていたことがある。人種差別であれ、部落差別であれ、結論的に問題の根源は全て同一点に帰着する。しかし、疑問なのはその根源にたどり着くまでのプロセスである。部落差別を正当化する一見妥当らしい動機付けが、日本人にすら不明だということが、余計に同和問題を厄介にしている。

幸か不幸か、関西滞在中に部落問題に関して、相反する地元の声を耳にした。一方はホ

ームステイ先での、他方はリバティ大阪や浅香地区での話である。Jinと私を迎えてくれたTさんは、小学校の同和問題役員を担当されていた。確かに差別する側に問題はあるが、同和地区の人も過剰な被害者意識を持っており、事あれば集団で押し寄せ、組織対個人という関係に持ち込んでしまうという、非建設的姿勢は改めるべきだと言われていた。

これとは対照的に、リバティ大阪のMさんは自らの婚約破棄の切ないエピソードを語られ、浅香地区のYさんらは、行政が行った不当な建設工事の爪跡を案内してくれた。

正直なところこれらの事実を総合してみると、一体何を信じればよいのか、私自身の判断が大きく動揺している。今の私が言えることは、実際問題この様な状況が多くの人間の目をくぐり抜けて、身のまわりに確かに存在しているという事実だけである。ともすれば、この事実を白日の下に曝そうとすると、新たな傷が生じるかもしれない。だが、事実を認知して普遍化しなければ、現状が一向に改善される余地がないことも、また自明である。

何気なく電柱や看板に記され、いつの間にか街の風景の一部と化してしまった“同和”の二文字。この視覚化された、やり場の無い

苦悶のイメージは、これからも私の中から来えることはないだろう。私に出来ること、それは別の人間にこの苦悶を伝達することだ。

西元 宏治

### 沖縄問題

関西地区では実際に少数者理解のための取り組みを見学することにより、当フォーラムの目的である国家・民族・文化を越えたヒトの交流がより盛んになりつつある現代社会における他者理解の在り方をより多角的に考えるために、各種のフィールド・トリップが企画された。その一貫として、私達日米の参加者10名は、幼児教育でのレベルでユニークな試みを続けている「のぞみ保育園」を見学させていただいた。

元々、この保育園で沖縄舞踏を遊戯に取り入れたり、沖縄料理を給食として出すなどの試みが始められたのは、この保育園の周辺住民の多くが沖縄出身であり、ほとんど園児もそうした家庭の子供たちであったので、子供たちに沖縄の文化・慣習を伝承する目的で自発的に、こうした試みが行なわれるようになったそうである。私たちが見学させていただいた日も、「めんそーれ」という子供たちの元気な挨拶に迎えられた後、牛乳パックで作った獅子頭を使つての5歳児による「ばしょうふ」・「子供えいさ」という沖縄舞踏を見せていただいた。その次に演じられた1歳児による「ホタルこい」には、アメリカ側参加者も加わって、子供たちと一緒に遊戯を楽しんだ。最初こそぎこちなかったものの、子供たちと一緒に体を動かしているうちに、最後には童心に帰って、皆、十分に楽しんだように見えた。1時間弱にわたる子供たちによる沖縄舞踏の

実演のあと、この保育園内で調理された沖縄料理の給食を子供たちと一緒にいただいた。6ヵ月から5歳までの子供が一斉に食事をとる光景はほとんど修羅場に近しいものがあり、呆気にとられてしまった。改めて、子供の持つ過剰なまでのエネルギーの物凄さを思い知らされた。ところで、この給食に使われた材料の一部も、この保育園の中で保育さんと子供たちが栽培したもので、他にもいくつかの沖縄料理の材料となる野菜を栽培しているそうである。給食の後片付けが済むと、子供たちは昼寝に入るので、その間を利用して実際にこうした取り組みを企画・運営からすべて自分たちだけで行なっている園長さんと保育さんたちに直にお話を伺い、質疑応答をおこなった。この保育園は、園長先生と保育さん14名で運営されており、現在、6ヵ月から5歳までの子供を約90名預かっている。最近では周辺地域にベトナムやブラジルからの出稼ぎ労働者も増加してきており、そうした家庭の子供も含めて、両親共に働いている家庭の子供がほとんどであるため、朝9時から夜4時までこの保育園で過ごしているとのことだった。

このような変化にあわせて、沖縄だけではなくモンゴルやアイヌの文化などについても、沖縄の文化紹介同様、遊びや食事といった生活に密着したレベルから子供たちに“体験させる”という試みを始めているということだった。近頃は、読み書きや習いごとを行なっ



ている保育園を希望する親御さんが多くなり、保育園側でもそうした希望に沿って遊戯や歌などより読み書きなど行なうところが増えてきているそうだが、この保育園では、子供たちの「こころの問題」と“Natural thinking”を大事にするという視点から、読み書きは一切教えずにこうした取り組みを続けているとのことだった。しかし、児童数そのものの全体的な減少もあり、入園希望者は減少傾向にあるということだった。このようなユニークな取り組みが十分に知られず、また、評価されないのは非常に残念なことである。

また、こうした取り組みが、保母さんたちだけによる全くの自発的な努力に支えられていることを知り、非常に驚いた。半日ぐらいの間しかその仕事を見ていないが、日常の業務もけっして楽なものではないにもかかわらず、こうした努力を自力で続けてられること自体に頭の下がる思いがした。私たちが訪問した数週間前にも、わずかの日数を使って沖縄に研修旅行に行ったそうである。このような取り組みが現場の方の創意や工夫に根ざして行なわれること自体は非常に望ましいことであると思うが、同じような試みを行なっている他の教育機関と相互に情報の交換が行なわれるようになったり、こうした異文化理解に関する取り組み全般に対して教育学的な蓄積がなされ、もっと容易に多くの人がこうした取り組みに参加できる機会が整備されるべ

きなのではないかと強く感じた。

最後に簡単に感想を述べさせてもらえれば、元々、子供の苦手なわたしは保育園に行かされると聞いたときは、正直別のフィールド・トリップ先に変えてもらいたいと思ったし、到着したのちも、はじめは子供たちのあふれんばかりの元気とカン高い声に圧倒されるというより辟易としていた。しかし、自由に飛び跳ね、嬌声をあげる子供たちをみているうちに、大学生の日常生活からは考えられない貴重な機会を得ることが出来たと思えるようになった。まだ、何物にも取り込まれていない野放図なエネルギーを間近にして、こうしたものにもっと目を向けるべきではないかと思った。そして、子供たちを学校や教育というものを通して、今ある社会の中にどう取り込んでゆくかということばかりを考えるのではなく、個人がどう自己を解放し、自由に自分を表現することが出来るようになるには何が必要とされるのかということが、教育というものを考えるときにもっと留意されるべきなのではないかと思った。更に、自分も含めて、ただ単に社会の常識や通念を安易に受け入れるのではなく、自分自身がどのような社会を望み、そして、そうした社会を創るためには自分が何を為すべきなのかということ为主体的に考えられるように常に自分自身に働き掛ける努力を続けていかななくてはならないかと思った。

## 総合テーマ討論会 パート 2

細江 葉子

7月29日に行われた第二回総合テーマ討論会においては、前日の討論で出された総合テーマの掲げる世界に行き着くまでに乗り越えなければならないと考えられるハードルを実

際に乗り越えて行くためにはどのような方法が考えられるかと言うことが話し合われた。その場で出された具体的な案を簡条書きに出してみると以下ようになる。

- ・個人レベルで知り合う
- ・政府のプロパガンダに流されない
- ・教育の改善
  - 他の文化についての教育
  - 宗教や哲学について
  - さまざまな家族構成や家族の在り方
  - 愛
- ・教育システムの改善
  - 外国人学生の受け入れ(完全な生徒として)
  - 外国人教師の受け入れ
  - 異文化についての教育を早い時期から始める—異質なものに対する違和感を生じさせないため
  - 目的をはっきりと持ったうえでの留学
- ・外国人との文通—同じ言葉(共通語)を使ってコミュニケーションしていても、それぞれの帰属する文化が異なる場合、考え方などにも違いが出てくることを認識できる。
- ・ニュース番組などを同時通訳で放送する。—同じニュースに対する視点や捕らえ方の違いを認識できる
- ・漫画の翻訳、放送—生活に密着した内容
- ・衛星回線を使って、同時に世界各地につなぎ、討論会などを行う。
- ・特殊な集団というものは必ずしも母集団全体を代表するものではないという認識
- ・他の文化的背景をもつ人とのコミュニケーションをすることによって、何らかの特徴を知ることができる。
- ・経済や政治といった国際的な問題だけでなく民族問題など国内の問題にも目を向ける。
- ・日米学生会議のように国際交流を重視した団体の中でも、何かにつけてアメリカ側参加者と日本側参加者は別れてしまうという現状を何とかする必要がある。
- ・経済摩擦など、ネガティブなイメージのこ

- とも、ポジティブにみとめる努力をする。
- ・先入観やイメージの問題
- ・マスメディアを鵜呑みにしてよいのか。(一度疑う、あるいは自分で考え直してみることの必要性)
  - 他のいろいろな人と話してみる必要がある。
  - ひとつの情報源だけから得た情報を信じてしまうことの危険
  - 情報量のギャップを小さくする
- ・国連のような国際機関でのコミュニケーションを通じての協調
- ・一国の利害だけではなく、より広い利益を考慮にいれるべき(特に政治家など、実際に社会の運営に大きな力をもっている人)
- ・平等の徹底
  - 多様性に対する寛容—共生へとつながる
  - 差別撤廃—人種、性など
- ・世界政府の実現
  - 個々の利害というものがなくなる
- ・人間性を理解し、実現させる努力をする
  - これらを見てみると、個人的なレベルでの、本当の外国の認識、自分自身での判断、そしてこれらを可能にするための各国政府や国際機関の協力というものが強く求められていると言えらる。特に日米間の相互理解という特別な関係については、冷戦後の国際社会における二つの大きなパワーであるということ、これからの世界の中心的存在であるということ、そしてこの二国は政治的にも経済的にも、そしてある程度軍事的にも切っても切れない関係にあるということを前提として、両国の本当の関係、姿というものに目をむけて行かなければならないと考えられる。一般的に人間というのは自分と異なるもの、自分の知らないものに対して拒絶反応を示しがちであるが、現在のように世界が小さくなって



いる状態においては、ステレオタイプのイメージや一方的な情報に頼った他国に対する認識ではなく、できるだけ実際に見て、聞いて、

接したうえで得た認識を大切にしなければならない。

## 新実行委員選出

西元 宏治

『岩波国語辞典(第四版)』によると「会議」という言葉は、「関係者が集まって(一定の手続きにのっとり)議題について意見を出し、相談すること。」と定義されている。この定義にしたがって考えれば、日米学生会議という「団体」の活動の中でこれほど会議らしい会合は新実行委員選出において他にはないのではないかと思う。確かに例年の慣行として日米が別れて新実行委員の選出を行なうとはいうものの、実行委員・参加者の別なく、一同に会して手続きの段階から物事を決定してゆくという作業は新実行委員選出の特色であると同時に、民主主義というものの最も原初的な形での再現でもあると思う。

民主主義が相対的価値観に基づいている以上、常に正しい結論を導き出せるとは限らないが、もし、仮にその過程において人々の意見が十分に開陳され、建設的な議論が展開されるのならば、決定に参加することによって責任感が喚起され、その結論は他のあらゆる手段から導かれた結論に比して有効性を持ったものであることは否定出来ないのではないかと思う。到達した目的からよりも、目的に至る過程がより多くのことを与えてくれることを忘れてはならないと思う。他人に教えられるどんなに迅速な答えよりも、迂路を辿ろうと自分自身が考えて導き出した答えに価値があるはずである。ただし、それらのことはすべて限られた時間と資源の中で実現されなくてはならないという現実を忘れてはならな

い様に思う。今回の場合のそれは新実行委員の選出という目的に従って、あらかじめ決っていた訳である。

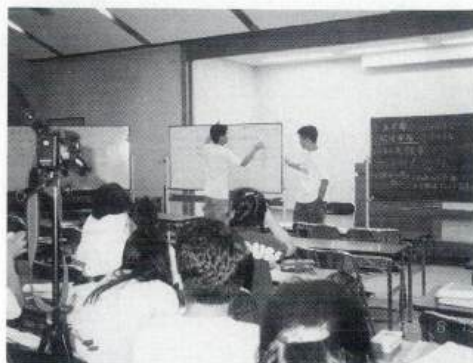
日米学生会議では、一ヵ月間にもわたって様々な機会に言葉が交わされ、あらゆる問題に関して議論が行なわれるにもかかわらず、一切そうした問題について結論が出されることはない。ほとんど何の制約も意識されずに議論が行なわれている。このこと自体は、現在の学生会議の性質上、止むを得ないことかもしれないが、時として現実的な要素を全く考慮しない、自己満足のための言葉遊びに陥ってしまいがちであることは否定出来ない。そうした学生会議特有の状況を踏まえた上で、新実行委員選出に至る議論の内容を見てゆくと一ヵ月に渉る学生会議での議論が、どの程度地に足の着いたものであったか、どの程度自分の発言の内容に対して責任をもって発言していたかを知ることが出来るように思う。言葉の上の整合性や論理的な分析だけでは、現実には動かないのである。そんな当たり前のことに40名で議論することによって気付かされる。

例年、まず、日米学生会議の意義の再確認し、来年の会議を行なうか否かについてから話し合いがもたれる。来年度の開催地が決められると、今度は実行委員になることを希望しないものの中から司会者が選ばれ、以後、一切の議事進行が行なわれることになる。今年、参加者の中から吉田泰治君と桜井周君

が司会を引き受けてくれた。実行委員の数から始まり、被選挙資格、男女比、地方枠の設定の可否、選挙方法、投票手順などについて話し合いがもたれ、一つ一つ時間をかけ、行きつ戻りつしながらも慎重に決められていった。午後7時に始められた会合は午前1時ようやく全ての選挙方法を決定するに至り、しばしの休憩を挟んだのちに、立候補者による所信表明が行なわれた。一人一人の候補者が、それぞれの言葉で表現した日米学生会議の姿は、彼らがこの夏の会議をどう受け止めたのかを感じさせるものがあり、非常に興味深いものだった。この所信表明に関して質疑応答が交わされた後、投票が行なわれた。ある意味で、ここまでかけられた時間の長さや議論の質そのものが、第45回日米学生会議の議論の成果といえるかもしれない。投票は、討論の結果一人の投票を10票とし、それを加重形式で自由配分するという形で行われた。集計は、実行委員の寺沢、西元、平竹によっ

て、1時間弱ほどを費やして、厳正に行われた。全ての作業が終了し、新しい実行委員が決定され、全員の拍手をもって承認されたのは、午前3時を過ぎてからのことだった。ここに至って、第45回日米学生会議の公式行事は閉会式を残すのみになり、第45回日米学生会議実行委員会はその役割をほぼ終えた。

最後に、粘り強く議事を進行してくれた司会の吉田泰治君と桜井周君に深く感謝したいと思う。本当に御苦労様でした。



## 新実行委員ミーティング

田中 沙羅

New EC Meetingは8月20、21日の両日行われた。このMeetingは来年度の大枠(総合テーマ、人数、日程、開催地、分科会、フォーラム等)を決定するものであり、この決定をも



とに来年度の会議への準備が進められる訳である。

まず総合テーマの話し合いから始まった。テーマは果たして会議に必要なのか、またその果たす役割は何なのか、そのあたりから話は始まった。今年は総合テーマのことで会議前、会議中一悶着あったので、再び過ちを繰り返すまいとの思いが特に日本側にはあったためである。米国側はどちらかというテーマをPR効果として捉えており、会議におけるテーマの位置づけ、各プログラムとのつながりにこだわりを見せた日本側との認識の差が感じられた。また、来年はアメリカ開催であ



り、具体的なつめは米国側実行委員の手に委ねられる部分が多く、日本側としてはこのMeetingでどこまで自分達の「こだわり」をわかかってもらうかが大きな課題であった。

来年は60周年記念ということもあり、さまざまな候補の中から最終的に決定したのは“Learning from History: Active Cooperation for the New Era”

今日の会議の反省から、人の集う場のみならず、会議としてのJASCを目指したいとの思いが強く、それを具体的にプログラムにどう生かすかが問題であった。「統一性」をもた

せることが1つの鍵であり、また、lectureよりもAction Orientedなものを求める声もあり、その結果決定したのが、フォーラム(戦争と平和、環境、ボランティア)、シリーズ(人種、日米関係、人間関係)、そして10分科会であった。こうして「Sengari Agreement」は完成した。しかしこれはいわば「器」であり、今後の1年間でその中に何を、どう注ぐかを煮詰めていく作業は新実行委員、そして46th JASCerに委ねられている。Agreementの完成と同時に我々は、自分自身の目指すJASCを模索する出発点に立った訳である。

## フリーデー

---

関西のフリーデーは2日間ありました。会議の終わりで、新実行委員のミーティングを並行しておこなわれたため、一部の人はセミナーハウスに残って来年の会議について議論していたので、全員が参加できた訳ではないが、それ以外の大半の人はどこかへ観光に行きました。

一日目は三田市内を回ったグループと京都に行ったグループがありました。三田班は市内の地酒、焼き物、ダムなどを見学してまわったあと、上野邸で茶や琴、そして人々のあたたかい心でもてなしをうけました。ミツイとマイクは着物まで着せてもらい、大いにもり上がりました。京都班は大徳寺から西陣

## 桜井 周

方面に行き、お茶にもよばれて日本の伝統を満喫しました。

二日目は京都と奈良に行く班にわかれしました。奈良班は途中、阿古の自宅のレストランによって昼食をとりましたが、たいへんおいしく大好評でした。その後、興福寺から東大寺、春日大社を訪れ奈良公園をたのしんだ後、わかれて買物をするなり大阪に出て夕食をとるなりしました。京都方面は宇治、伏見など南部をまわりました。

その他、神戸方面にショッピングに行く者もいたり、各人、関西を十分に楽しんだと思います。しかし、9時には宝塚駅に集まり、セミナーハウスにもどりました。

## 東 浩平

フリーデー第1日目の20日は、多くの人々が京都出身の渡邊尚美さんに連れられて京都観光に行き、食糧、教育等のテーブルに参加している人々は、源真帆さんのついで、三田

市の婦人会の方々に引率されて地酒の蔵、青野ダム、神社等を見学し、夕方から上野さんの素晴らしい邸宅に招待され、ディナーパーティーに出席した。新実行委員選挙の翌日と

いうこともあり、午前3時まで選挙を行っていた日本側参加者は、日中疲れを隠せなかった。

2日目の21日は、女性を中心にしたグループが、松本安代さんに引率されて神戸へショッピング(ウィンドー?)に出かけ、残りの多

くが奈良に向かった。奈良組は途中、志紀に止まり、阿古智子さんの実家である、うどん屋「阿古」で、おいしい料理を御馳走になって、奈良の観光へと向かった。夜9時30分には第1日目と同様、宝塚バスターミナルに全員集合しセミナーハウスに向かった。

## 閉会式

米倉由美子

1993年8月23日、第45回日米学生会議の閉会式は、関西学院大学セミナーハウスの一室において、和やかな雰囲気の中で行われた。広い室内に、椅子を円形に並べて参加者全員が座る。ぐるりと一つの円になったみんなの顔には、この一カ月の出来事をかみしめているような表情があった。

閉会式は、芝崎とRuhnkeによる共同声明の発表から始まった。会議の総括としての共同声明を聞く参加者の心には、一カ月の思い出とこれからの自分の姿が交錯していたのではなかろうか。

続いて、第45回日米学生会議実行委員長

Cobleと平竹のあいさつ。Cobleは彼女らしく明るくさわやかなスピーチで、平竹も彼らしい力強く熱の込められたスピーチで、委員長としての最後のあいさつを締めくくった。

そして、来年の第46回の実行委員長Bennettと廣田による千刈アグリーメントの発表と続く頃には、新実行委員の熱意と彼らにエールを送るような気持ちの他の参加者の熱っぽり思いが部屋には満ちていた。

最後のサークル・トーキングでは、参加者一人一人が順番に、自分が今思っていることを言っていた。みんなのいろいろな思いが伝わってくる。共に笑い、共に悩み、考え、





共同生活を送ってきたこの一カ月は、日本側と米国側双方の参加者に、どんな意味を与えたのだろうか。

みんなの口から共通して出てきた言葉は、「Thank You」だった。いろんなことがあったけれど、会議が終わろうとしている今、みんなに感謝したい。そんな気持ちが伝わってきた。お互いに理解しようと努力し、それを継続したこの一カ月を、私達はきっと忘れないことだろう。

参加者それぞれの感慨が入り混じり、笑顔



で互いの健闘を賛えあって、閉会式は幕を閉じた。

## 小西観光園

友末 優子

涙、涙のクロージングの後、昼食をとりに関学セミナーハウスからバスで三十分程の小西観光園に行った。小西観光園は川のほとりにある、BBQのできる施設で、山の中にあっただ。ここではあゆのつかみ取りをする事になっていた。つかめないと食事にありつけないのでは…との噂もあった。

ここであゆのつかみ取りなるものを、私は生まれてはじめて行った。浅瀬に人数分のあゆが放たれる。たくさん群がって泳いでいて、今にもつかめそうなのに、バシヤと手を水に入れてつかんだつもりが、あっという間に



なくなってしまう。つかめないとわめていたら、手は事前に水に入れてあゆを待ち、止まったところをつかむのだ、と教えられた。私も苦労の末、やっと一匹、岩にはさまって動けなくなっているあゆを、もう一匹は普通に泳いでいたあゆをつかまえることができた。中には十数匹つかまえていた人や、一度に二匹つかまえている人もいて、キャリアの差を感じてしまった。アメリカ側参加者も予想以上に気持ち悪がらずにあゆのつかみ取りに挑戦していた人が多かった。

あゆをつかみ終えた後、七輪の上でBBQを行っていたら急に雲行きがあやしくなり、激しい風雨にみまわれた。BBQではとりたてのあゆの他に牛肉やキャベツ等の野菜もいただいた。

食事後はそれまでの風雨はピタリと止み、それぞれ疲れている者は横になったり、元気のあるものは川で泳いだりして、残り少ないJASCを楽しみ、4時半にバスで帰路に着いた。

## 5. 分科会報告

### 芸術と社会 (The Arts and Society)

総括

芝崎 厚士

当分科会のコーディネートを担当する際に、芝崎とジェフがテーマとしたのは、芸術と社会の相互作用であった。芸術は、常にそれが生まれる社会的な要素を背景としている。と同時に、芸術は最も主観的・個人的な人間の表現手段である。このような前提にもとづいて、様々な規模・レベルの社会における芸術の存在の仕方を検討していこう。そして、そのようなケース・スタディーを通して、最終的には地球共同体における芸術の役割に対する考察を深めようというのが、当初の、少なくとも芝崎-ジェフ間の共通認識であった。

しかし、参加メンバーにその認識を強制するつもりはなかった。全体合宿の時点で、その基本認識を説明はしたものの、後は各自の理解・解釈に任せた。「わからないことがあれば、どんな小さなことでも気にせず何でも聞くこと」、「説明を聞いた後は自分で考えること」、「自分の考え方を大切にすること」が私の口癖だった。

分科会の議論に関しても、芸術を専攻しているメンバーがいなかったこともあり、我々には初めから厳密かつ批判的な議論をする意思も能力もなかった。個人的には、各自がこの分科会でできることを見付け、それをできるだけやってくれればよい、と考えていたので、強制的に専門書を読んで勉強するという類のことはあえて行わなかった。

「人も羨むアート・テーブル」といわれていたものの、結果として、他の分科会と比較し得る意味で「いい」分科会になったのかどうかはわからない。少なくとも、参加者一人一人が、背伸びすることなく、自分のレベルで意見を発表し合えたという意味では満足できるものであったといえるだろう。

最後に、特に日本側参加メンバーに深く感謝の意を表す。彼らは、会議開催直前の多忙時に、「わがまま」な私の苦言を取り入れて、自主的にアメリカ側との連絡を取り、「犀の角」に分科会に関する記事を何度か寄稿し、実地研修を立案してくれた。また本会議中は、様々な準備に追われて疲労困憊していることも少なくなかった私を励まし、元気づけてくれた。分科会に対する彼らの真摯な姿勢は、時折挫けそうになることもあった私にとって、常に心の支えであった。さら(田中[沙])、ひろみ(日向)、ひがし(東)、ほんとうにどうもありがとう。

#### <分科会・実地研修の概要>

- 7/28 ① 自己紹介・分科会の説明
- 7/30 ② 東・アナンダの発表
- 7/31 ③④ 実地研修 国立博物館・浅草寺
- 8/3 ⑤ 実地研修 月窓寺(座禅)：「哲学と人生」と合同



映画 DON'T LOOK BACK 観賞

- 8/7 ⑥ 田中(沙)・シャーリーの発表  
8/9 ⑦ 日向の発表・リフレクション  
8/14 ⑧⑨ 実地研修 上野焼制作  
8/19 ⑩ ジェフ・ケリー・芝崎の発表

自己紹介・分科会の説明

吉祥寺のファミリー・レストランで、「哲学と人生」「メディア」などと合同して自己紹介・分科会の説明を行った。私は残務整理のため、西元と共に当日の夕方まで四谷の事務所に残って働いていたので、メンバーとは初顔合わせだった。自己紹介と共に、今後の予定を説明した。

実地研修 国立博物館・浅草寺

午前中、国立博物館を訪れる。アメリカ側は特に日本刀や仏像に興味を示していた。会議中には珍しいくらいに綺麗に晴れ渡った一日。博物館内の庭園が素晴らしかった。見学後、地下のミュージアム・ショップで各自

買い物を楽しむ。

上野公園を散策しながら、感想を述べ合う。日本蕎麦屋で昼食を取る。その後、2階建てバスに乗り、浅草へ。かなりの人込みの中、参詣をすませ、仲見世で買い物。その後、原宿でストリート・パフォーマンスを見学する予定だったが、時間の都合で省略した。

実地研修 月窓寺(座禅)

午前5時に起床して、吉祥寺東急インから徒歩10分ほどのところにある月窓寺を訪問した。「何も考えないことを考える」という座禅の体験は、多くの参加者にとって初めての体験であった。まず、奥の座敷に通されて、住職より座禅の意味、方法について具体的なお話を聞き、練習をする。思っていたよりも簡単そうだと感じたのも束の間、実際に行ってみると、意外にこれが難しい。会議の準備について24時間頭をフルに使って「あれは大丈夫か、これは準備ができたか」などということばかりを考えていた私にとっては、思いも



(後段左より)芝崎 厚士、Ananda Martin、東 浩平  
(前段左より)田中 沙羅、Kelley Segars、Shari Oshiro、Jeff Bennett、日向 裕弥

かけないほどインパクトのある経験だった。30分を1回として、3回座禅を行った。終わる頃には、激しく降っていた雨も小止みになっていた。

#### 実地研修 上野焼制作

作陶体験は、個人的には最初から温めていたアイデアであった。当日は、小倉駅から電車で1時間半、さらにタクシーで20分ほどのところにある上野の里で、作陶を行った。

粘土いじりをするのは久しぶりで「もうダメ。やめた!」とっては何度もやり直すものもあれば、ろくろを使って見事な陶器を作るものもいた。大体2時間くらいでそれぞれが傑作(?)を完成させた。

辺りを少し散歩して見た。水田が多く、緑が濃く、小川のせせらぎが耳に心地好い。自然の豊かな恵みを実感した。東京・北九州と大都市での会議が長かったこともあって、心休まる実地研修となった。

### Ananda Martin : 美術館の新たな方法論

テーマ：シアトル美術館のユニークな展示方法について

アナンドは、彼女の住むシアトル州にあるお気に入りの美術館Seattle Art Museumの画期的で興味深い展示方法について、スライドを利用して説明してくれた。展示の特色として、従来の時代や流派、場所(表現方法[絵画・彫刻etc.])等による芸術作品の分類を乗り越え、今までのカテゴリーにとらわれない、斬新で現代的なコンセプトを展示手法にもり込んでいる。例えば、「中国人」というタイトルの展示場では、アフリカ諸国、ヨーロッパ、中東等の古代に作られた中国人の面や彫刻の

#### 東 浩平

写真が集められている。又、アフリカやインディアン民族の民族衣装が集められた展示場には、真ん中に1揃えのスーツが置いてある。マヤ文明の彫刻や民族衣装がならべられる展示場の壁の天井近くには、スペイン人の描いた南米侵略のヒーローの絵が見下ろすように掛けてある。こうした独特の展示の背景にある思想は、異文化との接触におけるステレオタイプやエスノセントリズム等の極めて現代的なコンセプトである。アナンドのプレゼンテーションは、現代における博物館というもののあり方、そして意義を考えさせてくれた。

### 東 浩平 : 俳句と禅を通して見た日本人の精神とアメリカのビートニクス達

#### 東 浩平

本プレゼンテーションでは、日本の伝統文化に多大な影響を持った禅を説明する上で、俳句を禅の芸術における実践と捉え、日本語、英語、両方で書かれた俳句を鑑賞し、禅の精神を理論と感覚の両方から説明していた。俳句は鑑賞のみならず、実際に皆で句会を開き、

禅の感覚を共有することに成功した。本プレゼンは芸術を通じた文化の理解、というものの好例であった。最後に俳句と禅が1950年代のアメリカ文化に与えた影響を、ビートニクスという文学運動を例にとり上げられた。



田中 沙羅

Shariはハワイ出身であることもあり、ハワイの芸術を紹介した。

ハワイにおいてもかつての日本と同様、西欧文化の流入におされ、独自の文化が忘れられてしまう傾向があったらしい。学校でもハワイの芸術について学ぶことが殆どないため、ハワイアンが全てフラダンスを踊れる訳ではない。(日本人だからといって日本舞踏が踊れる訳ではないのと事情は似ているかもしれない。)

テープを使用し、ハワイの伝統音楽をきか

せてもらった。音から察するに、自然物をうまく利用して楽器とみだてているのだろうと想像した。写真なども見せてもらったが、女王らしき人が着物を着ている写真が印象的であった。ハワイも世界の文化から強い影響を受けていることを感じた。

今ではハワイ芸術の見直しがされているらしい。民族固有の文化は大切にしたい。文化の分野においては政治的力は無関係であるのだから。

田中沙羅：現代社会における芸術

田中 沙羅

私は現代社会における芸術の役割について考察を行った。簡単に要約して紹介する。

今日我々は老若男女に拘らず、全ての人間がストレスのたまりやすい社会に生きている。混雑した通勤電車、厳しい受験戦争、年功序列等。このような中で、世論調査も示すように、人々は物質的豊かさより精神的豊かさを求めており、安らぎの時間をもっと欲しいと願っている。自然の中にいると気持ちがりフレッシュされ、穏やかな気持ちになるが、大都市では自然に接しようにも限度がある。もちろん街路樹を植えたり、といった努力は今後もっと促進させて然るべきだが…それと同時に芸術にも自然と同様の機能を担わせることができるのではなかろうか。

物事がうまくいかなくてふさいでいる時、どんなにあの絵が、あの音楽が、自分を慰めてくれたことか…このような経験を思い出して頂きたい。ここで「芸術とは何か」との根本

的命題に立ち返る。私のいう「芸術」とは芸術愛好家のみのものではないし、美術館や演奏会でしか鑑賞できないもの、といった金銭的、時間的余裕のある人のみのものでもない。お気に入りの画家の描いた絵入りのポストカードや、自宅で聴くお気に入りのミュージシャンの音楽、こういった誰の手にも届く範囲にあるものも含め、「芸術」と捉えたい。特に精神的プレッシャーを感じてしまいがちな現代人に、「芸術」はささやかなそよ風の役割、精



神安定剂的役割を担うことができると信じている。

Presentation後の議論のもっていき方で、table discussionの成果は決まる、とはわかっていたものの、その後の議論に対し、何も口出しせず、言いたいことを言って下さい、式

の放任的態度をとってしまったため、table memberも困ってしまっていたようだし、私自身も困ってしまった。discussionをリードするには少なくとも議論してほしいポイントだけでも提示すべきであったと反省している。

## 日向裕弥：外国人横綱をめぐる賛否両論

日向 裕弥

日向は、発表テーマとして国の伝統芸術保護かあるいは国際化かとして議論をよんだ「外国人力士の横綱昇進問題」を取り上げた。まず導入として相撲と外国人力士の歴史の簡単な説明をした。アメリカ側分科会メンバー全員がすでに「スモウ」の存在を知っていて、特に日系アメリカ人のShariがハワイ出身の力士全員の名前を口にし、家族ぐるみで曙関を応援しているときいた時には日本の国技といわれる相撲が予想以上にアメリカで知られていることを知った。次に、外国人横綱誕生の経緯と、それに対する賛成・反対論を紹介。最後に、日本人以外にも角界への門戸を開けている以上、一度力士として入門を認めたからには国籍に関係なく対応すべきであるとし、曙関の横綱昇進時の言葉「外国人としてではなく、力士としてみてほしい」という言葉をあげた。

発表後の意見交換では、アメリカの国技は

何かという問いに以前は野球であったが今日ではアメリカンフットボールといえるだろうとアメリカ側メンバーの一致した答えが得られ、Anandaは、国技の変化の理由について、人々の集中力(attention span)が、持たなくなっているからだとして述べた。集中力の低下の原因はなにかということから、話はアメリカ文化の特質にまでいたった。現代のアメリカ文化は、aggressive、independentといった言葉で表現されるが、個人の自由と独立が追求された結果、自由の野放し・責任感の欠如といった事態がもたらされているという意見が出された。そして、多くのアメリカにおける社会現象が徐々に世界中に広まってきた歴史から、アメリカにみられるこの自由の追求から野放しへという傾向が、日本そしてそのほかの国や地域にも広がるのではないかと危惧する複数の意見もでた。

## Kelley Segars：アメリカの音楽

芝崎 厚士

ケリーの発表は、日本とアメリカの音楽の種類に関するものだったが、控え目について何の成果も生まれなかった。プレゼンテーションには15分ほどかかり、質問は特に出なかったため、議論が成立したとはいえないが、

その原因は言語の違いや文化の違いからくるコミュニケーション・ギャップでないことは明らかだった。発表の内容は、中学校の教科書に出てくるような程度のアメリカの音楽の種類で紹介で、サマリーもなく、資料も配ら



ず、発表者本人の視点にもとづいた分析もなければ、議論の題材となるような問題提起をしようとする姿勢もみられなかった。

プレゼンテーションの負担を減らすという試みは、今回の会議の一つの改革としてなされたことであるが、それがこのような結果を生むようでは、分科会の存在理由さえ疑って掛からざるを得ない。何を話しても成果が上がるのはこの会議の特色であることは確かだが、参加者の意気込みを吸収するだけの最低限のリクワイヤメントとして、せめてある程

度の内容と実質を持つリサーチを各自が行うのは当然ではないだろうか。もともと日米学生会議は、分科会での議論をその本質として出発している。現在の分科会の状況は、日米学生会議の「会議」としての性質が形骸化していることを如実に示している。しかし、会議としての日米学生会議と国際文化交流としての日米学生会議との関係は、ここで論じ切れるほど簡単な問題でもない。今後の実行委員諸氏の努力に期待する。

## Jeff Bennett：現代美術の可能性

日向 裕弥

Jeffは、まず生まれ育ったウエストバージニア・モーガントウンの知人であるロトゥー・マックドゥルの描く故郷の風景画を分科会メンバー全員に配った。続いて、マックドゥルの後期の絵を、近代美術の教科書から紹介し、作品に見られる色調や使用素材などの傾向の変化を指摘した。このように、同一の芸術家の創作物の傾向が変化する理由として、

多くの芸術家たちは芸術活動を続けていく一過程として成功をめざして大都市へ移動する傾向があり、その環境の変化に対応しているからであるとして、教科書にのっている他の近代芸術家の作品も例にあげながら説明した。最後に、「人生は振り子のようだ」とたとえて、芸術の創造力は、決してとどまることはなく常にいつたりきたり変化しているとまとめた。

## 芝崎厚士：ポップ・ディランと地球共同体

芝崎 厚士

ポップ・ディランほど社会に無関心なアーティストはいないのだが、ポップ・ディランほど社会が関心を持ったアーティストもいないだろう。1941年に生まれ、1962年にデビュー以来、32年間に39枚のアルバムを発表している。

当初、ウディ・ガスリーの影響を受け、フォーク界で活躍。数年後、エレクトリック・サウンドを導入して純粋フォークと訣別、同時にティン・パン・アレーのくびきからポップ・ミュージックを解放した。ロック界初の2枚組アルバムを発表、3分間のお定まりのラブソングの全盛期に、

6分間のメッセージ・ソングをヒットさせた。バイク事故、ウッドストックでの隠遁を経て、サイケデリックな時代に逆らうかのようなシンプルさ特徴としたカントリー時代は、いわば半引退の時期だった。彼とその音楽に対する人々の尽きない興味によって、初めていわゆる海賊盤が流布した。“Dylanologist”とよばれる人々は、あらゆる方法でその作品や私生活の秘密を分析し、数多くの伝記を書いた。

65万枚のチケットに1800万人が申し込みをしたという1974年の全米ツアーから、彼の活動は

再び加速した。その才能を最大限に拡大した70年代中期を経て、突然キリスト教に傾倒したゴスペル・ロック時代に突入。初のグラミー賞と引き替えに、いわゆる「ファン」の多くを失った。即興性が重要な要素である彼にとって、80年代は高度に発達したレコーディング技術との闘いであったが、結局は傑作を出して健在ぶりを示し、1991年にはグラミー賞のLifetime Achievement Awardに輝いた。最近ではトラディショナルの弾き語りアルバムを発表、同時に1988年以降毎年100回以上ものライブをこなし続け、1992年にはデビュー30周年記念コンサートが行われた。

1963年のワシントン大行進ではJoan Baezと共に歌った。“The Times, They Are A-Changin'”は、米国において演説で最も多く引用される言葉である。1971年にはバングラデシュ救済コンサートに出演し、1975年には入獄中の黒人ボクサーの無実を訴えるシングルを発表し、支援コンサートも行った(そのルービン・カーターは1985年について釈放された)。この頃にはカーター大統領の演説にも登場した。1985年には“*We Are The World*”に参加、さらにLive Aidのトリを務め、同年のNew Musical Express誌の特集では、最も重要なアーティストの1位となり、偉大なアルバムTop 100の中に4枚の作品がランクされた。

アメリカの生んだ20世紀最大のアーティストの一人と呼ばれ、クリントン大統領の就任式で歌うようになって、彼は何も変わらない。彼は人間の無意識にあるレベルで起こっている現象を鋭く感じとり、それを歌にしているだけである。彼は自分の本当にやりたいと思ったことを、他のだれかが何を言おうともやり抜くことに徹している、芸術家である。

芸術は、今の段階では、人間の根源的な意識を最もストレートに表出させることのできる手段

であると僕は信じている。地球共同体的な発想にもとづいて協力関係を結ぼうとするときに、最も問題となるのは、お互いが本当に何を考えているのかをいかに正直に打ち明けることができるのかということである。

それは、言葉を変えれば、思ったことをそのままいうことを、何の損得勘定(感情)抜きでできるという意味で、不信感の克服である。相互理解の促進が平和を生むという主張は、あまりにもナイーブである。相互理解はより複合的な視点にもとづいた理解を生み得るから、より正確な相互理解にもとづく協力を生む可能性と同時に、より正確な相互理解にもとづく対立を生む可能性も孕んでいる。もちろん、より深い誤解を生む可能性についてはいうまでもない。相互理解は理解を生むだけである。

問題になるのは、お互いを理解する際に、何度でもあきらめずに試みること、自分自身を出し、相手を受け止める際に不信感をできる限り介在させないようなシステムの確立と個人的な資質にもとづく努力の継続とにある。そして、芸術は(無意識下の意識表出がなされているような素晴らしいものに限るが)そのような不信感の壁を打ち破る有効な手段なのである。

私は以上のような観点にもとづいて、ポップ・ディランを題材に議論を行おうとしたが、時間不足と疲労感のせいで十分にはできなかった。

私がディランを取り上げた理由は、別にディランをみんなに理解してもらおうと思ったからではない。ただ、ディランを分科会のメンバーがどう受け止めるのか知りたかった。それだけで十分だった。疲れていたことを割り引いても、自論を十分に展開できなかったことをさほど悔やんてはいない。芸術を説得力にもとづいて理解してもらおう・させようという試み自体が無意味だということに私は気付いたためである。



## ビジネス (Business)

総括

割石 俊介

ここ近年のJASCとは違い、第45回のビジネステーブルは非常にシンプルなネーミングだった。「日米-」、「現代の-」などのまぐら言葉が一切着かない「ビジネス」というタイトルの分科会だった。これは考えるのが面倒臭かったわけでは決してなく、後に分科会のメンバーとなる皆に、先入観なしに真っ白なイメージで単に「ビジネス」と聞いた時に心に浮かぶものを大切にしたいと思ったからである。また、コーディネーターの私としては、日米摩擦、多国籍企業、ASEAN・NIEsの台頭…といった今日のビジネスで耳目を集める「現象」をただ単に「話題性があるから」といった理由で取り上げ、意見を交わし、何か分かったような気になる、というような底の浅い分科会になって欲しくないと思っていた。安易にまぐら言葉を冠することは「底上げ」の第一歩のような気がしたのである。

ディスカッションとフィールドトリップ(以下FT)がテーブルの二本柱だった。FTでは東京で河合塾(教育産業)、エッソ石油(エネルギー産業、MNC)、九州でスペースワールド(レジャー産業、新日鉄の多角経営)、新日鉄(日本の基幹産業であり九州の地場産業)といったところを訪問し、現場を見学し、意見を交わすことができた。どの企業も非常に温かくもてなして下さり、本を読んで勉強するのとは異なる、印象に残る機会となった。

ディスカッションの詳しい内容は個々の説明に譲るが、極立ったのは、日本式・アメリカ式経営といったものに焦点を定めたメンバ

ーが多かったことである。そしてどれもが単に日米の典型的経営方法の比較検討にとどまるのではなく、それを通じてより普遍的・理想的な経営スタイルを模索しようとするものであった。

個人的に印象に残ったのは、ディスカッション中、メンバーの一人が「企業の目的は利益の追求にあるわけで、企業に社会的貢献を期待するのは間違っている。私は将来MBAを取るつもりだけど、それはべつに社会に貢献したいからではなくてビジネスシーンで成功したいからであり、金をもうけたいからだ」と強く主張していたことだ。私にとってなぜ印象に残ったかということ、私はまだこの企業の役割(目的)といったものについて模索中であり、確たる回答を持ち合わせていないので、彼女の自信たっぷりの主張ぶりが心に残ったのだろう。

企業倫理・企業市民、といった考え方。フィランソロピーといった取り組み。特に日本においてそれらがメセナと呼ばれ、バブルの徒花のごとく不況の昨今下火になってしまったように、それらは所詮営利追求のオマケに過ぎないものだろうか? 「ビジネス」とは「金もうけ」であり、それは個人の幸福とか社会の発展(本質的な意味において)といったものと常にトレード・オフなのだろうか? 日本に於いて「社員」と呼ばれる人口も本当はやはりただの「従業員」にすぎず、リストラによって国外へ溢れ出し労働市場で売買される「労働力」にすぎないものだろうか? 「企業は倫理を持ち

市民として社会に貢献する為に存在する」などという考え方は「理想主義」に過ぎないのであろうか？

しかし、私が思うに、好むと好まざるとに拘らず、企業は今や資本主義世界システムの中で縦横無尽に活動しており、それを「所詮奴らの目的は金もうけ」とクールに眺めるのは余りに危険ではなからうか。「営利追求には興味がないから公務員になるさ」とあなたが言ってみても、あなたはトヨタの車でオフィスに向い、IBMのコンピューターでデータを読み、ネスルのコーヒーを飲んで休憩するのではないだろうか。そして企業は顧客のニーズに応えることにより利益を生んでいるのなら、利益の源泉は他ならぬあなたではないだろうか。

今の日本はバブルの酔いもすっかり冷め、不況だ、リストラだ、企業内失業だと誰もがおびえているようだ。そして財界も政界もサ

ラリーマンも、としまえんまでもが景気回復を待ち望んでいる。バブルの最中もバブルの後も我々は何も変わっていない。「すぐ一色となって世の中をおおうムードに乗らされるな」ということこそ、我々がバブルの崩壊から学ぶべきことではなかったのか。

「日本経済は世界一だ」とゴーマンになろうにもなれない今こそ、じっくり腰をすえて、企業とは？ビジネスとは？といった根源的な問いを発してみるべきだと思うのである。我々は安い労働力を求めてNIESへ、ASEANへ、中国へと流浪の民のように出ていく為に経済発展を遂げてきたわけでもなければ、コンドラチェフの描いた山や谷で笑ったり泣いたりする為に毎日働くわけではなからう。ビジネステーブルで根源的な答えを掴めたとは思わないが、自分の中で問いを発する機会にはなった。これが私個人のビジネステーブルでの成果だと思う。



(左より)上原 由美子、George Lekakis、Sona Vaish、Dana Reed、  
Don Gibbons、割石 俊介、岩田 康志、山田 美那子



山田美那子

ビジネステーブル、プレゼンテーションのトッパッターは、ビジネスについての知識が皆無に等しい私だった。テーマは「新教育産業」。まず、日本の教育システムについての簡単な説明をした後、新教育産業の中でも塾、予備校を取り上げ、その実態を市場売上や拡大事業などの数字・例を挙げて示した。そして、このような産業を単に受験戦争が生んだ産物として捉えるだけでなくその背景にある日本社会の構造について、テーブルメンバーで考え、討論した。

米国にはない産業だったため、米国側デリゲーツは、塾、予備校そのものにかかなり興味を示し、その具体的な実態を理解してもらうために日本側デリゲーツの個人的な体験談も議論の中に織りこまれた。米国側デリゲーツは、日本の会社人間誕生の過程をこの新教育産業に見い出したようだった。

## Don Gibbons：日本的経営とアメリカ的経営の比較検討

山田美那子

ビジネステーブルで、いつも議論を引率し、方向づけてくれる存在だったDonのプレゼンテーションは「Zタイプ組織」についてだった。

彼はまず、日米の組織における管理システムのスタイルを、雇用、人事考課、昇進、意志決定、責任の所在、人に対する関与度について比較し、類型化し、日本タイプ(Jタイプ)、米国タイプ(Aタイプ)それぞれの長所を合わせもつZタイプについての説明をした。Zタイプとは、長期雇用、勤勉重視の人事考課、ゆっくりとした昇進制度、非専門的職歴、定期的な異動、集团的意志決定、個人責任とい

プレゼンテーションの翌日実施された、学校法人河合塾へのフィールドトリップでは、実際に生の塾生の声を聴くことで、更に理解を深めることができた。「なぜ、いい学校に入りたいのか」という問いに「親がそう望むから」「いい企業に入るため」と本音を語る塾生に米国側デリゲーツは、何を思ったことだろう。日本側デリゲーツも、身近なトピックだったゆえに、自らをその塾生に置き換えて、考え込んでいた。

産業そのものとしては、米国側デリゲーツからは、「アメリカにもこういう勉強のアシストをしてくれる所があったら、教育水準が上がるのに」という意見もあった。個性や人間性の育成の問題はさておき、日本の教育水準の高さを保つという点では、高く評価されているようだった。

う特色を持ち、アメリカの優良企業の管理スタイルに多く見られる。

Zタイプとは何かを知った後、テーブルメンバーは日米の企業のあり方を管理スタイルを切り口に討論を始めた。就職活動を終えたばかりのWanlyからは、典型的な日本の管理スタイルの具体的な事例が述べられ、会計士を目指し、会計事務所働いている米国側デリゲートのGeorgeは、アメリカ型管理スタイルを実体験を踏まえて語り議論に具体性を増した。

企業も国際化の時代を迎え、多国籍企業や、

合併事業が増加している今、管理スタイルにも柔軟性が求められているのではないかという点で意見がまとまった。日米の管理スタイルだけでなく、他の国の管理スタイルにおい

ても良い点は進んで取り入れ、クロスカルチャル的な管理スタイルがこれからどんどん生まれてくるのではないだろうか。

## 上原由美子：日本企業の東南アジア投資

上原由美子

ここ数年、目覚ましい経済成長を遂げているアジア(特に東アジアとASEAN諸国)において、外国企業の進出が目立つ。日本企業もその例外ではない。これらの企業は、どのような経営形態をとりアジアで生産活動を行っているのか、いくつかの側面から見た。

まず、国別に見ると香港、台湾、シンガポールの順で多くの日本企業が進出している。中国への進出も市場開放に伴って80年代から始まっている。その中、韓国への進出が割と少ないのは日本企業が韓国内に残存する強い反日感情を恐れている事も1つの大きな要因となっている。

また、これらの企業での日本側出資比率にもいくつかの特徴が見られる。香港、シンガポールにおいては100%出資が多く、タイ、マレーシアにおいては50%未満が多い。管理職の構成を見ると、係長から取締役へとレベルが上がるにつれ現地人比率が下降する。これに関連して、意志決定の問題がある。現地でなされる意志決定の具体的例として、従業員の人数、賃金水準、管理者の配職や昇進、年間予算や生産計画の策定、そして売上高・収益の目標設定等が挙げられる。一方、意志決定が最終的に本社(日本)でされるものとしては、工場や建物の建設、資本調達がある。一般的に多額資本移動を伴う資本投資は今だに本社の手にゆだねられていることが多い。

又、海外進出の目的として販路の拡大、低

賃金労働の利用、現地政府の優遇措置の順に多い。進出先国の決定理由としては、市場が魅力的であった、賃金水準が低い、労働力の質が高い、外資に対する優遇措置が厚い、などである。

加えて日本企業の経営形態は特殊性を大いに帯びていると言われているがアジア諸国へ進出した企業はどうであろうか。経営方法全般はほとんど日本的なやり方、又は欧米的なやり方の混合型が多い。意志決定は日本において稟議制といってボトムアップであるのに対しアジア諸国では下部から意見が出ない等のためトップダウンの形をとっている場合が多い。もう一つ、日本と違う点として、しばしばレイオフ(解雇)がおき得ること、そして労働組合というものが存在しないことである。やはり今の時点ではアジア諸国の日本企業は現地人を完全にとり込んだ形で経営しているとは言い難い様である。

日本企業がアジア地域に進出したことにより諸国の経済成長を伸ばすことに直接的にしる間接的にしる貢献して来た。日本企業と共に日本製商品が進出先の社会で浸透してきたことに伴い、最近では日本に対してオーバープレゼンスを批判する声も上がっている。今後、日本企業はオーバープレゼンスというイメージを与えるのではなく諸国社会の貢献にどの様にかかわってゆけるかが課題の一つであろう。



上原由美子

先進国による途上国への投資は増加しつつある。海外投資は安い労働力と市場を求める先進国側と雇用創出とインフラ整備を歓迎する途上国側の利害が一致した好ましい形であろう。投資先としては、途上国の中でも目覚ましく進歩を遂げているアジア地域が注目を浴びている。アフリカ、ラテンアメリカが経済成長に伸び悩んでいる中、アジアでは、ASEAN、NIEsといったかなり強力な経済協

力体が次々と誕生し、今後も成長を続けるであろうと思われる。アメリカ企業も現地で合併企業をつくり低コストで能率的な生産活動を行っており、アメリカ国内で生産するよりもずっと安く生産している。しかしながら、アメリカ企業が安い労働力を求めて海外へ流出していくあまり、アメリカ国内での失業者が増加しており最近社会問題化している。

割石俊介 : 日本の雇用慣行の実体と最近の動き

割石 俊介

昨今の不況下で企業のリストラが叫ばれているが、企業の経営資源の要諦である人材にもそのメスは及んでいる。日本経済の成長神話の要因とされる終身雇用、年功序列、企業内組合のありかたにもかかわってくる大きな動きである。

ここではこういった日本経済の状況を受けて、まず、この議論の前提とされている終身雇用、年功序列といった「日本の雇用慣行」なるものが一般に信じられているように機能してきたのかを議論することから始まった。そして日本経済の構造変化に伴って発生する雇用慣行の変化が将来的にどういう方向へ落ち着くのか議論し、企業と人の関係のよりよきモデルを探った。

議論の中で、日本の雇用慣行は一般的にはかなり単純化して理解されていることが明らかになった。たとえばある資料によると「新卒で就職した先で定年まで勤務する人の割合はわずか1%」だそうである。実際には終身雇用とはいえ、関連企業への出向、早期退職優遇

措置制度などによって労働力はかなり流動的で、「同期」の間では熾烈な競争がある。日本企業の雇用慣行について議論する際に一般的な単純化をしてしまうことを危険だということに気づかされた。

一方で変化は着実に起きている。役付きの社員に給与体形として年俸制を導入する企業も増加してきたことに見られるように、能力重視の傾向は今後も進行しそうである。また、ゼネラリスト指向からスペシャリスト指向への動きも至る所で見られる。

人と企業の望ましい関係は、といったとこ



ろまで結論は、出せなかったが、雇用慣行の動きの底流には経済構造の変貌があり、人々の仕事観や人生観とも関連してくる。表面に

顕れる現象だけでなく、それら諸要素との関係の中で事態を観察していかななくてはならない、と改めて気づかされた。

## Dana Reed：日米における自動車産業比較

割石 俊介

日米の貿易関係が日米貿易“摩擦”と形容されるようになって久しいが、この二国間の経済関係のなかで自動車を巡るやりとりはもっともhotなもののひとつであったし、現在もそうであると言えよう。このディスカッションでは双方の自動車産業の長所、短所の観察を通じて比較検討を試みた。

自動車産業は往時のアメリカに黄金時代をもたらした基幹産業であるが、今やその自動車産業も日本経済の奇跡的復興と多額の貿易黒字のシンボルと変わり、アメリカでは斜陽化してしまった。ディスカッションに参加していたアメリカ側メンバー自身、アメリカの自動車を購入するつもりはない、と率直な所を述べていた。

アメリカの自動車産業が衰退したのは種々の理由が考えられるが、燃費、デザイン、車種の種類(選択の幅)、価格、サポートなどアフターサービスなどすべての面において日本車の後塵を拝するようになってしまい、顧客の支持を得られなかった、という指摘がなされた。それは短期的利益を追及する近視眼的経営戦略、株主を過度に重視する結果としての、従業員／顧客を軽視した営業姿勢、などが結実したものであった。これはちょうど日本の車メーカーが長期的視野にたった設備投資、従業員重視(不況期においても安易な人員整理はせず人、技術革新などの手段で対応することなど)／顧客重視(充実したアフターサービス体制、低金利のローンなど)などを通じ

てその成功を勝ちえてきたのと対照的である、との観察も合った。

しかし上記のような趨勢は永遠のものではないことは最近の動向についての言及の中で明らかになった。日本車は消費者のニーズよりも競争原理に従った過度に頻繁なモデルチェンジを繰り返し、バブル経済にのって過大な設備投資を行い、売上が上がっても利益の上昇しない構造に陥った。そして折りからの急激な円高で価格競争力を低下させた。一方のアメリカの自動車メーカーは大胆な事業の再構築により性能面でも価格面でも日本車を凌ぐ製品を市場に提供し始めた。日本の基幹産業は危機的状況下にある。

このように議論を見てみると、競争力のある車は日本車でもなければ、アメ車でもない。顧客のニーズにもっとも適った製品がもっとも競争力があるのであり、顧客ニーズ適応力と環境への対応力がある企業が最も優秀な企業となるのである、ということが明らかになった。そもそも経済活動がグローバル化した現在に於て、アメリカ車／日本車という区分が適当かどうか甚だ疑問である。ローカルコンテンツ法などでアメリカ車の定義を試みたりしてはいるが、どうもじっくり来ない。ますますグローバル化のすすむ企業活動、消費活動であるが、その最終的な勝者は日本メーカーでもアメリカメーカーでもなく、消費者なのかもしれない。



私は先日ソニーの盛田昭夫会長が発表し、さまざまな論議を引きおこした論文について説明する。この論文は「日本型経営が危ない」という題で1992年2月号の「文藝春秋」に発表され、良いものを大量生産し、低価格で販売するという従来の日本企業の価値観が必ずしも欧米には「競争のルールが違う」として受け入れられないという盛田氏の体験から生じた疑問と、今後の日本企業のあるべき姿を書いたものである。

そこでは、日本の企業は、国内の競争に勝つために価格を低く設定するとしている。それでも何とかやっていけるように遮二無二働き、同時に労働者の賃金、株主への配当は低く押さえ、また必死になって技術革新を進めるのである。そして、そういったやり方で国内のシェアを広げ、確保してきたが、国際化とともに日本企業はこのようなシェア競争を世界中に広げ、外国企業が悲鳴を上げているのである。そこであげられる問題点として、労働時間、労働分配率、株式配当性向、取引先との関係、地域社会との関係というのがある。

こういった競争のあり方を見直すためには、日本企業がもっと賃金を引き上げ、労働時間を短縮し、配当を増やし、社会貢献や地球環境への配慮をすべきではないか。そうすれば自ら、そんなに低い価格は設定できなくなり、先進国としてふさわしい価格体系になり、世界との共存ができるというのが、盛田会長の考えである。

この論文に対しては「理想論ではないか。どうやってこれを実現するのか」とか「総論としては立派で、正面からは反論しにくい」が、具体的に実行に踏み切れるのか」という反論がたくさん上がりさまざまな議論を引きおこした。私としては、盛田会長は尊敬する人の1人でもあり、この論文には大きく影響された。正直な感想としては、この論文は1つの方向づけを日本経済にしたという点でとても良かったのではないかと思う。しかしながら、まだ盛田会長も生産者の立場に立っている。もっと消費者の立場に立った考え方をすれば、違った意見が出てきたのではないだろうか。ちなみに、「消費者重視の経済政策を問う」というのが私のゼミのテーマである。

日本は多くの国々に対してと巨大な貿易黒字があるが、米国は驚くほどの額の赤字がある。この貿易黒字は、日本の輸出が輸入より圧倒的に多い結果である。多くのアメリカ人は、この貿易不均衡は世界経済の安定をおびやかすものだと、国際貿易における均衡を望んでいる。彼らは、日本が外国の競争か

ら自国の産業を守り、比較的開かれた世界市場を不当に利用していると非難しているのである。

また、日本の貿易黒字は主に日本政府と実業界の間の不当な共謀の結果であるとも言われている。この点についてピーター・ドラッカー氏は、日本政府は経済発展のためにある

産業に的をしぼり、その産業の世界市場を支配するためにその企業に援助を行い、国際競争から保護していると指摘し、これを「日本株式会社」と言い表わしている。

以上のことは、我々の目標でもあるグローバルハーモニーを達成するためにも日本と米国の関係について熱い討論がなされてきたが、主張者の多くは一部の情報だけに論拠をたよっていた。問題の本質を理解し、解決策を達成するためにはお互いがよりよく理解するこ

とが大切なのである。

日本と西欧は多くの文化的相違はあるが、政治や経済の哲学は類似しているのである。それぞれの基本的な仮定は、自由市場には効率が存在するということである。自由市場での働きは、より高い生産性や技術革新に導き、製品に価値を加える企業間の公正な競争に基づいているのである。そして、この最大の受益者が消費者なのである。



## 経済開発

### (Economic Development in the Pacific Region)

総 括

平竹 雅人

当分科会では経済開発過程で生じる諸問題を考察するとともに、「開発」、「近代化」とは何か、日米両国の果たすべき役割、我々の求めるべき経済体制とは何かを考えてみました。

開発の問題は現在人類が直面しているすべての重要問題の中、最も緊急性の高いものです。「開発」とは広い意味で生活の質を向上させることです。そのためには所得の増加だけでなく、環境の整備、保健栄養水準の向上、個人の自由と権利の擁護等の実現が不可欠です。更に南北諸国両者にわたっての環境、人権、如何なる開発を望むのかといった点に

対する教育の改善を必要としています。

このような側面を踏まえた上で、我々は政府開発援助、非政府団体、海外直接投資、開発と女性、持続可能な開発と地球環境保全、とは何かについて議論しました。調和、そして共生に向けての日本の役割、米国の役割についても特に議論が深められました。夜を徹しての真剣な討論が重ねられ、この問題の重要性と皆の関心度の高さを再認識しました。最後にこの溢れる熱意のなかにこそ解決の一步が有ることを皆で共有出来た事に感謝したいと思います。



(左より) Christopher Guerriero、平竹 雅人、細江 葉子、Jessica Jensen、Nathan Swanson、貝原 健太郎、西見 さつき、Jin Gil Lee

## 平竹雅人：多国籍企業(MNC)と経済発展

平竹 雅人

発展途上国における多国籍企業の効果として、まず技術的効率性の直接効果と伝播の効果、伝播的効率性が考えられる。前者は優れた生産関数の移転を示し、後者はMNCの存在に対するデモンストレーション効果、生産活動、経営活動方法全般のスピルオーバーを示している。これら初期の産業発展のプロセスを理解するとともに、受入国政府に対する影響力、経済効率、経済成長、社会福祉に与える影響を議論した。特に発展途上国の対抗力、交渉力の強化に関して、投資に対する競争の激化、サクセフルイミテーションの増加による変化等まで幅広く考えられた。

更に、先進国と発展途上国という南北構造がMNCの登場により変化するのではないかという点について議論された。発展途上国の政治的圧力と工業立地の経済性的変化から、受入国政府とMNCによるある種の経済同盟が成立し、北から南への垂直的・二元関係からMNCを媒体とした多角的なインタレストを構築することが可能になったのである。事実、多くのMNCはアジア・アフリカ地域に先端技術を移転し、結果として当該地域に比較優位がシフトした。これら貿易制度の変容、多国籍企業の可能性について様々な角度から議論された。

## Jin Gil Lee：環太平洋経済圏における直接投資

平竹 雅人

80年代後半からの海外直接投資の急激な増大は、アジア諸国と日本の貿易関係の発展のみならず、相互依存の深化を促した。米国並びに日本の経済ダイナミズムの伝播は90年代に至り、貿易主導型の発展から直接投資主導型のより自律的発展構造へと変化させた。こうしたアジア太平洋地域における海外直接投資の影響を世界全体の直接投資に占める位置づけ、直接投資の面から見たNIEsの役割、等の視点から議論した。

また、その類似性が高まっているにもかかわらず

ならず要素賦存比率のよく似た先進国間で何故貿易、相互直接投資が増大しているのかという点に関してヘクシャー＝オリーンの貿易理論への批判的考察が加えられた。バグワッティの言う相互投資侵入論やクルーグマンによる規模の経済、消費財選択範囲の多様化等が検討された。

アジア太平洋地域における海外直接投資の構造を日米、NIEs、ASEANの三者の視点から分析し、国際政治学的、又、経済学的にも幅広く議論が重ねられた。

## 貝原健太郎：世界の調和のための日本の海外援助の役割

貝原健太郎

日本の海外援助は第二次大戦で日本が犯した罪への賠償という形で、東南アジアの国々にたいして行われるようになった。1960年代

に入り日本が高度成長を遂げると、それに伴って日本は海外援助の額を増加させたが、それは日本の企業の海外進出を助けるためのもの



のという色彩が強く、したがって、援助に対して多くの条件がつけられた(Tied Aid)。

石油危機以後は、海外援助にまた新たな役割が強調された。それは石油の輸入ルートの確保である。従って、インドネシアへの援助は増大した。

80年代には、日本も豊かになり、その援助にもまた新たな二つの側面があらわれた。一つには、BHN(Basic Human Needs)を満たすことのできない人々に対する人道的援助、もう一つには、援助の政治化である。

日本のODAにはいくつかの問題があることを指摘しなくてはならない。一つに日本のODAの額はたしかに世界で最大であるが、GNPに占める割合は低いと言うことである。二つ目に援助の構造が複雑であることも挙げられる。外務省、大蔵省、通産省、経済企画庁の4省庁が、海外援助に関係している。そのため、しばしば決定が遅れることになると言われている。三点目に、要請主義が挙げられる。

次に世界レベルでの問題も指摘されねばならない。一つに、累積債務の問題、またそれに伴うIMFのSAP(Structural Adjustment Programme)への反発である。二つ目に、援助

条件の政治化、つまり人権を抑圧しているような国には援助しない、という姿勢に対する発展途上国の反発である。

最後に日本がなすべき役割とは何であろうか。一点目に、日本の援助基準の確立が必要ではないであろうか。なぜなら、今日までのODAはアメリカ追随、もしくは産業保護の側面が強かったからである。そのために、例えば、核兵器を所有又は生産する国には援助をしないとか、発展途上国の女性の地位を向上させるような援助哲学をもつとか、何らかの方針をもつべきであるように思われる。二点目に日本は、BHNだけでなく、BSN(Basic Social Needs)に対する援助をさらに拡大していくのはどうであろうか。つまり発展途上国の道路、港湾、工場など、生産に結び付くような援助が重要である。三点目にこれまでの日本の援助で評価されていた点を、理論化することである。すなわち、「継続性」「予測可能性」「社会基盤・産業資本拡充重視」である。

海外援助は、今後の南北間の問題を対処するにあたって、最も重要な手段となるであろう。日本は、世界の平和を確立するためにも、海外援助の役割を重視していかなくてはいけない。

## Nathan Swanson：持続可能な開発と地球環境保全

貝原健太郎

日本は第二次大戦が終わって間もなくすると、アメリカの市場に激しく参入するようになった。ところがそれに対し、日本の市場が全く閉鎖的であり、アメリカの産業界も政府も、そのような傾向を打破したく思っていたようだ。80年代に入り、日本の不公正貿易制度がアメリカに損害を与えていることが明らかにになると、日本は自由貿易への敵として槍

玉に挙げられた。そしてそれだけが、論理的であり、かつアメリカ人にとっても受け入れることのできる、アメリカの世界市場での低落傾向に対する答えであった。

80年代後半に、日米構造協議が開始されると、日本国内のあらゆる障壁に対し非難を与える動きが最高潮に達した。そして、その中でも、最大のモンスターとして明らかにされ

たのが、日本の『系列』である。日本の会社は垂直的に、水平的にグループを作り、株の持ち合いをして安定性を高めている。そしてこのような会社の在り方は、戦前の『財閥』に由来している。

また大店法もアメリカの企業の日本進出を拒む要因である。しかし、日本政府はそれを改めようとしなない。

世界経済が自由貿易を享受するためには、『系列』の国内市場を独占しようとする保護主義的な態度を改めなくてはいけないのではないだろうか。

## 細江葉子：開発と女性

最近になって、先進工業諸国が発展途上国に対して行っている援助に関するさまざまな議論がなされ、そこで海外経済援助の抱えるたくさんの問題が指摘されている。それらの問題の理由の一つとして、「援助」という概念そのものが先進工業諸国から出されたものであり、それゆえ先進諸国を中心としたもの、先進諸国の都合によって左右される戦略的な意味をもつものになっているということが考えられるだろう。先進工業諸国は、植民地時代に手に入れた発展途上諸国に対する優位、支配というものを維持したいと考え、特に第二次世界大戦後、活発に議論され、尊重されるようになった民族自決の考え方に反しない方法で発展途上諸国をコントロールすることを思いついたというわけだ。それが先進工業諸国による発展途上国に対する海外経済援助を通じた経済的支配であった。

しかし、1970年代に入るとこのような先進工業諸国中心の世界経済の考え方、在り方に対し、新国際経済秩序(NIEO)のように反対す

また二つ目の問題として、果たして系列の独占的な状態が、日本の消費者にとってプラスに、そして経済全体を見渡した場合、効率的になっていると、言えるであろうか。もし他のアジア諸国が、日本を経済発展のモデルとするならば、考えなくてはいけないことである。

日米学生会議参加者として、私は日本の『系列』の構造をきちんと見極めたく思う。なぜなら、アメリカ人の目を通して、文化的な動機をもってされた説明は、時として馬鹿げているからだ。

## 細江 葉子

る勢力が発展途上諸国の中から現れ始めた。これらの国々は、自国の富や天然資源、経済活動に対する恒久主義を始め、発展途上諸国にとって不利な交易条件の改善、多国籍企業の活動に対する規制と監視などを主張したが、先進工業諸国にとって非常に受け入れがたい意見である以上、世界的に広い支持を得ることはできなかった。

このような現状を前にして、「発展」する、あるいはよりより生活水準を手に入れる、という権利は全世界の人々に対して保証されるべきであるし、ある程度高い生活水準にたどり着いている先進工業諸国は、同じ地球共同体のメンバーとして、後ろからくる発展途上諸国に対して手を差し伸べるという努力を怠ってはならないと思う。第二次世界大戦終了後、約50年間続いた東西の冷戦も終わり、本当の地球共同体としての在り方が問われている今、援助の本来の意味、そしてその在り方も、もう一度考え直される必要があるのではないだろうか。



日本の海外経済援助をみてみると、その目的が、利益と戦略に基づいたものであることが分かる。なぜならその多くはグラントではなく、また談合やその種の手段によって日本企業の子会社や系列企業に仕事が割り振られ、援助が行われる地域をみても、アジアを最高に、アフリカ、中東、ラテンアメリカという順番で援助額が大きく違っており、経済的な戦略上重要な地域に片寄っていることが明らかだからだ。この背景には、日本政府内における援助担当省庁の競争という構造的な問題があると言えるだろう。毎年度の予算は、前年度の決算に基づいているため、少しでもたくさん額を、はたから見て有効な使い方で使われなければ次年度の予算が減らされてしまうことになる。そのため、発展途上国を中心とする外国への経済的援助という国際貢献に予算を使い、その結果はできるだけ目に見える形で残るようという配慮がなされるようになる。そのため、最も関係、距離の近いアジア諸国に、目に見える形の援助である橋や建物といったものを作ることになる。そしてその建設を請け負う企業としては、国内企

業やその子会社、現地法人を優先することによって国内にもその利益が還元されるという訳だ。

このように、日本が行っている経済援助は、援助を受ける国の必要に応じて行われるという建前とは裏腹に、金額や規模の大きさ、援助の結果残ったものを見栄えを国内の他省庁と競い、同時に世界の経済大国としての日本が発展途上国のために血を流しているのだという自己満足のために行われているといえる。つまり、本当に必要なものをもてるころからもてないところに移すという援助の本来の目的から外れ、相手国にとって、不要なもの、高価なだけで使いこなせないものなどを買わせ、日系企業と提携したプロジェクトを組んで行くことになる。

この現状を改善していくための手段としては、より小規模なプロジェクト、NGOなどの草の根的な活動の促進、グラントの援助の増加、そして構造的な問題の解決策として、海外経済援助の管轄省庁の一本化と言うことが考えられるだろう。

## I 戦争の遺産

ベトナム戦争においてアメリカがアジアの小国であるベトナムに手痛い敗北を喫したことはよく知られているが、その後、アメリカがベトナムに対して取って来た厳しい政策はあまり知られていないのではないだろうか。この戦争に負けたアメリカは、その報復措置

として通商を禁止した。冷戦体制下での西側諸国はこれに追随し、ベトナムは非共産圏から阻害されることになった。

## II ドイモイ(新しい考え方)政策の実施

このようにして民主主義諸国から追い出されてしまったベトナムは、軍事面、産業知識

面、イデオロギー面において旧ソ連に依存することになったのである。この結果、ベトナム経済は低迷を続け、その打開策として1985年9月に実施された、通貨の切り下げや所得通貨の制限などを含む経済政策も失敗したため、より思い切った政策が取られる必要が出て来た。この混乱期に政権を取ったのがベトナム共産党である。ベトナム共産党は、政治的にも経済的にも劇的な大改造を行ったが、これをドイモイという。このドイモイ政策が取られた時期はソ連のペレストロイカと重なるが、ドイモイの方が、速度、範囲、深度の面でペレストロイカをしのいでいた。また、この政策によって議会の三大政党の党首が辞任に追い込まれている。またドイモイは経済復興のプログラムでもあった。ここでベトナム政府は、海外資本、技術援助、経済援助の受け入れを発表、それに伴い、ジョイントベンチャーに対して納税猶予や国有化しないという保証、主要輸出入財産業に進出した企業に対しても税金免除や資本の収用はしないという保証を明確にした。こうしてベトナムの市場経済化が打ち出されたのである。この政策の背後には、天然資源と労働力は豊富であるが、それらを経済発展に有効に活用するための資本が不足していたという状態がある。

### III 改革への反応：アメリカの見方

ベトナム戦争は、現在に至るまでアメリカ人にとっては思い出したくない出来事であり、感情的にならざるを得ないトピックである。戦後約20年がたとうとしているが、その行方不明者は約2300人にものぼるといふ。それでは戦争終結から現在まで、ベトナムとアメリカの関係はどう変化してきたのか、果たしてドイモイ政策はこの両国の関係に影響を与え

たのか見てみたいと思う。

1951年、アメリカはベトナムに対して最惠国待遇を停止。これを皮切りにベトナムはアメリカによる厳しい経済制裁の対象とされて来た。しかし冷戦が始まると、戦略的に重要なアジアから、ソ連よりの国を創出することを避けるという目的で、一時貿易の正常化が図られた。その後、共産圏の弱体化が進んだ1980年代に入ると、ベトナムがカンボジアを占領していたということもあり、再び米越関係は膠着状態に陥った。ベトナムがカンボジアから撤退すると、アメリカによって、ベトナムとカンボジアに展開する三大勢力からなる連立政府案が出され、再び関係の正常化へと向かうことになる。そして1991年にはパリ平和条約が締結されるが、経済制裁は継続された。その一方で、1993年、他の国際的な経済援助、融資に対して反対するつもりはないと発表したため、日本を始めさまざまな国の企業が進出し、出遅れた形になったアメリカ企業による経済制裁停止の圧力は強まった。

### IV 改革への反応：日本の見方

ベトナムに関しては、日本はベトナム戦争直後から独自の政策をとって来た。例えば、ベトナムのカンボジア侵攻後も、アメリカはASEAN諸国をベトナムから引き離そうとしたのに対し、日本はこの両者の関係を正常なまま維持しようとした。また、サイゴンが陥落してからも、ベトナムがソ連に頼って共産圏に参加しないようにという理由から、14億円という巨額の資金援助を続けていた。このことは、ベトナムの力を強めてしまうことが明らかなのにもかかわらず戦後の日本の立場を維持するための戦略的行為であるとして、



アメリカやASEANの強い反発をかうことになり、ベトナムに対して特別な感情を何ももたない日本は、アメリカをリーダーとする西側諸国の一員であるというだけの理由で経済制裁に参加することになった。しかし現地子会社や支社、工場は架空会社の形で維持されていた。1981年には、国連の監視団の引き上げ費用、自由選挙費用、避難民の帰国費用、そして周囲の関係諸国への経済援助を日本が行うということを含む、アジア地域の平和への計画を発表した。その一方で、日本経済が輸出によって成り立っている以上、ベトナムという大きなマーケットを放っておく訳にも行かないとして、イデオロギー的対立を無視することはできなかったが、1980年代を通じて細々とベトナムとの経済的つながりを維持し続けた。大きな市場であるという以外にも、日本にとってベトナムが魅力的であるという原因はあった。石油である。中東よりも近く、豊富であるという点で、天然資源を国内で自給できない日本にとって、格好の供給源になり得たのだ。そのため、アメリカが他の国々によるベトナム市場への進出に反対しないと発表すると、積極的にベトナム市場にかかわって行くことになった。

#### V 将来に向けて：チェック・アンド・バランス

アメリカとベトナムの関係の改善には、ベトナムのカンボジアからの撤退と、消息不明のアメリカ兵についてはっきりさせるという二つの要因が必要だろう。すでにカンボジアからの撤退が行われた現在、残る障害はアメリカ兵の消息の問題だけである。この調査にベトナム側がどの程度協力するかによって経済制裁の停止も有り得るとされているが、こ

の背景には、急成長を始めたベトナム経済に、できるだけ早く参入しないと、早い時期に参入した他国に覇権を握られてしまうという懸念がある。実際日本を始めとするアジア諸国の進出は目覚ましいとされている訳だが、これはアメリカが競争に加わっていないため、報道の中心がどうしても日本企業になってしまうからだという説もある。

冷戦中は、軍事的、イデオロギー的な要素が外交上重要視されて来たが、冷戦が終わった現在の国際社会においては、経済が重要なポイントになって来ていると言えるだろう。このような世界で、成長を続けているベトナムの市場があり、ベトナム人もアメリカが帰ってくることを望んでいる。そしてアメリカ、ベトナム双方にとって、現在のような日本経済によるベトナム市場の独占は恐れるべきものである、というように利害が一致したのだ。また、ベトナムにおける強いアメリカの存在は日本にとってもプラスであるという見方もある。つまり、アメリカがベトナム市場に参入すると、日本の立場はどうしても二番手になってしまうが、そうなることによって、日本のやり方はアンフェアである、日本はアメリカ経済にとって一番こわい相手である、というマイナスのイメージが消えるので、日米関係は良好になり、日米関係の安定は日本にとってメリットであるという訳だ。では、実際にアメリカがベトナムとの関係を改善しようとするのであれば、何をやる必要があるのだろうか。やらなければならないことはたった二つである。まず政府を承認すること。そして文化協定に調印し、文化的、科学的、教育的交流に関するプログラムを組むことである。ベトナムがやらなくはいけないことは、金融、投資、法的システムの確立、非効率で

腐敗している官僚制の改革、インフラストラクチャーの回復である。これらの改善なしには外国資本の流入を期待しても結果は思わしくないまま終わってしまうだろう。そして日本はベトナムの発展への貢献、ASEANとベトナムの関係改善への努力を続けて行くことが必要だ。

アメリカが対越経済制裁を停止するのは時

間の問題だと思われる。そうしてアメリカはベトナム経済の安定のために市場に参入し、日本と競争することになる。これは日本にとってもプラスであり、日米越三国の利害の一致を見ることになるだろう。このような関係の実現に必要なのは、たったひとつ、クリントン大統領の、対越経済政策停止という決断だけなのである。



## 今日の教育 (Education Today)

総 括

坂田亜也子

教育問題は現在、学生として私たちが常に直面している問題である。しかしいざ捉らえようとすると大変幅広く、難航してしまった。日常的には教育の渦中にありながら、その「教育」を受けるのに夢中で、それを客観的に捕らえるのは難しい。

発表は多岐にわたっていた。テーマは、以下の8つである。教育における多文化主義、公立学校の週休5日制の持つ社会的影響、日本のビジネスの発展における教育の貢献、ビジネススクールの展望、教育制度にみる社会、米国で取り入れるべき日本の学校教育、日本におけるマイノリティー教育、性教育の問題。討議は自然、教育というアプローチを通じての社会比較論、家族論、学校のあり方、女性論、大学入試論、就職論、そして人生論に及んでいった。

実地研修は、学校法人河合塾、UNIFEM、

新日本製鐵株式会社、太宰府天満宮、岡村酒造、木器窯を訪問させていただいたり、お話をうかがったりした。とくに河合塾のフィールド・トリップは興味深いものであった。日米双方から矢継ぎ早に質問が飛び出した。塾というものが学校教育、入試、教育制度、といったすべての問題を内包して存在しているからなのだろう。現役の塾生2人の登場も大いに座を沸かせた。

テーブルでのディスカッションは、それぞれのテーマから総合テーマへ明確に近付いていくものが多かった。それはテーブルメンバーたちの、教育への期待の大きさを伺わせた。普遍的な価値観の育成にたいする教育の今後の貢献に対してである。「Sharing Our Visions」の為、教育は確かに有力な1手段であろう。しかし、諸刃の剣であることも常に忘れてはならない。



(後段左より)Kathie Coble、坂田 亜也子、源 真帆

(前段左から)Adam Goff、田中 澄人、Mandy Sanguinet、吉田 泰治、John Westgarth

アイヌ民族、被差別部落、沖縄の人々といった「マイノリティー」。日本の公立学校では、彼らについてどのように教えているのか。

アメリカでは今、political correctnessなどの動きと共に、ヨーロッパ白人中心の価値観ではなく、いわゆる「マイノリティー」それぞれの歴史や価値観教育を行っている公立学校もある。先日もNY州社会科学委員会が、公立小学校における社会科学のカリキュラムが多文化主義に適しているかどうかという調査を行った。そして、まだ不十分だという判断を下したばかりである。

残念ながら日本では、とてもそこまではしていない。教育は、主にマジョリティーに対するものだ。差別をしてはならないという価値観の形成に重点が置かれている。つまり、

社会全体でまだそれができていないと言う事なのだ。

また、そのような教育さえ行われているのは一部地域にすぎない。例えば、関東圏では扱う事が少ないように思う。この問題について、全く何も知らない中学生が少なからず存在するのも、事実なのだ。テーブルでは、関西の公立中学校において2年間の道徳の時間に、取り上げた資料を提示した。

マイノリティー問題については、フォーラムでも取り上げている。故に参加者の関心も高く、テーブル外の人とも議論を交わした。個々人によって意見は違った。それは、ここで私が軽々しく言及できるものではない。しかし、こうした関心の高さ、問題解決に向ける気持ちこそまず必要であると痛感した。

## Kathie Coble：性教育の問題について

近年のAIDS感染等の増加に従い、性教育の重要性が叫ばれ、そのあるべき姿が模索されている。ヨーロッパ、日本、アメリカの教育のレベルにおけるそれを取り上げ、検討した。

スイスやスウェーデンを初めとするヨーロッパでは、性教育は幼稚園のレベルから始まる。漫画や、アニメを使ったものである。しかしその内容はアメリカであれば、TVでは放送禁止になるようなものだ。予防という目的のためには、婉曲に言ったりすることがないのである。事実AIDSだけでなく、その他性病の感染率は低い。それは、教育の結果による成功なのか。それとも何ごとにもオープン

な社会によるものなのか。

アメリカの性教育は今まで、「～してはいけない」という絶対的禁止の方向にのみ進められてきた。しかし、感染率は依然として高かった。最近では、教える事をきちんと教えて予防しよう、という世論も高まっている。しかし学校で教えれば、今まで知らなかった層にも許可を与えるようなものだ、という反対意見も根強い。現在は、比較的教えるようになってきている。しかし、禁止とどちらが効果が高いかについては、もうしばらく待たなければ分からない。

テーブルでは、日本のケースについてアメリカ側から質問が出た。日本は、特別の性教



育をしていない。ヨーロッパやアメリカに比べると、格段のおくれた。にもかかわらず、AIDSをはじめとする感染率は非常に低い。その理由は一体何なのか。麻薬中毒患者数に

よるもの、道徳教育によるものなど、多数の意見があった。しかし、今後は分からないという意見は一致していた。

## John R. Westgarth : 日本のビジネスにおける教育の役割

---

吉田 泰治

Westgarth君は、「The Role of Education in the Japanese Miracle (戦後、日本復興の奇跡における教育の役割)」というタイトルの10ページに及ぶ論文を下に、8月3日にプレゼンテーションを行った。

戦後、日本の奇跡的復興とそれに引き続くところの現在の経済的繁栄の源はその教育システムにあるとし、そのシステムの綿密な分析を下に、具体的に日本経済、社会行動にどのように効果的な影響を与えているかを解説してくれた。日本の教育システムを、アメリカ側から見たものとしても、もちろん興味深いものであったが、それを、経済的発展の根拠の一つとして結びつける点が、アメリカの視点というのも加わって私には大変斬新に思えた。

結論の中で、日本の暗記中心的な教育、又その弊害の1つである創造性の欠如をあげ

ている。加えて、東大を始めとする社会的に一流といわれる大学を頂点とするピラミッド型の教育機関の在り方にも言及し、それが及ぼす悪影響をあげ、日本の教育システムの批判を行っている。しかし、その一方で、戦後の日本の奇跡的復興と現代の経済的繁栄はそれらの批判的となっている教育システムにあることも否定していない。

その両者の関連は、この教育システムの中で生み出された人間は非常に均質的で、忠誠心を重んじる傾向を帯びるとしている。このような特徴をもつ社会人が、社会を運営する際には数々の効率的な活動ができる。近年、日本人の大部分が自分を中流階級であると認識している点をあげ、さらなる日本人の均質化が進行していることも指摘している。これらの議論を繰り広げた後、彼自身人間教育の重要性を強く訴えていた。

## 吉田泰治 : 日本の大学院教育の展望

---

吉田 泰治

以下は吉田泰治担当で、議論する予定としていた内容であるが、時間の関係で、担当の時間を日本のある高校を紹介するビデオを分科会全員で見ると時間にあてたため、以下は残念ながら議論されずに終わってしまった。ただ、此処で提起する筈の論文は分科会員各自に渡されている。

～日本の大学院教育の展望～

近年、日本の大学教育の改革が議論されており、教室にいる我々学生もその状況を肌で感じているはずである。一つには、偏差値偏重の大学入試制度の問題、またそこから生じる学生の学問に対する姿勢の問題等、大学教育自体の改革要請に呼応したものである。また、今後、18歳人口の減少にともなって、大学自身、存亡の危機に立たされることになる

というのもこの問題が議論される理由であろう。そこで、この論文中では、後者の動機によって始まった大学院教育の改革の現状と今後の展望について取り上げて議論した。“今日の教育”分科会でこの問題を取り上げたのは、アメリカの大学院教育は、法学、経済学、科学、医学、等どれを取っていても国の教育研究機関としては最高のものの1つとして位置付けることが可能であり、日本の大学院教育の今後を考える上で良い手本となると考えたからである。

特にここでは、経営大学院を例として考えることにした。というのも、日本においては社会人教育機関としてこの経営大学院創設の

構想、または実際に開校しているものも含めて非常に現実的なものとなっている。しかしながら、アメリカのそれらのように社会の要請に100パーセント応える所までは達していないと言えるだろう。この経営大学院は、教育機関としての“学問の探求”的な性格をもちつつ、その一方で、社会の現実的な要請に応えなければならないという性格も当然持ち合わせていかねばならない。ここにはまだまだ議論の余地があるであろう。但し、多くの企業が社員を日本ではなくアメリカの経営大学院にまで派遣している現状を考えると、この類いの教育機関が社会的に必要とされていることが分かるのである。

## 源 真帆：学校週休二日制の是非

源 真帆

開国以来、西洋の進んだ文化・文明に追いつこうと走ってきた日本は、敗戦の痛手から立ち直るため、益々彼らを目標に勤勉に働き現在では経済大国と呼ばれるまでの地位を築いた。しかしこのような成功の陰には、企業や国家の利益のために休みなく働く人々や、学歴社会で生き残るために暇を惜しんで受験戦争に備えている子供達といった犠牲があったことを考えるために立ち止まる余裕すらなかったのである。幸い最近、労働、教育の両方で、現状改善の動きが見られるようになった。そこで、この事実を踏まえた上で、これからの特に家庭における教育について考えてみたいと思う。

80年代後半から、政府も労働時間短縮を積極的に進め、労働基準法が改正された。熱心に働くことを美德と考えてきた日本人にとって、現在年間2004時間の労働時間を欧米並みの1600時間に減らすためには、様々な障害を

乗り越えなければならないが、労働者側でも時短を要求する声が高まっており、近い将来確実に実現されると見られる。そこで問題になってくるのが、時短に伴い増加する余暇時間の使い方である。

一方学校においても労働時間の短縮と並行して、昨年9月から月1回の週5日制が導入される等学習時間の短縮が進んでいる。知識や技能を共通に身につけることを重視した教育から、子供が自ら主体的に判断し行動できる資質や能力の育成を重視した教育へと、学校の基調を変えることを求めて導入された週5日制も、実施前には学力の低下や受験戦争の加熱等が心配されたが、実施後のアンケートによると、週5日制の導入による学力の低下は認められないという意見が圧倒的に多く、又、導入に反対していた人々も、社会全体が週5日制になり子供達が休日を通り過ぎ安全な受け皿が確保されれば問題はないという意見



に変わった。

このように親子共に余暇時間が増加しつつある今こそ、躰から学習まで過度に学校に依存した教育の現状を考慮し、家庭における教育について見直してみる良い機会なのではないだろうか？とかく日本人は、せっかく余暇が増えてもその活用法を知らず、家でゴロゴロテレビを見て過ごしてしまうと言われるが、子供達にとって最も身近な人間関係である親子関係の重要性を再認識し、親子で共に余暇や休日の過ごし方を考える等、親子の対話の時間を確保することも、家庭における教育力を回復する1つのきっかけとなるのではないか。例えば親子でボランティア活動等に参加すれば、その活動を選ぶ段階で、あるいは活動そのものを通して、親は子供を躰たり教育することができるし、又、直接何かを教えな

くても子供は共に活動する親の姿から多くのことを学べるのである。

以上のプレゼンテーションをもとに、学校教育における週5日制導入の目標を達成するためには、更に入試制度の改革やカリキュラム編成の見直しが必要であること、又、余暇時間の過ごし方がそのままその人の生活の質を測る指標となるというアメリカ側からの発言をもとに、家庭における教育力を取り戻すためにも、正しい価値観に基づく教育方針や人生哲学を両親がしっかり持っていることが重要であるといった意見が交わされた。私個人としては、やがて私達自身が家庭を持ち、子供の教育という問題に直面した時、家庭の教育力の重要性を決して忘れることなく、何らかの形で実践していけることを願っている。

## Mandy Sanguiet：モザイク社会—多元文化共存の国アメリカ

源 真帆

第1回目のテーブルミーティングでアメリカ側からは、マンディー・サングウイネットから、均質社会であると言われる日本と違ってアメリカは複数の人種によって構成されているが、文化的多様性がアメリカの教育システムにどのように影響しているか考えてみたいという提案があった。

彼女のプレゼンテーションによると、“多様性の中の調和”という概念がアメリカを表現するようになってかなり経つが、“調和”の程度が今問題となっている。アメリカは“チャンスの国”と言われ、このイデオロギーは共通言語と共通文化を目ざした“人種のるつぼ”という言葉で具体的に表現されている。しかし、実際にはより溶け込みやすいものだけが精選されて溶け込んだのであって、白人とい

う主流に有色人種は溶け込めなかった。従って多文化主義という時、私達は何世代にも渡ってアメリカ人のアイデンティティを形成してきたヨーロッパ系アメリカ人だけでなく、有色人種も含めたあらゆる人種のよせ集めであるアメリカに注目する必要がある。

しばしばアメリカでは、学校が少数派民族や彼らの文化に対する積極的な関心を啓発し少数派の若者に対する期待をより高めることに失敗し、逆に彼らを疎外し学問の機会を奪い続けてきた。これに対し、少数派民族の学生達に彼らの潜在能力を気付かせることを目的とした積極的な社会運動も起こりつつあるが、教師達はこの90年代の新しい動きに効果的に携わっていないのが現状である。

統計学的に見ても、ヒスパニック系やアジ

ア系の人口が空前の増加率を示しており、文化的多様性の尊重に失敗すれば、より深刻な問題を引き起こすであろう経済的な差異を拡大することになり兼ねない。私達はアメリカの極端に不安定な状況を目のあたりにして、ロス・アンジェルス暴動等は、彼らの無力さと公民権剥奪に対する深層感情の表現であった。今までは少数派民族にとって、ヨーロッパ中心主義が共通の敵であったが、新たに各民族間で敵意が芽ばえつつある今日、人種や性別や肉体的限界や経済的地位に関わらず、すべての個人に公平さを保障することを目的とした多文化主義教育の普及が重要である。

#### 田中澄人：学歴

私が、話したのは主に日本における学歴問題についてであり、これを解決する手立てとして、生涯教育を提案しました。

先ず、はじめに学歴社会の起源について言及し、人口と教育の一般化による大学受験者の増加に伴う、試験そのものの激化と、受験者達のたゆまぬ努力による競争の加熱があり、どれが先に顕著に現われるようになったかは議論の余地が残るところであるが、いずれにせよ、今日の偏差値教育を生みだすものとなったはずであるとしました。また、産業革命が比較的早くに起きた英国、仏国では、急激な労働力の需要がなかったために、学生の数の増加はゆるやかなものであり、従ってそれ程競争の激化は起こらなかった。これは、階級による大学進学率が非常に固定化されたため、教育の一般化というものがなされる幅が少なかったためである。

一方、革命に遅れた国、ドイツ、オーストリア、日本などでは、急速な文化吸収と消化が

以上の様なプレゼンテーションをもとに、文化的にも言語的にも経済的にも異なる子供達にどのようにして均等な教育の機会を与えることができるか、学校教育に対する期待が高まる中で、多文化主義教育に対応できるような教師をどのように育成していくべきか、さらには英語を母語としない両親と学校のコミュニケーションをいかにして図るか等について話し合われた。日本で普通に生活している私達は、ほとんど気付かないような問題だけに興味深く、アイデンティティの確立に与える教育の影響という観点から日本の学校教育を見直す良い機会にもなった。

#### 田中 澄人

必要であったために、それに伴う教育の一般化が急務となった。この制度上の改革は必ずしも不可欠のものではなかったが、これらの国々はことごとく産業革命のために教育の早期の制度化をはかった。このために、誰もが勉強さえすれば、高い地位につけるという知識偏重主義が生まれた。この傾向が長年続くことにより、向上心や学問の志が高いものよりも、日本においては受験技術と記憶能力が高い者が、勝者として残る構図が出来上がった。この大学受験における、非常に一時期の能力をもってして、人間の全人格として受け入れてしまうのが日本の社会である。そして、これは人の一生を大きく拘束するあまりにも大きな要素である。

人の可能性や能力あるいは実力とは、この青春の一期間にのみ発揮されるのではないので、全ての人に平等の機会と可能性を引き出すために、一生涯の教育というものが必要となるであろう。



アダムは、明治以降における日本の教育について語りました。明治からの急速な工業化の影響で、就業者の増加に効果的と判断された、中央集権の教育が政府により選択されました。これは、仏国から受け入れられたものです。ここで、彼はフランスから「借りた」という表現を使いますが、この表現は彼の発表全体を貫く大切な言葉です。そして、彼の考え方は文明開化によりもたらされた教育実験は、軍人の教育を手始めとして広がったが、1979年を境に個性と自由とが叫ばれるに至ってその終焉を迎えます。しかし、これには昔から有る藩校などが、伝統的家父長制を維持する温床となり、効果的に機能し得ていないのだとしました。このことを裏付けるために元田永孚と森有礼の事例をあげ、1870~1880年において日本の教育システムが、英独式に移行したために起きた混乱と教師の地位の低

さ、高等教育の分離により初期における教育政策は、失敗したのだとしました。

その後、失敗は日本独自の方法により改善されました。それは、一 高い競争は高い刺激を生み出す 二 平等化 三 アメリカより高い敬意が教師に払われている、というものです。これにより日本は、今日にみられるような経済大国になったのだとするものです。ここで、「借りる」ことの重要性を強調しました。つまり、日本は教育を通して欧米文化のすぐれたところをアレンジして風土にあわせて適用したというのです。

こうして、終始日本の教育方法が米国教育より、経済的發展もしくは平均的学力テストの比較において、優秀であるという理由によりアメリカの教育も日本から良いところを「借りて」いくべきだとの結論へ導かれました。アダムは、日本に見習うことを勧めました。

## 食糧問題

### (Food, our Lives, and the Global Community)

総 括

阿古 智子

“食糧問題”はその議題においてはこれまで日米学生会議の分科会において取り上げられることがなかった。今年、こうして一つの議題として取り上げ、議論していくことに決まったのは、このコーディネーター達が、食糧問題について議論することに関心を持っており、ぜひ分科会で議論の場を設定したいと意見が一致したからであった。

現代において、豊かな国に暮らす人々は、お金さえあれば食べたいものを、食べたい時に手に入れることができる。スーパーやデパートには外国から輸入された果物やお菓子、簡単に調理できるレトルトパックの食品や、出来たてのお惣菜など各人のニーズに合わせた様々な食料が色とりどりに並んでいる。もはや、豊かに暮らす人々のほとんどは、昔々がしていたように、田畑から農作物を収穫し、牛や鶏を育て、ミルクからバターやチーズをつくる。という風に自分の手で食べ物を手に入れ、そして調理することが出来なくなってしまった。便利さや贅沢さを求め過ぎるが故に、人間として生きていく最低の術さえ失ってしまったのである。世界の構造が変わり、食糧の供給システムは国際貿易が重要な位置を占めるようになってきた。貿易では国際的に公平な市場原理に従って国家間で取引が行なわれる。そうした経済活動を国際的に活発化していくのは、私達の生活を豊かにするためにも大切なことである。しかし、食糧の貿易は様々な問題を引き起こしている。遠距離の商品輸送は、それに耐え得るようにとたく

さんの農薬や添加物が農作物に使用される事態を引き起こし、人体に深刻な影響を及ぼしている。途上国では先進国に輸出する果物を栽培する際に使う強力な農薬がたくさんの人々の健康を害している。付加価値の低い食糧輸出を主な産業とする第三世界は、先進国の従属下から抜け出せぬまま悪循環を繰り返している。外貨獲得の為に外国向けの商品作物栽培を続け、その土地の人々は食べるものがなく飢え、苦しんでいる。今こそ私達の生活の根本を成す食糧の問題について、真剣に考えていかねばならないという危機感をもちつつ、分科会では話し合いが行なわれた。

農業問題は、日米間においても米の自由化等で議論が絶えないところである。今回、食糧問題の分科会では、アメリカの学生が日本の農業の歴史を調べ発表し、今まで私達日本人がマスコミ等を通して聞いていたアメリカ人の日本の農業政策に対する否定的な意見とは異なる日本の立場に立った考えを述べたり、実地研修として訪れた川越市の農家では、特にアメリカの学生から日本の農家の状況に関して活発な質問がなされた。その他捕鯨の問題等、国際的に論争的となっている問題についても議論し、捕鯨に肯定的な者と否定的な者とはに分かれ、白熱した意見が交わされた。又、ホルモン剤を用いた養牛が及ぼす影響や、農薬汚染についても議論された。そしてこうした様々な議論の中で強調されたのは、やはり農業の大切さだった。日米両国の摩擦における問題についても、そして、世界の食糧貿



易についても単に市場経済の側面から議論するのではなく、生態系のバランスや途上国との関係を考えた上で考えていくべきではないかという意見が出された。日本の農家にホームステイに行ったアメリカの学生は、日本の伝統的な家族と自然に囲まれて時を過ごしたことにいたく感動し、今までこんなに農業の良さ、大切さを感じたことはなかったと農家に滞在した時の様子を話してくれた。私達人間は、もう少し地に足をつけた泥の匂いのする生活を思い出すべきなのかも知れないと述べた者もいた。分科会での議論は尽きる事無

く続き、これからの課題としてたくさんの問題が残ったが、今回の分科会での議論は各メンバーに大きな刺激を与えるものとなったと思う。

(実地研修)

- ・築地市場
- ・ビール工場見学
- ・川越市農家(米、花、野菜)
- ・川越市小江戸めぐり(蔵造り資料館、駄菓子づくり見学、民俗資料館等)
- ・太宰府天満宮(門前町見学)



(上段左より)清水 直樹、Rick Ponzio、Angie Yager、三宅 浩史、Andrew Seaborg  
(下段左より)Jennifer Hu、林 秀美、阿古 智子

## 阿古智子：農の論理～新しい“発展”の価値を求めて～

阿古 智子

社会の発展が金銭的価値で測られると、発展の目的はその価値を高めることに集中されがちだ。しかし、人間社会にとって本当に達成されるべきものは、人間一人一人の成長を促進する環境づくり、すなわち福祉である。現代経済学において、こうした福祉的要素は

組み入れられておらず、全ての経済活動は金銭の取引に基づいている。農業について見ればどうであろうか。世界貿易において農作物の取引は、ガットのウルグアイラウンド等で自由貿易を原則に交渉が進められている。日本も米市場の開放をアメリカを中心にせまら

れているが、米は、日本の農業の基幹であるとしてその開放を固辞している。農業とは、人間にとって一体どのような役割を果たしているのだろうか。阿古は、農業の人間社会における重要性を生態系と人間との関係から論じた。

GNP等の経済指標は、人々の生活状況の実態や、自然の状態等は測定できない。そうした欠陥を補足すべく社会指標の作成が今までいくつか試みられてきた。その中には日本の国民総福祉や、グリーンGNP等で試みられている環境汚染の測定方法等がある。又、人間の基本的必要を測る指標としてBHN(Basic Human Needs)も注目されている。こうした指標はまだまだ実際の政策に応用するには不十分さが否めないものではあるが、現代の環境問題や南北の貧困格差の拡大等の社会問題が広がりを見せる中、ますます実用化を望まれる様になっている。阿古は農業の国際的取引の中で、単に競争原理に基づく自由競争を追求するばかりでなく、自然のサイクルや、人間の健康を配慮した取り決めをするべきだと主張する。貿易が発達したおかげで私達は何時でもすぐに輸入された食品を食べることが出来る。しかし、そうした食品には長時間の輸送に対処するため大量の農薬が使用されている。農薬は確実に私達の体に蓄積され、健康を侵していく。交通手段の発達により、生鮮食料の輸送も可能になった訳だが、やはり不自然さが拭えない部分がある。元来人々

は皆自分の手で食料を獲得し生活していた。農業(漁業、牧畜なども含めて)は地域の共同作業によって成り立っていた。自然と共存するというライフスタイルが自然を利用する方向に変わり、無理な自然の改造による歪みが少しずつ出始めた。もちろん農業も人間が自然を改造した一つの例だと言えるが、工業による自然破壊は全く自然のサイクルを狂わせるものであった。近年有機農業が盛んに行なわれるようになってきたが、こうした動きは自然の力をなるべく損わない、地に根ざした昔ならではの農業を志す動きである。金銭的な豊かさを手に入れ、それだけでない、本当の豊かさの意味を追求する欲求が高まった結果なのかもしれない。又、第三世界の開発に関わる立場にある先進国は、彼らの生活レベルの向上を一面的な金銭的価値のみによって測るべきではない。幸せの価値はそれぞれの地域によって違ってくるし、経済的発展は単に人間社会の発展の手段にすぎないのである。そして、生産と消費を大量に繰り返すことを美德とする経済活動に限界が見えた今、先進国が率先して新しい発展モデルを見いだし、実践していくべきではないだろうか。

発表を通して、問題解決の具体策ははっきりと主張出来なかったというのが実際のところでこれからの課題が残ったが、こうした問題の提起により大いにテーブルでの議論は盛り上がったものとなった。

## 林 秀美：捕鯨問題(1)文化的側面から見た捕鯨問題

林 秀美

私は食糧テーブルで、非常にタイムリーだと思った捕鯨問題にスポットをあてた。

①捕鯨の歴史。一応メインで主に近世～現代

における欧米と日本の捕鯨の目的とそれぞれの利用法、意識の違いなどをレポートした。ペーパーを書き終えてから知ったことだが、



ここ数年はアイスランドやノルウェーからの密輸が韓国経由で行われているらしい。

捕鯨についてプレゼンをしたものの、いくら関心があるとはいっても知識は豊富とはお世辞にもいえないものがあった。捕鯨についての情報、知識に関しては、会議後の方が遥かにふえ、なんとなくかなしいやらはがゆいやらで納得できないものがある。「ああも説明できた、こういう方法もあった、エトセトラ…」。後の祭りとはこのことだ。フィールドトリップで築地市場へ行った時、マグロの肉はそこら中に鬼のようになっている、というか寝そべっていたが、鯨肉をおいてある所は幸か不幸か全くなかった。私は最小限の捕鯨には賛成なので、残念とも言えないし、鯨肉がなかったから嬉しいとも言えなかった。

### 三宅浩史：捕鯨問題(2)鯨の生態学的側面から見た捕鯨問題

三宅 浩史

食糧問題テーブルでは、捕鯨問題についても考える機会をもった。本会議が始まる前、京都ではIWC(国際捕鯨委員会)が開催されるなど、時期的に話題性のあるテーマではなかったかと思う。私のプレゼンテーションでは、総合テーマをふまえた上で、以下2つの論点に絞ってメンバーと話し合うことにした。

#### ①食用動物の“生存権”について

商業捕鯨の全面廃止を唱えるアメリカは、国内的には牧畜によって、牛肉を食する文化を有する。『牛肉』なら食べてもよいが、『鯨肉』は許されないとする根拠は何か？私はこの問題を動物の“生存権”という観点から提起した。地球上の動物を、偏見を超えて等しく地球共同体の構成メンバーとして捉えたときに、ヒトや鯨にはあり食用動物にはないと思われる“生存権”について皆と考えることにした。

しかしもしかすると、どこかの店の冷凍庫の奥深くに、もしかすると密輸された鯨肉が眠っていたのかも知れない。

日本は現在商業捕鯨は行っていないが、将来再開したらどうなるか。反捕鯨国からの圧力で、再開してもすぐにダメになるか。そして、どうやって頭数の極めて少ない種類の鯨を保護していくか。このような問題についても話したが、結局、ベストな考えは出なかったし、しまいには自分がどう主張したかったかということすら分からなくなってしまいそうだった。生活の為に、執拗にせまられて捕鯨をする人々もいれば、商業捕鯨をする人々や国もあり、様々だ。プレゼンを終えた時、「すべての人々が納得する解決策は、いつ、どんな形で出されるのだろうか」と私は考えた。

#### ②食文化の変遷について

商業捕鯨の存続を訴える日本は、捕鯨文化の存在とその重要性を主張する。鯨肉が日本人の主たるたんぱく源であった戦後間もなくに比して、今日その消費量は激減している。戦前戦後を比較して、国民の食に対する嗜好の変化を見てもわかるように、新しい食文化と同様に、それと対照的な古い食文化に対しても寛容でいることは出来ないのだろうか？今でも鯨肉が住民の生活の主要な位置を占めるエスキモーや環境保護の観点から廃絶されるべき焼畑農業の例を挙げながら、この問題について話し合うことにした。

国際的に劣勢を余儀なくされている日本の立場を、その是非を含め、アメリカの学生を交えて日本人としてきちんと認識しておくことの必要性を感じた。

私たちの毎日の食卓に並ぶ農作物は除草剤、防虫剤、漂白剤等の大量の農薬に晒されている。最近、農家周辺に生息する動物が奇形児を生むのが発見されたり、偏食や農薬、保存料・着色料の使用量の増加などが原因で、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎に苦しむ子供たちが増加する等、農薬による影響が深刻になってきた。一方、日本は食糧自給率が1989年現在68%（1960年90%）、カロリーに換算すると約50%を輸入で賄っている状況にあり、「潜在的飢餓国」とまで言われている。輸入食品の場合には収穫までに使用される農薬に加え、輸送中の品質保存に必要な農薬も使用される。昨今の日本の市場開放の動きにより、これからの食糧農薬汚染はさらに深刻になるはずだ。どう対応していくべきなのだろうか。

まず国による農薬使用量および種類の規制強化が必要である。現在、農薬取締法（農水省所管）に登録されている約5000種類の農薬の

うち、その残留量上限を設定しているのはわずか26種類である（食品衛生法第7条 厚生省所管）。残りの農薬に関しては使用量制限をしていないのである。消費者の輸入食品に対する不安を取り除く意味でも、もっと徹底した農薬規制が欠かせない。

消費者の消費態度の改善も課題となる。見た目が良いものは大抵農薬、着色料、保存料に汚染されている。色の鮮やかなもの、形の良いものを好む消費者が減らない限り、市場に供給される食品も変わらない。

加えて重要なのがテクノロジーの進歩である。現在、果樹園などでは果樹を犯す害虫を防虫剤によらず、雌の性フェロモンでおびき寄せて始末する方法などが使われたり、またバイオテクノロジーの分野では、野菜の細胞の遺伝子を操作して味、品質を変えずに、害虫、微生物などを寄せつけない種を作り出す研究も進められている。

日本のコメ問題とその現状について、食糧問題テーブルのメンバーと議論しました。以下、議論の大筋をメンバーの意見を踏まえながらまとめてみました。

日本がコメに対して保護主義的な政策を採り続ける理由として、まず一つ挙げることができるのは、日本の食糧自給率が47%という先進諸国と比較してもかなり低い水準にあることでしょう。また、1942年制定の「食糧管理法」がこれを法制度上支え、日本のコメ市場を実質的に閉鎖的なものにしてあります。その他、

投票価値が農村地区に偏った日本の選挙区割も挙げることができます。これによって、農家に対する補助金を減らしていくことが政治的に困難な状況を作り出してしまいました。しかし、こうした状況は都市生活者に不公平感を植えつけるだけでなく、過剰な生産とそれに伴う減反政策という経済的非効率を産み出しました。他の輸出財産業の影響を受けた円価値の上昇によって、日本のコメは内外価格差が1対8となり、全く国際的競争力がありません。また、コメ市場を従来どおり閉鎖



的なままにしておくことは海外からの批判を浴び、さらに閉鎖的なコメ市場が日本の抱える数多くの通商問題の象徴としてとらえられる危険もあります。

これら問題点を追って、そのつど議論を進めていきました。早急な関税化はやめた方がよいが、市場の自由化は避けられないというのが議論の大半でした。

## Andrew Seaborg : バイオテクノロジーの功罪

清水 直樹

私の出身であるアメリカ、ウィスコンシン州は農業が盛んな州であり、特に酪農には大変力を入れており、私も子供の頃は家畜を見て育った。大学においても農学、畜産学、環境工学、バイオテクノロジーなどの生物関連の先端技術の研究が盛んである。身近に見受けられるバイオテクノロジーの応用例とその功罪について、今日は話をしたい。

バイオテクノロジーの最大のメリットは生物の機能、特質を人間の都合の良いように根本から変えることが出来ることにあるのではないだろうか。農業に於いては、より果肉・実が多く種の無い品種を創ることに、また作物を害虫が寄り付かないものに変えて農薬の使用を抑えることに、さらにまた植物を取り巻く環境を調節して大量生産を行なうことにその威力を発揮している。また医療の分野に於いては遺伝子工学によって体外受精、ワクチン合成、器官の培養・移植が可能になった。その他にも多種多様な応用例はあるが、い

現在、日本のコメ問題は既に対外的な決着をみている。しかし、日本のコメ問題は決して、対外的な問題に限られるものではなく、それ自体本質的に国内問題の性格をもつものです。関税化するかどうかといった議論の前に、いかに日本の農業の大規模経営化を図り、国際的な競争力をつけていくか今後の課題となるでしょう。

れも生物あるいは生命を操作する技術であり、且つ私たちの生活に深く関わるものであるから、その技術進歩は画期的で目を見張るものである。

しかし、こうした技術の進歩が果たして倫理的、道徳的に許されるものであろうか。故郷のウィスコンシンでは食肉用の牛が飼育されているが、その牛の一生は全て人間によって管理される。人工受精によって生まれ、成長促進のためのホルモン剤を定期的に服用されながら肉付きの良い牛に育っていく。私はそういった牛を実際に見た時大きなショックを受けた。こうした生命・成長管理技術はどこまで人間に应用されていくのだろうか。またその研究のために用いられる大量の動物を犠牲にしても良いのだろうか。これから尚も発展していくバイオ技術については皆が実際の現場に赴いて、その功罪を考えていくべきだと思う。

## Jennifer Hu : 日本の農村社会

阿古 智子

彼女は、日本の伝統的農家について発表し、米輸入に関する議論が高まる中、農業の意味

をどのように問い直すべきなのかを提議した。まず、発表前に彼女がホームステイで訪れた

農家での経験を熱っぽく語り、今までの日本の農業に対する考え方が変わったことを述べた。それから、そうした実体験も踏まえ、日本の古くからの農家が家族や地域のつながりをとても大切にされたものであること、農村が自然との関わりを合理的に考えた生活環境を作り出していること、農家が家屋や生活形式等、古くからの日本の伝統を維持してきたことなど、日本の農村社会について発表した。彼女が滞在した農家は、日本の親・子・孫の同居する三世代家族であり、核家族の生活に馴染んでいる彼女は、新鮮な気分を味わった様であった。そして、そうした世代を越えて同居することによって、子や孫が親仕事を手伝い、おじいさん・おばあさんが孫の面倒をみるといった役割分担がうまくなされ、家族間の調和がはかられ、現代社会の冷めた家族関係が忘れていた絆を形成していると述べた。又、農村における地域のつながりは、伝統文化の保存、社会事業の促進等、様々な面において、重要な役割を果たしていることを指摘した。それから、古くからの里山的農村環境は、実に環境面においても、機能面においても、合理的につくられており、農業の保持は生態系の維持に役立つことを説明した。又、

農家には、日本の伝統的生活が残されており、それらを文化財産として保存していくことが望ましいとした。彼女は、ホームステイで滞在した家庭の伝統的日本家屋に大変魅了された様であった。

彼女がホームステイで体験したように、日本の農村には素晴らしい部分が数多く残されているが、やはり社会の変容に伴い、様々な問題が累積している。若者の農業離れによる後継ぎ不足、人口の都市集中に伴う家族構造の変化・農村の過疎化、農業離れによる余剰農地問題、都市化進行に伴う農村地域構造の変化等が問題として挙げられ、議論が進められた。彼女はコメ市場開放に関しても触れ、公平な条件において貿易が進められることは重要なポイントであるが、その国・土地の状況をよく踏まえた上で、話し合いが為されるべきであり、アメリカ人は、日本の農業が果たしている役割をもう少し知る必要があることを主張した。貿易の発達により、現地での食糧生産の必要がなくなりつつあるが、日本の古くからの農村環境にもみられるように、農業が地域社会に果たす役割は大きく、農業を地域の産業基盤として発展させることが課題であると議論された。



## メディア (Media, Media, Media)

総 括

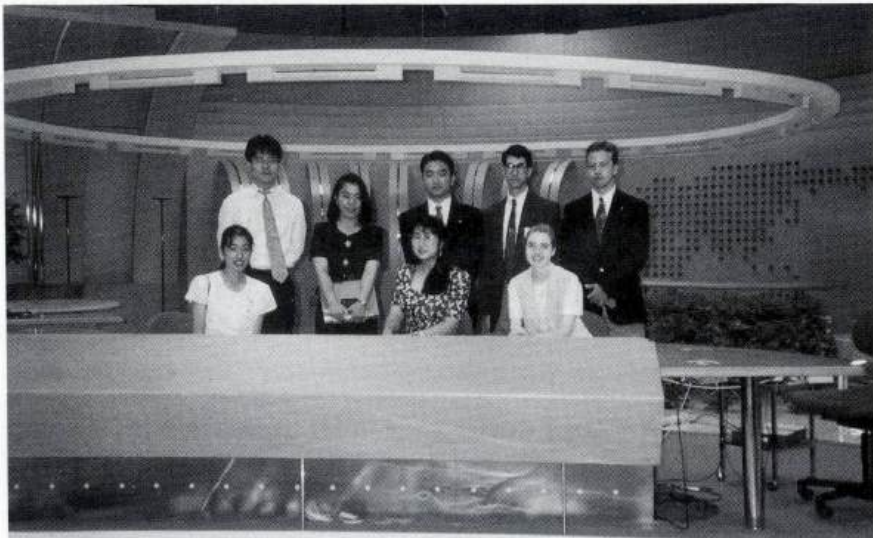
寺澤 実紀

メディアテーブルの英文名称は、“Media, Media, Media”である。これは第44回会議終了時にアメリカ側コーディネーターであるLisa Mizumotoの“MEDIA is here, MEDIA is there, MEDIA is everywhere.”という一言から名づけられた。「ここにも、そこにも、どこにでも」存在し、世界中に広がるメディアの、地球共同体形成に果しうる役割、また地球共同体への貢献を総合テーマに関連づけて話し合った。

各メンバーがそれぞれプレゼンテーションを行ったが、日本開催であったためか、日本のメディアの問題点を扱ったものが少なかった。そのため、「自分のプレゼンテーションの際に詳しく説明するが、……」といった主旨の発言が端々で聞かれたことを記憶してい

る。内容を事前に調整する必要があったと、多少反省している。

実地研修として、5ヶ所の訪問を予定していた。東京では、法と政治テーブルと共にワシントンポスト極東支局長である、Thomas R. Reid氏のお話をお伺いした。また、NHKを訪問し、元ニューヨーク支局特派員の岡部透氏にお会いした。福岡では、西日本新聞社とRKB毎日放送を訪れた。RKB毎日放送ではAndrew Contiがラジオ番組に出演し、彼の故郷であるデトロイトを日本語で紹介した。福岡滞在中にAsian Pacific Journalism Centerへの訪問も予定していたが、九州地方を襲った大型台風が原因で、残念ながら中止せざるを得なかった。センターでは、ジャーナリストとしての経験を持つヨーロッパ出身の留



(上段左より)桜井 周、寺澤 実紀、廣田 良平、Andrew Conti、Roy Schmidt  
(下段左より)恒田 恵美、Lisa Mizumoto、Andrea Bond

学生たちが勉学に励んでおり、「地球共同体におけるメディアの役割」についての討論を企画していた。センター長のウィリアム氏には多大なご迷惑とご心配をおかけした。

マス・メディア論やジャーナリズムを専攻しているメンバーがいなかったため、発表されたテーブル・サマリーや重ねられた議論は、

全く専門的ではなく、稚拙であったかもしれない。しかし、メンバー全員がメディアに少なからぬ関心を持っており、好奇心と恒常的な積極性で実地研修に、そしてディスカッションに参加できたことが、最大の収穫であったと自負している。

## 寺澤実紀：メディア天皇制

寺澤 実紀

東宮徳仁と雅子さんのご成婚に伴い、皇室への関心が各方面、様々なレベルにおいて高まっている。吉見俊哉氏は、「世界」(1993年7月号)に掲載された「メディア天皇制への射程」の中で、34年前の現天皇ご夫妻のご成婚を振り返り、「大衆天皇制」及び「メディア天皇制」を論じている。

「中央公論」(1989年4月号)において松下圭一氏は、「現在よみがえりつつある天皇制は、絶対君主制でないことはもちろん、19世紀ヨーロッパに展開され、日本でも大正デモクラシー時代に指向された制限君主制でもない。今や天皇制は、大衆君主制へと転身しながら、「大衆」の歓呼の中から、新しいエネルギーを吸収しつつあるということ、現在、はっきりと戦中派の実感をこえて認識しなければならない。」と述べ、構造的な変容を遂げた戦後日本の天皇制を「大衆天皇制」と呼んだ。「現御神」として崇拜された天皇を原点とする天皇制は「スター」としての皇室を焦点とする天皇制に転回した。この転換は、皇太子妃や成婚パレードに対する大衆の態度と、メディアの報道姿勢の中にはっきり現れていた。

大衆はパレードを「拝み」にではなく「見物」に出かけ、メディアは皇太子妃を徹底的にストリップ化し、彼女のスター価値を上昇せしめた。「平民出身」であることを大きく報道し、自由な恋愛を強調した。大衆の日常的要求の理想としての、皇室の「家庭」というイメージが随所に窺われ、家族国家思想からの脱却が試みられた。つまり皇室は「スターのモダンで理想的な家庭」として、大衆に受け入れられたのである。大衆天皇制及びメディア天皇制への転身は、一般大衆が心の底から寄せていた天皇制への価値態度に支えられたものではなく、マス・コミ自身が作りだした「ブーム」の上に支えられた「フィクション」にすぎない。

メディアは、大衆を扇動できる壮大なパワーを持っている。「メディア天皇制」は、資本主義の過程で作り出される「大衆文化」の一翼を担い、ワイドショー等では最も人気の高い、安定した「ブランド」として売り出されている。我々は天皇制のあり方を再検討すると同時に、マス・メディアによって製造、販売される「大衆文化」のあり方をも検討しなければならない時期を迎えている。



寺澤 実紀

日々の生活の中で、我々はメディアの渦中  
にいる。メディアは個人の生活から国際関係  
に至るまで影響力を行使し、特に世界的なレ  
ベルで国際理解を深める役割を果たしている。  
だが一方では、誤解を招く原因ともなってい  
る。戦後50年間に渡る両国国民及びメディア  
の尽力によって、日米関係は著しく改善され  
たが、果たしてメディアはその潜在力を充分  
に発揮し、人々に正確な情報を提供してい  
るのであろうか？

相互理解を促進するために、日本のメディ  
アはアメリカに関する多くのドキュメンタリ  
ーやアメリカで制作された番組を放映してい  
る。アメリカのメディアも、数は少ないが日  
本に関するドキュメンタリーを放映し、日本  
のニュースは頻繁に報道されている。ところが  
日本では、メディアがアメリカをステレオ  
タイプ化している。更に、アメリカにおける  
日本に関する報道のほとんどは経済問題であ

り、日本の悪印象を与えている。また日本に  
関する知識不足が原因で、日本人がアメリカ  
人を嫌っていると思込んでいるアメリカ人  
が少なくない。

日米間の誤解は、メディアによるところが  
大きいのかもしれない。だが、人々もその一  
翼を担い、アメリカの国益の介入に伴って更  
なる誤解が生じていると考えられる。アメリ  
カ経済にとって日本経済は脅威的であり、「ア  
メリカは善で日本は悪である」というイメ  
ージは、アメリカの経済的損失を考慮する際  
に都合が良い。そのイメージは、日本のアメリ  
カへの政治的、経済的なパフォーマンスに対  
する人々の反発を生み、アメリカ人は勤労と  
日米協力の必要性を感じなくなってしまう。  
経済競争と大衆の要求がメディアに影響を及  
ぼし、それが再度大衆に、そして日米間の政  
治及び経済に反映するという循環が存在して  
いるのだ。

## 桜井 周：日本メディアの歴史

桜井 周

日本のマスメディアは閉鎖的であるとか論  
調がどこも同じであるなどとよく言われるが、  
そのことを歴史を振り返ることで検証してい  
く。

新聞についてであるが、日本の大手5社の  
発行部数は他の外国の新聞に比べて極端に多  
い。朝日、読売はワシントン・ポストのそれの  
約10倍である。これは①日本に新聞社の数が  
少ない②全国紙がはばをきかせている、から  
である。①について、昔から新聞社の数は少  
なかった訳ではない。現在は百紙余りしか

いが、百年前には千紙以上あった。ところが、  
日本が戦争へ向かうにつれ、言論の統制が厳



しくなり、新聞社を政府が管理しやすいように合併させ数を減らした。同時期にもう一つの閉鎖性の象徴の記者クラブも言論統制の為にできた。②についても、同じ頃に、大手5社を全国紙と定め、また、各県には一紙ずつになるよう政府が指導した。

テレビについてであるが、電波は免許制に

なっており、郵政省の規制と管理のもとにある。従って、政府や政治家の介入の余地があるということである。

結局、読者、視聴者である我々が言論の自由が守られるよう、厳しく監視しなければならない。

## Andrew Conti：政治報道の日米比較

桜井 周

まず、アメリカのマスメディアについてであるが、ウォーターゲート事件では、新聞が先頭に立って批判し、ゆらぐことのないと思われていた、ニクソン政権を退陣に追いこむという、ときには政治とマスメディアが厳しく対立するという緊張関係がある。

それに対し、日本のリクルート事件では、朝日新聞のスクープが発端になり、新聞の追求とともに世論も盛り上がったのだが、政治家、財界人だけでなく、新聞社の役員もリクルート社から株の譲渡を受けていた。不正を追求する側が不正をしては、いきおい追力に欠ける。結果として、株譲渡を受けた政

治家はたくさんいたが、議員を辞職した者はほとんどいなかった。

しかし、日米両国に言えることは、政治報道については、より詳しく正確に報道しようとすればするほど報道される側とする側の距離が近くなるため、癒着が生じる危険を常にはらんでいる。マスメディアは社会に対して巨大な影響力を持つにもかかわらず、チェックするシステムは確立していない。マスメディアをチェックするのは、結局、受け手である我々であるのだから、その自覚を持たねばならない。

## 恒田恵美：メディアの国際化—日本のメディアにみる情報偏重

恒田 恵美

私は、「日本のメディア」に対する「国際化」を問う内容のプレゼンテーションをした。その内容に入る前に、まず、「国際化」の定義について確認する必要がある。国際性が様々な方面で求められている昨今だが、その意味が曖昧であるように感じる。そこで私なりの「国際化」の解釈とは、自己の文化を良く知りそれを他国に教えることであり、また同時に他の文化を受け入れることである。

国際化時代といわれる現在において日本の

メディアはその役割を果たすことができるのか問いた。日本のメディアの特徴といえば、記者クラブ制度による報道協定、皇室報道に関する宮内庁からの規制また、外国のTV局との契約によるアメリカからのニュースの増大などが挙げられる。その他にも、放送法の存在により、メディアの報道の自由や公正さが問われるのだ。日本のメディアは依然として政府にその実権が握られているのである。これでは、いくらアメリカの姿をとらえるこ



とができたとしても、真の日本の姿をとらえることができなく、また諸外国にも伝えにくいだろう。

ディスカッションにおいても、日本の「民主化性」について焦点が当てられた。これは日本の社会を反映しているのであろう。いくら、日本が国際化を求めているとしても、それは

単に外国のものを取り入れるのみであり真の国際化といえないのだ。日本のメディアはこれからの日本をより国際化、より民主化にすることができるキャパシティはあるように感じる。日本のメディアが将来、政府の圧力から解放され、真の国際社会を築く柱となることができるのかが注目すべき点である。

## Andrea Bond：日米間における情報量ギャップ

恒田 恵美

アンドレア・ボンドのプレゼンテーションでは日米両メディアが、互いの国について報道する際にみられる違いを指摘した。両文化を結びつけるのはメディアの役割でありその果たす役割は大きいといえる。その違いによっても私達は大きく影響されて溝を生じかねない、という内容であった。

アメリカのマスコミは政治や経済面でしか日本についてとりあげることはない。その反面、日本側は芸能、スポーツなどを含めて広い範囲でアメリカの報道をする。ディスカッションでは、日本人はアメリカについて多面に関心を払っているのに対して、アメリカは

日本について経済・政治面でしか興味を持たない、ということ話し合ったりした。

そこで、こうした不均衡をいかにして是正できるのかという問いに対して議論を交わした。結局のところ、アメリカ人はアメリカのことにした興味を示さず、その上、州独自のメディア系態があるために外国の特に日本社会内部に興味を持つことがないとした。

これをメディアが改善できるか、といえれば疑問がもたれるが、アメリカ社会で他国に関心を持たせる動機が生じるのを待つのが早いのだろうか……。

## 廣田 良平：メディアの世論操作

廣田 良平

湾岸戦争に関してその道義的な議論は多々あることですが、ここで注目すべきは米国内において、そして世界の各地でアメリカのイラク攻撃開始が支持を得ていく過程でメディアが大きな役割を果たしたことです。

一番印象的だったのは、イラク兵がクウェート市内の病院で幼児を保育器から取り出し、床に放置して死なせたといった証言が公聴会でなされ、アムネスティ・インターナショナルをはじめとした国際的な人権擁護団体もそれ

が事実であると公表したにもかかわらず、戦争終結後そのような事実はなかったことが判明し、その言を撤回したことでした。

アメリカの国際的地位と発言力により戦争の結果は好ましかったと、特に西側では見なされる傾向があったようですが、重要なのは国連という国際機関の公聴会といった場で偽証がなされ、それがイラク制裁の賛成票を生み、かつ国際世論もアメリカに有利になっていったことです。

国際的な意思決定機関が事実関係の誤りを発見することなく公聴会、さらには投票を行ったという事実は由々しいことだと考えます。

国際世論を形成するに当たって大きな要因となる事件に関してはその事実関係を解明する独自の組織を、国連をはじめとする公正が

期されるべき機関は持つべきではないか、そしてそれは地球規模の問題に対しての協力関係が要求されるこれからの時代にとってますます重要になる可能性もあるのではないかと考えました。

## Roy Schmidt : ハイ・ヴィジョンとマルチ・メディア

廣田 良平

科学技術の進歩は目まぐるしく、それはメディア、コミュニケーションの分野においても例外ではない。

技術の進歩により近い将来、我々は居ながらにして必要な情報を必要なときに必要なだけ入手できるようになるだろう。

メディア・ネットワークが多チャンネル化すると、政府機関の規制を度外視すれば、国境を越えて、まさに一人の地球人として個人対個人のコミュニケーションが可能になるにちがいない。そうになると言葉や文化の違いを認識しそれを乗り越えようとする二国間の国際交流といった概念はなくなり、あらゆる人格をもった個人間の国の枠を超えた対話型の交流—交信と言ったほうが適当かも知れない—が主流を占めるようになるであろう。

しかしこれが果たして、我々が本当に望む

形での世界のボーダーレス化であろうか、相互理解の促進であろうか。上に述べたネットワークの社会・文明をも破壊してしまうのではないだろうか。何故ならそれらは人間がある取り決めをかわして活動し、協力を通じて築いてきたものだからである。このような状況では環境などの地球規模の問題に対して我々が共同歩調を取れるかが疑わしくなってくる。

こう考えると、今我々が行っているように、まずあらゆる背景の違いを乗り越えて国境を越えた普遍的価値観の追求と共有に努め、そのようにして得られた地球市民意識を土台にしてコミュニケーション・ネットワークを利用し、連帯感をもって世界各地の人々と人類共通の問題に対処するのが望ましいのではないだろうか。



# 健康と社会

## (Mental and Physical Health in Society)

総 括

高橋 香織

当分科会は、前回迄の「スポーツと社会」、  
「医療と社会」の流れを汲むものとして設定さ  
れた。当会議に於いては比較的新しい傾向の  
分野として発展してきており、政治や経済、  
文化などの伝統的なトピックに納まらない今  
日的な議論を目標としている。英語の分科会  
名は、現代社会では身体面だけでなく心の健  
康も同時に考える必要がある、という私達の  
問題意識を表す。今回はより多様なアプロ  
ーチが可能となるよう、「健康」という一種漠然  
としたテーマを設定したが、その中で8人の  
当分科会参加者は、実に期待以上に活発で率  
直な議論を展開した。外国語・総合政策・人  
文学部という、一見医学とは直接関係を持た  
ないかに見える専攻出身の日本側メンバーが  
提起した問題点は、まさに専門家でないゆえ  
に今日の一般社会の多様な意見を反映し、  
各々の専門分野から鋭く「健康」問題に切り込  
む結果となった。一方、医学修士・救急救命  
士資格者・生物学専攻・プリメッド(医学大学  
院に進学予定の学部生)というバックグラウ  
ンドを持つ米国側メンバーからは、豊富な専  
門知識に基づいた発表がなされ、分科会全体  
の質を高めると同時に参加者自身学ぶところ  
が大きかった。また、数多い実地研修も精力  
的にこなし、官庁での医療政策に関する議論  
から、実際に体を動かしての健康作りの実体  
験まで、幅広く日本社会を見ることが出来た  
のは、米国側参加者のみならず日本側参加者  
にとっても非常に有意義な経験であった。健  
康という古くて新しいテーマを、どう各々の

参加者がとらえたか、議論の経過を以下に記  
そう。

(健康と社会一心と身体のバランス)

実地研修

### ①厚生省老人保健福祉部老人福祉振興課訪問

生活衛生局水道環境部環境整備課大野氏に  
ご同席いただき、老人福祉課矢野氏から、老  
後の保健及び福祉のための総合的施設の整備  
促進に関する法律の施行を中心に、シルバー  
サービスの現状や問題点、方策についてレク  
チャーして頂いた。これから超高齢化社会を  
迎えようとする日本において、国民が老後を  
快適に過ごせるように施設を整えていくこと  
の重要性は明らかである。同課では、国民の  
ニーズの多様化に伴い、民間事業者を福祉の  
担い手としてとらえ、公的機関よりもより高  
度に多様化・差別化したサービスを提供して  
いくための調査・指導を行なっている、とい  
う話であった。講義の後の質疑応答では、高  
齢化の背景、民間業者に委託することが社会  
問題を生み出す危険性はないか、日本にホス  
ピスはるか、誰が老人介護の負担を担うの  
か、老人が住み易い都市計画は推進されてい  
るのか等の質問があり、矢野氏と時間を大幅  
にオーバーした十分な議論が為された。

### ②アサヒビール東京工場見学

食料問題分科会、科学技術分科会との合同  
実地研修。英国では日本と違い生温かいビー  
ルが好まれているそうだが、その栄養価値の

高さから妊婦が好んで飲むという話を聞いたことがある。たんぱく質・炭水化物、カルシウム、カリウム、ビタミンB<sub>2</sub>などをバランス良く含んだビールは、確かに健康的な飲み物と言えるかもしれない。気分をリラックスさせ人間関係を円滑にするというアルコールの良い面と、お酒に頼り過ぎて抜けられなくなる依存症に陥る恐れを孕む危険性について、試飲のビールを手語り合った。

### ③財団法人聖路加国際病院訪問

広報部小川係長のご案内で、1992年に建築された新病院を見学させて頂いた。1902年にトイスラー博士によって創設されたこの病院は、キリスト教精神の下に患者中心の診療と看護を目指している。中央区に聳え立つ近代的な三角形の建物の内部には、至る所に患者第一の姿勢を感じさせる設備が整っている。シングルユニットと呼ばれる個室は、患者のプライバシーを重視しており、他の病室が見えないよう窓の角度にも工夫が為されていた。特に米国側メンバーが目を見張ったのは、診療記録管理室のSSPとSATという保管機と電動棚で、SSPの自動移載装置によって診療記録が自動的に各診療科に送られるシステムであった。小川女史は、献身的に院内を隈無く案内し、また経営面についての質問にも率直に答えて下さった。先端技術と人の優しさとの融合を見るような病院であった。

### ④国際連合児童基金(ユニセフ)

事業調査官久木田氏を、我々の宿舎である吉祥寺東急インにお招きし、当分科会のメンバー以外にもオープンな講義、質疑応答の時間とした。30名以上もの参加者があり、我々のユニセフの活動への関心の高さを窺わせた。

テーマは、第三世界における人々の健康状態についてであり、医療水準・栄養状態・教育・衛生環境等に関して、世界子供白書をテキストに講義が進められた。世界で5歳以下の児童が一日に3万5千人も死んでいるという数字に、参加者は衝撃を新たにした。議論は開発政策における優先順位再考や、人口問題へと進んだが、久木田氏の「児童がこのような劣悪な環境に置かれる原因は、貧困さもさることながら戦争による影響が大きいのだ」という指摘に、私達は平和と戦争についても思考を巡らせることになった。また、米国側参加者で医学専攻の学生の中には、将来第三世界の医療向上に携わりたいという希望を述べる者もあり、我々先進国の人間が何を為し得るのか、積極的に考えていこうとする姿勢が印象的であった。

### ⑤マユミプリージング、ヨガ教室

新宿の同教室に体験入学させてもらい、深堀先生のご指導の下ヨガの楽しさを十分に堪能した。ヨガの呼吸法は、肺機能をフルに活用し予想以上にハードである。全員初心者の方科会メンバーは、見よう見真似で様々な姿勢に挑戦したが、皆の気に入ったのはくつろぎのポーズと最後の締めに行なった瞑想であった。議論に終始しがちな会議の中で、言葉の障害を気にすること無く、存分に体を動かす時間を持てたことは、我々自身の健康にとって非常に有効であった。2時間の運動の後、足取りも軽く教室を後にした。

### ⑥アジア女性交流・研究フォーラム

北九州国際会議場8階の同フォーラムを訪問し、三隅専務理事、近藤事務局次長、篠崎主席研究員、小田課長、吉崎教授らから活動



内容に関して講義を受けた。分科会の時間外であったので、参加資格を問わないオープンな場とし、およそ15名の参加があった。参加者は、北九州市において女性問題をアジアとの連帯で行なおう、という発想のユニークさにまず新鮮さを感じたようだ。そして話を伺う内に、日本の女性問題に関する議論を、アジアの女性をも視野に取り込んで行なうことの重要性を学んだように思う。女性問題に関しては、国連憲章、世界人権宣言、女子差別撤廃条約などの国際法により、男女同権が一つひとつ保障され、また1975年の国際婦人年と翌年からの国連婦人の10年を通して「平等・発展・平和」を達成しようという運動が為されてきた。この問題は国により極めて異なる発現形態をとっており、複雑で重層化していて簡単に論じることは出来ない。しかし、先進国の女性問題と発展途上国のその間には、驚くべき共通性があることも事実である。同フォーラムのような活動を活発化させる必要性をひしひしと感じた。

<最後に>

一ヵ月にわたり、私達は心と身体の健康について、個人レベルから国家レベルまで、そしてまた世界を視野に入れつつ議論した。会議公用語である英語で、時に医学専門用語を用いての議論は容易ではなかったが、出来るだけ率直に交換した意見や知識は、将来私達がどの分野で活躍するにせよ、必ず何かの形で役立つと確信している。宿舎のロビーの片隅で、真剣に生と死について語り合ったことや、移動日の夜厚生省を訪問し、疲れた足を引きずりつつ高揚した精神状態で夜の官庁街を歩いたこと、救急救命の実演に目を見張ったこと等、思い出は数限りない。そして、私達は自分がこの貴重な場に存在している事の喜びを感じると同時に、恐ろしい位の責任を自分たちが背負っていることを常に意識していたように思う。当分科会で私達が経験した全てにおいて、それを実現可能にして下さった全ての協力者に心より感謝致します。本当に有難うございました。そして、当分科会に



(上段左より)Colleen Cebulla、Kenji Hall (下段左より)鈴木 武志、村上 敦哉、  
中村 明日香、高橋 香織、Greg Ruhnke、Cecelia Blue

ユニークな個性を惜しみなく投じ、協力し、盛り上げてくれたメンバー全員及び大切なパートナーである、米国側コーディネーターの

Kenji N. Hallに改めて感謝の意を表したいと思います。本当にどうもありがとう。

## 村上敦哉：死といかにして向き合うか

人種、民族、国籍、文化、社会的地位などに関わりなく、この世のすべての人間にいつかは訪れる最期、つまり死にぎわを直視することの持つ意味について発表を行なった。

「死への準備教育」で著名な哲学者アルフォンス・デーケン氏が唱える、「死を考えることは生を考えることだ」という言葉、つまり、死

### 村上 敦哉

について思いをめぐらすことは、逆説的ではあるが、自分の人生や生き方そのものを改めて考え直すことにつながるという考えに、村上同様、他のメンバーも共感していた。

発表に続く討論では、メンバー全員が各々の宗教観や世界観を発表し合い、かなり奥深い議論がなされた。

## 鈴木武志：食生活のジレンマ

米側のテーブルメイトであるKenji, Greg, Cecelia, Colleenは健康や医療分野に関する造詣が深く、専らこちらが新しい情報を提供してもらおうという面が多くなることが予想された。門外漢の自分にはどんな点で貢献が出来るのかを考えた時、やはり自分の直接体験にまつわるテーマが適切であるとの判断を下した。

食品添加物は病気の有無に関係なく、現代に生きる全ての人間に影響を及ぼすものであり、たとえいかに素人と言っても、決して避けては通れない問題である。まして経済の流通がボーダーレス化しつつある現代においては、パッケージに諸外国の国名が記載されていることは、半ば当然であるかの感がある。

食品添加物に関する問題は、数えれば枚挙にいとまがないほど存在するが、当分科会においては主として以下の四つの問題を提起した。第一に、虚偽の自然食、健康食ブームに関して、第二に、食品貿易は即、添加物及び

### 鈴木 武志

農薬等の流入流出を意味していることについて、第三に、内外の食品に含まれる添加物に対しての法規制について、そして第四に、外食産業やファーストフードの発展に伴う、食生活の変化についての議論を展開した。

これらの主要項目を通じて言えることは、短絡的な便利さと経済的利潤追求の観点からのみ製造や貿易のあり方が問われる時代において、人間の健康状態を保つための最後の砦となるのが、各個人の食品に対する認識度の差位にかかっているという事実だ。

現在、ウルグアイラウンドやEC統合により貿易枠等に関する議論が世界各国で高まりつつある。しかし、自由貿易か保護貿易かをめぐっての攻防を繰り広げる以前に、もっと素朴に永続的な全体としての共生を目指すには、一体何が求められるべきなのかを改めて問い直す時期にさしかかっているのではないのだろうか。



アメリカ合衆国に於けるヘルスケアは、主に雇用によって実現される健康保険に依っている。実に、3700万人の人々がこの健康保険に加入していない。そして、医療技術の発達に伴い、ヘルスケアの潜在的可能性、費用効果性の低い保険への期待が高まり、今やGNPの中で、医療が占める部分は膨大なものとなっている。ちなみに、合衆国に於いて、メディケアとは65歳以上の高齢者に対する医療健康保険制度のことであり、一方メディケイドとは低所得者に対する医療扶助制度である。アメリカが導入した「新しい」ヘルスケアシステムとは、簡単にいえば市場によって費用を下げ、且つ医療の質を向上させようと意図したものであったのである。

日本の国民健康保険制度は点数表と呼ばれる一律1点が10円というものによって、費用が計算される。アメリカではこのようなシステムは連邦レベルでは存在しない。日本では、点数表に基づいて償還という形をとっており、費用は例えば手術の方法など行為別に定額であり、マーケットメカニズムに則るアメリカのように高い金額を出せばより良い手術を受けられるというようなことはなく、これがコストダウンに役立っている。しかし、この点数表の為、医師のパフォーマンスには差が出せないことから、投薬という面では他の先進国よりも総額が多い。

日本は、世界でも平均寿命が高く、そして乳幼児死亡率の低い国である。しかし、日本は他の国と比べると健康というよりも経済的な理由によって人工中絶率の高い国であることから、それによって乳幼児の死亡率が低く

抑えられているという意見もある。一方、自殺率も合衆国に比べおよそ2倍というデータもある。

日本がアメリカのように健康保険制度を変革するとすれば、次の3点が重要なポイントであろう。

1. 日本は既に安定成長の時代に入り、高度成長期にはあまり認知されなかった医療費の負担が相対的に増大してきた。
2. 世界の中でも急激に高齢化社会に向かっていること。
3. 医療技術が、その分配と集中に於いて拡大してきた。

日本の健康保険制度は中小企業と自営業を対象とする国民健康保険と企業(雇用者)によって賄われている組合保険の2つのセクションに分かれている。高齢者に対する保険は、(老人保険として)市町村などの地方自治体によって賄われている。また、自己責任によらない病気、症例(例えば出産には保険が適用されないが、帝王切開には適応される)に対しては全て保険による費用保障がなされている。しかしながら、ここでの問題点として考えられることは、病院が自己責任に依らないと思われる極端に軽度の病気にも対応することになり、単に(これは医師の方も医療費の支払いの増大という面で歓迎しているふしもあるが)高齢者の溜まり場的な存在となる可能性があるということである。

ヘルスケアを供給する側に目を転じると、そこには病院と診療所(20床以下)の反目が起こっている。診療所は病院よりも少ない医療行為に対する権限を持つことになっているが、

診療所では患者を失いたくないという考えから、診療所で診察を受けてから、病院で治療を受けようとする患者を離さないということも生じている。そして、診療所の開業医のほうが、病院の勤務医よりも高額収入を得ているという。

医療の質に対するアセスメントに関していえば、アメリカと比較するとまだ立ち遅れているといえよう。しかし、アメリカにおいても、ジャクソン=ホール・グループによって考えられたような、「管理競争」というシナリオでは、依然として正確で包括的な医療評価が達成されていないといえる事こそ、一番の潜在的な問題といえるだろう。

## Colleen Cebulla：低レベル放射能の人体への影響

鈴木 武志

同じテーブルメイトのColleenは、大学での専攻が生物学ということで、放射能問題に関しては殊に造詣が深く、生物学的主義のためという理由で、ベジタリアンを実践している徹底ぶりだった。そんな彼女が扱ったのは、やはり日頃から取り組んでいる低レベル放射能についてのリサーチであった。

最初の分析は、原子力発電所付近の（正確には十マイル程度）住民には、rhyme diseaseと呼ばれるダニの一種によってもたらされる奇病が多く存在するというものであった。そして、この病気の治癒には大変な労力を要し、その原因と考えられるのが、原発から生じる低レベル放射性物質によるものであるという見解を示していた。

次に彼女が述べたのは、英国のスコットランド、イングランド、ウェールズ地方の原発付近1 km<sup>2</sup>に見られる、background-radiationに関する考察であった。ここでは直

日本の点数表システムは、かなり恣意的に決定されたものであるが、近年では、RBRVSタイプシステムという、資源に応じた相対点数表の採用を図ろうという傾向にある。いわゆる医師のサービスの度合いに応じて還付率を決定しようというものである。日本ヘルスケアにおける費用効果性は、必ずしもそのみでヘルスケアのなんたるかを表すものではない。費用効果性に対する主張は日本には当てはまらないかもしれない。なぜなら、医療は公共財として認知されており、アメリカのように政府の政策には登場することは無いからである。

接的爆のみならず、間接的爆による人体への影響についても触れられており、大変興味深いものであった。また、私のテーマも食品汚染についてのものだったので、植物の発芽防止目的で行われる放射線照射（コバルト照射）について彼女の考えを尋ねてみたところ、そういった手段はアメリカの軍隊の食糧保存に起源を発しているが、安全性の面からは、百パーセントの保障が出来るかどうかについては、大きな疑問が残るということであった。

彼女のテーマを総括した結果、今後問題になってくるのは、高レベルの放射性物質が人体に及ぼす影響というよりは、むしろややもすれば見落とされかねない低レベル放射性物質の取り扱い方であるという結論に達した。

ロシアの放射性物質投棄問題が懸案となっている現在、この様な政治がらみの顕著な事例だけでなく、Colleenが提起してくれた様



な、見逃しやすい日常的事例にこそ、もっと

注意が払われるべき時なのかもしれない。

## Cecelia Blue：アメリカにおける病院前救護と救急救命士の実態報告

村上 敦哉

自ら救急救命士の資格をもつセシリアは、救急車が現場から病院に到着するまでの治療つまり、プレホスピタル・ケアの米国における現状を、自らの体験を交えて報告した。

米国では、特別な訓練を受けた後に資格を得た救急隊員が緊急的な医療行為を行いながら搬送するシステムが確立している。救急隊員は、自らの判断で、あるいは、無線で医師の指示を受けて、交通事故や心臓発作などで

心肺停止状態になった患者の救命にあたるという。その甲斐あってか、米国では、心肺停止状態になった患者の1割以上が助かるとのことだ。

発表の後に行われた議論では、日本の緊急医療制度の現状に話が及んだ。日本でも、92年4月に、救急救命士の国家資格制度が導入されたそうだが、欧米に比べると、やや立ち遅れているという感は否めなかった。

## 中村明日香：女性の社会進出と社会システム整備

中村明日香

日本における、女性の就業率は、近年増加してきた。そのことから、従来日本の高度成長期を通じて形成されてきた、男性優位社会、平たく言えば、「女性は銃後の守り」という単純な構図が成立しなくなっているといえよう。つまり、我々にとって必要なことは、男性も女性も社会におけるキャリアと家庭生活を充分に両立し、且つエンジョイできる社会を構築することであろう。

社会が対外的な社会(ここでは職場Workplace)と家庭と簡単に大別出来るのであれば、双方は常に関連しあっている。日本経済の職場の成功は、個々人の集大成によってなされたのであれば、その個々人の依った、家庭の存在を無視することは出来ない。家庭での問題は一人の人間の精神的負担となったとして、職場の生産性に影響が生じたとしよう。そこで職場での成功を第一義的な目標に置くとしたら、その問題は解決されるべきと容易に考えられるであろう。そこに、家庭を担ってい

た女性の社会進出によって従来家庭よりも問題を生じさせる要因が増えたとしたら、職場の成功を維持するためにも、誰かが補完しなければならないであろう。女性にも高学歴を持つ人が増加するという事は、社会性を経験する人が増えるということである。結果として、高等教育は、社会において存在しようという意思を持つにあたって十分なインセンティブである。つまりここで強調されるべきことは、例え従来のような家庭の維持を行わなくなり職場という新しい社会を得た女性に責任を転嫁してはならないということである。職場での問題が或いは家庭に直結しているのなら、職場にいる人間全てに、家庭に於ける解決方法を模索するインセンティブが存在し得る筈だからである。

家庭における問題が職場に悪影響を与える例とは反対に、職場での問題によって、一方の側から家庭を顧みないことも考えられるであろう。長い通勤時間や接待などに時間を割

かれる場合、家庭での時間が御座なりになることがしばしばである。これは、女性の社会進出という面を考えれば、何も男性に限り起こることではない。つまり、家庭の不在によって問題が生じ、仕事に差し支えることはいずれにしても起こり得る訳である。全体の利益としての職場の生産性あるいは正確性など数々の要素にダメージを与えることは、割けられなければならない。「男性の意識改革」も必要であるかも知れないが、これは男性にとって主夫化を追っているかのように捉えられるかも知れないし、何のインセンティブも存在しない。両性が職場という価値を認知し始めた今、それを維持向上するという面に目を向け、構成員である男女全てが依存する家庭

の重要性を二義的に認識し、維持するようにすべきであろう。つまり男女に限らず、職場維持のためにも家庭は重要性をもっている。全員の利益の実現は、社会システムの変革に反映されるべきであり、それは、社会の構成員の価値観の変革によって達成されるであろう。意識の改革よりも、改革への発言を行なう人々の相対的な総数が増加することで、価値観の変化が生じてくる。職場の構成の変化によって家庭の変化を先導して行く方が賢明な方法であると考えられる。一つのロール・モデルとしての一部のアメリカの社会が考えられるが、彼らに起こっている新たな問題に留意して、社会的な解決を図るべきであろう。

## Kenji N. Hall : 医薬品の適正な供給のために—FDAの仕事と問題点—

高橋 香織

FDA(アメリカ食品医薬品局)は、新開発された医薬品を事前に調査し、商品化の認可を与える権限を持つ。現段階では、FDAはクリニカル・トライアルと呼ばれる私企業の調査団体や大学医学部による人体(実験に同意した患者)への試薬の過程を厳しく監視する一方、医薬品会社が独自に調査・試薬データの記録等を行なうことを許し、その結果を基に認定を行なっている。FDA自身が調査を行なえない理由として、①費用が莫大であること②高度な専門技術をもった職員が必要となること③調査の監視を地方自治体または国家の調査委員会に委ねていること④FDAが政府機関の中でも少数の限られた人員しか持たない弱い存在であること等が挙げられよう。FDAは医薬品に関して問題が生じた場合に、医薬品会社の内部資料を全て入手する権限を持っていない。私企業はFDAの監査に服する

義務を持つが、特許と関係する資料には“機密資料”のスタンプを押し、FDAのアクセスを拒むことが出来る。一般に、新薬が市場に出るには、製薬会社はまず多額の費用をかけて研究開発をし、実験の計画を立て、次に調査委員会に監督を依頼し、同時にクリニカル・トライアルを行い、FDAに認定を申し立てなければならない。調査・研究や試薬には膨大な費用と時間が費やされる為、他社に情報が漏れないように特許に関しては細心の注意が払われる。国民の健康と医薬品の安全性確保の為には、FDAが自ら調査したり情報を全て管轄したりすることが望ましいのだが、現実には上記4つの理由により不可能となっている。FDAによる認可のスピードアップが望まれるが、それには企業側が十分な情報を正直に提供する必要がある。またFDAがより正確な判断を下す為に、独自の調査が可能



な位の子算と権限を獲得する事も求められていると言えよう。ハルシオンや胸部整形用シリコンなど、市場に長年出回った後に副作用の存在が患者から指摘され、発売中止になったり訴訟が起こされたりする製品が多い。国

民の健康に直接影響を与える生命関連商品である医薬品を適正に供給する政策、またその際のFDAと製薬会社の機能再編は、国民医療の質的向上にとって重要な課題として、今日注目されるのである。

## 高橋香織：日米医学教育制度比較—日本の国立地方大学医学部—

高橋 香織

今日、医療問題に関する一般の人々の関心が、以前に比べて一層と高まっている。脳死判定基準など、先端技術の開発に付随して発生した医療の倫理に関する議論や、インフォームド・コンセント等に見られる医師—患者関係の見直し論が、医学界のみならず社会全体を巻き込んで盛んに行なわれるようになった。医療を、専門家の手から自分のものに取り戻し、医療の出発点としようという動きである。これらの新たな傾向に対応し、これからの医療を考えるにあたって、医学教育の在り方を見直す必要があるだろう。地域に密着した住民一人一人の為の医療を実現し、国全体としてその質を向上させる鍵となるのは、全般的な医療教育である。医者という専門家を養成する唯一の機関である医科大学の中でも、特に地方の国立大医学部に注目することで、現状の国家医療政策や医療関係者間に横たわる問題点を明らかに出来るのではないだろうか。そのような問題意識から、会議参加者で地方医学部に通う学生の協力を得て、医者になろうと思った動機、入学後の現実、卒業後の見通し等を調査し、発表を行なった。

人はなぜ医者になろうと決心するのだろうか

か。人の命を救いたいという純粋な動機から医学の道を志望する人もいるし、医者という職業が持つ経済的安定性や社会的地位を理由として挙げる人もいる。これらの動機と共に、現在の入試制度、学費水準、定員数、教育内容、期間の長さ等が、これからの医療を担う人材を養成するのに適当であるかを検討した。国立の地方大医学部は、一都道府県に一医学部を、という政策の下に設立されたが、大学卒業後その地域に定着しようという学生よりも、自分の地元へ帰る卒業生の方が多いという。安易な定員数の増減や、予算削減に伴う研究費の減少、不十分な設備等の影響が、特に地方大において大きい。一旦国家試験に合格すれば、その後公式にチェックされる事がない点や、医者になった後大学に戻って研究するのが難しい点なども紹介された。それを受けて、アメリカ側参加者からは米国での医学教育制度の説明があり、学部の4年間で何を専攻しようと、生物などある一定の科目を終了していれば、日本の医学部にあたる医学専門大学院に進み医者を目指せる点などは、日本側参加者の賛意を集めた。

## 哲学と人生

### (Philosophies of Life and Human Issues)

総 括

西元 宏治

昨年の会議では、第三世界を巡る問題を取り扱う分科会に所属していた。そこでの議論の中で、いつも感じたのは、「どうして、こう議論が噛み合わないのだろう？」ということだった。それは単なる知識の多寡や問題意識の違いというよりも、南北格差やODAという極めて現実的な問題を取り扱いながらも、それぞれの問題に対する個人の問題意識の出発点や各々が重視する価値観などといった部分に対する掘り下げが、十分に行なわれなかったために感じられたように思われた。そのことがこの分科会を担当した直接の動機だった。加えて、自分が将来進むべき進路を考えるうえで、巨大な組織や複雑な制度の発達した結果、一人一人の人間が自らの価値を見出しにくくなっている現代社会の日常における「哲学と人生」が持つであろう本来的な意味を改めて、自分自身に対しても問い掛けてみたいと思っていた。

そして、夏の本会議を準備する立場に自分が身を置くようになり、いわゆる世俗的な価値とは異なった目的を持って活動している日米学生会議という団体に自分が深く関わるようになる中で、それまで自分が観念的な問題としてしか捉えることの出来なかった問題が、より切実で現実的なものとして経験することが出来た。理念と現実の相違、社会と個人の関係、自由の意味、民主主義の難しさ、言葉と責任の関係などなど、「哲学と人生」について考えるに事欠かない、と言うよりは考えざるをえないような状況に約1年間に渉る準備

活動で置かれたことにより、当初の目的はある程度達成されたように思う。こうした分科会に対する意図や実行委員としての経験が、実際の分科会の内容に対してどれだけの影響を与えることが出来たかは、自分でも心許ないが、分科会で参加者が僅かでも自分自身のこだわりのようなものを他の参加者との意見の交換の中で再確認することのできるような場を設定する努力は怠らなかつたつもりである。とは言うものの、日本開催故の常軌を逸した忙しさと参加者が東京・名古屋・京都とに分散していた為に、十分な連絡が取れず、去年の会議での経験や教訓のようなものをろくに伝えることが出来なかつたので、本会議で戸惑うひとがあったかも知れないが、きっと、それも「哲学と人生」を考える上で有益な経験になったのではないかと思っている。

分科会は、日米の参加者が用意したペーパーをもとにした議論のほか、参加者の希望に基づいて実地研修が企画され、ペーパーの発表と併せて実地研修での体験についても意見の交換が行なわれた。

詳細は以下の通り。

<東京>

第1回 ペーパー発表：Monte

第2回 靖国神社見学

ペーパー発表：後藤

第3回 全日空ホテル・ブライダルフェア見学

ペーパー発表：Blanche

第4回 月窓寺・座禅体験



<福岡>

第5回 ペーパー発表：渡邊  
ファーム・ステイ体験

第6回 総合テーマ討論

第7回 ペーパー発表：坂野

第8回 ペーパー発表：一色

<関西>

第9回 ペーパー発表：Mitzi

第10回 ペーパー発表：西元

各発表の議論の詳細については、以下の要約を参考にして下さい。

(最後に)

約1年に涉った準備活動を通して、カウン

ター・パートであったMitziには、担当分科会だけでなく会議全般のあらゆる情報に関して、日本とアメリカの実行委員会間及び連絡が難しかったアメリカ側実行委員会間の連絡係として積極的に活動してもらい、本当に助けられました。僕のコンピューターのメール・ボックスは、彼女からのメールでパンクしそうになったほど途切れることなく連絡をくれました。忙しさの中で、とかく見えにくくなってしまふ海の向こうの実行委員だけれど、彼女だけは1年の間、常にその存在を感じさせてくれました。

本当にどうも、ありがとう。Curtisと仲良く、幸福になって下さい。



(左より)後藤 田鶴子、西元 宏治、Taro Isshiki、坂野 晴彦、  
Mitzi Hnizdil、Blanche Fung、Monite Scholz、渡邊 尚美

## 後藤田鶴子：国家神道と靖国神社について

日本人の宗教観は、国外で理解されないことが多い。国家神道という特殊なものの説明を通して、日本でどの宗教を示してみた。

### 後藤田鶴子

強力な国家の形成を目指した明治政府は、国内をまとめ上げるのに、日本各地の神社を利用した国家神道や、儒教的な家族観を用い

ようとした。

そもそも、神道は、氏神的・地母神的な、原始の形を保った宗教で、西洋の、キリスト教などに当てはまる宗教の概念とは違い、教義や哲学を持たない。日本人は、仏教やキリスト教などの哲学的な宗教を外から受け入れながらも、土地に応じた様々な形で神道を維持してきた。かつての日本政府は、こうした神道の祭祀の部分を取り出し、公的な性格を与え、天皇家の儀式の形と結びつけたりした。

1890年の教育勅語では、家父長制的な家族道徳が奨励された。それを、天皇を頂点にする国家という家族に拡大することにより、天皇崇拝のシステムが形成された。

こうして、現人神天皇を元首とする「神の国」日本がまとめられ、各地には、伝統的な土着の神社のような形をした国家神道の神社が建てられ、戦争で日本が占領した地にも、神

社がつくられた。

靖国神社は、1869年、「天皇の国」のために戦い、命を犠牲にした人の「英霊」を祭る招魂社として始まった。ここには、「国」のために命を落とした日本人戦死者が祭られ、いわゆる戦犯者も含まれる。しかし、外国人や、「天皇」の敵となった人々は祭られない。靖国神社は、日本人の奇妙な宗教観の上につくられた国家神道の、解決されないままの問題である。

実際に国家神道が宗教として人々に意識されていたかどうかは分からない。しかし、戦後、日本人の宗教の信仰が形式的なものになっていく傾向にあったのは、ひょっとしたら、「神」への崇拝が、結局、失敗であり、過ちに招くものであったという経験が、日本人の意識の中に引きずられている証拠なのかもしれないと思えなくもない。

## Blanche Fung：現代日本の結婚式における花嫁の役割

坂野 晴彦

ハーバード大学で文化人類学を専攻するBlancheは大学での研究論文を元に、現代日本の結婚式における花嫁の役割とその役割が女性の社会的役割とどう関連するかについて発表した。この発表は、東京全日空ホテルのブライダルフェアへのフィールドトリップでの日本の結婚式の現状を見た後で、行われた。

ブライダルフェアでは、幸せそうなカップル達の間交じって神道式、キリスト教式の結婚式の実演を見学することができた。どちらにおいても新郎新婦の一举一動に説明が入り、分かりやすくまた感動的であった。結婚式の実演が終ってからは、フェア参加者の為に用意されたロビーで、室内楽を背景に、

お茶とお菓子を楽しみながらBlancheが発表を行った。

彼女は、結婚式において新婦が新郎に従って行動することが、日本の男尊女卑の考え方を反映しているのではないかと指摘した。しかしながら、儀式の大部分は伝統から源を発しているわけであり、変わりつつある日本の女性の役割を正確に反映しているわけではないということも述べた。また、日本の結婚に至るプロセスの違いにも触れ、日本には「見合い」という習慣があること、米国では小学生の頃からデートをすること等テーブルメンバー1人1人がそれについての考えを述べ合った。見合いは出会いへの手段の1つであるといった考えが出されたり、米国では40%、日本で



は2%だという離婚率の話、各自の結婚観にまで話は及んだ。皆関心が高い話題だけに楽しく議論ができたと感じた。

発表の後は、婚礼衣装の試着会が開かれており、米国側参加者の中には着物を試着した

ものもおり、喜んでた。

このフィールドトリップ及び発表において東京全日空ホテルには大変お世話になりました。ありがとうございました。

## Monte J. Scholz：死生観

渡邊 尚美

第1回目のプレゼンテーションは、「死」についてであった。彼は、まず、人間が死を身近に感じる最初の瞬間を幼児期に経験する近い者(動物も含む)の死にしている。その後、ただの抽象概念でしかなかった「死」が、「私の死」の問題系を形成するようになるのだ。その中の一つに「私は死んだらどこに行くのか。」という問いがある。人は各々、独自の死生観を持ち合わせているが、それは大きく3つに分けられる。①純粋に生物学的な死②死後の世界(天国・地獄・獄・その他)に生きる死③輪廻転生(直接的な転生だけでなく、全てのもは大きなエネルギーの一部であり、そこから生まれ、そこへ帰る形で転生するという意見もあった。)これらが全てとは言えないが、多くのものは、これらに含まれるか、これらの組合せである。我々8名の間でも同じ意見は一つとしてなかった。ただ一つ「死を見つめることでより充実した生を生きたい。」

という思いは一致した。

「哲学と人生」テーブルは、英語の名称を“Philosophies of Life and Human Issues”という。これは直訳すれば、「人生哲学と人間問題」となり、また、そのどちらもが複数形である。ここからも推測でき得るように我々は所謂「哲学的」な問題を扱うのではなく、極めて個人的な興味から発した、一般的な人生の諸問題を扱うよう努力してきた。その意味では、モンテ・ショルツのプレゼンテーションは、このテーブルの口火を切るのには誠にふさわしいものであったといえる。もう一つ我々が努力してきたことは、知識の一方通行ではなく、問題とそれに対する各人の答えを8人全員でわかち合うことであった。テーブルの全日程を通して我々が貫いたその姿勢に最初に方向付けを行ってくれたのもまた彼のプレゼンテーションであったといえよう。

## 渡邊尚美：男女間の考え方の相違

渡邊 尚美

最初にジェンダー問題一般を語るときに発表者が気を付けている点について述べた。それは、まず、男女の性差は存在すること。しかし、個人差の幅の方が広いために、実際に個人に焦点をあてた場合には、性差は無意味なものになること。次に、差の多くは社会化

の過程で後天的に得られるものであり、よって、生物学的な差異が全てを決定するわけではないこと。そして、女性性の優位を主張することは、男性性優位発言の裏返しでしかなく、意味はないのだが、少なくとも今の状況で女性には得なければならぬものが多々有

り、踏み切り台として、今の時点では必要なレトリックであることなど、である。

プレゼンテーションは、キャロル・ギリガン著「In a Different Voice」に基づいて行なわれた。彼女の理論の中でも特に「権利の倫理と責任の倫理」という部分を取り上げ、道徳的なジレンマに陥ったとき男性の視点は、誰の権利が一番尊ばれるべきか、その順序決定にむきがちであり、一方女性のそれは、順序自体とは関係なく、状況の中で誰に何ができるのかといった方向にむきがちであることが述べられた。フロイトの説明では、女性に比

べ男性の方が道徳的に、より発展しているため、女性は決断が出来にくいとされている。しかし、ギリガンの説は、それに真っ向から対立するもので、女性が即断できにくいのは決断ができないからではなく、沢山の可能性をまず提示するからであり、女性と男性の思考方向の違いから生じるものであることを主張している。誤解を避けるために書くが、一人の人間の中にも必ず両方の思考が並立しており、これは、あくまでも、一般化されたモデルでしかないことも自明のことであろう。

## 坂野晴彦：日本人の精神的特質とこれから

名古屋大学で医学を専攻する坂野は、「甘え」理論をもとに日本人の精神的特質について、またそれが将来においてどういった意味を持つのかについて発表した。

始めに、日本人に際だった性質としての「甘え」が「人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとする欲求」と定義されることが示された。そしてこの「甘え」の心理により仲間うちでは他者性をなくし、外部からは閉鎖的に見える日本人特有の人間関係が生まれること。また、その心理が、仲間うちでの無差別平等、寛容を生むことを論じた。

次に欧米社会において「甘え」の心理が日本ほど発達しなかったことについて、本質的に人間を超える神というものが存在し、人々をまとめ、各個人に自由を与えるという図式が

### 坂野 晴彦

あったと指摘した。しかしながら、科学の発達等により神から人々が離れていっている現状を顧みると、欧米では「愛」という形に包含されてしまっている「甘え」の心理を使って世界全体に依存意識を持つようになることで、個人の間での理解、さらには民族間の考え方の違いも克服されるようになるのではないかと述べた。

この発表に引き続いて議論が行われ、甘えはそれを媒介として人との共感を経験できること。衝突は抽象的な概念を具体化する上で技術的に起こることが多いこと、精神的特質というものは、歴史や環境に深く根ざすものであり、自然と形成されるもので強制的に変えられるものではないこと等の意見がでて、発表者として、これからより深い人間心理への考察を行ってゆきたいと感じた。

## Taro Isshiki：人生の意味

### 後藤田鶴子

人は何のために生きるのだろうか？人生の意

味とは？その人の人生の目標は？単純で、簡



単そうに思えるかもしれないが、実際考えてみると、そう易しい問題でもない。

人によっては、金持ちになって大屋敷に住むことが目標であったり、自然に囲まれて暮らすことが希望であったり、あるいは、大組織のトップに立つ人間になることが目的であったりするだろう。このように、表面的な答えを求めるならば、人生の目的は人それぞれ、ばらばらかもしれない。

しかし、このような表面上の価値観の違いの下にある、もっと根本的な、心理的な、人生の価値観についてはどうであろうか。あるいは、このような人生の価値観において、日本人と米国人による違いがみられるだろうか。

その人の人生の意味・目標は、その人の現在やこれからの生き方を左右するわけであるから、これは、一度考えてみるに値するテーマだ。是非、お互いの意見を聞き合ってみよう。

## 西元宏治：「こころ」

幼い頃から本を読むことが最大の娯楽であった僕にとって、夏目漱石という作家の作品は、小学生の頃から比較的身近なものだった。「坊ちゃん」に始まり「吾輩は猫である」や「こころ」も高校に入る前には、一度は読んだことがあるものだった。しかし、その頃の僕にとっては、「こころ」は数ある名作の中のひとつでしかなかった。著者の夏目漱石も教科書に載っている昔の人にすぎなかった。

高校に入学した後、有り余る時間の中で、自分自身の内側へばかりと目が向くようになり、いつも満たされない気持ちと自分自身に対する過信と不信とに悩まされていた時期に、「こころ」に再会した。そして、それ以後、折

以上の前提で、このプレゼンテーションの時間は、お互いの人生観を聞き合った。

具体的な展望を持った人もいたが、そうでない人も多い(なにせまだ学生である)。しかし、大まかな次の点は、共通していたようだ。まず、「幸福」な人生を送りたいということ。それも、例えば金持ちになるといったような、物理的な満足度で示せるようなものではなく、もっと心理的な要素に根差したものであること。そして、心理的に満足がいく人生においては、人との関係、あるいは周囲の人の幸福も大切である、といったことだ。

また、日本の側からは、そもそも「生きる目的」といった考え方が日本にはなく、そうしたことを考えること事体、不可能だという意見も出た。何かにつけて意味や目的を見出そうとする欧米的思考と、意味を見出さないまま物事を受け入れられる東洋的思考との違いも明るみになった。

## 西元 宏治

りに触れ何度も何度もこの本を読むようになった。「こころ」が書かれた明治という時代の意味するもの、「こころ」の登場人物の自分や人生に向き合う真摯な態度や伝統と近代(あるいは日本と西洋)との狭間でゆれる知識人の苦悩は、明治という時代と共に歩んでいた漱石自身の姿とだぶらせることも出来るが、それにもまして、そこには現代の我々にも深く通じるものが存在しているのではないかと思う。そして、そこで提示された問題が時代においても根本的な解決をなされていない故に、「こころ」が現在も多くひとの共感を得ることが出来るのではないかと、常々思っていた。

そこで今回は、日米の参加者にあらかじめこの作品を通読してもらい、それぞれが最も注目した点や率直な感想を聞かせてもらおうと思った。それによって、一人一人の持つ「哲学」や「人生」に対するこだわりに触れられるのではないかと思っていた。特に、先生やKの漂わせている一種のストイシズムに対するアメリカの学生の評価を聞いてみたいと思っていた。そのために敢えてこちらからは、分科会においてもこちらの意図するところは伝えなかった。それどころか述べてもらった感想に関して議論をする気もなかった。単に素材を与えるだけに止めて、そのひとの反応を注意深く観察するほうが、そのひとの考えや問題に対する取り組み方がよく見えるような気がしたからだった。確かに議論をすることによって、自分の持っている問題意識や論点が明確になることがあるのは否定しないが、その一方で、議論することによってそのひとの本来持っている考えや態度が隠蔽されてしまうことが少なからずあるように思っていたからだ。自分の中に矛盾して存在するものを無理に結び付けてみたり、話の流れに任せてないものをさもあるかの如く語ってみたりと、多すぎる言葉のなかに本来の目的を埋もれさせたくはなかった。

分科会で交換された意見の詳細について、ここで述べようとは思わない。ここまで述

べた問題の幅の広さに比して、実際に費やされた時間はあまりに短いものだったし、慌ただしいものだった。僕が期待していた論点に関する他の参加者の意識を知ることが出来る程の十分な観察も、そうした事情により行なうことが出来なかった。しかし、そのことは必ずしも僕を失望させるものではなかった。こうした問題とは、常にそうしたすれ違いを内在しているのだということは、この1年の間に十分すぎるほど分かっていたことだった。仮に、それを嘆いたところでナルシズムに満ちた自己満足の域を出るものではないと思うからだ。そんなことなら、敢えて他の参加者に分科会のテーマとして提示する必要はなかったはずである。所詮、こうした問題に満足のゆく解答など存在しないのかも知れないし、世界が常にきれいな解答を用意してくれると思うほうが間違っているのかも知れない。仮に、答えがあったとしても、それが議論によって導かれるとは限らないはずである。ただ、そうした状況を踏まえつつも、安易にニヒリズムに陥ることなく、常に自分自身に対して、どれだけ厳しく問い掛けを行なうことが出来るかが問題なのであり、それだけが神ではない人に許された業なのではないかと思う。そして、そのことが「こころ」を通して、学ばれるべきことなのではないかと思う。

## Mitzi Hnizdil : 人間の精神

渡邊 尚美

発表者がクリスチャンであったこともあり非常に宗教的なテーマであった。しかし、文化的、宗教的な違いを考慮してか「神(God)」という語の使用を終始避けていたことが印象的であった。プレゼンテーションでは、まず彼

女の個人的な体験が語られた後で「自分の人生を導いてくれる霊性(spirituality)」のようなものを、それがなんと呼ばれるにせよ、感じたことがあるかという質問がなされた。様々な回答がなされる中、筆者にとって最も





興味深かったことは、言葉とそれが指す意味のズレであった。「スピリチュアリティ」という言葉は、8人全員にとって、決して奇異なものではなかった。しかし、各人の思い描く概念には大きな違いがあった。ある日本側参加者は、その言葉から、自分の外にある人知を超えた力を想像し、発表者は、自分の中にあって自身を導く力を想像していた。例え

ば、発表者にとっては、所謂「座右の銘」も、自身を導く「スピリチュアリティ」であるが、ある人にとっては「座右の銘」は、「座右の銘」でしかなく、それを「スピリチュアリティ」と呼ぶことからして、既に理解を超えていた。メンバーの8名は、日本人4名、アメリカ人4名で構成されていたが、国籍を同じくする者どうしても各々が異なった文化的、宗教的、思想的背景を持っており、予想されたような国籍による意見の二分化は見られなかった。実際、ある日本人の考え方が、非アジア系アメリカ人に一番よく理解された場面を目のあたりにし、ここにきて、会議全体を通して大きな課題の1つでもあった、一般化された個人の像と本当の個人の間についてもう一度考えさせられた。

## 新時代の法と政治 (Politics and Law)

総 括

法律というものは、接するにつけ思うのだが、「どこからそれを持ち込んだか」と、「どこでそれを用いているか」という地域性とかいかに交わってきたか、という歴史そのものである部分が多い。従って、今後“国際化”若しくは“地球化”と呼ばれる現象が進むのだとすれば、法はそこでネックとなるとある。法と直結した国家権力の言動たる政治についても同様の考察をなしえよう。今回の討論全般では、これからの新しい時代に於ける、人

竹井 亮一

間生活上の一制度としての法・政治の在り方を求め、現状の法意識・政治意識について意見を交換した。だがそこで、日米互いの意識の差を感じたのではなく、むしろ意識の類似性を痛感し、その類似性とは離れた制度上のギャップを見ることとなった。至極有意義な時間であったと思う。実地研修先は以下の通り。①ワシントンポスト②竹内弁護士との会見③国会見学④木原玲子さんとの討論⑤衆議院議員山本幸三氏との討論。



(後段左より)Mark Wenzel、泰松 昌樹、Bonnie Mioduchoski、Todd House  
(前段左より)竹井 亮一、Kristina Skierka、山本幸三氏、脇坂あゆみ、米倉由美子

竹井亮一：法と倫理～医療との関連から～

竹井 亮一

個人的に6月に実地研修として行ったホスピスの現場に大きな感銘を受け、同分科会メ

ンバーと、法と倫理、殊に生命観や死生観といったものについて意見交換することを目的



に、一つのケースを見た。これはジョージタウン事件と称されるもので、自ら病院に入院したが輸血が緊急に必要となったところ、本人及びその夫が信仰上の理由からこれを拒否したので、病院側は裁判所に緊急令状を公布してもらった上で輸血を施し患者を救命した。これに対し、回復後本人が、「輸血を拒む権利を侵された」として裁判所を訴えたというものである。

様々の問題をはらむ事件だが、生命の自己決定の在り方、それを制度としてどのように位置付けるか、信仰上の理由の正当性、その他法技術的な問題も考え得た。

討論は、生命の自己決定の問題についての意見交換の後、尊厳死の問題を考え、家族の同意の問題等にも及んだが、その中で議論となったのは、先掲のジョージ・タウン事件で、「患者は幼児の母親であるから、自己の生命を軽々と放棄できない法的立場にある」といった裁判所の見解についてであった。

我々の日常生活に於いて意識されることの少ない生命の在り方、そしてその一つの局面としての死について幾らかの議論を持ち得たことは、自分にとって至極有意義であったと思う。

## Todd House : 責任法の日米比較

竹井 亮一

Toddのプレゼンテーションは、日米の責任法比較であった。責任法とは、製造物責任に見られるように、一般に他人に対して迷惑を及ぼした際(不法行為)、損害賠償などの責任を負わせる制度を、より強化して居るものと言えよう。

日本では、「悪いことをすればその損害を埋め合わせねばならない」とする法律の条文で多くを処理するのであるが、アメリカに於いては、60年代の大衆運動の一環として起こった消費者運動により、消費者保護の志向の強

い立法がなされた。只、日本では保護が不十分で、アメリカに於いてはゆきすぎという傾向が見られ、補償と予防を有効に実現してゆくため、裁判制度や立法政策の見直し・推進を計る必要があるとの結論に至った。

アメリカン・フットボールのヘルメットが、その価格の3分の2が補償の為に組み込まれて居ることなども話題に昇り、分科会メンバー全員が驚かされることもあったが、お互いの訴訟観の相違を知ることができ、有意義だった。

## 脇坂あゆみ : SDI交渉に見る政治的プロセスのありかた

脇坂あゆみ

冷戦前後の日米同盟の変化と展望を、日米のみに焦点をあてた発表では、安保条約の歴史と今後その軍事同盟が果たす役割が問い直された。

冷戦中、米国の外交政策は安全保障が第一課題であった。その対共産圏政策の一環とし

て日米安保条約が結ばれ、安定した同盟関係が80年代まで続いてきたが、米ソ冷戦の終結は、安全保障をこえた日米の摩擦—政治・経済政策の不一致と外交問題の最重要課題にした。東芝、FSX事件はその予兆であったが、湾岸戦争において、日米の安全保障政策の違

いは浮きぼりにされ、摩擦は悪化の一途をたどった。

経済はもはや政治・安全保障問題とは切り離せぬところに在り、エコノミック・スーパー・パワーとなった日本は、これまでの商業

主義と米国追従をこえた積極的国際貢献をすべき時にきている。米国は、日本の貢献に相乗すべく、具体政策と、安保の維持に関する姿勢を明確にするのが望ましいだろう。

## 泰松昌樹：拳銃所持の問題について—服部君殺害事件の考察—

泰松 昌樹

僕のプレゼンテーションは、92年11月にルイジアナ州で起きた服部君事件をとりあげた。吉祥寺東急イン3階のラウンジでテーブルを囲んだわけだが、この時期、まだテーブルメンバーともあまりうちとけておらず、事件に関するリサーチはしたものの、プレゼンテーションの段取りの不備が目立ち、とてもテーブルが円滑に進んだとは言い難い。事件を継続的に注目していた僕としては、日米両国におけるマス・コミ報道のあり方やその内容等、事の合法性と正当性ではむしろ正当性について話しを進めて行きたかったのだが、結果として合法性をメンバー全員で確認する形で終わったことがいささか心残りではあった。

しかし、テーブル全体を眺めると、会議も後半にさしかかりテーブルメンバー相互の理解が進むにつれ、法や制度といった規範にとらわれない、突っこんだ意見交換が出来、個人的にはたいへんうれしく思った。この意味

において、一方でよく言われる、よりアカデミックな場としてのテーブルの位置づけは、JASCが60周年を迎えようとする今日、当然のごとく受けとめられがちだが、60年を経たなおJASCが存在するという意義と、その存在の導かれる必要性というものを自分なりに考えると、本質はむしろ別のところにあるのではないかと思わざるを得ない。

ともあれ、各テーブルメンバーがそれぞれの個性をいかんなく発揮することで、テーブルは毎回有意義なものとなり、80人のマイクロ・コスモスの中の更に小さな、たった8人のメンバーによる「法と政治」テーブルというマイクロ・マイクロ・コスモスは大成功だったと言える。最後に、やむを得ない事情により会議途中にして帰国してしまったトッドと、5月の全体合宿以前から計11回にわたるテーブルのために走り回ってくれた、たけちゃんに感謝しつつ、テーブルのサマリーとしたい。

## Kristina Skierka：マイノリティーと政治システム

米倉由美子

本発表は、米国における、政治システムの中のマイノリティー(非白人、女性)の政治的アイデンティティーの関係を明らかにし、彼らの政治的アイデンティティーを現状の、また将来の政治システムの中で、いかに位置づけていけばよいのかという問題を提起するこ

とを目的に行われた。

発表者は、まず、多くの異なる民族が一つの政治システムの下にいることがマイノリティー問題を発生させていると指摘した上で、政治システムは、その統治下にある市民に対して、文化的同一性を要求するとした。米国



におけるその例としては、自由の女神像や7月4日の独立記念日に象徴される「自由と正義」の価値観が挙げられた。

そして、そのような同一化を強いる一つの価値観に基づく政治システムが、社会において人口統計上少ないという意味でのマイノリティに、その社会に対して、自分達は疎外され、排除されているという「マイノリティ・メンタリティー」を発生させてしまうとした。そして、そのメンタリティーが過度に激化すると、ボスニアの民族紛争やロス暴動のような暴力に訴える悲劇を招く。

以上のような発表を踏まえてのディスカッションでは、様々な意見が出された。政治システムとしての民主主義の制度上の欠点は、

数の支配によって少数意見が反映されないことだという意見が挙がると、しかし現在、有効な統治システムとしては民主主義しかないという意見が出て、民主主義の本質は何かといった問題や、マイノリティの文化的アイデンティティー保護の意義といった抽象的・哲学的な議論にまで発展した。

特に、本発表は、総合テーマを考える際に避けては通れないマイノリティ問題を提示したという点で、非常に意義が深いと思う。私達は、現行の政治システムの中においても、マイノリティの考えを政策決定者が聞き、政策に反映させることで、share visionsが一層進行することを理解した。

## Bonnie Mioduchoski：日米法制度比較全般

泰松 昌樹

ボニーのプレゼンの内容は、日米の法制度の比較をメインに捉えたものだった。まず両国の法制度の歴史的背景をざっと振り返り、その上で、現状についての解説が行われた。中でも興味深かったのは、米国における法の必要性の部分だった。とかく法を所与のものであると考えがちな我々日本人に対して、なぜ米国ではあのように法律というものが社会のすみずみにまで行きわたっているのか、またなぜそうならざるを得ないのかについて、今なお、各国から移民を受け入れ続けており、建国わずか200年という、国民が共通の文化的基盤を作り得ていない状況を基に説明してくれた。このことは、45thが日本開催であること、また、渡米経験の少ない僕に米国という国を特に意識させる出来事であった。また、その後議論は、両国民の国民性について、そしてそこからくる考え方へと移って行った。

具体的には、「両国の弁護士の数に隔たりがありすぎる。日本はもっと弁護士の人数を増やして競争をさせるべきだ」という意見をもとに話し合いを進めたのだが、市場原理の導入によって、よりよい法曹界を作りあげることが出来るとそろって主張するアメ・デリに対して、日本側参加者はそれはわかっているけれど……、と特に具体的な反論が出ずじまいだったのが印象に残っている。8人の先頭をきって行われたボニーのプレゼンは、お互いをよく知らないことから、言葉を選びつつも、活発な意見も一方で聞くことが出来、その後の「法と政治」テーブルのあり方に少なからずも影響を与えたものと思われる。それにしてもボニーのウインクには悩まされた。

本発表は、日米の雇用機会均等法の内容、成立背景、社会の意識を比較することによって、日米両国の法、男女平等に対する意識やそれらの意義について考えることを目的とした。

日米の均等法の違いは、まず、日本の場合は採用、募集、配置、昇進においては努力義務規定であり、違反制裁を欠くため道徳規範程度の効力しかもたない点である。次に、差別を受けた女性に対する救済システムについては、米国は雇用機会平等委員会(EEOC)が申立人の女性に代わって自ら原告となり裁判を起こすことができるほど強い権限を持っているが、日本でEEOCに当たる機会均等調停委員会は当事者への調停案の勧告にとどまり実質的な効力はほとんどない。

この違いの原因として、米国の多民族社会ゆえの「社会主義」に対する明確な姿勢と日本での均等法は女子差別撤廃条約の批准のための国内法整備という「外圧」の産物という二点

を挙げてみた。

発表に続くディスカッションでは、日本における女性に対する差別や米国の人種差別、女性差別の状況について意見交換し、両国を比較してみた。米国側参加者から、日本は、他にも在日外国人やアイヌ、部落民などのマイノリティーに対しての差別があるので、包括的な差別撤廃の法が必要ではないかという意見も出た。また、女性の子供を産むという特質をどう捉え、社会での女性の在り方はどうあるべきかという問題点についても、活発に話し合った。各個人の価値観がぶつかりあい、とてもおもしろいディスカッションとなった。

本発表と話し合いを通じて、均等法を一例とした社会における法の役割について、人々の意識と法の相互作用の重要性を改めて考えることができた。また、女性が働くことの意義や困難についても、様々な意見を聞くことができ、非常に興味深かった。

ワシントン大学で、日-米-韓関係を専門とするマーク・ウェンツェルは、日本-北朝鮮関係における日米の役割についてのリサーチを発表し、日米が今後より強固な同盟・友好関係を築いていく上での問題点、展望を提示した。

現在北朝鮮については核兵器製造の疑惑が強まり、日本では改めて、戦後保障問題が従軍慰安婦問題を含めて取りあげられているが、政府間では何ら具体的積極的な対策が講じら

れていない。日本では無知と無神経さ、朝鮮では「日本は半島をレイプした」という憎悪が未だ顕著である中、過去へのより正確な認識と反省、それを推進する教育の見直しが早急な課題である。国交の正常化とより進んだ交流を目指した1990年の金丸訪問時の共同声明の趣旨はまず、政府レベルによって努力が進められるべきだ。また日朝両政府の外交政策は積極的なものは少ない。米国の建設的な主導が果たすべき役割も大きい。



## 変貌する世界における科学技術の影響 (Technology's Impact on a World of Change)

総 括

松本 安代

世界は変わりつつある、その原動力の1つは科学技術である—これが当分科会を始めるにあたり日米相方のコーディネーターの考えていたことであった。現代社会と科学技術が分離不能の複合体である以上、現代社会を考える上で科学技術の功罪を考察することは重要な意義があるだろうと。

科学技術をどう自分の中にとらえ、話を進めていくかは十人十色。各自の価値観、興味対象、考えの違いなどがよく表れたように思う。まさに7名のメンバーが集まり、一度議論が始まると、「個性が爆発」といった様子の分科会が続いた。

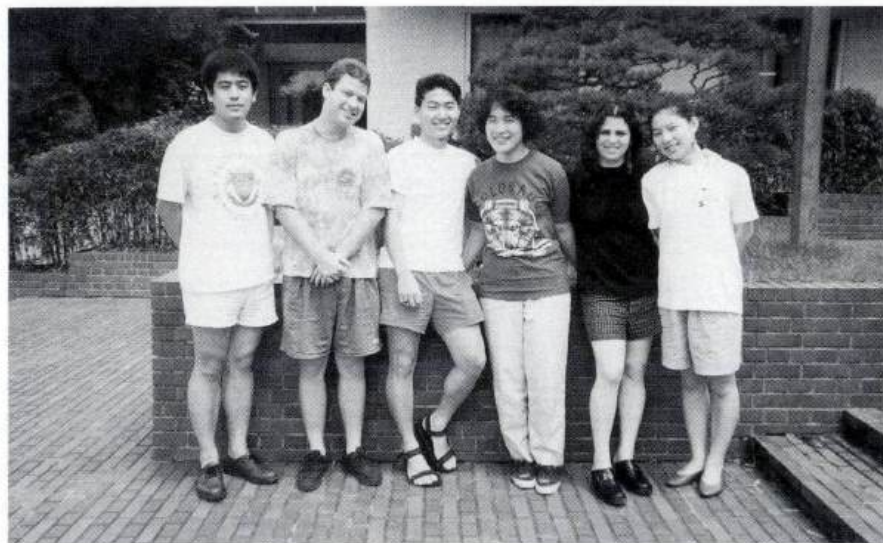
コーディネーターの力量不足から十分な実地研修の準備を始め、スケジュールの調整が

できず、テーブルメンバーには随分迷惑をかけたし、不満も多かったと思う。それでも一緒に“Techno. Table”を創っていったくれたことに、この場を借りて感謝したい。

実地研修先は①アサヒビール工場②理化学研究所③高エネルギー物理学研究所の3ヶ所であった。

### ①アサヒビール工場

現代の科学技術の利用例としての工場見学であった。なぜ“Techno. Table”なのにビール工場へ？といった疑問もあったようだが、ビールの製造過程におけるオートメーション化、食品工業における衛生管理、東京の街中にある工場の土地利用など説明して頂き、様々な質問も飛び交った。



(左より)尾崎 良木、Mike Bayle、Mike Siegl、松本 安代、Sarah Kovner、友末 優子

## ②筑波学園都市理化学研究所

理研の林崎先生を訪ね、主に「ヒトゲノム計画」に関して、現代の科学技術の進歩により様々な遺伝病の解析がなされているとのお話を伺った。理系学部でない学生にもわかるように染色体の話から始まり、先生の研究内容の一端に到るまでをわかりやすく説明して頂いた。

## ③筑波学園都市高エネルギー物理学研究所

高エネルギー物理学研究所の岩田先生に案内して頂き、研究所内の見学と説明を受けた。筑波のトリスタンと同様の施設を持つスタンフォード大学出身者たちは別として、他のメンバーは研究所の規模の大きさに圧倒され、驚きの連続であった。

以上が実地研修のすべてである。私たちの研修を受け入れて下さった方々、準備に関わって下さった方々に心からの感謝を示したい。

## 松本安代：変わりゆく日本の医療

### 松本 安代

日本における医療は技術面では先進レベルといえるにもかかわらず、治療、医学教育などにおいて、様々な問題をかかえている。現在、日本の医療はそれらの問題を解決すべく、多くの試みがなされており、まさしく科学技術が人の生活に大きく関わり、変化をもたらしつつある—という松本の発表に基づき、健康と社会の分科会と合同で変わりゆく日本の医療を取りあげたテレビ番組のビデオを見た後、Greg Runkeの発表、質疑応答と討議になった。

患者が医者や、病院を選ぶようになってきたという日本の現状はアメリカでは10年以上も前の姿であるといった指摘、技術は進んだが日本社会や日本人がついてきていないのではないかといった疑問など様々な意見がでた。Gregの発表は医者や病院を評価するというシステムについてであったが、日本ではまだごく一

部の病院でしか行われていない医者のランキングシステムがアメリカでは1つの大きな流れとして実際に動いているということは近い将来の日本の姿を見るようでもあった。無論、新たなシステムを導入することはリスクを伴うものである。Gregの発表にあった「医者のランキング」を日本で行うとすれば、まずアメリカ同様、その評価基準が問題になるであろうし、ランク付けすることが必ずしも医者や病院の自由競争による技術やサービスの向上につながるかどうかは疑問である。

日本における医療の問題のみならず、アメリカにおける問題、特に医療保険制度について話は広がり、時間不足もあっていささか収集がつかないまま終わらざるをえなかったが、誰もが科学技術が医療の面でも大きく時代を変えつつあることを感じたのではないかと思う。

## Sarah Kovner：新たなコミュニケーションの形～E-mail

### 松本 安代

科学技術は様々な目的のために応用され、私達の生活をより便利に変えてきている。SarahはE-mailの利用によって生まれた新たな

コミュニケーションの形について考察した。

E-mailは約20年前にアメリカ国防省が軍事調査に利用していたARPAnetに始まり、現



在ではアメリカのほとんどの4年制大学で学生が日常的に利用するようになってきているという。E-mailの利点として経済的かつ簡便な通信手段というだけでなく、1対1はもちろん多数との情報交換が可能であることが挙げられた。

当分科会メンバーのE-mail利用についてはアメリカ側は3名とも日頃よく使う。1日に少なくとも1回は利用するというのに対し、日本側はE-mailの名前は知っているものの、誰も利用したことがないとのことだった。コンピューターを通じてコミュニケーションをとる方が便利な上、気楽だという意見がアメリカ側からである一方、日本側は大学院生しか使えないと大学で言われたという声もあり、日本でのE-mail利用がまだ限られていると

いう現状がうかがえた。しかし、JASCにおいてE-mail利用者は日本側学生でもかなりの数になる。特に会議後、E-mailを利用してお互い連絡を取るために大学のコンピューター室に通うようになった昨年度参加者の例があるといった話を聞き、「太平洋にける橋」となるにはE-mailが大きな助けとなるのは間違いないといった意見もでた。

近い将来、日本でもE-mailによるコミュニケーションが日常的なものとなる日がやってくるであろう。科学技術の進歩に伴い、様々な通信情報手段が生まれ、発展し、私達の生活を大きく関わって変化をもたらしている。世界は確実に狭く、国境を越えて近づいているのだということを感じずにおれなかった。

## 尾崎良太 & Mike Bayle : 私の分科会報告

尾崎 良太

私たちの分科会テクノ・テーブル最後の討論発表は、尾崎とマイク・ベイルであった。8月10日、北九州市での発表である。その日は、気分転換も兼ねて、市中心部のミスター・ドーナツで、テーブルを囲んだ。当日は、尾崎の北九州市でのホスト・ブラザーも遊びにきて、小倉の町を案内してもらったのであった。

はじめに、マイク・ベイルが発表した。

彼はアリゾナ州の出身で、スタンフォードの工学部をコンピューターの専攻で今年卒業し、JASC終了後は京都の通信関係の企業で働くことが決っていた。

演題は「VR(バーチャル・リアリティ)の開発における日米の産業政策の有無、VRの今後の展開について」であった。

近年、ことにゲーム・センターなどを通し

て、とみに知られるようになったVR(バーチャル・リアリティ)：仮想現実：であるが、もとは戦場のシミュレーション用に開発されたという。実際の兵器・兵員を運用するよりも、低コストで、戦術・戦略の研究・訓練を行いたい、という目的であった。軍事用という用途でもわかるように、先行開発はアメリカでなされた。ところがアメリカでは、民生用技術への応用がなされなかった。これに対し日本では、パワー・グローブなどの開発で知られるベンチャー企業、大手家電メーカーなどが提携し、台所の設計などにVRを利用する、はじめての実用化が行われた。この間、通産省でも、各企業を横断するVRの基礎研究を実施した。

ベイルの結論では、VRの開発においても、(半導体のときと同様)日本では産業政策が有

効に作用した。アメリカも、同様の処置をとるべきではないか、というものであった。

次に、VRの様々な応用例に話は転じた。なかでも興味深かったのは、“VR手術”であった。近未来において、常時宇宙空間に基地を建設・運用する場合、限られた人員の中に、医師を割り振ることはできない。しかし、なんらかの外科的な手術が必要となったとき、地上でVRによる模擬手術を行い、それが数値化・電送されて、宇宙船内で再現される。まさに、宇宙時代の一端を担う技術と、大いに座はもりあがった。ただ、衛星中継でままた見られるノイズが、手術中にあつたら、どうしたものか、という声もあった。この技術は、深海底や、原子炉内などの極限条件でも、同様に利用が期待できる、と思われた。

次に私、尾崎が<sup>2</sup>、“日米の都市構造の相違と、20世紀の巨大都市を支える技術”という話題に転じた。

今世紀は、“都市の世紀”と呼ぶ人もいる。産業革命以来の技術と資本の蓄積が<sup>3</sup>、東京やN. Y.といったメガロポリスの形成を可能にした、と言える。上下水道やガス、電気、道路などのインフラストラクチャー、社会資本の整備、高層建築とそれを可能ならしめたエレベータなどの付帯設備の発明、土木・建築などの工学の達成。なかでも、私がつも注目したのは、大量輸送手段である。日本は電車、アメリカでは道路網とモータリゼーションがそれにあたると思った。そして、電車と自動車の違いが<sup>4</sup>、そのまま日米の都市構造の差となってくる、というのが論拠である。

勿論アメリカでも、N. Y. C.のように、電車・地下鉄なしでは語れない都市もあり、日本でも、地方都市は、より自動車の重要性が高い。

簡単に、典型的な例として、東京と、モータリゼーションと共に成長した、ロサンゼルスと比較した。東京は山手線のターミナルから放射状に伸びる鉄道によって、中心の業務地区へ、労働力が求心的に移動する。同心円的なゾーニングによる都市の機能の分化がはっきりしている。これに対しロサンゼルスは、シビック・センターのような政治の中心はあっても、各種機能は、都市圏の適当な範囲にバラまかれている。地理的な中心に、ピバリー・ヒルズのような住宅地が存在している。これを私は、自動車という、より個々の自由度の高い交通手段を用いているから、とした。

また、今日、アメリカの学生の全てが周知の、日本の高い地価の原因も、この同心円的構造によるもの、と説明した。

ただ、説明のモデルがあまりに単純すぎたことで、様々な例外を指摘された。都市の問題は、誰しもが興味の対象にあり、分科会で最も白熱した議論を楽しむことができた。

この日の話題から、私たちは、ある法則、のようなものを確認した。日本は、通産省の産業政策や、求心的な都市構造にみられるような、中央志向、中央のコントロールが強い。

アメリカは、個々の独立性が強く、中央に対して言えば、末梢的である。日本では、社会全体の高度情報化が論じられているが<sup>5</sup>、アメリカでは、末梢の個人一人一人の情報化が日本よりも、余程すすんでいる。例えば、アメリカの学生は、電話番号と同様に、E-mailという、パソコン通信のコードを有している。

このE-mailの真実は、正直言って、日本側メンバーには、衝撃であった。何らや、昼寝をしていて、追い越されてしまったウサギのような気持ちであった。いや、アメリカに追いついた日本、なる考えすら、白昼夢であっ



たのではないか。

今、大学間のコンピュータ・ネットワークの拡充、学校へのコンピュータの大大的な導入などを盛りこんだ、新・社会基盤整備が議

論されている。まことに、もっともな事である。むしろ、遅すぎるのではないか、そんな危惧すら感じた一日であった。

## Mike Siegel : 技術と経済成長の関係

Mike Siegelのプレゼンテーションは8月3日に行われた。テーマは「技術と経済成長の関係」である。

- 1 : なぜあるところでは技術の進歩がすすみ、あるところではそうでないのか。
- 2 : 1973年からのアメリカの生産性の成長が鈍くなったのは果たして本当か、それとも幻想か。
- 3 : なぜアメリカは、ある分野では進んでいるとはいえ、日本の技術を真似できないのか。

以上3点に基づいて、行われた。

(1) 技術進歩には2種類ある。一つはinvention(個人に基づく)、もう一つはinnovation(他人との関わり合いによってもたらされる)であり、innovationが起こる条件として以下の3要素があげられる。

- 1 : 人々の好奇心、チャレンジ精神
- 2 : 技術ややる気を支える施設
- 3 : 既成のものを打ち破る多様性

innovationのある社会は教育やリサーチを推進しているので、政府はそう関与しなくても、かえって地方分権を推進していくことが

より技術の進歩を促進する。

(2) 1973年に入って、アメリカの経済成長は陰りを見せ始めた。技術輸出は減っていないのになぜ経済成長率が落ちるのか。それは、創造性はいまだに豊かで、輸出は一緒であるが、他国からの輸入が増えていることが原因である。これを“Productivity Paradox”という。コンピューターが例として挙げられる。また、日本や韓国がアメリカに追いついた理由は以下の3点である。

- 1 : 2国ともアメリカという目標があった
- 2 : アメリカの競争力の低下
- 3 : 世界の相互関与性の強まり

(3) 日本を真似できない理由は2つある。

- 1 : アメリカは未だに日本を真似する必要がないと思っている。
- 2 : ハードウェア(コンピューターやテレビ等)など“tangible”な物は真似しやすいが、ほかのものはそうはいかない。

アメリカは“INVENTION”に大半のお金が費やされるが、日本は“DEVELOPMENT”に長けている。

## 友末 優子

## 友末優子 : ハイテク汚染

私(友末優子)は、「ハイテク汚染」についてプレゼンテーションを行った。

## 友末 優子

現代社会では必需品となっている半導体が多量に消費され、新たなタイプの環境汚染について

取り上げた。

現在、半導体はコンピューター、テレビ、自動車、果てはおもちゃにまで使われている。その半導体を作る過程で、大量の有機溶媒が洗剤として使われている。それら大量の有機溶媒が地下水に流れこみ地下水汚染を引き起こしている。

地下水汚染の害は深刻で、人体に膨大な悪影響をもたらしている。例としてアメリカと日本で起こった事件の一つずつ取り上げた。アメリカではフェアチャイルド事件と呼ばれる事件が80年代に起こっている。カリフォルニア州のシリコンバレーで多くの健康被害が他の地域よりより顕著に見られたのが始まりだった。心臓病、自然流産、癌等の確率が高く、死亡する人も出た。そこで住民が訴え、地下水の汚染状況や、タンクの漏れなどが徹底的に調べられた。そして驚くべき結果が判明した。80%の地下水から毒性のある化学物質が発見されたり、たくさんのタンクが漏れていたことなどがわかった。また日本でも同様の事件が千葉県君津市の東芝コンポーネントで起こっている。この周りでも、心臓病や、流産、腰痛、肩こり、喉の痛み等に悩まされている人が沢山いた。兵庫県の太子町の東芝の半導体工場の周りでも同様のことが起こっている。

被害はもちろん人体に重大な影響を与える。慢性的な被害が特徴的である。環境にとっても被害は深刻で、汚染は地下深くまで浸透していて取り返しがつかなくなっている。また有機溶媒は揮発性が強いので大気中に蒸発し、大気汚染までも引き起こしている。

対策としてはシリコンバレーではタンクを強化したり、化学物質のモニタリングをしている。日本では、太子町の場合、住民が自衛の手段として浄水装置をつけている。東芝は汚染排水は認めず、寄付として住民にお金を渡しているのが現状である。排水は未だにそのまま行われている。

これからは、まずいったいどの化学物質が、有機溶媒が危険なのかをまず把握すること。そして政府による厳しい規制、監視と、安全な代替有機溶媒の開発が望まれる。





第 三 部  
本 会 議 後 の 活 動

## 会議後の活動まとめ

芝崎 厚士

第45回日米学生会議の活動は、名目的には8月23日をもって終了したが、実質的には以下にあげるような活動が残されていた。定例会は、今後の活動の方針を確認する意味で行われ、会議終了後日本に留学中の米国側参加者も参加して旧交を温めた。10月セッションは、6月セッションの続編として開催された。各参加者からは、今後も同種の企画の継続を望む声が強かった。報告会では、参加者のスピーチとフリー・トークが好評だった。

11月にはISAと合同でOB総会が行われ、各回のOBが親交を深めた。また、OB会の担当者が44回のOBから45回のOBへとこのときを境に代替わりした。OB会の担当者は上原、田

中(澄)、恒田、中村、源、山田の6人である。以降彼らは、通常の業務に加え、60周年記念事業の準備、名簿の作成、OB会通信紙“JASC ALUMNI NEWS”の発行などの担当としてそれぞれ活動を行っている。

一方、本報告書の作成も同時に進行した。年内に基本的な部分の原稿を収集し、試験期間を経た後2月から本格的に写真選定、校正、編集作業を行った。

9月以降、OBによる自主的な活動として勉強会が再開された。国際関係から哲学・思想に至るまで幅広い題材を取り扱い、ISAやOB、知人などを招いて多彩なメンバーによって継続されている。





## 第45回日米学生会議 会議後の活動日程

1993年 8月23日	第45回日米学生会議閉会
9月 9、16、23、30日	第二次勉強会
25日	定例会、『犀の角』第12号発行
10月 7、14、21、28日	第二次勉強会
16日	10月セッション
30日	第45回日米学生会議報告会
11月 4、11、18、25日	第二次勉強会
6日	OB総会
(21日 第46回日米学生会議第1回講演会 講師：近藤 健氏)	
12月 2、9、16、21日	第二次勉強会
16日	OB幹事会
23日	忘年会
1994年 1月 7日	新年会
24日	日本側報告書第1稿完成
2月	報告書編集・校正作業開始
3、10、17、24日	第三次勉強会
(12日 第46回日米学生会議第2回講演会 講師：鴨 武彦氏)	
16日	60周年記念事業開催委員会会合
3月	報告書編集・校正完成、
10、17、24、31日	第三次勉強会
4月	第45回日米学生会議日本側報告書、『犀の角』第13号発行
7、14、19、21、28日	第三次勉強会



JASCが終わって約一か月が経ったある9月の日に、久々の定例会が四ツ谷で行われた。でも秋の訪れのせいか、JASCが終わった安心感と徒労感のようなものからか、何だか教室がJASC以前に比べて寂しげだったと記憶している。集まった人数もほんの一握りだった。しかし皆、早速できた写真を交換したり、JASC後の各自の生活などについて久々に興

## 10月セッション

このセッションは、我々第45回日米学生会議(以下、JASC)を中心として、この年の夏に行われたJASC以外の学生国際交流団体の皆さんをはじめとする方々との意見交換会を主な目的としました。会議の形式は、いくつかのJASC中で話し合われた内容からテーマを設定し、そのテーマをもとにいくつかのグループわけを行いそれぞれのグループで参加者による意見交換を行って頂きました。それぞれの学生団体は、それぞれの成果を各会議の中で得ていたようで、グループによっては、活発な意見の交換がなされていたようです。ここで一つ問題となったのは、このように

上原由美子

奮して話していたように思う。芝ちゃんの多大なる力とその協力者により発行を重ねて来た45th JASCのニュースレター『犀の角』が再発行され、これも又、久々であったため皆読み耽っていた。通常の『犀の角』と違い、45th JASCを振り返った投稿、また46th JASCに向けた新実行委員の新たな思いを綴った文章も投稿された。この定例会には、アメリカ側の delegates であった Andrew Seaborg と Christopher Guerriero も参加した。彼等は文部省奨学金で慶応大学に学ぶことになり、再び来日していた。この時、東京地域以外の参加者はいなかったこともあって、会議中に比べ人数はとても少なく、皆のパワーもややおさえめといった感じであった。JASC後の一番初めの活動として、参加者は心の片隅にとどめていることだろう。

吉田 泰治

JASCの形式を導入した形で行われたため、JASCでは話し合われた内容もそれ以外の団体ではなされておらず、意見の交換がうまく行かない、もしくはあるテーマを設定したグ





参加者のバックグラウンドの多様性は、議論の対象となる諸問題の複雑さとあいまって、会議全体としての結論を導き出すことをいっそう困難にしました。しかし、同時に我々が今後の人生において国際社会に対して働きかけるための出発点となる大きなきっかけを与えてくれました。

今年の会議の開催直後の段階では、日本側参加者とアメリカ側参加者の間には明確な境界線が存在していました。しかし、様々なレベルでの相互の交流が進むにつれて、まもなく、日米学生会議独特の急速な同化作用により、日米両国の文化を分けていた境界線は確実に薄れていきました。そのことによって、我々はお互いが非常に多くの共通点を持っていることを確信できました。

しかし、全参加者の合意形成を目指す過程で得た経験によって奇しくも明らかとなったのは、国際機構、多国籍企業、各国政府、そして様々なNGOが、安全保障、福利厚生、環境問題、経済問題といった諸課題に関して国際秩序を再検討しようとする際には、かならずといっていいほど膨大な困難が生じる、ということです。

知的な議論を行う場合に知識が果たす役割は、どれほど過大評価しても十分でないほど重要です。それゆえに、数多くの情報源の中からメディアが選択し、人々に供給する情報にたいして、我々は常に冷静な検討を加えてゆかなければなりません。情報の取捨選択に関する国際的な問題に関しては、現在メディアのみが支配している領域にたいして、何らかの国際機構がメディアと同等の影響力をもったコミットメントを行ってゆくことが必要となるでしょう。

日米学生会議を通して、我々は自分たちがすでに知っていることをさらに深く認識することができましたが、おそらくそれ以上に我々が学んだことは、我々が今まで知らなかったことで、しかも地球規模でも協力関係を形成するために知らなければならないことでした。我々は今後どのような方向へ向かってゆけばよいのでしょうか？

最も大切なことは、より効果的な国際機構を構築しようという我々の願望を実現するために、どのようなドグマを発展させてゆく場合でも、人類最重要の課題である平和の実現は、常にその中心になくしてはならない、ということです。

また、環境汚染に直面している我々にとって、個人のそれと同様、企業の文化や行動誘因を見直すことが、非常に重要であることは明らかです。オゾン層の破壊や酸性雨の問題が最も如実に示すように、様々な影響を持つ異なる分野に跨る政策調整が必要です。さらに、我々は、グローバル化の推進へ向けた取組みをひろく浸透させるために自ら積極的に活動してゆかなければなりません。

加えて、我々は、人権という議論の余地のないほど根源的な意義を持つ分野で、同様な協力体制を模索してゆかなければなりません。例えば、マイノリティーの問題を改善するためには、人々のものの見方を成熟させてゆくという、究極的かつ長期的な解決策を実行することは言うをまたず、文化社会学的な分野でのパラダイムの転換をはかるのと軌を一にして、政策面での一層の改善が必要です。

また、女性やホモセクシュアルに対する差別の問題などを議論する中で、我々はジェンダーの問題の重要性をより明確に認識することができました。と同時に、自分自身や我々の周囲の人々をいっそう注意深く見つめることによって、それらの問題に対して過剰に思いを巡らせてしまう

危険を防ぎうることに気がきました。

おそらく、ポスト冷戦期において、自由ないしは公正な貿易のあり方に関する論議ほど白熱した問題はないでしょう。「自由ないしは公正な貿易」という言葉自体は、国際経済の現状を正確に反映したものでなければ、相対利益を追求する各国を必ずしも規定するものでもありません。

本会議は、最終的な結論としてそれらの用語を定義したり、最も望ましい貿易関係の特質を決定したわけではありませんでしたが、我々はリージョナル・グループまたはサブ・リージョナル・グループの形成と、貿易概念の一層の発展をめざす国際的体制の確立に高い意義を見出しました。

NAFTA、ASEAN、そしてGATTといった国際機構は、貿易の利潤追求に伴う紛争の改善を目指すために今後多数形成されてゆく枠組みの好例です。さらに進んで、我々がより普遍的に発達した世界を想起する際には、諸国間の経済格差、特にいわゆる南北問題こそ、衡平さを追求する議論が最も顕著に明白となる問題分野といえましょう。

その背後には、個々の国民国家の主権と多国間のレジームづくりに伴う要請とのあいだに生じる根本的なジレンマがあることを斟酌しなければなりません。例えば、GATTの取極は国家主権と超国家的協力という、基本的には相反する二つの枠組みの相剋にともない、現段階までにはかかれた妥協の結果の代表的なものです。

経済開発に対する考察を深めることは、一種独特の重要性を帯びています。なぜなら、経済開発は一種のパンドラの箱であり、日米学生会議が地球共同体をめざす際にとり扱ってゆくような、環境問題、人権、貿易といった様々な問題にたいして大きな影響力を持っているためであり、経済開発の成果如何によって、それらの諸問題への対処の方法も規定されてゆくためです。

日米学生会議は、今日、そして21世紀における様々な課題に取り組むために対話と行動を深めてゆくのに必要となる無限の潜在能力を秘めています。人間社会が直面する危機とそれに対応する機会を深く認識した上で、我々は未来が今、この瞬間から作られることを忘れずじにただちに行動し、正義と人間らしさが保障された世界をめざす活動にたいして貢献していかななくてはなりません。

第45回日米学生会議の参加者として、我々は参加者全員が1993年の夏に育んだ考え方と精神を将来に渡って末長く保ち続けて行くことを希望します。

1993年8月22日 第45回日米学生会議参加者一同

編集・作成：グレッグ・ランキー、田中澄人

日本語訳：芝崎厚士

## 芸術と社会

私たちはこの分科会で、芸術が地球規模の調和に寄与する多くの可能性を秘めていることを学んだ。芸術とは鏡であると同時に扉である、と私たちは考えた。芸術は私たち自身の文化を反映すると同時に、他の文化をのぞかせてくれるからである。

国籍に関係なく全ての人類が理解することができる普遍的な特性を、芸術は持っているという



ことも話し合った。芸術は言語、経済、地理などの障害を乗り越えられる数少ないもののひとつであるから、私たちは芸術を通し、地球共同体規模でひとつの視点を共有できるのである。

芸術はまた、芸術家ひとりひとりにとって特別の個人的意義も持っている。各人が芸術を通し心の平安を維持することが、世界の平和につながるであろう。そして何より重要なのは、考え、意見、思想などを感情のレベルにおいて探求し表現できる芸術を通し、自分のことと同様に他人を理解できるということである。

## ビジネス

私たちは日米関係における協力体制の重要な役割について話し合った。発表と討論を通し各国のビジネスのあり方、管理方法、そして株式の問題に関する知識を深め、教育とマスコミの商業的側面と、伝統的な株式会社について実地での理解をえた。またビジネスの効率と各国の経済状態との連関について論じあった。

## 今日の教育

学校と家庭での教育を通し、人々は社会性を身につける。しかし一度、一社会の価値観が強く教え込まれると、それを変えることは難しい。そこで人生の早期に“地球規模の調和”の大切さを覚えさせることが今後重要になるといえる。

日本の教育制度に関する話し合いでは、創造的思考教育のための時間の欠如、生活様式の変更の少なさ、そして卒業後教育を受け続けることができないことなどが、個人そして社会の可能性を奪っていることに気づいた。アメリカの教育制度に関しては、多文化教育の必要性を認識し、読み書きなどの必要不可欠な技術の教育に一層の努力をすることが、緊急の課題であると確信する。全ての人が専門の教育者となるわけではないが、私たちはみな、自分の住む共同体において学習に適した環境を作り出す責任がある。私たちが必要な技術を習得するための機会を与え、教育の選択を認めることにより、私たちの社会が面している問題の創造的解決方法を次の世代が見つけることができるようになるのである。

## アジア太平洋地域の経済発展

当分科会は、日米間の衝突と協力に関する視野を共有するためのユニークな機会となった。私たちは、人々の生活水準を向上させ、第三世界の不確実な政治状況を安定化させるために、日米両国は自由で協力的なODA、NGOとの協力そして発展地域でのプロジェクトと投資の競争などを促進させるべきであるとの強い認識を得るにいたった。世界の二大経済国が決断し、努力をつくさねば、第三世界は、貧困、飢餓そして暴力の悪循環から逃れることはできない。私たちは、日米の行動を監視し続け国際社会における責任を十分に果たしているかどうかを判断することを

怠らない決意を抱かされたのである。

## メディア

莫大な財源、急速に発展する科学技術、優秀な人材により、メディアは、グローバルな協力という私たちの目的を追求する上でもっとも重要な役割を果たしているといえるだろう。しかし一方で、各国内及びその間で交換される情報の媒体として、民族中心主義的な偏狭なものの方を押し広げるために、地域、国家そして地球を舞台として立ち廻らねばならないという責務を負わされているのも事実である。

日米両国の歴史の考察を通して、私たちはメディアには二つの側面があることを知った。第一に公的、政治的なスキャンダルを暴いて、環境破壊、侵略行為、社会的不正を表面化させる役割を担う、情報の“自由な”流通媒体としてのメディア。第二に政府主導のプロパガンダや誤ったステレオタイプの代弁者としてのメディア。このような状況のなかで、真に客観的で公正ではありえないとしても、メディアはいま、経済的な絆や民族中心主義をこえたより高いレベルで、国際的な認識や理解を促進することが望まれているのである。

## 健康と社会 一心と身体のパランスー

健康は、私たちが現在直面している問題の中で、最も広範にわたり、複合的な形で問題となっているものである。この問題の私たちの社会との深い関係に気付くなら、私たちは、法人の利益や表面的なことよりも、これを最優先課題としなければならない。私たちは、様々なヘルスケアのシステムについて話し合いもしたが、何よりも、適切なヘルスケアを受けることは人間の基本的な人権であるという、銘記すべき結論に達した。貧しい人も富んだ人も、若い人も年老いた人も、第三世界の人もそれ以外の人も、全ての人が適切なヘルスケアを受けられるよう、保障されなければならない。そしてそれが達成されたとき初めて、私たちは、地球共同体の調和と共生という目標に向かっていくことができるのである。

## 哲学と人生

私たちは会議のテーマに個人的なレベルでアプローチし、以下のような人間の複雑な問題について意見を分かちあった。「愛」「人生」「ジェンダー」「日本人の精神」「死」「人生の意味」などである。私たちは二国間の関係を解決する具体的な方法ではなく、“新しい人間の見方”を提供する。上記のような問題は、国籍に関係なく全ての人にとって共通のものである。そしてそれらの問題に対する私たちの意見は、いくぶんかは文化的な相違によるものであるが、それよりも個人の育ち方や他の感情的な要素から成る確固とした人生哲学によるものなのであると言えよう。従って政治・経済・教育・科学の分野における日米の指導者は互いに追い詰め合うことをやめ、相手の肩



書きの向こうにある一人の人間の顔に気付くべきである。そうすれば互いにより深く理解し合い、尊敬し合うことができるであろう。そしてそれによって、本当の意味で、展望を共有し、政治・経済・環境等の問題で調和と共生を得られるであろう。私たちはいつも、合意や解決に至れるわけでない。しかし、少なくともお互いを理解し合い、尊敬し合うことはできるのである。

## 新時代の法と政治

正義や法、政治についての私たちの考え方は人それぞれですが、これを共通の土台としてわたしたちは協調に踏み出すことができる。

日米の“少数派”と呼ばれる人々が平等を求める姿を、そして彼らと今の体制がいかに関わっていきべきかを、私たちは話し合った。

「女性の地位と機会均等」の議論に熱を入れたこともあった。そして私たちは様々な考察から、現状を打破するために、「機会の平等」が果たす積極的な意義をたびたび再認識するに至ったのである。

## 変貌する世界における科学技術の影響

世界のよりよい調和にむかって、地球共同体の一員である私たちは、科学技術発展の基礎となる技術革新や発明を共有する必要がある。科学技術は全ての分野に広がっており、全ての社会が協力していくための道具となり得るものである。しかし科学技術は、永遠に両刃の刃でもあり続けるであろう。従って私たちは、過去の失敗から学び、その知恵を科学技術のより有効で適切な使用のために用いなければならない。また、倫理的な問題を提起し科学技術の発展の全ての段階にそれを反映させなければならない。そしてこれまで世界の融和をもたらしてきた科学技術は、今後の地球共同体のよりよい協力の“鍵”となるといえるのである。

## ジェンダーワークショップ

私たちの生活の様々な場面での、男女の違いは明らかである。

理想としては、私たちはお互いを、紋切型のイメージではなく、男女という枠組みを超えて一人の人間としてみるべきであろう。しかし私たちは完全な社会に暮らしているわけではない。従って、権力を持った人々は、現在抑圧されている人たちも自由に自分の生き方を選べるような社会を作るために、行動しなければならない。それができて初めて、全ての人々が本当に平等だと思えるようになるのである。そして私たちは、「女性の権利」や「ゲイ・ライツ」に限ることなく、「人権」を求めて行動してゆこう。全ての人々は「人間」なのだから。

## 地球市民シンポジウム(九州リージョナルデイ)

一カ月の会議を通し、私たちは参加者として、まさに地球市民の在り方を模索してきたといえよう。来る21世紀に目を向けても、環境破壊、人権侵害そして地域紛争など私たちの行く末を脅かす深刻な問題が山積している。そしてこのような事態は各国・各地域だけを念頭に行動していたのでは、もはやどうにもできないのである。

私たちは地球市民としてこのような地球規模の問題に正面から向かってゆかねばならない。各人が自ら差別と戦い、環境汚染に苛まれ、軍事的侵略に曝されている、そういう気持ちで向かってゆくことが必要であるといえよう。

このような視野を育み、異文化・多様文化の共存の機会を捉えてゆきながら、私たちは地球市民となっていかなければならない。私たちが様々な人々の求めるものを大切にしたときに、全ての人が共通に持ち合わせているものの何たるかに気付き、全ての人の求める“共通善”を支えてゆけるのである。そして、私たちがこの地球を、地球上の一人一人の目を通して捉えることができたときに、“think globally, act locally”を実践できる地球市民となることのできるのである。

## ボランティアフォーラム(関西リージョナルデイ)

地球共同体の全ての構成員は、ボランティアというものの重要性と、ボランティア活動が軽視されている現状について再認識する必要がある。ボランティアが私たちの生活にとって不可欠なものとなるためには、ボランティア活動への参加が肯定的に捉えられる環境を作っていかなければならない。このような環境は、たとえば教育を通じて社会問題に対する意識を喚起したり、ボランティアに対する日頃の態度や見方を変えたりしていくことによって実現できるものといえよう。そしてこのようなボランティア活動への積極的な参加を促進することが、地球規模の調和への道を切り拓くのである。

## 環境フォーラム(東京リージョナルデイ)

学校社会と社会教育は、どちらも世界、国家、地域というそれぞれのレベルにおける環境問題に対する関心と呼び起こすための重要な“鍵”であるといえよう。私たちは、社会の全ての人々が、環境に対する振る舞いや取り組みを変えていくよう働きかけていかなければならない。再生、節約、リサイクルなどの、ほんの些細なことに気を付け態度を改めることでも、最終的には大きな変革をもたらすのである。私たちは地球市民としてこのようなレベルの変化に加えて国家レベル、世界レベルにまで視野を広げていくことを求められている。民間部門は今やより詳細な情報を持っているため、現状の変革に対して敏感であり、また責任もおっているのも、国内の環境政策だけでなく、第三世界に対する政府開発援助(ODA)などについてももっと大きな影響力をもつべき



であろう。そしてもう一方で政府が人々の意見に耳を傾けることによって、環境政策は今よりもより实际的、効果的なものになるであろう。

### 少数派問題フォーラム

本会議参加者として、私たちの緊急の課題は人権、宗教、性別に関わりなく全ての人が安心して共存できる世界を作ることであると宣言する。二極構造や制度的差別のような過去の遺産が崩壊したにもかかわらず、人々の間に根強く残る偏見は、今日の世界に於いても尚、全人類の平和的共存の実現を阻み続けている。会議を通して私たちは、よりよい地球共同体を目指して、異文化間の理解を進めることが可能であるような制度をどのようにして作り出すのかということのひとつの焦点として話し合ってきた。日本については、外国人労働者、在日韓国・朝鮮人、部落民などの問題を考え、平等を求める彼らの運動を認識・支持することが重要であり、多様性を享受する力を備えることによってより開かれた社会が実現されるだろうとの認識に達した。アメリカについては、伝統的な権力構造が多様な新参市民を異分子として排除する恐れがあることが指摘された。「全ての人に対する自由と正義」を誓ったこの国においてさえ、女性、少数者そして高齢者たちは社会のなかでの平等を勝ちとるために戦い続けているのである。日米両国は多数派少数派に関わらずすべての国家の構成員が共存できる社会の建設に向けて学ばねばならない。調和のとれた社会とは、地球共同体のなかの全ての人の、あらゆる表現の自由を保障するような環境を備えた社会であるといえるのではないだろうか。

### 戦争と平和フォーラム

一カ月にわたって、私たちは戦争と平和についての話し合いの場を持つことができた。そこで私たちは“戦後現在まで続いている記憶と不公正、特に戦争犯罪問題における不正に対する、いわゆる戦後処理に迅速に取り組む”、“戦争の原因となる人種差別、経済問題や社会的不平等のない平和的共存を進めていけるような体制を整える”という、将来に向けての二つの大きな目標を見つけたのである。他の文化や歴史をより深く理解するために、特に若い世代に対する教育の継続と向上を基本としてこれらの問題の解決をはかってゆくことを、ここに提案する。私たち市民こそが、戦後残存している不公正を是正するよう政府に対して働きかけるために、必要な情報を得、戦争の潜在的原因に対する解決をはかっていく力を持っているのである。

## 2. 戦争記念館・博物館に関する提言

長崎原爆資料館への訪問は、私たちに戦争の恐ろしさを目の当たりに再現しただけでなく、戦争について公に展示することの教育的な可能性について議論するきっかけとを与えてくれた。資料館における原爆投下直後の長崎市のイメージはとても衝撃的で、私たちの心を揺り動かしました。と同時に、この資料館が当時日本にいた人々だけを被害者として扱っていることは、原爆投下の背景にあった歴史的事実を知ることを妨げているのではないか、という思いが私たちの中に沸いてきたのです。もしそうであれば、この資料館は、人々が戦争から教訓を得ることの障害となることだけでなく、人々が他人の痛みを知るという機会をも奪ってしまうことになってしまうのではないのでしょうか。そしてこの問題は“Pearl Harbor Memorial”やその他の世界中の戦争記念館についても言えることなのです。

こういったなかで、私たちは、長崎原爆資料館をより広範囲の歴史的事実に基づいた資料館に改造する計画が現在進められており、そこでは戦争の一部として長崎の原爆が扱われる予定である、ということを知り、これをたいへん素晴らしい試みであると考えます。新しい原爆資料館では、年表やビデオの上映によって、攻撃者としての面も含めた日本と中国・アジアの関係を負い、最終的に1945年8月9日の長崎への原爆投下にたどりつく構成になる予定であるとのこと。この構想は、「日本人は、現在だけでなく第二次世界大戦中に於いても、日本がどのような立場、役割にいたかを学ぶ必要がある」という本島等長崎市長のお考えの趣旨に添ったものであると言えます。

私たちは、このような変化が、戦争の恐怖を、被害者意識を強く前面に押し出した主観的なものからより客観的なものにしていくための重要な第一歩であると信じます。鶴見和子先生が8月7日の地球市民シンポジウムにおけるスピーチで強調されたように、私たちは他人の痛みや苦しみの経験を共有することによって地球共同体を実現しなければならないのです。自国による戦闘行為の被害者や旧敵国の受けた苦痛を直視せずそれを避けて通るということは、人々の間でいつまでも見られる問題でしょう。このことは真珠湾記念館、アリゾナ原爆博物館、そして東京に新しくできる戦死者平和記念館を巡るなどの議論を見ても明らかです。

私たちは、戦争記念館や博物館が、自国の払った犠牲のみでなく、自国の侵略行為、戦闘行為によって他国が払われた犠牲についても触れていくことを提案します。戦争という行為を扱う資料館を作るうえで、主観的な部分が完全にとり除かれることは不可能でしょうが、その中で、自国の行為によって発生した破壊や死を見つめていくことが戦争と平和に対する攻撃的な考え方の抑制につながることを強く望みます。日本に於いてもアメリカに於いても、今後、戦争教育を変えていくためには、いま以上の世論の後押しが必要となるでしょう。そしてそこでは、長崎原爆資料館のような戦争記念館が、戦争の捉え方の変化につながるような、世論の大きな動きへの原動力となることを、私たちは確信するものであります。



### 3. 日米ユース・デklarレーション

#### 日米学生による宣言

私達第45回日米学生会議の参加者は、現在世界の国々が遭遇している数々の難問と変化への足がかりに対して認識を深めていく中で、1945年のサンフランシスコでの国連憲章は最早現代の世界情勢や新時代の幕開けとともに登場するであろう地球共同体、及びそれが内包する諸問題には到底対処しうるものではなく、今後私たちがヴィジョンを共有し、これらの問題を力をあわせて解決してゆくには、徹底的に民主化され、強化された国連と、地域レベル・草の根レベルでの活発な活動に基づいた新たな国際協力体制の双方が必要とされているという確信を抱いたのです。

このような中で、日米両国が世界に於いて、殊に政治、経済、軍事、科学技術等の諸部門に対して占める役割や影響力には注目すべきものがあると言えます。

そこで私達日米学生会議参加者は、自らが、分科会・フォーラム等を通して対話を続けてゆくうちに、多様な文化的背景を超えて一致団結し、世界のより良き変革を求めて語り合える、他に例を見ない場を創造している事を改めて認識し、1934年、日米関係が急速に悪化する時代に在って、その関係改善を目指し、両国の架け橋たらんとしてこの会議が産まれたことを想起し、当時に劣らず1990年代の今も世界の諸地域が切迫した状況に置かれていることを正視しつつ、1995年には25歳以下の青年層が世界の約半数を占めるであろうことも踏まえ、地球の調和が平和・幸福等の根源的価値に基づく公正で人道的な世界秩序においてのみ見出されるという信念の下、以下の諸提言をここに宣明します。

1. 国連の50周年に向けて新国連憲章を作るための世界的首脳会談の開催の実現に向けて、日米両国が協力すること。
2. 上記首脳会談を開いて新国連憲章を起草し、国連を民主的で責任ある国際組織へと変革せしめ、環境・貧困・人権問題への対処、民主的政府の一層の普及、地域紛争の抑制及び核拡散の防止、等の積極的措置をとりうるだけの組織とすること。
3. 世界中の若者に呼びかけ、世界的に教育を普及させ、若年層の意思決定過程への参加が制度的に確保されることを国際・国家及び地域レベルで推進してその力を発揮してゆくこと。
4. 以下の手段により、地球環境を守り、日米関係を改善して博愛精神を育てること。  
A. 地球の生態系を保全するよう行動かつ生活し、全ての種とその棲息地を尊重する。

環境悪化防止のために共働する。ここでは、①清浄な代替燃料に依存してゆくこと②開発途上国にこのような技術を提供すること③全ての食糧を、環境との調和を保ちながら確保してゆくこと④軍事前提の経済体制を平和な時代にふさわしい経済体制に切り換えていくこと⑤リサイクルを実現し、浪費を削減させて資源節約を推進すること⑥生産物の価格に環境上のコストを盛り込んだ「実質費用価格」を設けること⑦国際原子力機関を通して核兵器の世界レベルの統制を目指すこと⑧人口問題を倫理的見地もふまえて取り組むこと等が具体的に考えられる。

B. 全ての人々が、食糧・住居・清浄な空気や水、そして教育・保健・家族計画・職業等の全てを必要としており、同時にこれらが全て、各人の人権を満たしてゆく上で必要不可欠であることを再認識して、資源の衡平な分配を目指し、異文化間交流を推進して、他者への寛容と世界における多様性の享受を説いてゆく。

5. これまで日米学生会議を通して志を共にした者たちが、そして第46回及び将来の日米学生会議参加者が、各人が自らの手でできる様々な方法を通じて、この宣言で掲げた目標に向かって歩みつつけること。

日米間に戦争が始まった1941年、会議の創設者達が恐れていたことが、現実のものとなってしまったことは、私たちの注意を喚起して止みません。今日、私たちは、その使命を果たさなければならぬのです。

私たちは、普遍たる地球共同体をこれからも求め続けてゆくことを、ここに誓います。



第五部  
エッセイ

## 「さまよえる忘れ物」

鈴木 武志

Lost & Foundを知るキーワードは、ヒロミ、3K、リサイクルである。JASCersの前にヒロミが姿を現わす時、それはまず例外なく忘れ物確認のため、段ボールを抱え込んでいる時であった。こんな風に言うとヒロミには失礼かもしれないが、この仕事にヒロミほど適任の人物は他にいなかったように思われる。そして、こうしたヒロミの地道な活躍に救われ、運良く失いかけた物が見つかったJASCersも少なからずいたはずだ。同じ係でありながら、自分の財布を紛失して、ヒラチクやハリーに迷惑をかけてしまった私は、全くヒロミに顔向け出来ない立場にある。

次のキーワード3Kは、周知の3Kとは多少意味が違う。ここでの3Kは「こまった」「きりがいい」「気になる」を意味する。関西滞在中は、忘れ物の中に何と東急インのコードレスフォンがあった。この様な予想も出来ないとしてもない代物に、いつもこまった表情の我々だった。また、呼びかけても呼びかけてもきりがいい部屋の忘れ物や、バスの落とし物にはただただ無力感を味あわられた。しかし、この仕事も板に着いてくると、さすがに引き取り手のない忘れ物が気になるものだ。最終地大阪国際空港では、人目とはばからず次々と誰の忘れ物か尋ねまわる始末だった。

そして最後のキーワード、リサイクル。武蔵野市ではあれほどリサイクルの説明を受けたにも関わらず、その翌日には半ば放置された忘れ物を、部屋の方々で目にした。一体何のためのリサイクルだったのだろうかかと皮肉なものを感じずにはいられなかった。

この様な経験を踏まえて言えることは、この仕事は見た目ほど甘くはない。全くの重労働であるということだ。東京の事務所には、今なお引き取り手のない、さまよえる忘れ物たちが悲しみの声を挙げているという。担当者としては、少しでも心根の優しい引き取り手が現れてくれることを願うばかりである。



## ビデオ係

三宅 浩史

第45回日米学生会議本番中は、僕を含めた2人がビデオ係をやらせていただきました。ファインダー越しに見るJASCの風景も、またひと味違った面白さがあって、その意味では恵まれた仕事をしたと自分では思っています。

僕たちの撮るビデオは基本的に記録することが目的なので、フォーラムやシンポジウムなどの具体的な会議進行中は、できるだけ公平にまんべんなく撮りました。しかし、JASCの最もJASCらしい部分というのは、それ以外の時間、例えばホテルのロビーや移動中の何げない光景にもたくさんあるようです。カメラを向けると誰もが笑って返してくれまし



た。数十本に及ぶビデオカセットの中に45回JASCerの一つ一つの笑顔が入っています。撮っていた最中は何か絵になるものを探していましたが、あとで見て本当に懐かしいと思うような映像は、むしろ自然な光景にあるのかも知れません。

日米学生会議は夏のたった一ヶ月の共同生活のために、日米からいろんな人間が集まり、そして別れます。しかし、その中で、それぞれが自分の道を見つけて社会へ出て行くことでしょう。

僕たちのとった数多くのビデオは、'93夏に日米80人の学生の間で芽生えた友情、共に感じた感動を伝えるものとしてずっと残っていきます。また、いつか、何年か経っても変わらぬ友情を確かめ合いながら、第45回JASCの同窓会でこのビデオが見れる日を楽しみにしています。



の友達と会いつづけた。1週間、旧友の歴史を聴きつづけた。そうして、今改めて、強く感じていることがある。さまざまな土地・文化・背景の人間が集まった時の使命、ということ。奢りかもしれない。けれども、いつか、何とかしたい憤りを今持っている。

それは、部落差別に対する。差別全体に対する。「それで別れたんやない、て思いこもうとした。これでいいんや、て信じようとした。でも、負けた、ていう気持ちは消せんのだ。」

5年間つきあった、被差別部落出身の彼と別れた友人は、正直な湖底の石にむかって、何度もくやしい、という言葉をついた。

「私はずっと、友達と家族のいるこの土地で根をはってしっかりと生きていきたい。自分が好きなら前は良かった。でも今は、今もっている何もかもを捨てていく、ってことは、でさん、てわかった。」

友人は、結婚の約束までしたのだ。

「今の人を好き、と思う。でも時々、好き、と思いこもうとしてるんや、ていう正直な本当がでてきて打ち消せんのだ。」

私達は被差別部落のない町で育った。だから、高校にいくまで、同和問題は歴史でしかなかった。関東のJASCerの多くのように。知らなかった。



## マイノリティー部落差別について雑感

脇坂 あゆみ

太陽の真下 平和の平は平凡の

平と思いき 何を捨てたか(俵万智)

8月の琵琶湖はそのままの、想い出と思じ形と色で輝いている。JASCで3年ぶりに日本に帰り、残暑に故郷で4年ぶり、7年ぶり

8月18日、浅香部落にいった時、教育によって、正しい認識によって、闘争によって、平等はかちとられるものだ、というのが部落解放同盟の方のお話であった。

「我々は必ず勝利すると信じています。」とおっしゃった口調はこの上なく頼もしかったし、なくなりつつある差別、とも感じられていた。

けれども、滋賀の湖北に帰り、友人の涙を見た時、地方では、時の流れも、人の流れももっと、もっと遅くて、マイノリティー問題として、JASCで語りあった差別問題は、まだまだ人の生活の中にある、ということをつくづく感じねばならなかった。

「同和教育なんかあるのが悪いんや。」

友人は解放同盟の人と反対のことを言う。

「違う、と知ってしまった人間の心をかえるのは不可能や。悪いこと、と思っても優越意識はもう生まれてしまう。」

今苦しんでいる者を楽にしてほしい、歴史に残すのはあとからでいい。タイムカプセルにつめて差別をこの瞬間に抹消できれば。

彼女の切望は、JASCで勉強をした私達の認識をはるかに越した観察であり、私はそのことに、半ば「絶望」していた。JASCで話した一部の人の意見は、自分がそうでなくてよかった、と思う自分に自己嫌悪を感じるがどうしようもない、というもの。そして、

「差別される側の傷みはする側には絶対にわからん。」  
ということだ。

「どうしたらなくなるんやろなあ。」

家意識がなくなり、土地への執着が薄くなり、人の動きがはげしくなっていけばなくなっていこう、という、友人は首を振る。  
「そうかんたんに考え方も変わらんし、人も

動かん。今でも好んで悪い噂を広める人がいる。そう、いいことは絶対広まっていかんに悪い噂は光より速い。」

いいことは、どうして広まっていかないのだろう。人はどうして誰かより優れていると信じたがるのだろうか。ケン・ジョセフさんの「日本人」に対する警告が思い出される。平等の理想さえもないまま、私たちは国境という壁をこえていくことができるのだろうか。

私はたまたま、国外へ出る機会を得て、いろいろな人や考え方に触れることができた。グループや国々へのステレオタイプはまだまだあって、それはこれからなくしていく偏見だと思っているが、価値観とは全て相対的なものである。また人間個人の高級低級はそれぞれの人間関係の定義によっていて、絶対的な上下などない、と信じるようになっていく。そうした部外者的なものを見方は、海外生活なくしては得難かったであろう宝物だ。

JASCerの特権とは、そういうことだ。使命とは、一見机上の空論にみえて、実は、加害者と被害者の言のおよばない見方を提供することだ。さまざまな土地・文化・背景の人間が、実社会で本気でぶつかりあうことは難しい。でもJASCはできる。そして、

私自身は、今後、故郷やアメリカ、東京や





## 「80人の顔」

泰松 昌樹

1980年代はじめより国際化がしきりと叫ばれ、同時に「日本人には顔がない」と言われ続けている。このことは、“物”は好かれても“人”が好かれない、すなわち経済以外の分野における国際化の立ち遅れを意味しているのではないだろうか。では果たしてその国際化を、学生レベルで考えるならばどのような物になるだろう。実際、国際化という語の意味を一言で言い表すことは不可能だと思う。しかしあえてそれを試みるならば、「異なる文化を持つ人間が心の壁を越えて理解し合おうとすること」だと思う。よく使われる言葉だが、相互理解という言葉がぴったり来るものと思われる。そこには相手を理解する必要性と同時に、相手に自分を理解してもらう必要性もあり、そのためには自らをよく理解する必要があるだろう。安易に相手を非難するのではなく、極端な相対主義に陥るのではなく、一身の独立を保ちつつ常に問題意識を持ち、自己の哲学の形成に励む必要性もあるだろう。

あの千川のセミナーハウスの蒸し暑い夜を思い出しながら、今こうして、大学に入って一年にも満たない自分が、第46回実行委員として今夏の本会議に向けて毎日を忙しく送ろうとは。そして、一抹の不安とともに、毎週土曜の午後にかかれるJECミーティングで次第に会議の具体的な内容が見えてくるにつれて、是非とも会議を成功させたいと強く願うようになった今日この頃。

1993年の夏、日米各国40名の学生により第45回日米学生会議が行なわれたこと、明らかな力不足を感じながらもその一員として会議

に参加できたことを本当にうれしく思う。そして今、今度は立場を異にし、次回会議をつくっていく立場で振り返ると、そこには以前見えなかった物が数多く見えてくるのも事実だ。実行委員として他の方と接するとき、「なぜ日米なの?」「どうして学生なの?」等々、会議の根幹に関わる質問をよくされる。所与の物だった会議が、本当に自分たちの手で作り上げる物なんだと感じる一瞬でもある。「毎日が第一回の会議なんだよ」とはよく聞く言葉だが、今年で会議創設満60周年を迎え、それぞれの道において第一線においてご活躍なさっていらっしゃる諸先輩方の姿を見聞するにつけ、強く自らの存在意義を問わされる。会議そのものは終わったが、僕たちのJASCはまだまだ始まったばかりだと思う。会議後、参加者の一人からもらった手紙の中に次のような一文があった。「こんなにすばらしい経験を共にしてくれた第45回参加者に感謝を表す意味でも、この経験を最大限に生かして、いつどこで彼らに再会しても恥ずかしくないような自分でありたいと思う。」

昨夏集った80名は、それぞれが個性豊かで、魅力的な顔の持ち主ばかりだった。



## 網

### 寺澤 実紀

実行委員としての活動を開始してから第45回会議終了までの一年間は、怒濤のように過ぎていった。JASCは私の生活のすべてを巻き込みながら、北九州市滞在中に西日本を襲った台風のように私の中で暴れ、夏と共に去った。全ての仕事から解放された生活は、「嵐の後の静けさ」とても形容し得るのだが、JASCやJASCerたちが私に与えた衝撃は私の中で消滅するどころか、遠心力を伴って私を押し潰さんばかりである。

「帰郷者というものが皆そうであるように、少し落ち着かないところがあります。自分の思い網が何て重いのか、また確かには知らないのです。」『若き詩人への手紙』より

閉会式で抱いた筆舌に尽くし難い複雑な心境は、札幌へ戻ってから何日もの間、私の心を支配した。何か言いたい、伝えたいのだが、何をどのように伝えたらいいのか分からなかった。そのような気持ちをそのままガラスの箱に入れ、沈黙することが一番だと感じたが、反面、どうにか言葉で表現して自分の心を整理したいとも思った。そこで手紙を書こうとしたのだが、筆が全く進まなかった。何通か失敗した後、ようやく送った支離滅裂な手紙に、「1年間に及ぶ様々な経験を消化するのは自分であり、それは自分の手で自分に課さなければならない重要な課題です。今までは一緒に仕事をする事ができたけれど、これからは『独り』で歩まなければなりません。」と書いた。少し変な気分だった。「独り」の生活

は準備期間中と同じで、話したければ電話があるし、少し無理すればいつだって会うことができる。連帯感や信頼、そして友情は心の中で持ち続けることのできるものだと実感して終わった会議だったのに、なぜ「独り」を感じたのだろうか。

準備期間中や会議中、今まで受けたことのない鮮烈な衝撃を受けた。見えなかったものが見えるようになり、存在すら知らなかったものを認識できるようになった。衝撃は、見えなかったものや見ようとしなかったもの、更には無意識のうちに目を閉ざしてきたものが目の前に露呈され、それを直視せざるを得ない状態に陥った時に強く感じるショックだと思う。見えなかったものが見えるようになる感動は大きいですが、同時に自分の愚かさが身に染みて心が痛くなる。私には、知識はもちろん、洞察力も的確な判断力も長期的なヴィジョンもない。自分が小さく、頼りない存在に思えて、全てに関して自信が持たなくなってしまった。

私の時間を侵蝕し続け、最後には生活そのものとなってしまった膨大な量の仕事は、自分が受けていた衝撃の大きさについて考える暇を私に与えなかった。あるいは、その場の状況への対応を優先することによって、仕事を盾に無意識のうちに私の側から逃避していたのかもしれない。それよりも、会議の運営に携わり、参加している間は、考える必要性がなかったのだと思う。私が愚かであっても自信がなくても、仕事をしなければ会議が開催できなかったし、何よりも、私の仕事をフォローしてくれる人たちがいた。「嵐の後の静けさ」の中で「独り」を意識したのは、それまで目をそらしてきた衝撃の大きさに気付き始めたからであろう。会議の終了によって、自分





が物理的のみならず、精神的にも「独り」であることを認識し、今までの人生の中で自分がいかに自己を顧みることを怠って来たかを理解した。

会議が終了して以来、様々なことが脳裏を掠め、私は紆余曲折を重ねている。今の私には、数々の衝撃によって目の前に突き付けられた多くのものを凝視し、自分の中で共存あるいは克服する勇気が必要だと感じている。そのような課題を自己に課すことができるようになっただけでも大きな進歩であり、自分に自信を持っていいと思う。「自信を喪失したんだったら、また持てばいい。」と言ってくれた人もいる。開き直りにも似た意志を持って、自分の歩幅で前進できればいいだろう。しかし、頭では分かっているものの、実行することは至難の業である。一定の歩幅で着実に歩まなければならないのに、往々にして歩幅が乱れてしまう。時は、私のために静止することなく、常に流れ続けている。自己嫌悪に陥りつつも、歩幅を保持しながら前へ進まなければならない。

「あなたは自分の道を発見された、あなたはどこへ行くかを知ってられる。だがぼくはいまだにまだ、夢想と形象の混沌の中に漂っていて、何ためにまた誰に、それが必要なの

か知らないのです。ぼくは信じていず、知りません、ぼくの使命は何にあるのか。」『かもめ』より

私はようやく、真摯な態度で自分自身を見つめ始めているのではないかと思う。今まで自分自身に目を閉ざして生きて来たことを、非常に悔やんでいる。しかし同時に、内に対しても外に対しても閉ざされていた私の目を開いてくれたJASC及びJASCerたちに、一言の「ありがとう」という言葉には託しきれない程、感謝している。

JASCからの帰郷者である私の網は、一生重いままであろう。そして、感謝の気持ちと例の複雑な心境を抱きながら、JASCやJASCerたちを今後見つめていこう。「重い網」と共に、着実な歩幅で大地を踏みしめながら、一步一步前進したいと思う。



## 独 白

西元 宏治

最近読んだ文章のなかにカズオ・イシグロの次のような言葉が引用されていた。

「僕自身、人生の終わりにさしかかって過去を振り返ったときに、自分が人生を浪費していた、人生が失敗だったと気づくことになる

んじゃないかという恐怖を持っています。そういう冷酷な現実と直面すると、多くの人は自分自身に嘘をつく。その嘘にいたるまでの全過程に興味があるし、それが僕が小説で今後も探求してゆきたいテーマです。」

人間の内面の動き、特に自分自身に対する評価の限界に関する非常に小説家らしい見解だと思う。確かに、人間とは誰に対してもより、まず自分自身に嘘をついてしまうものだと思う。三島由紀夫もいうように、「忘却とそれに伴う過去の美化がなければ、人間はその生に堪えられない」のかも知れない。しかし、かりにそれが人間の性だとしても、現実生きてゆかなくてはならない人間がそれに寄り掛かることは許されないように思う。美しい嘘をつくことは文学者の使命かもしれないが、全ての人間が文学者になることは出来ないのである。現実がなくては嘘も存在しない。自分に嘘をつくことはあまりにも簡単なことではあるけれども、自分を騙し続けることは出来ないし、何よりもどんな嘘をついたとしても現実をかえることは出来ないからである。しかし、こんな当たり前のことさえ、本当に意味で分かることはないのかもしれない。

これから、ここで自分が何を書いたとしても、それは今の自分の気休め以上のものにはならないだろうと思う。だから、僕が第44・45回日米学生会議について何を述べたとしても、この一年間余に経験したことについて総括したなどとは思わないでほしい。ただ振り返って感じたことを思いつくままに書いてみたに過ぎないのだから。

人によってJASCに参加した理由は、様々であると思う。僕自身、一体自分が何故、JASCに興味を持ったのか、ハッキリ言葉にして説明できないし、更に、何故、それが

JASCという場所をわざわざ選んだのかという事になれば、もっと良く分からない。ただ僕は、毎日に退屈していた。高校の時から、もっとそれ以前からそうだったかもしれない。毎日が不満でしょうがなかった。平凡な日常からどうにかして逃げ出すことばかり考えていた。それでいて何をしたいか分からず、いつも迷ってばかりいた。何でも出来る様な気がする時もあるれば、何も出来ず、一生何も出来ずただ不満だけを抱えたまま生きて行くことになるのではないかという不安に苛まれていた。その気持ちは、大学に入った後も消えることはなかった。いろいろなものが表面ばかりの薄っぺらいものにはしか見えなくて、自分の力を注ぐのにはふさわしいものには見えなかった。ただ、人ばかりが多くいるキャンパスは、僕を疲れさせ、虚しくさせるだけだった。

そんなときにJASCに偶然出会い、参加することになった。JASCに何かを期待していたわけではなかった。実際僕は、JASCについて何も知らなかった。参加者に友人がいた訳でもなく、講演会や説明会に行ったことがある訳でもなかった。ただポスターを見て、実要を読んだにすぎなかった。それで十分だった。それ以上のことを知ったところで、その頃の僕には批判の材料が増えるだけだったように思う。要は、変化を与えてくれるものであれば何でもよかったのだと思う。試験に合格したときも、特にうれしいとも思わなかった。勝手に期待して、勝手に失望するのが厭で自分の気持ちを無意識に抑制していたのかもしれない。

5月の全体合宿で初めてJASCに触れたとき、正直これから一緒にやっていけるのかということばかりが気掛かりになった。多くの



参加者が持っているエネルギーみたいなものが、過剰なものに感じられ、鬱陶しかったのかもしれない。そして、そこから醸し出される雰囲気が良くも悪くも善意に満ちていると思ったからかもしれない。自分が求めていたものを見つけたような気持ちを一方で持ちながら、その一方でそれを受け入れることが何かを誤魔化しているだけのような気がしてならなかった。この矛盾した気持ちは、定例会などを通してJASCとの関わりが深くなるうちに益々、強くなっていった。もっとJASCに深く拘りたいという気持ちが強く働く反面、何かそこにある雰囲気に自分が持っている疑問が曖昧にされそうで、雰囲気に吞まれないように距離を保つことばかり考えていた。結局、その気持ちをどう処理して良いか分からないままに44回の終わりを迎えてしまった。その気持ちにうまく整理をつけることが出来ていたら、実行委員にはなっていなかった様に思う。きっとJASC自体というよりも、JASCと自分との関わり方に満足できなかったのだと思う。それが実行委員としてJASCに残ることを僕に選択させたのだと思う。

実際に仕事を始めてみると、実行委員の仕事は、当初の予想を越えて、厳しいものであった。単に肉体だけでなく、精神的にもかなりの負担があったと思う。抽象的で独り善がりな悩みに浸っている暇などなくなって、常に現実的な問題の処理に頭を働かせなくてはならなかった。仕事が大変だったとき、いつも「自分は、試されている。」と思っていた。それが何かはよく分からないけれど、何かに試されていると思っていた。しかし、そのことは少しも苦痛ではなかった。それどころか、楽しいとすら思っていた。そういう時こそ、自分自身についての発見がいくつもあった。



困難だと思ったことは何度もあったけれど、解決できないと思ったことはなかった。何とかしなければならぬといつも思っていた。それまでの批判ばかりしていた自分が、如何に無責任だったかということを読み知らされた。何もしないうちから、知らず知らずのうちにいろんなことを決め付けていたことに気づかされた。何かに戸惑って足踏みしていても問題から目をそむけることにしかならないと思った。戸惑っているよりも、前に進んで戸惑いの原因になっているものに、自ら働きかけないかぎりは批判する資格などないと思った。そして、そのことを知るきっかけを与えてくれるこの経験を自分なりに精一杯利用しない手はないと思った。

実行委員として仕事を始めた時、まず自分が心がけたことは、目の前にある現実をきちんと見据えることだった。それは、実行委員になることによって自分が日米学生会議という組織のなかに身を置くことを選んだことから生じる当然の責任だと思っていた。そして、それが自分の置かれた状況を楽しむ最善の方法だと思った。次に、自分が何を欲しているかということを中心に把握することを忘れないように努めようと思っていた。いくらJASCの中に身を置くことを決めたとはいえ、目に見えない組織に自分を埋没させるような

ことはしたくないと思った。JASCに入ったときから感じ続けていた違和感を大事にしたいと思っていた。そして、この違和感が、どんなに忙しくなっても僕に醒めた目でJASCを見せてくれたのだと思う。それは間違っていないかと思っ

ている。実行委員としてJASCを経験して改めて感じたことは、JASCのように抽象的な目的を掲げて存在している団体にとって大切にしなければならないのは、団体自体の目的をより精緻なものとして団体としての性格を強調するよりも、そこに参加する個人の自由な発想が発展出来るような環境作りを常に念頭に置くべきなのではないかということだった。その自由な発展の手段として、理念についての理解が深められることが行なわれても構わないと思うし、各種の企画が立案されるのも結構なことだと思

う。しかし、これらはあくまで手段であって、これを固定的なものとして捉えることによって、参加してくる個人の方を鑄型にはめることや、規格にあわない個人を排除するような結果を招いてはならないと思う。組織が先にあるのではなく、目的を持った個人の集団が、目的を達成させる一つの手段として組織を維持しているはずである。その手段に本来の目的が従属する必要はないと思う。例えば、それは今年何回か話題に昇った「JASCの社会的意義」を巡る議論に言えることだと思

う。そのことについて話し合うこと自体は意味のあることであると思う。しかし、何も社会的意義がJASCを作った訳ではないのである。JASCが独自に行なっている活動や理念というものが、現実の社会との関わりの中で意義を作り出しているのである。まず、考えるべきことは参加している自分自身がJASCという場を通して、何をしたいの

かをはっきりさせることであると思う。そして、そのためには自分と他人との相違点や自分のいる集団の特徴を認識し、その相違点や特徴を大切にしなければならないと思う。つい答えを出すことを急ぐあまりに画一化に陥ってしまうと、様々な種類の人間が集まることによって生まれる活力の様なもの

が失われてしまうのではないかと思う。外界との関わりに注意を向ける前に、JASCというものの曖昧さというものをもっと積極的に捉え、それを活用するべきではないかと思

う。同じようなことはJASC内の関係においてもいえると思う。大切なのは、仲良くなったり、同調したりすることではなく、相手を理解することであり、違いを認めた上でどう折り合いをつけながら一つのことを為してゆくのかということであると思う。同質性ばかりを強調しすぎたり、衝突を恐れて異質性に目をつぶることは、結局は自己と他の区別を曖昧にし、問題の所在を不明確にすることにしかならないと思う。大切なのは、常に自他に対して批判的な精神を忘れずに、冷静でより客観的な視点を保つ努力をし、自身の見解をはっきりさせることであると思

う。そして、そのことこそが、個々の人間を尊重することにつながるのではないかと思

う。安易な馴れ合いは、形を変えたナルシズムにすぎない。つい、閉ざされがちになってしまう人間関係のなかでは、いつしか人間そのものを見ることが失われて、関係の維持ばかりが優先されることになってしまう。特に、JASCのような強制力を持たない集団に於いては、集団内に衝突が生じた場合、集団意思の押しつけが行なわれない替わりに関係性、いわゆる「和」というものばかりが強調されることになってしまう。それが大事なものであることは僕も否



定しない。しかし、何も「和」を維持するためにJASCというより組織を維持しているわけでもなし、第一そんな為にJASCに参加した訳ではないということを忘れてはならないと思う。そうしたときこそ、自分自身でしか自分を律することが出来ないことを知るべきであると思う。所詮、人間はひとりなのである。そうあるべきであると思うし、そう努めるべきであると思う。人の助けや情けをあてにしてしか何も出来ないのなら、他人を巻き込んでまで何かをする資格などないと思う。一人立つ人間こそが、真に他人を理解し、助け合う可能性を見出すことが出来ると僕は信じている。そして、孤独な個人間の関係に於いてのみ、人に媚びることのない、やさしさが析出してくるのではないかと思っている。人が人に対して出来ることは、その人が一人で考え行動出来る様な状況を作るべく努めること位でしかないと思う。やさしさは、ほんの少しで十分である。やさしさは清涼剤でしかない。人間を突き動かすエネルギーそのものにはなりえないと思ってる。それは自分の中に見出してゆくべきものであり、けっして固定的なものではなく、それ故、それを求め続ける限り、常に迷い続けることになるのではないかと思っている。

そのことを知ることが出来ただけでも、実行委員になってJASCに残ったことに満足している。これから同じような状況に自分が置かれたとしても、ここでの経験を生かすことが出来るのではないかと思っている。そして、それこそがJASCの成果ではないかと思う。

最後に、一言付け加えるなら、少なくとも僕にとってJASCは、まだ、「化城」なのだと思う。その先にある道に進むために存在しているのだと思う。それを、幻のままに終わりに

してしまうか否かは、一重にこれからの行動にかかっているのだと思っている。



## 「わがまま」から「わがまま」へ

芝崎 厚士

ぼくは二十歳だった。それがひとの一生で一番美しい年齢だなどとはだれにも言わせまい。  
—ポール・ニザン「アデン・アラビア」—

第44回会議の全体合宿に参加したとき、ぼくは「絶対実行委員にはならないぞ」と思った。なぜなら、わずか2泊3日の間みんなと過ごただけだったけれど、「ここはぼくのいるべき場所ではない」という直観が、一瞬のうちに自分の心の中を駆けめぐるのを感じたからだった。ぼく以外の「彼ら」は、ぼくがこれまで歩んできたところとはまったく違う生活環境で育ち、ここにやってきているのだということに気付いた。彼らの多くは留学か海外滞在の経験を持ち、少なくとも共通のマスメディアに目を配って、社会の問題に対する理解を心掛け、自ら積極的に社会に働きかけようとして、様々なボランティア活動などに参加したりしている人達だった。

第45回日米学生会議の実行委員として活動し、この日本側報告書を作り、結局実質的に

一番最後まで第45回会議の仕事に携わることになった今も、2年前の5月と言葉の上では同じことを感じている。ここはぼくのいるべき場所ではなかったのではなかろうか？違う。そうではなくて、ここはもはやぼくのいるべき場所ではなくなってしまった。そうしてしまったのはぼくなのだ。そしてぼくは、そうしなくてはならなかったし、そうするしかなかったのだ。

ぼくはJASCに参加する以前に海外に行ったこともなかったし、飛行機に乗ったことすらなかった。一浪して東大に入ったが、自信の持てることなどほとんど何一つなかった。「日本で一番」の最高学府に入ったのはいいが、ぼくはいわゆる東大生と自分との違いに愕然として、なすすべを知らなかった。父母双方の家系を辿ってみても、四年制の大学に入ったのはぼくが初めてだった。幼い頃から、ぼくの周りには、両親を含め中卒や高卒で自活して頑張っている人がたくさんいて、彼らから大学に行くことがどんなに素晴らしいか、そして自分たちが行けなかったことでどんなに辛い思いをしてきたか、しかしそれに負けずにどれほど身を粉にしてきたのかをよく聞かされていたけれど、東大生はおろか大学生にすら会ったことはなかったし、話をしたこともなかった。そんな状態のまま、大学生と呼ばれている人達のことをほとんど何一つ知らないで自分が大学生になってしまったのだ。

高校生までの間でぼくが知っていた大卒のインテリは、塾や学校の先生ぐらいたった。特に小四から中三の頃行っていた小さな塾は、翻訳家やジャーナリストが教えてくれるユニークなところだった。先生も生徒もみんな仲良しで、授業中にアイスをおごってくれたり、

いきなりピンゴを始めたり、クリスマス・パーティーをしたりした。生徒もごちやまぜで、成績的には箸にも棒にもかからない人から、名門校の野球部に入って甲子園を目指す人、隣の中学の番長格(ぼくとは妙に意気投合した、すごく頭の切れる奴だった)、生徒会長(ぼくの中学時代のアダ名は「会長！」だった)にいたるまで様々な人間が6、7人いっしょくたになって同じ授業を受けていた。勉強さえやっていたら(それも怪しかったが)何でもOKという塾で、現在に至るまでぼくはこの風土に決定的に大きな知的、精神的感化を受けている。今思うと、JASCの雰囲気結構似ていたような気がする。ぼくの方が、自分の生活環境とはまったく違う可能性のある世界へと開くことができたのは、ここでの経験のおかげであって、これがあったからこそ、ぼくは大学での生活を何とか乗り切り、JASCを楽しめたのだし、今ここで書いているようなことに思い当たるようにもなれたのだと思う。

さて、4年間の大学生としての生活を振り返ってみると、結局ぼくは形式的な身分を除けば、一般的な意味で「東大生」にも「大学生」にもなれなかったようだ。一、二年生の頃は大学生生活にうまく適応することができなかった。このまま法学部に行くことは自己の人格の抹殺に繋がる、とまでの危機感を持って、教養学部の国際関係論学科に進学した。そこで自分のいる場所を見付けようとして必死になってあがき続けたが、結局は他の人々と同化することも融和することもできなかった。今のぼくに残されているのは、皮肉にもそのあがきが必死であればあったほど一層揺るぎのないものとなってしまった「ここは違う。これも違う。ぼくのいるべきところはどこなのだ？ぼくの探しているのは何か？もしかして、



ぼくがなぜ、このようなことを問うているかは、やはり他の誰にも理解できないのか？そして、ぼくは同じ場所にいるこの人達とは違う世界に住む人間なのだ、やっぱりそうなのか？」という、さらに救いようがなくなった孤絶感だけだ。

会議に参加して得たものがあるとすれば、それはこの世の中でどう生きていったらいいのかという命題に対する模索の時間と空間を与えられ、ぼくは、自分の現実の中で常にそれに自分なりにすばやく答えを出し続けざるを得なくなったということだ。

日米学生会議における経験は、そのような悪あがきは決して無駄ではなかったことをわからせてくれた。たとえそれがどんなにぶざままで、こっけいであっても、自分自身の力によって「ほんとうのこと」を掴もうとすることだけが、それを自分のものにするための唯一の方法だということに気付かせてくれたのだ。ぼくには「ほんとうのこと」を発見し、実践する力は依然として乏しいが、そうでないことに気付く力は格段に身に付いたと思う。それはどういうことかという、ぼくには「ほんとうのこと」を積極的に定義できるほどそれをとらえていないが、少なくともそれが本物ではないかどうかを、その点がかなり巧妙に隠されている場合でも見分けられるようになってきたということだ。もっとも、これはそうでこれはそうでないということは、直観的にしかわからないし、わかるときとわからないときがあって、やっぱり頼りないのだけれど。

そして、ぼくはぼくなり世の中に全体像を作り始めた。ぼくはその地図を見つめ、常に描き加え、修正を行いながら、やっていかねばならない。それがたとえどれほど不完全

なものであったとしても、それ以外のものを頼りにはできない。なぜなら、それはぼくが自分の足で歩き回って、自分の手で測量した、ぼくのためだけの地図だから。そして、それはぼく自身が自分のものであると感じることのできる唯一の地図だから。

ぼくはJASCでは「わがままパンダ」と呼ばれたり、とかく頭脳明晰で常に理性的な判断をするクールな人だと思われることが多かった。「わがまま」というのは当たっている。後に述べる通り、ぼくがJASCでやったことは、これまでで一番放埒に自己表現をしたという点に尽きるからだ。



この2年間はぼくにとっては世の中で生き抜いていくためのセルフコントロールの技術を修得するための機会だった。ただし、コントロールするためには脱線もしなくてはならなかった。自分の能力を把握するためには、その能力をできるだけすべて使ってみることが必要だった。ぼくは会議の活動の中でそれをやろうとした。その結果が「わがまま」な行為の集積だ。その放埒の中で、ぼくは何を発見したのだろうか。

ぼくは、実際には意志が弱く、引っ込み思案な大きな子供にすぎない。正しいことを主張することは苦手で、強気に見えるのはすべてぼくのもっている弱さの裏返しだ。自信

満々に見えれば見えるほど、またそうすれば  
そうするほど、ぼくは自分の持っている弱さ  
から逃れることができるが、自信満々に見え  
ることと自信があることとはほとんど一致す  
ることはなく、さらに深い泥沼に落ち込む。  
素直に自分を出すことによってしか救われな  
いのに、頻繁に無駄な虚勢を張っている。そ  
うすることによって他人はぼくを信頼し、高  
い評価を持って受け入れる場合が圧倒的に多  
い。ぼくはそれに甘えている。自他からの厳  
しい批判が必要なはずなのに、JASCではそ  
のようなことが起こらなかったから、ぼくは  
益々増長していたようだ。そうなればなるほ  
ど、ぼくは孤立し、だれにも癒すことのでき  
ない、地獄のような孤独に苛まれる。ぼくの  
抱えているジレンマは、ざっとこのようなも  
のだ。

ぼくは自分の内部に、ある信念と情熱を持  
っている。『銀河鉄道の夜』のジョバンニと、  
「カラマーゾフの兄弟」のゾシマ長老の表現  
を溶接すると、それは「あらゆる人のさいわい  
のために、実行的な愛を積む」ということだ。  
にもかかわらず、ぼくは他人や自分に対する  
あらゆる嘘やごまかしの多くを黙認してきた。  
それを「赦す」ことだと履き違えていた。それ  
に気づきながらも、結局はぼくは自分の意志  
を押し通すことを避けようとしてきた。その  
結果は必要以上に自己中心的な態度と、必要  
以上に愛他的な態度の両極端になって現れる  
ことになった。普通前者だけが批判的な目で  
見られがちだし、後者はむしろ羨むべき態度  
と取られがちだが、どちらも自分からの逃避  
であることには変わらない。ここまで自己批  
判できるのが救いだというのは間違いではな  
いけれど、それでもやはりぼくは自分や他人  
に嘘をついていた瞬間がそうでない瞬間やそ

れに気付いた瞬間を全部足し合わせたとして  
もとても及ばぬくらい多かったことを認めな  
ければならない。

前回の報告書に書いた通り、真実には否定  
神学的なもの、自己が自らの心の中に発見  
できるものの二種類しかない。前者の真実と  
後者の真実の間に一本の道が繋がっており、  
その道に何の夾雑物もない瞬間をどれだけ保  
てるのか、その瞬間をぼくがどれだけ自分の  
ものにできるのか。その瞬間をいかにして実  
現し、どれだけ自分にとって有効に経験でき  
るかが、人生の意味だと思う。ぼくにはそれ  
しかできない。その中途では、きっと想像も  
つかないほど様々なことが起こり続けるだろ  
う。それでも他にはあり得ないしもうどこに  
も戻ることはできない。

人々はその道の存在自体を、信じていない  
か信じることを忘れてしまっている。その代  
わり人々が信じている、あるいは信じようと  
して必死になっているのは、法律や慣習とい  
った社会的なルールだ。そのルールにあては  
まるかどうか、すべてだといってしまうのは  
当然「現実主義的」な社会観として、多少倫  
理的な罪悪感(それ自体中途半端なものだが)  
を感じながらも、この世の中の大多数の人々  
が受け入れている通念である。

ぼくが求めているのは、「正しいと一般的に  
思われていること」だけを知ることではない。  
それを知った上で、それを自己の信念と照ら  
し合わせた上で、「ほんとうに正しいこと」を  
見付けて実践しなければ。それもこれを書い  
ている今この瞬間から一生の間ずっと。

もちろん法律や慣習を全面的に否定すべき  
ではない。自分のルールを自分で作ることに  
よってのみ、言い換えれば自分の世界観や信  
念を持ち、「否定神学的」真実と「自己の心の裡



にある]真実との間にわたされている「一本の道」をはっきりと見据えようとすることによってしか、生を自分のものにはできない。あらゆる人のさいわいのためにぼくができるのはそれだけだ。一見逆説的だが、今は次のようにしか表現できない。完全に利己的になった時には、その人の行動は自分も含めたあらゆる人のためになり、完全に利他的になった時には、その人の行動は自分のためのものでしかなくなる。

普通は生まれた瞬間から、世の中に自分を合わせていくことがほとんど義務的によきこととされている。それをいったんひっくりかえして、まず臆さずに自分を出し切って、それを世の中にもぶつけてみる。まず自分に世の中を引き付けることがぼくには必要だった。それを行ううちに、他人が理解している自分と、自分が理解している自分の姿を知ることになる。その作業がないと、自分の持っている力がどのくらいあるのかはわからない。それを経た上で、つまり自分というものを世の中との比較においてよく知った上で、今度は自分から進んで世の中に合わせてみる。自主的に社会通念や慣習とわたりあう術を見つけてゆく。「知彼知己者、百戦不殆」という、何千年も前から知られている最も古典的かつ健全なリアリズムを、ぼくは青年期の自立の過程の中で経験的に体得しただけにすぎない。これは別段目新しいことではないが、それを理解したことは、ぼくにとっては貴重な大発見だった。

日米学生会議という、ほとんどのような種類の自己実現も許容してくれる場所は、ぼくにとっては、子供のころ通ったあの塾と同じくらい、この上もなく重要だった。世の中の枠組みを観取するためには、いったんそれ

とほとんど無関係な状態のなかで「わがまま」に自己実現することが必要だからである。自分が繋がれている可能な限りすべての鎖をいったん断ち切って、そこから出発しないと結局はうまくいかない。そして今度は、自分から進んで鎖を繋ぐことを選べるようになることが大切だ。

いったん「わがまま」になることが、自らをコントロールして自分の居場所を自分で作るためには必要なのだ。ぼくは日米学生会議という「わがまま」を許して貰える機会を与えられ、それを最大限活用した。そして、そうしたからこそ、ぼくがここでやるべきことはなくなってしまったのだし、ここにとどまる理由もなくなった。だからぼくはもうここにはいられない。もういてはいけない。

これからはそうやってみきわめた自分のもつ力を、自分の信念と意志にしたがって意識的に、かつ自在に使うことを学ばなくてはならない。《A nous deux maintenant!》というわけだ。ぼくは放埒に近い「わがまま」から、論語のいう「従心所欲不踰矩」に近い「わがまま」へ向かって、いかなる他人によっても、無理やり走らされることなく歩き続けていく。

ある目標に向かって歩みよめることは、自分自身によってだけ実践されうる。討議というものは、決定的な歩みが踏み出される前に終わるものなのである。

—エーリッヒ・フロム『愛するということ』—

(筆者注：本来は、日米学生会議の活動の意味とその課題に関する考察も掲載する予定でしたが、紙幅の都合で割愛させていただきます。それらの点については、会議の歴史、活動形態、その意義と問題点をまとめた拙文「日米

学生会議にみる国際文化交流』をご参照くだ さい。)





第 六 部  
参 考 资 料

## 内閣総理大臣宮沢喜一様よりメッセージ

「第45回日米学生会議」の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

国際社会は今、歴史的な変化の中にあります。日米両国を始めとする各国は現在、新たな国際秩序の構築のために懸命の努力を続けておりますが、国際社会が真の平和と繁栄を享受するためには、信頼と相互理解を礎とすることが何より必要であります。

このような中で開催される「第45回日米学生会議」は、将来国際社会の担い手となる若者に、まさにこの相互理解を深めるための場を提供するという点で非常に意義深いものと考えます。また、私自身、第6回、第7回の2回に渡って日米学生会議に参加しましたが、本日より約1か月、日米学生会議という共同体の中で80名の日米の学生が、お互いに率直な意見交換を行うことは、皆様の将来にとっても有益な体験となりましょう。

いつの日も、若者のすばらしさは、夢を語り、決して諦めること無く、人間の可能性を信じ、努力することにあると思います。今日の日米学生会議を作り上げてきた幾多の先輩がそうであったように、本日参加された皆様方も「第45回日米学生会議」の開催を契機に「自分が太平洋の相互理解と信頼の架け橋である」との使命感を持ち、努力を重ねられるよう祈念します。

1993年7月29日

宮沢喜一



## クリントン大統領のメッセージ

July 14, 1993

I am pleased to extend greetings to all the participants of this year's Japan-America Student Conference.

When I was a young student of foreign studies, I gained an invaluable perspective on our diverse world—a perspective that has benefitted me throughout my life. Your experience in this important program will give you an opportunity to gain insight into each other's cultures, practices, and beliefs, and will also give you insight into your own nation.

During my recent visit to Japan, I was impressed by how much our two nations have in common. I strongly believe in the value of human contact in building relationships. The future success of the United States and Japan will rely heavily upon our ability to cooperate and communicate about issues of importance to both our nations. Whether one works in the areas of trade, business, diplomacy, or the environment, mutual respect and intercultural understanding are key elements of success. Exchange programs like the Japan-America Student Conference build the international bridges that are so important to the future of the world.

Best wishes for a successful program.



## 第45回日米学生会議：主催・後援・賛助団体

主 催 財団法人国際教育振興会  
後 援 外務省  
文部省  
国際教育交換協議会(CIEE)  
日米文化センター

### 賛助地方公共団体

武蔵野市  
福岡県  
福岡市  
北九州市  
長崎市  
兵庫県  
神戸市  
三田市

### 賛助財団

財団法人石橋財団  
財団法人上廣倫理財団  
大阪日米協会  
財団法人加古川市国際交流協会  
財団法人鹿島平和研究所  
財団法人国際教育財団  
国際交流基金  
財団法人神戸国際交流協会  
神戸日米協会  
社団法人証券投資信託協会  
社団法人生命保険協会  
長崎北ロータリークラブ  
長崎琴海ロータリークラブ  
長崎中央ロータリークラブ  
長崎西ロータリークラブ  
長崎東ロータリークラブ

長崎北東ロータリークラブ  
長崎ロータリークラブ  
社団法人日本医師会  
社団法人日本歯科医師会  
社団法人日本証券業協会  
日本ハーブ音楽振興会  
財団法人日商岩井国際交流財団  
財団法人庭野平和財団  
東長崎ロータリークラブ  
財団法人芙蓉教育振興会  
財団法人平和中島財団  
財団法人三菱銀行国際財団  
南長崎ロータリークラブ  
八幡中央ロータリークラブ  
財団法人吉田国際教育基金



賛助企業

旭硝子株式会社  
株式会社あさひ銀行  
アサヒビール株式会社  
味の素株式会社  
アメリカン・エクスプレス・インターナショナルInc.  
池田興業株式会社  
伊藤忠商事株式会社  
株式会社伊勢丹  
株式会社イトーヨーカ堂  
エーザイ株式会社  
エッソ石油株式会社  
エバラ食品工業株式会社  
エム・シー・シー食品株式会社  
大阪ガス株式会社  
株式会社大林組  
オムロン株式会社  
カルテックス・オイル・ジャパン株式会社  
川崎製鐵株式会社  
鹿島建設株式会社  
勸角証券株式会社  
関西電力株式会社  
キックマン株式会社  
九州電力株式会社  
協和発酵工業株式会社  
キューピー株式会社  
協栄生命保険株式会社  
共同石油株式会社  
国際証券株式会社  
国際電信電話株式会社  
株式会社さくら銀行  
三洋証券株式会社  
三洋電機株式会社  
株式会社三和銀行  
株式会社十八銀行  
新日本製鐵株式会社

住友海上火災保険株式会社  
株式会社住友銀行  
住友金属工業株式会社  
住友建設株式会社  
住友商事株式会社  
株式会社住友信託銀行  
住友生命保険相互会社  
住友不動産株式会社  
成蹊大学  
株式会社西武百貨店  
積水ハウス株式会社  
セコム株式会社  
ゼネラル石油株式会社  
ソニー株式会社  
株式会社第一勧業銀行  
第一工業製薬株式会社  
第一生命保険相互会社  
大成建設株式会社  
株式会社ダイナワード  
株式会社大和銀行  
大和証券株式会社  
医療法人高梨病院  
武田薬品工業株式会社  
株式会社竹中工務店  
株式会社大丸  
中外製薬株式会社  
中部電力株式会社  
TDK株式会社  
デュポン・ジャパン・リミテッド  
株式会社電通  
東京海上火災保険株式会社  
東京急行電鉄株式会社  
株式会社東京銀行  
東京電力株式会社  
株式会社東芝  
東燃化学株式会社

東洋信託銀行株式会社  
 凸版印刷株式会社  
 トヨタ自動車株式会社  
 ニッカウキスキー株式会社  
 日興証券株式会社  
 日産自動車株式会社  
 日商岩井株式会社  
 日本アイビーエム株式会社  
 日本エアシステム株式会社  
 日本鋼管株式会社  
 株式会社日本興業銀行  
 日本信託銀行株式会社  
 日本信販株式会社  
 日本生命保険相互会社  
 日本電気株式会社  
 日本マクドナルド株式会社  
 日本郵船株式会社  
 野村證券株式会社  
 株式会社パイロット  
 株式会社長谷工コーポレーション  
 株式会社日立製作所  
 株式会社富士銀行  
 富士ゼロックス株式会社  
 富士通株式会社  
 本田技研工業株式会社

松尾橋梁株式会社  
 松下電器産業株式会社  
 マツダ株式会社  
 株式会社松屋  
 丸紅株式会社  
 三井海上火災保険株式会社  
 三井信託銀行株式会社  
 三井不動産株式会社  
 三井物産株式会社  
 株式会社三菱銀行  
 三菱重工業株式会社  
 三菱商事株式会社  
 三菱信託銀行株式会社  
 三菱地所株式会社  
 三菱自動車工業株式会社  
 明治生命保険相互会社  
 山崎製パン株式会社  
 安田火災海上保険株式会社  
 安田信託銀行株式会社  
 安田生命保険相互会社  
 山一証券株式会社  
 山種証券株式会社  
 UCC上島珈琲株式会社  
 雪印乳業株式会社  
 株式会社ロイヤルホテル

賛助者

守屋 壽	Viktor Chang	石田正美	山崎真利子
福原秀己	佐藤健一	藤本典之	川嶋秀雄
加納裕久	藤平登史郎	中山純彦	池田利明
正木彰夫	柳澤信彦	徳田雅幸	柿沼孝治
徳田明	石原章太郎	小西祥仁	橋田健一
加賀谷裕	高野聖也	田村雅宣	張禧哲
星文秀	大山覚	田中寛	菅潤一郎
大泉雅章	林修史	牧野博治	近藤義男
橋本憲	David Semaya	吉田泰久	Jeff Wang
藤井幸広	立石透	Anne Holthaus	高橋正光



勝山正幸  
埋田俊行  
米田哲  
目見田明晴  
伊賀可次  
神馬宏美

晝岡幸男  
保坂久子  
永矢純一  
伊藤寛行  
小林立伸  
中山和見

堀田浩一  
小野勝己  
都築裕憲  
(以上メリルリンチ証券会社  
東京支店、順不同)  
尾辻まゆみ

近藤文樹  
宮澤喜一  
山田謙三  
吉田直樹  
Reiko Lee

## 第46回日米学生会議のお知らせ

第46回日米学生会議は1994年7月25日から8月21日までの約1カ月間、ノースカロライナ州、ワシントンD.C.、ニューヨーク、シアトルの4地点を移動しながら行われます。当会議も第46回をもって創設60周年を迎えることとなります。私たちが今日を生きる学生として直面する課題は、いかに創始者の理念・情熱を受け継ぎ形に出来るか、そして学生の自主的活動によって蓄積されてきた様々な成果をもとにいかに今後の会議の発展を図っていくか、ということでもあります。

第46回では“Learning from History ; Active Cooperation for the New Era”を総合テーマに据えてこの課題に取り組んで参ります。日米及び世界が歩んできた軌跡を考察する中から、これからの日米両国の協力関係のあり方を学びとる一方で、当会議の今日に至る道のりを顧み、今後この会議が担うべき役割をも模索して次回につなげていきたいといった思いを私たちはこのテーマに託しました。

時代の変遷の中にありつつ常に変わらないものは、誤解が生じることがあっても最後には必ず理解し合えるといった信念を持ち、互いに向き合い、心の内を訴えかけていこうとする若者の真摯な態度であります。第46回会議におきましても、80名の若者が彼ら独自の視点から相互理解という一つのテーマに果敢に取り組んでいくことでしょう。

当会議の今後の発展を担う者として、実行委員一同、皆様のご指導・ご協力を心待ちにしております。

第46回日米学生会議実行委員会  
日本側実行委員長 廣田 良平



第46回日米学生会議実行委員会



## 編集後記

この第45回日米学生会議の日本側報告書の完成を以て、ようやく第45回日米学生会議の公的な活動が全て終了しました。実行委員にとっては約2年間、新参加者にとっては約1年間、文字通り生活のすべてといってもいいくらいの時間と労力を投入して来た「われわれの」会議も、これで完全に思い出となることとなります。

本報告書は日本側参加者全員が執筆した原稿にもとづいて作成されていますが、実際の編集作業には以下の人々の献身的な努力がありました。吉田泰治、西元宏治、割石俊介は原稿の回収、校正の中心となってくれました。校正の段階では、誤字脱字のチェックに加えて、事実関係の訂正、文意の不明瞭な文章の修正なども、執筆原稿の原意を損なわない程度に行いました。坂田亜也子は、財務担当者として賛助団体一覧を責任を持って作成しました。寺澤実紀は、原稿の割振り、名簿、各種図表の作成に協力してくれました。高橋香織と後藤田鶴子は、掲載写真の基本的な選定をおこないました。源真帆と上原由美子は、最終段階の校正に協力してくれました。そして、作成計画の立案から最終的な完成に至る全ての段階にわたって、編集者代表である芝崎厚士が作業の総指揮にあたりました。

最後に、原稿の遅れや細かな注目を根気強く受け止めて、報告書作成に多大な尽力をしてくださった古屋繁氏をはじめとする実業公報社のスタッフ一同に心から感謝を捧げたいと思います。

1994年3月末日

第45回日米学生会議日本側報告書編集委員一同



第45回 日米学生会議  
日本側報告書

発行日 1994年4月17日

編集者	坂田亜也子	芝崎 厚士
	高橋 香織	寺澤 実紀
	西元 宏治	割石 俊介
	上原由美子	後藤田鶴子
	源 真帆	吉田 泰治

発行 日米学生会議日本側報告書編集委員会  
〒160 東京都新宿区四ッ谷1-21  
財団法人 国際教育振興会内  
日米学生会議事務局

印刷 (株)実業公報社



***JASC***  
***1993***

***SINCE 1934***